Disturbed Hearts

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｉｓｔｕｒｂｅｄ　Ｈｅａｒｔｓ

【Ｎコード】
Ｎ９４５４Ｙ

【作者名】
炊飯器

【あらすじ】
地図から忘れ去られた漁村ボンゴで育った少年、ロイ＝クレイス。平凡だが幸せな日々を送っていた彼の人生は唐突に終わりを告げる。１人残された彼は復讐のために立ち上がることを決意する。

設定・登場人物紹介（前書き）

小説の進行状況に合わせ、随時更新します。

設定・登場人物紹介

【人物】

・カオス　　数百年前に魔物・妖怪を封印したザイガの英雄。自身も共に魔界に封印したといわれている。

・ウラル＝ジエルトン　　かつてカオスと共に魔の封印を行った男。封印後は解除の時に備えて「ジエルトン」を結成、精霊術を伝える

《ボンゴ》

・ロイ＝クレイス〈熱〉　　１４歳。茶色い髪に白い肌、漆色の目をしたボンゴの少年。父、母、祖母との４人暮らし。父親であるガイを尊敬し、いつか力になりたいと日々修練に励んでいる。身長１６０ｃｍ前後。魔物に復讐心を持つ。ボンゴ唯一の生存者。特技は家事手伝い。

・ガイ＝クレイス　　村の漁船の船長。身長１８０ｃｍ超。村人と同じく色黒で濃い黒髪。

《ジエルトン》

・ギン〈風〉『千本刀』　　金髪碧眼。黒いローブを愛用している。美男。三兄弟の師範でロイの恩人。カリュー中腹の小屋に住んでいる。何事も面倒くさがり、重要な時しか行動しない。２４歳。

・ヘルゲン〈風〉　　三兄弟の長男。１８歳。

・オルソー〈風〉　三兄弟の次男。無口。

・アンゴラ〈風〉　三兄弟の三男。

・カリース〈風〉『疾風の妖精』　ギンの師匠。享年３８歳。

・コラヌ〈熱〉　カルコンの師匠。享年１０２歳。

《ディアボロス》

・カルコン〈熱、火球〉　２８歳。無表情で声の渋い男。ロイの師匠。魔物を憎み、駆逐するために世界を牛耳ろうとしている。ボンゴを襲って魔天転器を発動させた。色黒で、身長は１８０ｃｍほど。ガイガンと契約を交わし、火球の能力を得た。

・レギュラス〈操〉　１６歳の少年。長い青い髪、両腕に文様の刺青、全身を覆う長く薄い衣をまとっている。一見すると少女と見間違いそうな外見。代々操の術を使う一族「カノトリアス」の末裔。フルネームはレギュラス＝アイティオン＝カノトリアス。

〔三騎士〕

・キリシエ＝モレスキュール〈水〉　２５歳の女。茶色がかった長髪。

・リック＝ローラン〈光〉　２３歳の男。細身。身長１７５ｃｍほど。銃を使う。独り言体質。

・ザバン＝ド＝ヴォルダン〈地〉『ガイアアーマー』　４０歳の男。筋骨隆々。身長１８０ｃｍほど。タイタンハンマー（持ち主

以外が触れると柄が消失する）を使う。

〔七聖〕ディアボロスの諜報部隊。それぞれが人外の技を有している。

・＃２サトリ〈読心術〉　独身術と肉弾戦に長けた男。ジルコナで用心棒、ロバートとして暗躍していた。

・＃３バシリスク〈猛毒〉『アンタッチャブル－ヴァイパー』　女性。全身包帯。全身の皮膚に黒斑が走っている。左目は澄んだ淡紫で、右目は霞んでいる。

・＃４スナグモ〈砂潜り、毒〉　甲高い笑い声の軽薄な男。黒装束に身を包んでいる。砂の中を自在に掘り進む『砂潜り』を使う。

・＃６カラス　カルコンの腹心。詳細不明。

・＃７パラサイト〈蟲、不死〉　１９歳。魔物に寄生されており、傷を瞬時に回復させるため、不可死。呪いを消すためカルコンに協力していたが、違和感を覚えて脱退。ロイたちの仲間になる。本名ベルゼビュート＝プランシー。

《ケムト》

・リュウコウと盗賊たち　元ケムトに住んでいた男達。シルクを慕い、盗賊になった。

・キリク　盗賊団の一員で、ひ弱そうな外見。

・シルク　カリューを拠点とする盗賊団の頭。父親がケムトの

商人だった元お嬢様。長い黒髪のなかなかの美女。身長１５８ｃｍ。１９歳。シュートの手助けをしようと日々奮闘。父の敵を討つため、グリンの商車から略奪していた。同業の盗賊に付け狙われていた。

・シュート　　自称モンスターハンター。黒髪黒目の青年。ドビルジャベリンのリートと意思疎通し、毎回変身して町を襲う役のリートを追い払うことでヒーローを演じていた。

・ボール＝グリン　　ケムト位置の大商人。ロイの雇い主で勉強を教える。

《ガルガイア》

・リーエン　　ガルガイアのリーダー。弓の腕は右に出るものはいない。

・アレルナ　　リーエンの奥さん。

《ドートリア》

・エリナリア＝スタンフィーナ　　ドートリアで戦う１６歳の少女。銃火器に精通している。金髪碧眼。方向音痴の気がある。銃の連射は得意だが、狙撃は苦手。三等兵。

・ロマリア＝スタンフィーナ　　エリナの兄で、ドートリア軍少佐。２６歳。

・ブラハム＝レンジェン　　ドートリアの軍団長。百戦錬磨の肉体と精神力を持ち、ドートリア軍を統括している。オフの日はイェーガサンドの屋台のおっさん。

・アレン＝マクーガ　　エリナに振られた同期？1。三等兵。軽薄だが首席で軍試験を合格し、将来的には幹部が確実視されている。

《ジルコナ》
・ボルノーニ　　ジルコナのバカ王子。反乱軍によって処刑される。
・ロバート　　王室護衛。化け物級の強さを誇る。

《ティグレー》
・店長　　ロイとエリナが働いているレストラン・ヴォルフォールの店長。仕事はできるが女好き。
・ルシカ　　ヴォルフォールのウェイトレス。店長のお気に入り。自他共に認める一般人。
・シルビア　　お嬢様のような話し方。スタイル抜群。赤みがかったセミロング。ロイを逆ナンした。怪盗リリー。スラム出身で、スラムの皆に施すために怪盗をしている。

【地形】
・ザイガ　　中心のタンタニア大陸、北東のバーカギル。北西のロスターニャ、南東のジラビア、南西のクルシスの各大陸と大小さまざまな島からなる。共通通貨はピークル。

《タンタニア》
・ボンゴ　　大陸の最南端に位置する漁村。北方にカリューがそびえているため、交易をほぼ完全に断ち、自給自足の生活をしてい

る。

・カリュー　　ボンゴの北に位置する山脈。標高はあまり高くないが、広大で身を隠すにはうってつけの場所のようだ。通っても南にボンゴしかなく、広大すぎるため、人はほとんど通らない。

・ケムト　　カリュー北の街。世間ではタンタニア大陸で人がすめる最南端と言われている。カリューの恩恵か、水資源が豊富で、活気のある街。魔物を警戒し、警備は厳重。

・ガルガイア　　森の中の平原にひっそりとある村。そこを守るため、村人の８割が武装し、魔物と戦っている。ガーレイシャの大軍によって滅ぼされた。

・ゴルゴナリア砂漠　　ケムトの東に広がる砂漠。オアシスが点在し、国や街もある。

・ドートリア　　ゴルゴナリア砂漠の中央に位置する国。オアシスを中心にして建国された。カルタゴラと戦争を続けている。建物は塔で、全１５階。技術が発達しており、夜間にはガス灯が点く。人口約１万人。一割近くが軍人。

・カルタゴラ　　ドートリアの北に位置し、ドートリアのオアシスを乗っ取ろうと戦争している国。ディアボロスの拠点があり、機械化魔獣の生産を行っている。

・ジルコナ　　ゴルゴナリア砂漠を抜け、さらに北へいったところにある王国。小国家で、国民のほとんどは農業従事者で貧困。現王と王子の怠慢な政治と浪費で国内にレジスタンスが出来ている。

・フェルメロン　　ホーエンス山脈の麓にある山越えの準備のための町。山脈の南北を中継しているので、商業が発達している。

・ホーエンス山脈　　タンタニア大陸最高峰。東西に長くそびえているため、北に行くにはここを越えるしかない。

・ティグレー　　タンタニア大陸の北に位置する港市国家。バーカギル、ロスターニャとの中継地点。現在、魔物が出ているので港は封鎖されている。

【魔】

《妖怪》　鋭い爪ととがった耳を持つ種族。背格好は人間と変わらないが、その力は凄まじい。生まれながらにして2つの能力を持ち、譲渡も可能。

・ガイガン〈擬態〉　自分の体器官を自在に複製できる。魔界では晶霊石の石切り場で働いていた。カルコンにザイガに来た礼に火球の能力を譲渡した。

《魔物》　能力を持つ獣。先天的に一個体にひとつの能力を備えている。

・リヴァイアムース〈水〉　A　ボンゴを襲ったラブカに似ている魔物。水の球に入って空を舞い、水鉄砲を発射する。ただし、一度出した水の球は解除するまで移動できない。水鉄砲は遠距離になるほど拡散し、殺傷力が落ちる。

・ドビルジャベリン〈変身〉　C　ケムトに現れた魔物。シュートに懐いている。自在に姿を変えることができる（物理的には効き

目がないので、幻覚の一種）。レギュラスに洗脳され、ケムトを襲う。

・ガーレイシャ〈音波〉　Ｂ　ガーゴイルのような魔物。ガルガイアを襲う。口から出す音波で物を破壊する。

・マドロアップス〈針〉　Ｃ　猿のような魔物。怪力を持ち、口から指ほどの太さの針を放つ。

《魔獣》　獣が進化し、通常では考えがたい巨大さ、強大さを持ったもの。しかし、その定義は人間による偏見が大きい。

・Ｍ－４９２Ｆ　Ｃ　機械化魔獣。巨大な鳥で、鉄球を落とす。

・Ｘ－００ＧＴ　Ｃ　機械化魔獣。硬い装甲に守られた巨大な獣。

【古代】

・魔天転器　ボンゴに奉られていた古代兵器。どうやらザイガに複数あるらしい。魔界と人間界をつなぐ役割を果たすもの。晶霊石だけはその影響を受けない。

【ジエルトン】

ウラル＝ジエルトンが結成した組織。目的は自衛及び魔物の討伐。情報の漏洩を防ぐため、孤児や、一子相伝で伝えられている。身分を証明するものとして、銀色の指輪が用いられている。「ｒｅａｌｗｏｒｌｄ」を教典としている。

【ディアボロス】
カルコンを世界の王にし、魔物を駆逐するために作られた組織。

【精霊術】
森羅万象に精霊が宿っているとした太古の考えに基づき、それらを自在に操る能力。
?開眼　精霊術を発現させること。剣の素振りなど様々な方法がある。
?発動　術を自在に操れるようになる事。開眼したものならば簡単に出来るが、エネルギーを消費する。
?応用　術を戦闘可能なほどに使用する事。

・熱　熱を直接使い引火させたり、筋肉を活性化させて身体能力をあげたりできる。

・風　風を自在に操り、自身や物を持ち上げて軽くしたり、真空波を飛ばして遠距離のものを斬ったり出来る。

【能力】
魔物や妖怪が先天的に持っている力。妖怪は2つ、魔物は1つ持っている。同じ能力でも、使用する者によって大きく異なる。

【剣】

ジエルトンでは基本的に剣を戦闘の手段としている。修行では術に合わせた重量を使う。また、本部の地下に鍛錬場があり、術や体格に合わせてオーダーメイドする。

プロローグ

遥か昔、人類が出現して間もない頃。この星ザイガには魔物や妖怪達が溢れ返っていた。人類との共存を許さなかった彼らは人間を喰らい、人々は日々怯えながら暮らしていた。

人類出現から数万年、一人の青年がついに魔物たちを封印した。その青年の名はカオス。彼は、封印が解かれた時にそなえ、自らの体を魔物や妖怪と共に封印したという。

彼はその間際に一つの予言を残している。

『例えこの世にいかなる光が宿ったとしても、闇が栄え、悪が生まれるときがくるだろう。』

物語はそれからさらに数百年後――――

第1話　ロイ＝クレイス　1

青空に包まれる海の上で、海鳥が羽の白さを自慢し合いながら羽ばたいている。その鳴き声と、ゆったりと流れる波の音色はハーモニーとなって小さな漁村、ボンゴを包んでいた。そのまま静かに時が過ぎようとした刹那、村に突然大声が響き渡った。

「ロイッ、聞いてんのかいっ！！」

初老の女性の怒鳴り声が海を正面に臨む木作りの家から上がった。屋根に群がっていた鳥たちが一斉に飛び上がる。この家はクレイス家。家長は漁師、その妻は主婦という、この村の９０％の家と同じ職業の平凡　な家庭だ。その家の中では手作りのテーブルをはさみ、浅黒い肌の初老の女性と真っ白な肌の少年とが向かい合って椅子に座っていた。ロイと呼ばれた少年は椅子の上でストレッチしながらぞんざいに応えた。

「聞いてるも何ももう覚えたっつうの！」

子どもにそう言われたことに怒りを覚えたのか、しわくちゃの女性は眉間にさらに皺を寄せた。

「じゃあ、さっさと剣の稽古に行っといで！」

「へ～～い」

「なんだいその返事は！ほんとに怒るよ！！」

その言葉に押し出されるように、ロイは家を駆け出した。

「ばーちゃんはうるさいなー。若い頃は村で一番の美女って呼ばれてたなんてとても信じられん」

家の外に出ると大きく伸びをした。目の前に広がるのは一面の海。夏らしい入道雲が沖合に見えている。ふと目を向けると、最近作りなおされた桟橋の端で老人が１人釣りをしていた。祖母に言われるがままに稽古に行く気になんてとてもなれず、なんとなくそちらの方に足を進めた。

「おお、ロイ。相変わらず怒られてるな。ここまで声が聞こえたぞ」

この村での老人の定義は息子が一人前になった後、引退して船に乗らなくなった男を指す。この老人も数年前に足を悪くして漁師を引退したが、長年鍛えられた体は健在だ。絶対に釣りをするより素潜りした方が魚が取れるとロイは思っている。

「大人が漁に出てると静かでいい。ま、淋しくはあるがな」

老人はにやっと笑った。ロイも首肯する。港につながれた船もなければ昼間から続く酒盛りの声も聞こえない。男たちは今漁に出ているのだ。

「それはそうと稽古に行かないとまたどやされるぞ」

そういう老人にロイは唇を尖らせた。

「俺は早く漁師の仕事を覚えたいのになんでその鍛錬が木刀振ることなんだよ。意味わかんね」

「伝統なんだ。ガイだって、お前の祖父さんだってみんなそうしてきた」

「わかったよ。行ってきます！」

声を荒げてそう言うと、家の方に戻り、家の裏にある1メートルほどの木刀を手に取って、林の中へと駆けて行った。

「船が帰ってきたぞー」

その言葉が聞こえてきた途端、汗を額から滝のように流していたロイの表情が明るくなった。耳を澄ますと、木の船が帆をはためかす音がかすかに聞こえる。ロイは振っていた木刀を放り投げて、一目散に潮の香のするほうへと駆けて行った。

クー、クー、クー

先ほどまでいっぱいに風を受けていた帆はきれいに巻かれており、船はロープで結わえられている。先ほどまで船底に詰まっていたで

あろう魚達は港に置かれた木の箱に小分けにされていた。
「これ、東の方に運んどけ！・・・おいそこ、休んでんじゃねぇ！！」
野太い男の声が響いている。筋骨隆々の黒光りする体をした中年の大男だ。名前はガイ。この村の漁船の船長で、ガイとの関係は――
「おかえりっ、父ちゃん」
ロイはガイに近づき、声をかけた。ガイは振り向き、ロイに気付くとがしがしと力強く頭を撫でた。
「おお、ロイ。ただいま」
１５歳のロイはこれでも１６０ｃｍはあるのだが、１８０ｃｍを裕に超えるガイ相手では見上げる形となってしまう。ロイの茶色がかった髪の色に比べて、濃い黒の短髪だ。ロイは肌も白いので、余計にガイの色黒が目立つ。
「今日の飯はなんだ？」
先ほどの怒鳴り声の顔とはうって変わって優しい笑顔になった。

その日の夜。一週間ぶりの家族全員揃った食事。クレイス家はロイと父母、祖母の４人だ。祖父はロイが生まれる前に事故で死んだ。嵐の日に船を守るために港に出て、波にさらわれたらしい。話によるとガイに負けぬほどの豪傑な人で、葬式には村人全員が駆けつけたとか。とは言っても村人は数えるほどしかいないのだが・・・。
「そういえば、漁場の最寄にあるテルの島のキーじいさんが言ってたんだが、海底に設置してあった網が食いちぎられたらしい。」
キーじいさんはこの家の話によくあがる人だ。相当高齢の人らしいのだが、若いころに１０ｍもある鮫を銛で捕ったなんて伝説も残している。テルの島はボンゴから南の方向へ３日ほど船で進んだ先にある小さな島で、人口はボンゴと同程度、面積はボンゴがあるタンタニア大陸と比べれば、気付かないほど小さい。
「じいさんの話だと大型の海底魚がいるって話だ。」

ボンゴ近海は暖かく、漁の条件が良いので、漁師の言う大型ってのは大体が3～4m以上の魚だ。4メートルは、二階から尻尾を持って（現実には重すぎて無理だが）魚の顔が地面に着くぐらいだと考えればいい。ロイも一度5メートルのフラットフィッシュを見たことがあるが、怖すぎてそれから3ヶ月ぐらいは食卓に上がる魚の種類を毎晩確認したぐらいだ。しかし、今となっては気にも留めず、目の前に出された父親の戦利品をほおばれるようになっている。

漁師は早寝早起きが他の仕事よりも確立されている。なぜならば、朝早くから仕事を始めることがほとんどの上に、休息を取らなければ命を落とす危険性があるからだ。家長のその生活スタイルは一家にも反映され、ロイもよほどのことが無い限り日が落ちる頃には床に付く。この日も横になり、すぐに眠ってしまった。

パン！・・・パン！

何かが破裂するような音がした。ロイはベットから飛び起き、窓から外を覗いた。

「きゃあああ」

聞き覚えのある女性の悲鳴が聞こえる。それだけではなかった。老若男女の悲鳴が村中に響き渡っていた。その声はあまりに痛切すぎて、絶えるはずのない波の音をかき消していた。ロイは意味もわからないままあわてて家を飛び出した。だが、そこで足が止まった。

――それは、あまりにもむごい光景だった。

体が上下二つに分かれている漁師がいる。あそこにうずくまっている女性には右肩から先が無い。その切れ目からは血が止め処なく噴出し、辺りに血の池をつくっていた。その先の林にいる人は首か

ら上が無い。先ほどまでその人を支配していた脳は・・・その隣の樹の幹にへばりついていた。

「ゲエエエエエ」

ロイはその場にうずくまって嘔吐した。もし、彼ら、彼女らが見知らぬ誰かだったらもしかしたら耐えられたのかもしれない。しかし、そこにいる人たちはロイが生まれたときからの知り合いで、家族同然に接してきた人たちなのだ。だが、そんな人々の命はあまりに容易く散っていた。

ようやく胃から出すものがなくなって顔を上げると、うずくまっていた女性は目を見開いたまま動かなくなっていた。池は次第に固まり、黒さを増す。ロイは再び吐き気を催したが、もはや胃液しか出なかった。

パン！・・・パン！

「何かが弾けるような音」は途切れることなくまだ続いていた。それは上空から聞こえてくるようだ。ロイは顔を上げ、明るみ始めた空を見た。

それを見た瞬間は、何がなんだかわからなかった。何か青いものが空に浮いている。よく目を凝らして見ると、水のようだ。大きな水の球体が空に浮かんでいて、そこから弾けるような音にあわせて、水鉄砲が発射されている。水鉄砲と言っても手で作るようなかわいいものではない。今、その水鉄砲のひとつが樹の幹に当たり、樹をなぎ倒した。その水鉄砲は樹の幹の幅よりも大きい。

「なんだ、あれ・・・・・？」

ロイがそう思ったとき、朝日がそれを照らした。

中には魚がいた。樹の肌みたいな色をした魚。よく見ると、深海魚に特徴が似ており、陸上動物にはありえないほど口が大きい。対比させるものが無いので大きさはわからないが、さっきの水鉄砲の大きさと比べると軽く１０メートルはありそうだ。それが球体の水

の中で泳いでいる。その動きはまるでこの光景を楽しんでいるかのようだった。

「ちくしょう、どうなってんだよ・・・」

そうロイが悪態をついた瞬間！水鉄砲がロイめがけて飛んできた。

「危ねえ！」

ロイの視界は右へと引っ張られた。

「おい、ロイ！大丈夫か！？」

どうやらガイがロイを突き飛ばしたらしい。ガイの右腕には水鉄砲がかすったのか、血が滲んでいた。

「くそっ、こっちだ、走れ！」

ガイはロイの手を引いて村の広場の方へと走った。上空の魚は、動かない人間を優先的に狙うらしく、ロイたちのほうは向いていなかった。

村の中央には石でつくられた塔がある。それほど高いものではなく、見張り台として使われている。何でも、村をつくってから建てたものではなく、ここを拠点に村を作ったというのだからかなり古い物だ。その塔の下は、村の備蓄庫になっていて、時折来る盗賊にも開けられないように頑丈に造られている。

「ここに入れ、早く！」

ガイは、持っていた鍵で錠を空け、ロイを中に入れた。自分もその中に入ると、扉を閉めた。

「全く、お前はいつまでっても朝寝坊だな」

ガイが微笑んだ。その顔は今まで１５年間慕い続けた「父ちゃん」の顔だった。

「なんだよこれ・・・」

ロイは俯き、震える声でその言葉を喉の底から押し出した。

「いいか、現状だけ言っておく。お前と、殺された村人、そして俺以外は村の離れの避難所にいる。母ちゃんも一緒だ。だが、ばあちゃんは・・・助けられなかった」

ロイの頭の中で何かが崩れる音がした。今まで家事やら父ちゃん

の手伝いやらで何かと忙しかった母ちゃんの代わりにロイにいろんなことを教えてくれた・・・。その光景が脳から溢れ出てくる。

「あれは恐らく・・・魔物だ」

それ以外考えられない。それは子供であるロイにも分かった。あんな獣がいるはずが無い。確かに魔物は封印されただけで、まだ生きているとも教えられていたのだが・・・。

「いいか、お前はここにいろ！」

ガイが、先程よりもさらに真剣な顔をして言った。

「お前『は』って、父ちゃんは？」

「このままあいつらにここに巣食われちゃあ避難してるみんなが生活できねえ、塔にある古代兵器を使う」

「兵器？」

「爆弾だ！」

それは初めて聞く言葉だった。古代兵器？爆弾？そんなものがこのボンゴに？

そう思ったとき、はっとした。

「じゃあ、父ちゃんはどうなるんだよ！？」

「・・・・・村のみんなのためだ」

ガイの顔に少し笑顔が戻った。それから小さく溜息をつくと、ロイの目をまっすぐ見た。

「その前に、お前に教えなきゃならんことがある。お前の生い立ちのことだ・・・。俺も母ちゃんも若かった頃・・・今よりもっとだ。母ちゃんには幼馴染の女がいた。その人はこの村に迷い込んだ旅人の男と恋に落ちてな。実は・・・お前は・・・・・・その二人の間の子だ。母ちゃんだ産んだ子供じゃ、ない」

目の前が真っ白になった。それはあまりにも唐突過ぎて、重すぎる事実だった。

言葉は出てこない。今にも意識を失いそうだった。ガイの言葉だけが静かに脳の中を何度も反響していた。

「その男はまたすぐ旅に出て、その女はお前を産んですぐに死ん

だ。母ちゃんは実は病気でな。子どもがつくれない体だったんだ。だから、俺達がお前を引き取ることにした」

そう言われたとき、なぜか妙に納得できた。ロイの容姿はほかの村人と違う。肌が白いのも髪の毛の色が薄いのもロイだけだ。

「俺と母ちゃんはなあ、女が死ぬ間際に約束したんだ。何があっても守るってなあ。だからよぉ、ここにじっとしていてくれ」

ガイは今にも泣きそうな顔をしていた・・・。それはロイも同じだ。わかっている。今すぐにガイは死別する。

「わかった」

そううなずいたロイの頭をガイはガシガシと撫でた。

「それでこそ俺の子だ！いいか、忘れんなよ、お前はあの二人から血を受け継ぎ、俺達から愛情を受け継いできたんだからな」

涙が止まらなかった。これがロイが自分の目標にしてきた「父親」の最期なのだ。

「じゃあな、ロイ！！ちゃんとでっかくなれよ！！」

ガイは扉を開けた。先ほどから続く水鉄砲の音がさらに激しくなる。

「と・・・父ちゃん！！」

ぎぃぃぃ、バタン。重々しい音をたてて扉は閉まった。水鉄砲の音は弱くはなったが、已然として鳴り響いている。

ドウン！！！！

世界が揺れた。壁際に積んであった木箱は転がってくる。ロイは反対側の壁に近付いて、それをかわした。しばらくすると音が完全にやんだ。とめどなく続いていた水鉄砲の音も聞こえない。水鉄砲は止まったのにロイの目から溢れる涙は止まらなかった。

いつもの夜だったはずだった。朝になったら港に行ってガイを手

伝って、剣の稽古をつけてもらって、疲れて帰って母ちゃんの美味い飯を食って眠る。何で、どうしてこんなことに――。

壁の上に積んであった小箱が崩れ、ロイの後頭部めがけて落ちてきた。視界はすぐに黒くなり、何も見えなくなった。

第1話　ロイ＝クレイス　2

それからどれくらいの時間が経ったかわからない。ロイは倉庫の中の物を何とか喉に押し込み、何日かをそこで過ごした。
涙が止まらなかった。父親はもうこの世にはいない。その事実がロイの孤独感をさらに加速させた。扉には鍵がかかっていなかったが外に出ることはなかった。ガイの話では母親や村民の何人かはまだ生きているはずだ。ならば貯蔵庫にある食料は不可欠なものなので必ずこの場所は外から開けられる。開かないという事は周囲に誰もおらず、まだ安全ではないという事なのだろうと考えた。
涙がようやく収まったころ、1人でいることに限界を感じてゆっくりと扉を開けた。避難所から戻ってきたみんなが復興作業をしているかもしれない。そんな期待をこめながら――

「なんで・・・。なんでなんでなんで！」

――そこには何も残っていなかった。まるで知らないどこかに迷い込んでしまったように、何も無い世界だった。

「どう、して・・・・・・」
真っ白な世界。そこにたたずむのはロイ一人。
「どうして！！」
ロイは膝をついた。さっき抱いた期待はただの虚構だった。世界と同じくそんなものはどこにもなかった。
――村は無かった。ロイが15年間暮らした家も、桟橋も、剣の稽古をした林も、みんなが働いていた港も、みんなが避難しているはずの遠くの離れも・・・。全てが、この世界から削り取られていた。残ったのは、白い砂と白い塔、そして肌の白い自分だけ。
既に枯れたはずだった涙が再び流れ出す。

――白い世界は慟哭に包まれた。

「やはり何も残っていないか・・・」

一人の人間がボンゴの跡地を眺めていた。紫に近い黒いローブを頭から爪先まですっぽりと被っている。

その人間が海のほうへ向かって歩いていくと、真正面に白い建物を見つけた。

「なんだ、やっぱりあるじゃないか。」

そう呟きながら建物に近づくと、そこには少年がうつ伏せに倒れているのが見てとれた。

「おい！」

男は駆け寄り、少年を抱きかかえた。息はちゃんとしている。ローブの人間は安堵の吐息を漏らすと、少年を建物を背もたれにして座らせた。

「うっ」

少年は苦しそうに顔をしかめると、目を開けた。その少年の目に男は少し戦慄する。少年とは思えない、一片の光も見いだせないような闇色をしていたからだ。

「おい、水だ。・・・飲めるか？」

男は懐から水筒を取り出し、少年に飲ませた。

少年は掠れたか細い声で何か問いかけたようだったが、男には聞こえない。

「立てるか？」

男が顔を覗き込むようにしてそう尋ねると少年は小さくうなずいた。

男は少年を立たせると塔の下にあった空間に少年を担ぎながら入っていった。どうやら村の備蓄庫のようだった。ものが散乱している。砂が入らないように扉を閉めると、少年の方に振り返った。

「私の名前はギン。ここの北の山、カリューに住んでいる者だ」

そういって、ローブのフードを取った。金色の髪に青い目をしてい

る。顔は少年が今まで見たこともないほど整っていた。
「君は・・・ボンゴの者だね？名前は？」
少年は頷いた。
「ロイ＝クレイス」
言葉にも表情にも目にも何の感情も見いだせない。
「ロイ君・・・か。君はどうして助かったんだい？」
ロイはかすれる声で静かに話し始めた。突然、空飛ぶ魔物に襲われたこと、父親が村を守る為に古代兵器を爆発させたこと、そのせいで村人も村も消し飛び、後には自分とこの塔だけが残ったこと。その話はロイが主人公のはずなのに、なんの抑揚も感情もなく、まるで遠い昔の伝説を聞いているようだった。
「当てはあるのかい？」
ロイは落ちくぼんだ目をギンに向けると首を横に振った。ボンゴは南を海、あとは山に囲まれた土地で、完全自給自足の生活をしている。ロイはこの村から出たことすらない。他の村人もボンゴ以外に知り合いもいなかったはずだ。
「わかった、それじゃあ、私についてきなさい」
ギンは言って立ち上がった。ロイに向かって手を伸ばす。
「どうしてですか・・・？」
乾いた唇がかすかに動く。いや、かすかにしか動かせなかった。
「多少の衣食住は面倒を見てあげる。体が回復したらカリューより北の街に行けば最低限生きていくくらいはできるだろう」
「生きて、いく・・・・・？」
ギンの目が鋭くなり、ロイを睨むとロイの胸倉をつかみ、持ち上げた。つま先が浮いている。苦しくはないが、身動きは取れない。何が起こっているのか理解するよりも先にギンの口から叱責が発せられた。
「お父上は最期になんと言ったんだ！何を願ったんだ！生きるんだよ！君は死んだか？生きてるだろう！君が生きなきゃ誰がお父上の勇姿を讃えるんだい？誰がその勇敢な魂を受け継ぐんだい！？」

ロイの目から、またしても涙が溢れた。すっかり痩せこけてしまった頬に涙が伝う。

「わからないよ・・・。なんで、どうしてこんなことに・・・・・・」

ギンはロイをゆっくりと床に下ろし、持っていた水を再び与えた。

「さあ急ごう。いつまた魔物がくるかわからない。とりあえず、この倉庫にも食料や路銀はあるはずだ。ぐずぐずしている暇はない」

そう言って、倉庫を物色し始めた。品の選別の手際のよさをロイはぼーっと眺めていた。

「さあ、出発だ」

しばらくして、倉庫の中のものを結局ほとんど背負い、笑顔とともにギンは言った。

カリューの山は、それほど高いものではない。しかし、途方もなく広く、草木が生い茂っていて人はなかなか通らない。ガイも若い頃に登ったことがあるらしいが、途中で帰ってきたそうだ。山を越えた向こうにあるという麓の町までの道のりの半分ぐらいは行ったらしいが、それでも丸2日かかったという。

ロイはギンの大きな歩幅に四苦八苦しながら歩いていた。途中見たこともない獣や蛇、虫など様々な生きものがいたが、ギンは気にしていなかったので、恐らく害はなかったのだろう。ただ、山に入る前に、大きな牛みたいな生き物を見たら即座に伝えるように言われた。ギンはそれ以外にはほとんど喋らなかった。ロイも喋る気はなかった。

ボンゴを発ってから丸一日。そこについたときにはギンの表情も見えないくらい辺りは暗くなっていた。

家があった。ロイの家と同じぐらいの大きさだ。丸太でできていて、結構頑丈そうなつくりだった。

「ただいま」

不思議なことにこの家に扉はない。奥を見れば部屋らしきものはあるが、大きな机やいすが置いてある場所は屋根があるだけで、吹き抜けになっていた。

「あれ？誰もいないのか。しょうがないな」

口ぶりから、２人以上の人間がほかにもいることが窺えたが、今のロイにはそんなことに気づく余裕はなかった。山登りで体力がないのはもちろんだが、それよりも気力の方が底をついていた。

結局、一番奥の部屋を案内され、そこにあったベッドに倒れ込み、気を失うようにして眠った。

第1話　ロイ＝クレイス　3

目が覚めると、室内は窓から差し込む夕焼けの赤に染まっていた。
見慣れない天井を見上げて、見慣れない狭い部屋を見まわした。しばらく考え、昨日何があったのかを思い出した。
ベッドから体を起して逡巡する。前にベッドで寝たのはまだ幸福だった時だったか。思い出してももう涙は出なかった。それは時間が経過したからなのか、心が死んでしまったからなのか、自分ではわからない。
ただ、思い出される言葉があった。ギンと名乗った怪しげな男の言葉、ロイに生きろと焚きつけた言葉。だから、とりあえず生きておこうと思った。
「足、いて・・・」
じっとしていることが嫌いで普段から走り回っているのに、両足に体重をかけようとした途端に筋肉が悲鳴を上げた。痛みをこらえながら立ち上がると、倒れるようにして外開きのドアを開けた。
ゴンッ
何か固いものに当たったらしい。まさか壁があってちょっとしか開かないようになっているのか？設計ミスか？と思い、ドアノブに体重を預けながら少しドアを引いて外を見た。
「誰っ！？」
そこには筋骨隆々の大木の様な男が立っていた。どうやらドアは壁ではなく、この男の額に当たったらしく、男は無表情で額をさすっていた。顔は怖い。生まれてこの方、ロイが人の顔を怖いと思ったのは初めてだ。
「どうしたオルソー？」
右の方から野太い声が響いてきた。そして顔をのぞかせたその声の主を見て、ロイは目を見開いた。
「お、同じ顔だ・・・・・」

双子という概念を知らなかったロイにとって、その光景はホラーだったらしい。しばらく男を指差したまま固まっていた。
額をさすっていた男は何も言わずに歩きだしたので、ロイは何となくその後をついていった。
真ん中に大きな木造りのテーブルがある部屋だった。テーブルの上にはランタンが1つだけ置いてあり、火が灯っている。この部屋には夕日は差し込んでいない。窓は東向きなのだろう。
「やあ、ロイ君。おはよう・・・というにはもう夕方だね。この場合はなんて言えばいいのかな？」
大きな机に座っていたのはギン。そしてその横に座っていた男の顔を見て、ロイは意識を失いかけた。
そう、彼らは世にも珍しい3つ子というやつだったのだ。
「この子はロイ君。戦利品だ」
軽く咳払いして、ギンは言った。男たちはそれぞれ椅子に座った。
ロイの目の前には太い丸太があったので、とりあえず腰かけてみた。反応を見る限り、間違ってはいなかったようだ。
「もう少し売れそうなガキはいなかったんですか、お頭？」
ギンの隣に座っている男がにやにやと笑いながら言った。同じ顔だが、先ほどオルソーと呼ばれた男とは表情が全く違う。オルソーは一言も喋らないし、仏頂面のままだ。
「これじゃあいっても5万ピークルがいいところだ。ま、好き者の婦人なら買ってくれるでしょうが」
ピークルと言うのはザイガの星共通の通貨らしい。らしい、というのはボンゴでは貨幣経済そのものが成り立っていなかったので、ロイはお金と言うものを見たことがないからだ。だからそれがどれくらいの価値なのかもわからない。
「えっと・・・買うって・・・？」
徹頭徹尾、話が全く見えてこない。
「冗談だよ」
ギンはくすくすと笑った。４人の中で唯一顔の違うギンは恐らく3

人よりも若い。だが隣に座っている男が少しだけ丁寧な口調で喋っていたのが気になった。

「じゃあお頭、やっぱ戦利品は食料だけですかい？」

倉庫の中の食糧をギンはまとめていた。戦利品というのはおかしいが、あれは火事場泥棒のようなものなのだろうか。ロイは更に警戒心を強める。

「う～ん、労働力、かな？」

「は？」

ロイは首をひねった。さっきから話がなに1つ見えてこない。

「あ、ごめんごめん、言うの忘れてたよ。いや、君がずっと暗い顔をしてたからなんか独りになりたいのかな～と思ってさ、こっちも話しづらかったんだけどね。まあ元気になったみたいだから大暴露大会催しちゃおうかな、うん。実はだね、私たちは盗賊なるものをやってるんだよ。あっ、でもとって食わないから安心していいよ。その代わりにちょっとやってほしい仕事があるんだ」

昨日、ここに来るまでまったく喋らなかったギンが矢継ぎ早に話し始めた。あっけにとられたロイは、ギンの言葉を全て理解するのに相当時間がかかった。

「盗・・・族・・・？」

ボンゴに足を踏み入れた理由。カリューに住んでいるわけ。そして何のためらいもなく倉庫から食料を持ち出したこと。確かにつじつまは合う気がした。唯一合わないのはロイがここにいる理由だけだ。

「それはつまり、生かす代わりに盗賊の片棒を担げと・・・？」

「うんそう、決定。じゃあよろしく」

ギンは目の前で手を汚してまで生きることを選択すべきか迷っているロイを無視して勝手に決定した。

「えと、こっちからヘルゲン、アンゴラ、オルソー・・・だよね？」

「正解です」

応えたのはヘルゲンだけだった。

「で、早速仕事なんだけど」

「えっと、ちょっと・・・ちょっと、待ってください」
ロイはあわてて声を上げた。
「ああっ、ごめん。・・・ロイ、君は僕たちについて生きるか、それともこのままのたれ死ぬか・・・どっちを選ぶ？」
銀は極めて愉快そうに笑いながらロイを見た。
３人が「違うだろ」という目でギンを見ていた。
ロイは混乱する頭の中で、昨日ギンに言われた言葉がくり返していた。

『お父上は最期になんと言ったんだ！何を願ったんだ！生きるんだよ！君は死んだか？生きてるだろう！君が生きなきゃ誰がお父上の勇姿を讃えるんだい？誰がその勇敢な魂を受け継ぐんだい！？』

心は既に決まっていた。丸太から立ち上がって勢いよく頭を下げた。
「よろしくお願いします」
何があっても、とりあえず生きてみようと思った。それに、なんだかギンなら信用していい気もしたのだ。
その言葉を聞いて、ギンはニッコリと笑った。
「よろしい・・・ようこそ我らの家へ。で、早速仕事の話だ」
「な、なにをすればいいんですか・・・？」
恐る恐るロイは尋ねる。盗賊という事は犯罪者だ。危険も冒すし悪いこともしなければならないのかもしれない。しかし、そんなロイの不安をよそに、ギンの解答は実に単純明瞭なものだった。

「う～～～ん・・・・・雑用？」

第2話　ウラル＝ジエルトン　1

「朝早いけど大丈夫か？」
そうヘルゲンが言った。よく喋るこの男が長男だそうだ。3つ子というのは説明を受けてもよくわからなかったが、要するになんやかんやで3人同時に生まれたらしい。
早起きは習慣だったので問題はなかった。ただし、夜まで起きているのはなかなかきつい。しかしこの3日で少しではあるが慣れてきたようだ。
仕事は薪割り、炊事、洗濯、木の実や山菜などの採集が主だ。標高のそれほど高くないカリューではボンゴの近くに自生している木の実や山菜とほぼ同じものが採れた。
雑用をしているのは基本的にロイ一人だ。3人はたまに出かけては獣を狩ってきたり、かと思えば何も狩らずに泥だけになって帰ってきたりする。ギンはといえば一日中机に座ってお茶をすすっていたり、たまにふらっと出かけたと思えばすぐ戻ってきたりと退屈そうな毎日を送っていた。

「おお、大変だな、ロイ。ご苦労ご苦労」
ロイがここに来て4日目。黄昏時になり、ランプに火がともされた。ロイは夕飯のために机を拭いていた。こんなところに置かれているからか、表面がざらざらしていて、それでいて汚いので面倒なことこの上ない。そんなロイにヘルゲンが声をかける。それをねぎらいの言葉ととれるものは相当の聖人であるか、正直者だろう。なんせ、ロイ以外の4人は椅子に座って何もせずにロイが働くのを見ているだけなのだから。
「まだ汚いよ、ロイ。ほらっ、もっと手を素早く動かして」
今日は結局その場所を一度も動かなかったギンがそう言ったとき、ロイの怒りがピークに達した。

「やってらんね～～！！」
ロイは布巾を床に叩きつけた。本当ならギンに投げつけたいところだった。そうしなかったのは助けてくれた最低限の恩義というやつだろう。
「何で俺がこんなことしなくちゃなんねえんだ、面倒くさっ！！3日も正直にやってた俺も馬鹿だけどっ！！」
地団駄を踏みながら叫んだ。
「あんた、暇なら手伝えよ！！」
力強くギンを指差す。それを受けて、それまでにやにやと笑っていたギンの金色の眉毛がピクリと動いた。
「ふぅ」
「ちょっと今ため息付いただろ！聞こえたぞ！！」
今のロイにとって自分の発言を妨げようとするものは全て敵であった。
「こんなことに何の意味があるんだよ！ていうかだいたい盗賊じゃねえじゃん！こんなところ誰も通らねえじゃん！なにも盗めねえじゃん！なにも盗まないおっさんたちを人は盗賊とは呼ばねえ、世捨て人と呼ぶんだよ！」
3日間たまりにたまった鬱憤。それが一気に噴き出した。
「あ～あ、せっかく頑張っているみたいだから剣の稽古でもつけてあげようかと思ったのに」
「は？何言ってんだよ。わいてんのか！？」
ロイの人差し指が自分の頭を指す。
要するに『頭大丈夫ですか？』のポーズ。そんなロイに対してギンは静かに目を細め、口を開いた。
「だって君はいつか自立するわけでしょ？魔物を見たんだろ？わかってる？復活した魔物はあれだけじゃないんだよ。何年も前から人間はもう既に襲われてる。そんな世界で君は本当に生き残れると思ってる？無理だよ、それは。私達だってどうなるかわからない世界だよ。ここを出たら君なんか1週間と持たないよ。野垂れ死んでカ

ラスの餌がせいぜいだ」
まくし立てられた言葉にロイは一瞬にして口ごもった。それは確かにわかっているのだ。ボンゴ以外を何も知らないロイが1人で生きていけるはずもない。分かっていたからこそ3日間苛立ちを抑えながら黙って働いていた。しかし、ロイ自身ですら何も考えていなかったロイの将来をギンはすでに見ていたらしい。
「あの日のあの村が初めてじゃないんだよ。もう何年も前からザイガは魔物に犯され始めている。こんなに増えたのはほんの数年前からだけどね。だから君は決して特別じゃない」
「・・・・・・」
知らなかった。ボンゴは他との交流が全くなかったから仕方がないのかもしれないが。ずっと自分だけが不幸なのだと思っていた。自分だけがこんな目にあっているのだと。
ロイは俯き、自分への情けなさから溢れる涙を拭った。
「また泣くの？君はもう子供じゃないんだよ？この3人が僕との生活を始めたのだって君よりずっと小さい頃だったし、私が魔物に家族と故郷を滅ぼされ、血肉をすすり、人を見たらまず奪うような生活を始めたのは9歳の時だ。君はもう子どもじゃないんだ。泣いてる場合じゃないことぐらい察しなよ」
ギンの言葉が強く心にグザグザと刺さっていく。ギンの顔を見て、3人の顔を見た。ロイよりもずっと小さいころに絶望を背負いながらも生きることを選択した男たちの顔を。
ロイは涙を残らず拭うと、大きく息を吸った。
「すいませんでした」
「謝る必要はないさ。何も考えずに言ったことなのだからそれは君の本心だ。それが間違っているわけじゃない。ただ私が言いたいのは考えもなしに動くのもいいがそればかりではいけないという事さ。さて、冷静になったかな？じゃあ少し考えてみようか。君はこの世界を生き延びなくてはならない。そのためには力がいる。どうだろう、君はそれはを望むかな？」

選択肢など始めからなかった。ロイは決して忘れていないのだ。あの日を思い出すたびに悲しみとともに湧き上がる激しい怒りを。

「・・・・・はい」

思いを巡らせているうちに怒りの対象がギンから魔物へと変わっていた。拳に力を込めながらもロイはギンを見据えてそう言った。

「オーケイ。大事な話がある。そこに座りなさい」

ロイが丸太に腰をかけると、ギンが話し始めた。

「さっき君が言っていたが・・・そう、私たちは盗賊ではない」

「やっぱり・・・・・」

ロイは呆れた顔でギンを見た。

「ま、私は物心ついたときから盗人をやっていたから似たようなものだけどね」

微笑みながらギンは話す。そんな辛く苦しい経験をそんな風に語れるのは時間が経験したからだろうか?それとも乗り越えたからだろうか?

「私とこの3人の関係は師弟だ。見えないだろうけど彼らは18歳、私は今年で24になる」

「ええっ!?」

どう見ても3人の方が老けて見える。ギンの見た目が非常に若々しいのもあるだろうが、3人が老けすぎだ。どう見ても実年齢の倍は生きているように見える。

「そして今、私たちはこの山に居座っている魔獣を追っている。ここに来る間に言った『牛みたいな生き物』と言うのがそれだ」

「魔獣?」

聞き慣れない言葉に聞き間違えたのかと耳を疑った。

「まあ、色々いるんだよ。そういうのは後で説明しようかな」

とにかく、カリューには何かがいる。ようやくこんな僻地に身を置く理由に納得がいった。

「でもなんであんた達なんだ・・・ですか?」

「私たち4人だけじゃない、既にザイガ中で同志が活動している」

ザイガは世界の中心にボンゴやカリューがあるタンタニア大陸がある。その北東にバーカギル、北西にロスターニャ、南東にジラビア、南西にクルシスそれぞれ大陸がある。中でもタンタニア大陸は巨大で、ほかの大陸全てを足しても半分ほどの面積もない。

「私たちの組織の創立者はカオスと共に戦ったものだ。カオスの予言を危惧し、この星に私たちを残した」

カオス。かつてこの星から暗黒の闇を取り払い、希望をもたらせし者。その伝説は小さいころから毎日の様に聞かされてきた。そのカオスと時を共に過ごしたという事は数百年前からある組織だということだ。

「まあ、割と名の通ってない組織ではあるんだけどね。私たちのような身寄りのないものも多い。むしろ魔物による遺児を積極的に集めている節がある」

ギンと3人、そしてロイの共通点。ロイの村を滅ぼしたのが魔物だったからこそ、ギンはこの話を切り出したのだろう。

「私たちの組織の名はジエルトンという。これは創始者、ウラル＝ジエルトンの名前だ。そして・・・」

ギンは指を立てると「ちょっと待ってて」と言って立ち上がり、奥の部屋へと入っていった。数秒後、何か棒状の物と、小さな木箱を持って現れた。棒状の物は1メートル以上あり、布にくるまれている。

ギンが棒の布を取ると、中から出てきたのは一振りの剣だった。1メートルほどの大剣。鍔は左右に開き、恐らく剣と聞いて誰もがイメージするだろう形である。鞘は黒く、柄の部分は横縞の模様が彫ってある。

木箱は開けずに剣の横に置いた。

「話の途中だったね。この木箱の中に入っているものは唯一私たちの身分を証明するものだ」

そう言って木箱を開けた。中には銀色の指輪が入っていた。何も彫っていないシンプルなものだった。

「そしてこれは、君の誕生へのプレゼントだ」
そういって剣を鞘から抜いて見せた。刀身はロイの後ろにある窓から入り込む光を反射し、眩しい。
ギンは剣をもう一度机の上に置くと、ロイの目を見据えた。
「君には、今から私たちの同志になってもらう」
「はい」
ロイもギンの目を見据えながら答えた。
「よろしく、ロイ」

――覚悟は既に出来ていた。力を蓄え、魔物を討つ。それが今のロイの生きる意味である。この日から、ロイは戦いの世界へと足を踏み入れたのだった。

第2話　ウラル＝ジエルトン　2

「まずはここで剣を振りなさい」
剣を渡されてすぐにロイはそれを言われた。場所はというと小屋のすぐ目の前の野原だ。3人も3人で修業というものがあるらしいが、それは全く別の場所だ。ギンはというといつも通り椅子に座ってにやにやと笑いながらお茶をすすっていた。その様子に少しだけいら立ちながらロイは言われるがままに剣を振った。小さいころから木刀を振らされているのでこれくらいなら余裕だ。そんな風にたかをくくっていたのだが・・・・・。

「ゼェ、ゼェ」
まだ始まってから30分も経っていないのに、ロイの額には汗が止め処なく流れ続けていた。息が荒くなり、ペースはどんどん落ちている。真剣がこれほどまでに重いとは思わなかった。鋼剣は見た目よりも軽いものの1，5？ほどある。それに加えロイの体にはあまりに長すぎるその刃にかかるモーメントがロイへの負担を何倍にも増幅していた。
「ここまでか」
ロイをずっと観察していたギンが目を細めた。
剣を振り上げた時に止まることができずに後ろにひっくり返って尻もちをついてしまった。
「・・・っつう」
ロイの右手は痙攣し、親指と人差し指の間はこの短い時間の間に肉刺ができ、つぶれて血だらけになっていた。ロイは剣を地面に置くと、激しく息をしながら。ギンの方へと目を向けた。
「20分くらいかな。まあ、いい方だ」
ギンは立ち上がってロイに近づいた。まじめな顔をしている。
「あと一ヶ月で2時間、今のペースで振り続けるようになってもら

う。もし、誰か、もしくは何かと対峙することになったとき、技術よりもまず体力がものを言う。体力の限界＝死だ」

「精進します・・・お頭」

ロイの掠れながらも力強い声とその言葉を聞いてギンは肩をすくめた。

「わざわざヘルゲン達と同じ呼び方にしなくても」

いつのまにか微笑が戻っている。

「いや、兄弟弟子だからそっちのほうがいいと思ってるんスけどね」

「ま、いいや。じゃあ、がんばってね」

ギンは家の中へと入っていった。その姿を確認した後、ロイはゆっくりと立ち上がり、森の中へと消えていった。

「あれ？お頭、ロイはどこですかい？」

自分たちの修業から帰って来たヘルゲンが尋ねた。日はもう暮れかかっていて、山は赤く染められていた。

「あいつ今日の飯当番なんスけど・・・」

もっとも、昨日も今日も明日も明後日も当番はずっとロイのまま変わらないのだが。

「ロイなら表でちゃんと・・・」

ばててるよ。と言おうとしたが、その言葉はさえぎられた。

「いません」

先ほどまでロイを探していた三男のアンゴラが椅子に座るなり言った。

「え？」

目を向けるとそこには鞘に収まった剣が置かれていただけだった。

ロイが剣になってしまったのではない限り、そこにはロイがいないことになる。

「逃げた・・・わけじゃない筈だけどな」

立ち上がって剣を拾う。柄の血は既に乾いていた。帰ってきたら手入れの仕方を教えてやらなければならない。帰ってくれば、の話だ

が。
その時、赤から黒に変わっていく道を走ってくる人影があった。
「すいません！手首が動かなくなったので、足腰だけでも鍛えようかと思ったんスけど、思いの外遠くまで行きすぎて帰ってくるのに時間が掛かりました」
ロイだった。汗だくになって、肩で息をしながらギンのもとへと駆け寄ってきた。その顔を見て、ギンはすぐに悟った。
「ロイ、ボンゴを見てきたかったんだね」
ロイは頷いた。
「もうあそこには戻れないし、ここにくる時は突然だったから、どうしても見ておきたくて・・・」
「それで、もういいんだね？」
「はい・・・じゃあ、飯作ります」
そういってロイは厨房の奥へと入って行った。
握られたこぶしに力が入る。ギンたちとは比べ物にならないほどの小さなこぶし。それでも――
「強く、なるんだ」
ギンとその横にいた三人は椅子に腰掛けた。ヘルゲンが尋ねる。
「ほんとにあいつも連れて行くんですかい？」
ギンは答えなかった。難しい顔をしたまま目を閉じた。

それから数日間、ロイは剣の振ることのできる時間を着々と伸ばし、体も一回り大きくなったようだ。そして素振りを始めて3週間後――

「ハッ、ハッ」
やはり剣を振っていた。しかしほぼ三週間前と比べて振り下ろしから振り上げまでが格段に早くなり、形もより美しく洗練されつつあった。既にロイが剣を降り始めてから1時間が経過していた。
「少し暑いな」
毎日のように座ってロイを眺めているギンが呟いた。いつもはほと

んど汗をかかないギンが、日陰に座っていても暑く感じ、まるで汗を大量に流していた。

「異常気象かな？」

ギンは立ち上がり、屋根から出て太陽を仰いだ。しかし、太陽からはその暑さの原因は感じ取れない。むしろ正面から熱風が漂っている。そこにはロイがいた。

「暑くないかい？」

集中しているロイは反応しない。ギンはロイのほうへとまた一歩近づいた。すると、まるで炎の前に立っているような熱を感じた。

「これは・・・・・・」

その熱はロイの体から発せられていた。しかし、ロイはいつもと同じようなシャツ一枚の体からいつもと同じように汗を流しているだけで、いつもと同じように剣を振っていた。だからそれに気付いたのはギンだけだ。

ギンは何か思いついたように目を見開くと、大きく頷いて息を吐き、小屋の椅子（ヘルゲンが言うにはお頭ポジション）へと戻り、お茶をすすりながらロイを眺めた。

「ロイ、2時間が経った」

「・・・・・・・・・・・・えっ？」

ロイは言われたことが理解できなかった。脳の大半はまだ剣を振ることへと注がれていた。

「ロイ！終わりだよ」

言われたロイはようやく剣の動きを止めた。剣を地面に刺すと、その場に座り込んだ。周囲の空気はいつのまにか涼しい風へと変わっていた。

「まさか3週間でこなせるとは思ってもみなかったよ」

ギンはにこりと笑い、ロイはそれに笑い返した。

「楽勝っス・・・・・・よ・・・・・・」

ロイは疲労からか、その場に倒れこんでしまった。ギンはロイのも

とへ行くと、剣を拾った。まだかすかに熱が残っている。
「こんなに早いとは思わなかったな」
ギンは複雑そうな顔をする。そして自分の足元に倒れているロイを担ぎ、中に入っていった。

第3話　妖怪　1

ロイが出された課題をやり終えた次の日。
「今日も晴れてるな」
ロイは自室ベッドの上で目を覚ました。太陽が上がるか上がらないかといった時分で、まだまだ薄暗い。西向きの窓から見える空には雲がなく、しばらくこの快晴が続くことを示唆していた。
ベッドから起き上がると身体の節々がこわばっていた。
「えっと・・・。確か俺は課題をやり終え・・・たんだよな？」
首をひねる。そこから先の記憶がない。まさかあれは夢だったのだろうか。
「あ、やべ。昨日の夕飯作ってねえや」
雑用が脳髄に染み込んでいた。考えるよりも先に朝食の準備をしようと思いなおし、厨房へと向かった。

それから数時間後、ロイはギンといつもの野原にいた。どうやら課題はちゃんと達成されたらしい。ロイは少し遅い達成感と次の修業への期待で胸を膨らませていた。ロイはおよそ真剣な目つきででギンの話を聞いていた。
「じゃあロイには次の修業に移ってもらう」
ギンがそう言いかけたとき、森の中から低いうなり声が聞こえた。その声があまりにも不快だったので、ロイは思わず身震いをしてしまった。
見るとギンの表情は先ほどのロイ以上に真剣なものになっている。その顔を見て、瞬時にこの声が目的の魔獣のものだと察した。
「ロイ、ここにいるんだ！」
声を上げたギンに対してロイは眉をひそめた。自分はギンが指定した課題をクリアしたのだから連れて行っても助けになる事はあっても足手まといにはならないはずだ。

「俺も行きます」
そのロイの強い目にギンも揺れ動かされてた。ロイに魔獣との戦いを見せることは大切なことだし、幸い魔獣ならそれほど手ごわい相手ではない。離れて見ていれば巻き込まれることはないだろう。
「わかった・・・来なさい」
ギンはそういって駆け出し、ロイもそれに従った。今まで気付かなかったが、はためいたギンのローブの中にはロイのものより遥かに長い長刀が隠されていた。
道の途中で合流したヘルゲンたちと共に、再度うなり声が響いた根源の方向へと向かった。3人もギン同様に真剣そのものの表情で走っていた。
「・・・・・」
必死に走りながら、ロイはあの時の光景を思い出していた。村人が届くことのない距離で、村人を確実に殺せる水鉄砲を撃つ魔物。今からああいったものを倒しに行くのだ。自然にこぶしに力がこもった。
気付けばだんだんと4人の背中が遠のいていた。足腰には自信があったのに、これだけの距離走っただけでもう追いつけなくなっている。ロイは考えるのをやめて、ギンたちについていくことに集中する事にした。

その場所は、家からさほど離れていなかった。樹は明らかに力で根こそぎ倒された形跡があり、そこだけ見晴らしがよくなっている。これだけの面積があれば人が一度に何百人も泊まれる宿でもつくれるだろう。
しかしそこには魔獣の姿はなかった。広大な空き地の真ん中に一人の男が立っているだけだった。
「ここに大きな獣がいたのだが、知らないか?」
ギンが着くなり、息など微塵も切らせていない声で尋ねた。後ろでゼェゼェ言うしかなかったロイは無性に悔しくなる。

男はこちらを振り向き、切り株を気にしながらツカツカと歩み寄ってきた。
「私はこの近くに住んでいる者だ。大きな唸り声がしたので、ここに駆け寄ってきたのだ」
淡々とした、感情を全く感じさせない口調でそういった。表情は初めから無いかのように変わらない。
「何で急にいなくなっちまったんだ？」
ヘルゲンは空き地の中央まで駆けていくと、およそ誰も答えを持っていないだろう質問を全員に向かって投げかけた。
「おい、あんた、何でもいい、なんか知らないか？大きな牛みたいな獣で角が馬鹿でかいんだ・・・」
「いや、すまないな。わからない。しかしここにいても仕方がない。とりあえず私の家に来ないか？ここを抜けたすぐ向こうにあるんだ」
相も変わらぬ単調な声でそう言うと、ギンたち４人が立っている場所の後ろを指差した。ギンが了解して、来た道を戻り始めた。今の位置は先頭からロイ、オルソー、アンゴラ、ギン。そしてその後ろに男、ヘルゲンとなっている。
そしてギンが一歩踏み出した瞬間。男の口元が卑しく曲がり。能面のように固まった。そしてその顔のまま振り返ると、ヘルゲンへと２、３歩近づいた。
「・・・・・っ！！」
その時ヘルゲンが見た顔は先ほどまでの男とは違っていた。耳は槍のように尖り、鋭い歯がむき出しになっている。そして視界の左から突き出された鋭い爪は、ヘルゲンの喉元を寸分の狂いも無く狙っていた。
オルソーはそれを見た瞬間、反射的に体を右側に寄せた、その爪は少量の血を残して空を切る。
「お頭っ！！」
その声に振り返ったギンの目に最初に飛び込んできたのは尖った男の耳だった。それに気付くと同時に右手を男の方へと突き出した。

「はっ！」
ギンの叫び声とともに風が巻き起こった。その風が男を吹き飛ばす。
「ぐわっ」
声を上げたその男はその先にあった樹に顔からぶつかった。額から流れる血を口元で舐めながら振り向いた。その顔はさっきまでとは全く異なっていた。禍々しく、牙と尖った耳を持っている。
「妖怪、だな！」
ヘルゲンは、首の右側を手で押さえながら言った。
「ご名答。俺の名はガイガン。・・・・・・妖怪だ」
男はその問いを待っていたかのように瞬時に答えた。だが、妖怪の特徴を残された書物で知っていた5人も、妖怪が現れた話など聞いたことは無かった。もちろん妖怪という存在を目にしたこともない。
「なぜ、妖怪が・・・？」
ギンが呟くと同時に、ガイガンは言った。
「まあ、最後ぐらい疑問もなく死にてえよなあ。教えてやる。魔天転器、だ」
表情も声の感情もさっきまでとはうって変わって楽しそうだ。
「マテンテンキ？」
聞いたことのない言葉にロイは眉をひそめる。
「知らねーのか？どうやら後釜が育たなかったらしいな。人間は」
ロイをはじめ、そこにいる誰も意味が分からなかった。その顔を見て察したらしい。ガイガンは呆れたように手を広げた。その指先にある長い爪はなんでも切れそうなくらい鋭い。
「本当にしらねえのかよ。魔界とこの世界を転換させる媒介となるのが魔天転器だ。唯一、霊石である晶霊石だけはこの影響を受けないがな。・・・よりによって魔界の晶霊石の石切り場で転換が起こるとはな。おかげでこっちに来たのは俺だけかよ」
「・・・・・！」
疑問には思っていた。平坦になった森、爆弾で吹き飛ばされた家々。燃えたのであればその焼跡が、吹き飛んだのであれば残骸があたり

に散らばっているはずである。しかし、ボンゴを最後に見に行った時、その残骸はどこにもなかった。まるで世界から切り取られたかのように消滅していた。だから村人を弔う事は出来なかったし、形見の品を取ってくることもできなかった。

それにあの爆発。村を吹き飛ばすほどの爆発にもかかわらず、あの塔と、中にいたロイは無事だった。強固な石造りの中だから大丈夫、とかそんなレベルの爆発ではない筈だ。

その疑問はガイガンの答えによって解き明かされた。

妖怪の住む魔界というものがあるらしい。そしてそれとこの世界をつなぐのが魔天転器。ロイがその影響を受けなかったのは、あの塔が晶霊石でできていて、その中にいたからということだ。そして目の前には代わりにこちらに飛ばされた妖怪がいる。

「じゃあ、向こうに飛ばされた人達は、生きているのか？」

魔界から飛ばされてきた妖怪が生きているのならば魔界に行った人々も生きているということになる。

ロイが声を上げるとガイガンの目がロイを睨んだ。しばらくしてそれは意地の悪い笑みに変わる。禍々しい表情をした妖怪はこちらの様子を逐一楽しんでいるようだ。

「俺は親切だから懇切丁寧に教えてやるよ。確かに俺と同じように飛ばされても生きていられる人間はいる。・・・実例もあるしな。だが、魔界じゃあ人間は餌か奴隷だ。人間はまずいから俺みたいに腹の減ってるやつしか食わないけどな。まあ、どの道お前たちはここで俺の餌だ」

希望にすがる表情から一気に表情の暗くなったロイの前に出たギンが話を元に戻すべく聞いた。

「ここにいた魔獣を食ったのはお前だな」

ガイガンの口元が大きくつり上がった。

「ああ、美味かったな、あいつは。やっぱ魔物や人間は駄目だ。魔獣じゃなきゃ！でも俺まだ腹減ってるからよお、お前らの肉分けてくれよォ～～」

そう叫んでロイたちのほうへと飛びかかってきた。それを見た3兄弟は一斉に飛び出すと、次の瞬間、ガイガンを正面と左右から囲っていた。それはあまりにも突然の出来事で、ロイは3人の姿を完全に見失っていた。既に剣を抜いていた3人は、一斉にガイガンに斬りかかる。

「なにっ!?」

3人が切った剣には手応えは全くなかった。まるで布を切っているようだった。いや、ようだった、ではない。事実、ガイガンの肉体はそこにはなかった。着ぐるみのような上皮だけを3本の剣が貫いていた。

第3話　妖怪　2

「ガッ・・・！」

3人がほぼ同時に地面にうつ伏せに倒れた。服に血が滲んでいる。何か刃物に裂かれたようだ。いや、刃物ではない。ガイガンが生得的の持ち合わせている鋭い爪の仕業だった。

「・・・なるほど、この皮が、君の能力らしいね」

ギンがいつのまにか倒れている3人の近くにかがみ込み、穴が三箇所空いている皮を手に取った。ガイガンはというとロイの左、１５歩ほど離れたところにいつのまにか立っている。ロイにはまたしてもその動きは見えなかった。

ガイガンにはギンの気迫が伝わっているのか、先ほどまでの浮ついた表情は消えている。

「ああ」

おもむろに自分の顎の下の皮をつかむと、軽く引っ張った。それは音も大した抵抗もなくガイガンの顔から剥がれた。目や鼻、口の部分はただの穴だがそれ以外は髪の毛も耳もある顔そのものだった。ガイガンの顔にはちゃんと皮が再生されている。

「そいつらは妖怪にも魔物と同じく能力があることは知ってるようだったが、俺の能力を“人間に化けること”だと勘違いしたな？」

ギンがガイガンの皮をつかんだまま立ち上がり、ガイガンのほうへ向き直った。その目はいつもの優しさなど微塵もなく、目があっただけで切り裂かれてしまうように鋭かった。

「お前には上皮を自在に操る能力がある。そうだな？」

「ご名答！」

ガイガンの体は一瞬ぶれて、消えた。ギンは剣を抜くと、同様に消え、次の瞬間には3人から5メートルほど離れたところで打ち合う音が聞こえた。見ると、ギンの刃とガイガンの短刀のように長く鋭い、赤く染まった爪が打ち合っている。ロイの耳に3度ほど打ち合

う音が聞こえたところで、ガイガンの声が聞こえた。
「さっき俺を吹き飛ばした風。あれはアンタのセイレイジュツだろ？知ってるぜえ。もう一度見せてくれよ」
ロイには意味がわからなかったが、ギンはロイの目の前でその目にも止まらぬ動きを止めて構えた。
「コォォォォ」
低い声を出し、剣を大きく横に振った。
「裂波！」
空気が泣いているように震えるのを感じた。
一瞬の出来事だった。ギンの剣が空を横薙ぎに切ったかと思うと、正面にあった樹が次々と背を短くし、広場はさらに大きくなった。
「ハア、ハア・・・・・・」
ギンは肩で息をしている。ロイはこんなに苦しそうなギンの顔を初めて見た。しかし、ギンのことを気遣うよりもまず混乱していた。ロイの目にはギンの剣から何かが出て、それが樹を薙いだように見えた。だが、その「何か」が全く解らない。
「終わった」
ガイガンは背後に広がる木々と同様に、胴体が真っ二つに裂けて、仰向けに倒れている。その境目からは真っ赤な血が止め処なく溢れ出ている。ギンはロイのほうを振り返った。ようやくロイはギンの方に近付く。だが、ギンはまだ厳しい表情は崩しておらず、なんて声をかければいいのか決めあぐねていた。すると突然、
「――――ああ、終わりだ」
ガイガンの声が聞こえた。
ドスッ！
赤く染まったガイガンの爪が、ロイの胸のの前で止まった。見上げ

ると、口から血を吹き出したギンが立っている。そして、ロイの顔にその血を吹きかけ、横向きに倒れた。

「ヒッ」

その後ろにはガイガンが立っていて、ロイを見下している。ロイは尻もちをつきながらその顔を見た。口元の歪みが示す感情は快楽以外の何物でもない。

「ロイ、逃げろ・・・・・・」

ギンの声がかすかに聞こえた。しかしロイは恐怖で、立つことはおろか、その目をガイガンの顔からそらすこともままならなかった。

「これが俺の能力、『擬態』だ。皮だろうが目だろうが心臓だろうが脳だろうが俺は自分自身の複製を無限に作り出せる。加えてこの戦闘力。生まれながらにして存在する人間との差。・・・いくらセイレイジュツが凄くても人間ごときが妖怪にかなうわけがねえんだよ」

その言葉はいま自分が腹を貫いたギンに対してのものだった。そしてすぐにその爛々と光る目をロイに向けた。

「さあ、お前から食わせてくれ」

ガイガンの顔が歪んで見える。恐怖からか、ロイの目は次第に光の収集をやめ、やがて何も見えなくなってしまった。

ガイガンは表情の変化のなくなったロイに一歩近づいた。そして大口を開けると、鋭い歯でロイの頭を包み込もうとした。

――その瞬間、目もくらむほどの閃光が、ロイの額から放たれた。

ガイガンは3メートルほど後ろに飛びのき、ゆるりと立ち上がるロイを見た。目の焦点は合っていない、虚ろな目。意識があるように思えない。まるで糸に操られているかのように立ち上がっている。光が放たれた額には、中央を境につくられたシンメトリーの紋様が赤く浮かび上がっていた。

「双竜のパターン、まるで・・・」

その先を言うよりも早く、ロイの体の右手が挙がり、ロイの口からロイのものとは似ても似つかない低い声が響いた。

「――――――」

それは熱気だった。太陽に近づいたかのような熱が周囲を包み始めた。

「バカな・・・！！」

ガイガンは明らかに動揺していた。熱はどんどん高まっていく。ロイの足元にあった切り株が干からびていった。その眩しい光に照らされたガイガンの額から、大粒の汗が流れている。それは熱気のせいだけではない。

「そんな、バカな。こんなガキにカオス様のお力が・・・・・・」

熱はロイを焦がさない。

「――――――」

ロイはギンへと近づき、何かを呟いた。手をかざすと、腹に開いた風穴が乾いてゆく。そして傷口から溢れていた出血が止まった。

おもむろにロイは立ち上がり、右手をガイガンのほうへとかざすと、低い声で叫んだ。

「――――――！」

「なっ！」

掲げられたロイの右手が陽炎で見えなくなった。あまりのも高められた熱。それがロイの右手を離れてガイガンのほうへ移っていった。

熱の塊が、ガイガンの核、脳を貫き、全身を焦がした。

悲鳴が轟く――――。

第4話　精霊術　1

「・・・生きてる」
ロイはおよそ一ヶ月間慣れ親しんだ部屋で目を覚ました。どれだけ眠っていたかわからない。そもそもどうして眠っていたのかもわからない。とにかく寝すぎた時によく怒る頭痛がした。
「よっと」
気合いを入れて上体を起こそうとしたが、力が入らなかった。かろうじて手足は動いたので、体をよじりながら足を流し、ベットの下へと着地させた。
「つう」
両足へ体重を乗せると痛みが走った。なんだからここに来た日みたいだな、とひとりごちる。まるで足が体を支えることを拒絶しているかのような感覚。しかし、時間が経つにつれてそれにも次第に慣れ始め、座りながら足踏みができるくらいにはなった。
「コンコン」
ドアがノックされた。てっきり3人がロイを起こしに入ってくるものだと思っていたが、入ってきたのはギンだった。
「あれ？お頭妖怪にやられたはずじゃ・・・」
記憶がフラッシュバックする。ギンを貫き、身体の前で止まった鋭い爪。確かにギンはあの妖怪、ガイガンに腹を貫かれたはずだ。その証拠にギンは少しだけ腹を庇うようにしていた。だが、腹を貫かれたら庇って歩けるようになるはずがない。そもそも生きていること自体がおかしい。
いつものローブをまとっているギンはたいそう驚いた表情でロイを見ていた。
「ロイ、目が覚めたのか！？」
その言葉の意味がよく理解できなかった。まだ頭が廻っていないのかもしれない。

「ヘルゲン達なら、大丈夫だ。傷の一つ一つはそれほど深いものじゃなかった。出血は多かったけど、元々血の気が多いから、少し抜くぐらいがちょうどいいのさ」
ギンはふっと笑う。しかしロイはその言葉に笑い返す事はしなかった。
ロイの脳では焼きついている光景が繰り返し再生されていた。最後に自分を飲み込むべく開けられた妖怪の大口と、迫りくる死の恐怖が思い起こされる。
「夢じゃなかったんだ」
ロイの考えを察してギンが言い放った。
「ああ、現実だよ」
その光景を再度思い出す。そのたびに何もできなかった自分が情けなく思った。
「すいませんでした、俺足手まといになってばっかで・・・」
「いや、そうじゃないかもしれない」
すっかりうなだれて謝罪したロイに言った。ロイはその言葉が全く理解できず、顔を上げた。
ギンは真剣な顔をして顎に手を当て、ロイを見ていた。
「あの妖怪が言った“セイレイジュツ”って覚えているかい？」
そういえばそんなことを言っていた。ヘルゲンを襲おうとしたガイガンを吹き飛ばしたあの風、そして木々を切り倒したあれの事を指しているんだろう。
「はい」
「実は、君もセイレイジュツが使えるんだ」
「は？」
ロイは目を丸くして、ギンの顔を見た。ギンは傍にあった椅子に腹をかばいながら腰掛ける。背もたれに寄りかかりながら顔の前で指を合わせた。
「少し説明するよ。今ではありえないとわかってるけど、太古には、風も日も水も光も全てのものには精霊が宿っているとされてきた。

そして、人間はそれを自在に操る力を持っている事を発見した。だから“精霊術”と呼ばれている。そして、君は、先日それを開眼した」

まったく身に覚えがないロイは、ギンが自分を謀ろうとしているのだと思い、ギンの真剣な表情を見なければ吹き出してしまうところだった。だいたい全く説明になっていない。そんなロイの意図を察したのか、ギンは続ける。

「君は夢中で気付かなかったかもしれないけど、剣を振る訓練の時のことだ。あまりの熱気で私は君に近づくことすらできなかった」

ギンは一呼吸置き、続けた。

「そしてもうひとつ、まだ厳しい訓練も積んでいない少年が、あの重さの剣を2時間も振り続けることなど不可能だ。実はあれは術を開眼するための鍛錬なんだよ。というよりは精霊術を開眼する才能があるかどうかを見極める試験かな。もちろん精霊術は誰にでも使えるわけじゃない。開眼のためには類稀な集中力が必要とされる。命の危機も感じずに幸せに暮らしているような人々には難しいだろうね。だって、彼らは必死に強さを求めることなんてないんだから」

そのギンの皮肉はどちらかというと自分自身に向けられている気がした。

「という事はお頭も？」

ロイの言葉に自嘲気味な笑みをやめて、深くうなずいた。

「そうだ、私も師の下で同じ鍛錬を行い、風によって力を使わずに剣を振り続けた。全身から熱気が発せられたという事は、君は恐らく熱によって全身の筋肉を活性化させたのだろう。しかし、こんなにも早く開眼させるとは思わなかった。正直驚いたよ。本当は2ヶ月はかかる」

「え？」

確かには一ヶ月と言われたはずだ。

「ああ、『あの』修業は一ヶ月なんだよ。“水”や“光”なんかだと、あの修業じゃ効果はないから別の方法で開眼させるんだ。もっ

とも、大抵の場合はその時点で諦めることが多いらしいけどね」
あまりにもぶっ飛んだ話で、なぜこんな説明をされているのかを忘れてしまった。ようやく思考が追い付いてくる。いや、追い付いていないのかもしれない。
「それで『そうじゃなかったかもしれない』って言うのは？」
ギンは指を鳴らした。
「そう、それだ。私があの広場に目覚めた時、あの妖怪は炭になっていた。あれは自然の雷に打たれでもしない限り、焼かれたんだろうね。あの日は晴れていたし、あそこは人も通らないから、君が無意識の内にやったのではないかと思っている。と言うか、それ以外の仮説が思いつかない。しかし、それもありえないことなんだがな。君の小さな身体に妖怪を焼き尽くすほどのエネルギーがあるとは思えないし、仮にあったとしても都合よく発動するはずがない。ハッピーエンドが待っている物語じゃないんだから」
「お頭の傷は？」
ギンは首を横に振った。
「わからない。目覚めたら動ける程度には回復していた。まだかなり痛いけどね。と言うわけで、何か“運が良かった”と考えよう。こうして全員生きていたわけだし」
急に笑顔になり、手をたたいた。
「楽天家すぎだ！」
思わず突っ込んでしまった。同時にごほごほと咳き込む。しばらく使われていなかった喉をいきなり動かしたからだろう。しかし、考えても結論が出ないものは仕方がない。
「あっ、そういえばあれから何日経ってるんスか？」
「ん、ああ、３日だよ」
ロイの頭の中で何かが崩れ落ちる音がした。せめて、もう一日早く起きていれば・・・。肉の焼ける匂いが頭の中でこだまする。
「あの日の夕食になる予定だった、獣の肉は？」
ガイガンが現れた日の午前中にヘルゲン達が狩ってきた獣の肉だ。

今夜は御馳走だとみんな手をたたいて喜び、食卓に並ぶまで腐らないように保管していた。
ギンは悪びれない様子で笑顔をロイに向けた。
「ああ、あれね～、美味しかったよ、ごちそうさま。ヘルゲンたちもすぐに目覚めたとはいえ、食欲もあんまり無さそうだったし、足が早いから私が2人前も頂いちゃったよ。いやぁ、この腹で2人前はきつかったね。幸いにも消化器官は傷ついてなくてよかったよ。・・・うん、おいしかった」
「そんなあ」
ロイはがっくりと肩を落とした。久しぶりの肉だったのに・・・。
話している間に3日のブランクの勘が戻ってきたのか、機嫌が直る頃にはロイは立ち上がって歩けるくらいにはなっていた。ギンの後に続いて居間に出ると、3人は机に座っていた。ヘルゲンは右腕を吊っていて、オルソーは右目付近を包帯で隠している。アンゴラは目立った外傷はないが、服の下にしっかりと包帯を巻いているのが見えた。
「おお、ロイ、起きたか」
「無事か？」
「・・・・・・」
なにもできなかったロイを攻めるわけでもなく、慰めるわけでもない。ロイには兄弟はいなかったが、兄がいるならばきっとこういう感じなのだろうな、と思った。もっともこんなふけ顔の兄などお断りだが。
ロイは少しにやけながら特に何を言うわけでもなく、ギンに続いて自分の椅子に座った。
「・・・・・・」
沈黙が一瞬流れ、ロイを除く4人の腹の音がそれを打ち壊した。
「そういえば俺も腹減っ・・・」
そう言いかけたとき、8つの眼が全てロイに注がれているのを感じた。

「・・・・・・」
「えっ、俺ぇ？3日昏睡状態にあってたった今目覚めたばっかだぞ！」
4人を見回した。ヘルゲンは、痛そうに右手を庇い、オルソーは右手で目を覆い、アンゴラは胸を押さえた。そのタイミングは全く一緒で、恐ろしいほどの血のつながりが感じられた。
「わざとらしっ！」
ぼそっと呟いたロイの声を合図に、
「イタタタタタ」
各々の怪我の箇所を押さえながら、ステレオで言った。
「ちぇ、・・・お頭は？」
ロイがギンの方を向くと、やはり輝かしい笑みを呈しながら言い放った。
「何で私がお前たちの飯を作らなくちゃならないんだい？」
「・・・・・・」
結局ロイが昼飯を作ることになる。とんだ雑用根性だった。炊いた米を湯の中に入れ、野菜添えて味噌で味を調えた。
「いやあ、やっぱりロイの料理は美味しいなあ」
そうギンが言ったところで気づいたが、
「あれ？昨日までの飯は・・・？」
一斉に目をそらされた。やっぱりか。
「交替で作ったんだろ？」
目はそらしたまま、木のスプーンで飯を口に運び続けた。ギンは食べ終わると、
「いやあ、やっぱりロイの料理は美味いなあ」
ロイがじろっとギンを睨んだ。
「あっ、そうだ、精霊術のことだけど」
ギンが唐突に話を振った。１００％逃避のためだと思うが、『精霊術』という言葉に敏感に反応したロイは、そのことには気付かなかった。

「君の“熱”の術の修業には同じく“熱”の師が必要だ。幸い私の知人に“熱”の術者がいるから手紙を書いておいたよ」
ギンは新聞や手紙やらは伝書鳥で行っている。大抵は鳶や鷹を使うことが多い。頻繁に紛失するらしいが、スピード重視という事らしい。
「多分結構時間がかかるだろうから、それまでは・・・」
そういうと、思い出したように立ち上がり、剣と指輪を出した部屋に入り、何かごそごそやりだした。
ボフ
「うわっ！」
扉からほこりが吐き出された。どうやら中は相当汚いらしい。見たくない。掃除をしたくなってしまうから。
「・・・・・・」
染み込んだ雑用根性が取り除かれる日は来るのだろうか。
2，3分ほどして、ギンはなにやら色あせた分厚い本を持って出てきた。それを机に置くと、辛うじて表紙の「ｒｅａｌ　ｗｏｒｌｄ」と言う手書きの文字が見て取れた。
「これはジエルトンが残したもので、私たちの教典にもなっている。もっとも、これは写本だけどね。読みなさい」
ロイの顔はさっと曇った。幼い頃から家にいるのが苦手だったロイは、本を読めるほどじっとしていられなかった上に、村に本自体が稀少だったため、今までほとんど本など読んだことはない。ばあちゃんに字は教わってはいるが・・・。
「マジで全部読むんスか？」
「マジで全部読むんだよ」
「このクソ分厚い本を？」
「このクソ分厚い本をだよ」
「・・・・・・」
間を空けないギンの返答が有無を言わせないことを物語っていた。
ロイは深く溜息をついた。

「わかりましたよ、ええ読みます。読みゃいいんでしょ！」
大声で言って、立ち上がり、本を脇に抱えると、大またで部屋へとはいっていった。背後から、くつくつと笑う声が聞こえた。

第4話　精霊術　2

表紙をめくると、予想通りの黄ばんだ紙と、黒いインクの手書きの文字が出てきた。不本意だったが、ロイは祖母の教えを思い起こしながらゆっくりと読み始めた。

「この世は5の種族からなっている。すなわち人間、妖怪、獣、魔獣、魔物――」

人間とは地上に生き、術を使うもの。妖怪とは地上に生き、能力を持つもの。獣は世界に生き、４の種以外の全てを指す。魔物は能力を用い、魔獣は用いない」

魔獣と獣の定義は曖昧だと注意書きがされていた。生命力や凶暴さなどが基準になるらしい。

ここまで読んで、ようやくロイは自分がこの本に釘付けになっている事に気がついた。この本には、まさしくロイが今一番知りたいことが記されていた。

その下は、目次のようなものになっていた。写本と言っていたが、随分汚れていたので、写本自体が相当古いものなのだろう。

目次にある世界の地形のことがロイの興味をそそったが、まずは“術”について読むことにした。

“術”は妖怪や魔物の持っている“能力”と違って生まれたときから備わっているものではないらしい。ギンが「開眼」と言っていたのも頷ける。中には開眼できない者もいるらしく、“風”や“熱”のほかに“水”や“光”など多種多様だ。しかし、その詳しいことは書かれていなかった。

ほかにも戦術なども参考になった。特に剣術については、知らないようなことも多かった。ただ、「先に体術を学ぶべし」と書いてあり、体術のマスターを前提とした内容であったので、足がまだ完全には治っていないことも考え、後回しにする事にした。

「ふう」

ロイは天井を仰ぐと、溜息をついた。読解できなくて読み飛ばしたところも多いのだが、一通りは読み終えた。本と言うより事典に近い。ロイは軽く伸びをすると、何か簡単にできる事がないかと、体術の章を眺め始めた。

「入るよー」
ロイの返事も待たず、ギンはドアを開けた。
「な、何してるんだい？」
ロイは床に寝転がっている。仰向けの姿勢から左右交互に向きを変え、その都度掌で床を叩いていた。
「・・・受身の、練習です」
ロイはがばっと起きて、床に座ると、少し気恥ずかしそうぼそっと言った。
「ああ、なるほど、いや、大事だよ、受身は。もう読んだのかい？」
ロイは「一通りは」と言うと、立ち上がった。まだ足が本調子じゃないので、ゆっくりとではあったが、もう痛みはほとんどない。
「ロイはせっかちだから、剣術から入るかと思ったよ。じゃあ、その本貸すから、うまく使うといいよ」
「はい」
ギンはニッコリと微笑むと、両手を重ねて腹の上に置いた。
「ああ、そうだそうだ。お腹が空いたなあ」
「またスか・・・・・」
ギンの表情は変わらない。それは依頼ではない。強制だった。何しに来たとのかと思えばそう言う事か。ロイは心の中だけで嫌味を言った。
「はあ・・・わかりましたよ」
ロイは胃にも穴を空けられればよかったのに、と思いながら先に部屋を出た。ギンは部屋のドアを閉めて、微笑みながらロイの後に続いた。

「あ、そうそう、ロイの先生なんだが、1週間後に来るらしい」
食後に、ロイが一番気にかけている事を適当にギンは言い放った。
あろうことか爪の垢を取りながらという適当っぷりだ。
「どういう人なんスか？」
今度はお茶をすすりながらギンは言った。
「カルコンってやつだ。私とは幼馴染でね。多分“熱”の術だったら5本の指に入るだろうね」
ジエルトンの規模を知らないので「5本の指」が果たして凄いのかどうかはわからなかった。
「じゃあ、お頭はどれぐらいなんスか？」
「さあ」
軽く流された。
「カルコンは確かに術者としては凄いけど、でもなあ・・・」
何事もなかったかのように受け流す。さすが“風”の術者だ。
「でも？」
ロイは控えめに聞いた。
「最悪、死ぬかもよ？」
「えっ！？」
ギンは最後に最も聞き捨てならないことを言い置いて、立ち上がって自室に入っていった。最後に振り返った。
「じゃあ、体術がんばれ」
バタン
誰も物音を立てない部屋に、扉を閉める音だけが響いた。
1人残されたロイはつぶやく。
「・・・まじかよ」

第5話　カルコン　1

靴が砂を踏みしめる音が響いた。それ以外の音は何もない。ロイは何も持っていない両腕を構え、ヘルゲンと対峙していた。アンゴラとオルソーは近くに座って眺めている。

ロイが砂を蹴り出し、5歩でヘルゲンの間合いに入り、右フックを繰り出した。身長差でそれはフックというよりもアッパーに近いものになる。ヘルゲンは少し口をほこばせながら、頭を少し後ろに下げ、それを避けると、腕を下げ、右アッパーを返した。

「・・・・・っ！！」

豪快に音が鳴った。ロイはよけるために後ろに飛び、ほぼ元いた位置に戻った。

もう一度踏み出すと、ヘルゲンへ向かって突進する。ヘルゲンはそのタイミングを合わせて右ストレートを繰り出した。

「・・・・・・！？」

その右手は空を切った。刹那、ヘルゲンはロイの姿を見失う。沈み込んで拳を避けていたロイはその隙を逃さずヘルゲンに足払いをかけた。

「おわっ！」

ヘルゲンの体は前のめりに倒れそうになる。それをロイは支えると、倒れる勢いを使って背負い投げした。

ヘルゲンは地面に仰向けに倒れた。そのままの姿勢でロイを見た。

「ぶははは、負けた」

「勝った！」

ロイは嬉しそうに顔を綻ばせている。ちなみに対戦成績はこれで1勝49敗である。

「随分いい動きになったじゃないか、ロイ」

突然出てきたギンはロイを称賛した。ちなみに昨日までは、「まだ、勝てないのかい？」とかロイを馬鹿にし続けていた男である。

「勝ったっスよ、お頭。これで剣術教えてくれるんスよね！？」
聞きしてロイが言うと、ギンは腰に手を当て、バキバキと鳴らした。
雰囲気だけでなくしぐさまで年よりじみている。
「まあ、ぶっちゃけめんどくさいけど、約束だ、教えよう」
「ぶっちゃけすぎです」
「じゃ、昼飯の後にしよう。さあ、今日は何？」
ロイは、後ろの3人を見ると、一斉に「あいたたた」と、それぞれ怪我していた箇所を押さえ出した。
「うそつけっ！さっき人殺しそうなパンチだったぞ！！」
「あれで肩いったんじゃねえか？アンゴラ、診ろよ」
「折れてる」
小芝居を始めた。
「・・・・・・」
ちなみにロイの料理の腕は他の誰よりも上がっていた。特技としては重宝することなのだが、何となく悲しくなってくる。

「まずひとつ言っておく、剣は何かを傷つけるためのものじゃない。自身を守るためのものだ。それだけは肝に銘じておきなさい」
ギンが真剣な表情で言った。
「はい」
ロイもそれに答える。
「実践剣術は、型がそう多くはない。達人になればなるほど勝負は一瞬でつく」
ゴクリとロイは唾を飲んだ。真剣な表情なだけに修業への期待が高まる。
「私は相手なんかしたくないから、この樹を斬りなさい」
ギンは相変わらずぶっちゃけながら家の近くの樹の幹を叩いた。
「はあ」
なんか自分ひとりでもできそうだ。とはいえ、結構太い樹だった。
絶対無理である

「お頭、まず手本を見せてくださいよ」
ギンは心底嫌そうに剣をローブから出した。ロイのものよりずっと細身の剣だ。
その樹の前に立った。そして剣を抜いた――――
シュン
ギンが剣を納めると、その樹は切り株になっていた。あまりの早業に、ロイにはいつ斬ったのかすら見えなかった。
「・・・・・・」
「まあ、こんなところだ。とりあえずは一振りで切れるようにすることだね。実践剣術についてはカルコンが教えてくれるよ。頑張ってね。はっはっは」
ギンは笑いながら踵を返し、家の中へ入っていった。
「・・・・・・」
ロイは倒された木を見る。滑らかな切り口で、むしろもともとこんな形だったと言われた方がしっくりくる。だいたい手本にはなっていない。ロイにどうしろというのだろうか。

「はあ、はあ」
数時間後、ロイは自分の目の前にある大木を眺めた。何本も切れ込みが入っているが、どの太刀筋も4分の1もいかないところで途絶えている。
「無理だろ、これ」
どさっと音を立てて、ロイは芝生の上に仰向けに倒れた。全く斬れないので、ギンはトリックでも使ったんじゃないかといぶかしみ始めた。掌を見ると、また肉刺がはぜて、血まみれになっていた。息を強く吐いて立ち上がり、地面に刺してあった剣をつかんだ。右から刃を入れると、案の定、刃はほんの少しで止まった。
「・・・駄目だな、それでは」
背後から声がした。低く腹の底に響くような声だ。ロイが後ろを振り返ると、背の高い男が立っていた。色も黒く、どことなくガイに

似ている。ロイは目をこすった。しかし、やっぱり自分の父親とは違う。少なくともガイはもっと表情豊かだ。目の前の男は無表情で暗く濁った眼をしている。

「脇をしっかりと締め、下半身を安定させろ。そして・・・」

男は一回そこで区切った。

「剣を研げ」

その言葉にハッとして剣を見ると、刃がボロボロになっていた。恐らくもらった時から相当刃こぼれしていたであろうが、むやみやたらに叩きつけすぎたということだろう。

「・・・あっ！」

ロイはそこで始めて突然現れた男の正体に気が向いた。

「もしかして、カルコンさん・・・ですか？」

「そうだ。お前がロイか？」

「はい。えっと・・・」

ロイがカルコンの雰囲気に息苦しさを感じていると、家からギンが出てきた。

「やあ、カルコン。よく来てくれたね。ああ、その子がロイだよ」

堅苦しい雰囲気をぶち壊し、カルコンと挨拶を交わした。

「ギン。久しいな。魔獣退治の任務は終えたのか？」

任務。と言う言葉が気に掛かった。「ジエルトン協会」みたいなのがあって、任務が出されるのだろうか。

「ああ、妖怪が出てきてやばかったけどね」

ギンはまったくやばそうにもなく、肩をすくめて答える。それを聞いたカルコンは表情を変えずに眉を動かした。

「妖怪、だと？」

「ああ、なぜか知らないけど灰になってね。まあ、倒したんだろうね」

それを聞いて、カルコンがちらりとロイのほうを見やった。しかしロイには身に覚えのないことだ。未熟な自分がやったはずがない。いたたまれなさを感じて、目線を樹の方に戻した。

「どうかしたかい？」
「・・・いや、なんでもない。無事で何よりだ」
カルコンが少しだけ微笑んだ。旧友の無事を喜んでいるのだろうか。
「すまないが、用ができた。ここには半年ほどしかいられない」
それに関係あるのはロイだが、カルコンはギンに向かって言った。
「半年か・・・。厳しいな。修業は完成しないな。だが、基礎さえ積めばあとは独学でも何とかなるか。・・・いいね、ロイ」
ロイはギンの質問に頷いた。
3人とカルコンは既に見知っていたらしい。ロイはすぐさま3人に剣の研ぎ方を教わり、研いだ。その後、修業は明日からという事になり、ロイは6人分の夕飯を作るはめになった。カルコンは表情1つ動かさず、何の感想も言わずにロイの手料理を平らげた。
父親に似た無口無表情な男。それが師匠への第一印象だった。

第5話　カルコン　2

「修業を始める前にひとつ聞きたい。お前は今の異変についてどう思う？」
唐突にカルコンが言った。ロイはその言葉の意図が全くわからなかったが、正直に答えた。
「俺は・・・・・・許せません。家族を、村を奪い去った魔物が許せない」
ロイの目は力強く、それと同様にその言葉も力強かった。
「そうか・・・わかった。では修業を始める」
質問の意図は最後までわからなかったが。今の言葉でロイの決心は固まった。
「お願いします、師匠」
昨晩、自分の事を『師匠』と呼べとカルコンは言った。
「まず、能力をいつでも引き出せるようになってもらう。金属のコップに水を入れてもってこい」
ロイは、コップに水を入れて持ってくるとカルコンに手渡した。
「“熱”の術の修業の初歩だ。水の温度を上げる」
そういうと、左手にコップを持った。しばらくすると、コップの水はゆっくりと沸騰を始めた。
「コツは、水を体の一部のように考えて、そこに神経を集中することだ。やってみろ」
突然言われてもまったくできる気がしないが、ロイは言われたとおり、コップを持ち、手に力を込め、水を凝視した。
「・・・・・」
もちろん変化はない。
「では、コップを胸に抱えてやってみろ。“熱”の術の本質は代謝の操作だと俺はイメージしている。自分のエネルギーを無理やり消

費して熱を生み出すのだとな。つまり、体幹に近いほうが自ずと能力は出やすい」

ロイは言われたとおりにコップを心臓の前で抱え、先ほどと同じように集中した。しかし、

「変化無いように見えるんですが・・・」

そもそもできるわけがないだろう。集中しつつも諦め半分でカルコンを見た。

「水に触ってみろ」

「？」

ロイは言われたとおり、指を水につけた。

「・・・暖かい！」

確かに水の温度は上がっていた。先ほどカルコンが温めた水は捨てて、新しい水に代えたので、これはロイの力によるものだろう。

「そうだ。使えないものが思うよりもずっと、術の発動は簡単だ。開眼には時間を要するがな」

自由に発動できるようになるまでが一番時間がかかるんじゃないかと思っていた。

「では、明日までに手を頭上で伸ばした状態でも水を沸騰できるくらいにはしておけ。俺はこれからやることがある」

そういうと、カルコンは山道の方へ歩いていった。ガイガンの死骸がある方だ。昨日妖怪に関して興味を示していたから、カルコンはそちらに向かったのだろう。

たとえ、手取り足取り教えてもらうことができなくとも、今まで地味な基礎トレーニングばかりやってきたロイにとって、この修業は刺激的だった。

「まだまだ時間はある」

ロイはそう呟くと、先ほどと同様にコップを抱えて、神経を集中させた。

「・・・・・水も体の一部と考え、そこに神経を集中させる」

ロイは目を瞑って、胸の前の手の中に神経を集中した。
１０秒ほどたって唐突に音が聞こえた。ハッとして水を見てみると、先ほどのカルコンのように沸騰していた。
「よしっ！！」
ロイは左手でぐっとガッツポーズをした。
「あっつ！！」
コップの水がこぼれた。沸騰しているのだから暑いのは当たり前だが。とりあえず次の段階に進むために新しい水を入れようと立ち上がった。
「なんだ！？」
眩暈がしたかと思うと、そのまま膝をついてしまった。少し息を整えてから立ち上がると、目の前にギンが立っていた。
「言い忘れてたけど、ロイ。精霊術は無限に生み出されるものじゃないんだ。使えば使うほど術者の体力を消耗していく。だから、一気に使うのは危険だ。はじめは慣れるまで時間を置いて訓練した方がいい。そうするうちに、消耗の抑え方もわかってくるし、体力も増えてくる。わかったね」
まだ少しくらくらしているロイは、返事をして、流しへと歩くと、バケツに水を汲んだ。休憩を挟まなければならないならば、水を汲みに行く時間も勿体ない。

日が暮れかかっていた。少し肌寒い山の中で、残り少ない日射しを争うように、木々が揺らめいている。夏は終わりを告げ、秋へとバトンを渡している。その中で、ロイは未だにコップを片手に立っていた。
「・・・・・！」
わずかな音だったが、ロイの右手に高々とあげられたコップから音が聞こえた。途端にロイの曇っていた表情に満面の笑みが走った。
「できた」

小さく呟き、コップをギンが斬り倒した木の切り株に置くと、ガッツポーズをした。
水を捨て、コップを水がそこに少し残るバケツの中にいれて、切り株に腰掛けると、大きく息を吐いた。
何十回かこれをくり返しているので、どれくらい休めばいいのかは分かっている。ロイが立ち上がって、家に戻る頃には、鳥の鳴き声に変わってあたりは虫の鳴き声に包まれていた。
程なくしてカルコンが帰ってきたが、特になにを喋ったわけでもなく、ロイにも訓練が終わったかどうか聞くだけだった。ギンが言うには、昔から不愛想な男だったらしい。しかしギンみたいじゃなくともねぎらうくらいはしてくれてもいいのにな、とロイは思った。

翌日。
「昨日やった訓練は、能力を自在に操るためのものだ。しかし、実践で使うとなると、これを応用しなくてはならない。今日は、熱を使って身体能力を上げる」
「？」
ロイは始め、カルコンの意味している事がさっぱりわからなかった。しかし、すぐに素振りの訓練を思い出した。あの時は熱の力で振っていたのだとギンが言っていた。
「熱によって筋力を活性化させる。ギンらの使っている風の力が、柔の力だとしたら、我々の使う熱は剛の力。純粋にぶつかり合ったら不利だ。それに・・・」
「柔の力と違って限界があるってことですか？」
「そうだ。その上この力は一時的に肉体を酷使する。人間に許された力の限界を超える諸刃の剣だ」
「なるほど・・・」
それじゃあ、この力では風には勝てないって事じゃないか。風の術

者になりたかったとロイは落胆した。その表情からロイの心情を汲み取ったのか、カルコンが続ける。

「だが、それは長期戦の場合の話。もし熱を自在に操り、身体能力を爆発的に上昇させられれば、熱の術者に敵う者はいない」

一呼吸おいて、カルコンは言った。

「確かに、それでも肉は疲労し、骨は軋む。だがな、ロイ。完璧すぎる力は暴力しか生まない。人間としての本分を忘れないためのくさびだと俺は思っている。このくさびがあるからこそ、我々は体を鍛え、強くなろうとするのではないか、とな」

カルコンは自嘲気味に微笑み、ロイを見る。自嘲とはいえはカルコンが微笑んだのを始めてみた気がする。そして、その表情と同時にその言葉が心に深く刻み込まれた気がした。

「話は終わりだ、始めるぞ」

カルコンが立ち上がった。

第6話　ディアボロス　1

修業を始めてから3ヶ月。ロイは身長も伸び、日に日に身体も大きくなっていった。剣を重いと感じることもなくなったし、術を使わずに木を両断する事もできるようになった。

「ふっ！！」

地面を蹴ったロイは続いて梢の根元に足をかけ、更に上へと跳んだ。一蹴りで、数メートルは跳んでいる。

頂上まで来ると、木の頂点を左手で掴み、海の方を眺めた。１５年間聞き続けた波と海鳥の音は聞こえない。既に遠くの憂愁になりつつあった。冷たい風が耳を切り裂くような音だけが耳に響く。それでもロイの覚悟は微塵も揺らいでいない。身の内に炊ける怒りはこの風程度では消えはしない。潮の香も波の音も聞こえなくても目を閉じればすべてがそこにある。ロイが失くした故郷とは自然のうねりを指すのではない。人々の笑い声そのものがロイの故郷だったのだ。

「よし、いいぞ、降りて来い」

樹の下でカルコンが言った。優に2，３０メートルはあるだろうか。普通に飛び降りたら間違いなく両足が折れるだろう。受け身を取って衝撃を逃せばどうにかなるような高さではない。“熱”の術によっていくら筋力を上げても体の構造そのものが変わるわけではないのだから。

しかしロイは両足を空に出した。ロイの体が足から真っ逆さまに落ちる。３メートルほど落ちたところで樹の幹を右足で蹴った。空中で上手く体の向きを変えると続いて隣の樹を左足で蹴る。そのまま落下スピードを殺しながら地面へと着地する。地面にゴロゴロと転がり、衝撃を逃がすのも忘れない。

「うっしゃ！」

立ち上がり、ガッツポーズをした。体中についた砂を払いながら、今自分が下りてきた樹の天辺を眺めた。
カルコンはロイのもとへと歩み寄ると、表情をほとんど変えぬまま言い放った。
「まさか、三ヶ月ほどでここまで上達するとは・・・。俺ほどとはいかないが、なかなかの熱使いになった。さあ、もう今日は休め。明日から実践型の修業に移る」
ロイはまだいけますと言いたげな表情をしているが、早々と踵を返したカルコンを見てやめた。カルコンはどれほど言っても一日のメニューを変えたりしない。ロイは有り余った活力を開放するために、また樹の頂上へ跳ぶ。コツを掴めばそれほど難しくはない。神経を集中させ、足に血の全てを集める感覚。足が2倍にも3倍にも膨らむイメージ。あとは空へ向かって跳ぶだけだ。

翌日、ガイガンと闘った広場の近く。ロイの周りの木は、全て切り株と化していた。ロイは汗を流しながら、ひたすら一刀の下、木々を斬り倒していった。
「そうしたら、切った木を一箇所に集めろ」
隅のほうの切り株に座ってるカルコンが言うと、ロイは何も言わずに木を転がしたり引きずったりしながら切り株の広場の真ん中に積んだ。カルコンの指示通り円錐型に組み上げる。
「よし、それでは修業だ。その木を燃やせ」
「は?」
思わずロイの口から声がもれた。ロイの目の前には組み木がある。高さはロイの身長を2倍にしたくらい。外周に至ってはロイ１０人が手をつないでようやく囲めるくらいだ。ロイは躊躇して、カルコンを見た。
「いや、流石にこれは無理じゃないですか?」
カリューの山の葉が全て落ちた頃から、ロイは木をひたすら切り、

しばらく乾燥させてから燃やす特訓をしてきた。始めのうちはくすぶってしまったり、枝を燃やすだけでも2週間かかってしまったりと困難を極めたが、始めて2ヶ月で何とか燃やし尽くせるほどにはなった。一度火がつけば後は熱を広げていくだけだ。何もしなくても火は勝手に燃え広がっていくので、着火さえできればそんなに難しいことではなかった。

しかし、この量は不可能だ。そんなロイの抗議にも耳を貸さず、カルコンはじっとロイのほうを見ていた。その目には確信と冷静さが宿っている。ロイはその目を見て、カルコンが自分を信頼しているのだと読み取り、頷くと組み木へと歩み寄った。

目を閉じ、両の掌を組み木のうちの一本にゆっくりと乗せた。春が近づいているとはいえ、木の幹は冷たい。ロイは目を閉じる。

「術者といっても所詮人間だ。自らの出した火に身を焼かれてしまう。だから、常に術を使って自分を守るようにしろ」

ロイは今までの修業とカルコンの言葉の一つ一つを思い出していた。

「物質の燃える温度にはそれぞれ法則がある。まずそれを理解し、術は効率よく使え。前にも言ったが、限界を超えるとその術は文字通り己の身を焼く」

ぱちぱちと弾ける音がして、ロイの掌の先の樹が黒くなった。その範囲が徐々に広がってゆく。ロイが勢いよく目をあけ、全ての意識を掌のさらに先、組み木の内部の方へと注いだ。

火はロイの両手が接している部分よりも奥から出ていた。その火は十分な熱のある方へと四方八方上下に広がってゆく。

「ロイ！」

カルコンは切り株から突然立ち上がり叫んだ。その頬には今の季節にそぐわない汗が流れていた。ロイはカルコンの方を見ない。一瞬

でも集中を切らせば火はすぐに消えてしまうだろう。
「上の方から燃えるように操作しろ！」
再びカルコンが叫んだ。ロイは灯っている火を凝視し、手を前に差し出す。水をすくい上げるように両手を上に掲げた。熱を上へと伝えてゆくイメージ。
火はロイの意志にしたがって、徐々に上の方へ昇っていく。カルコンは再度叫んだ。
「下にある火を弱められるか！？」
ロイは地表付近で燃え続けている炎を目を凝らして見る。熱を自在に操るということ。それは物質の温度を上げるだけではない。温度を下げることも可能という事だ。目を閉じ、先ほどの感覚を思い出す。左手を炎の方へと向け、握りこぶしをつくる。そしてその手を勢いよく手前へ引いた。
カルコンが驚愕の表情をたたえた。作り出した地表付近の炎はほんの少しではあるが弱くなった。頂上付近の猛る炎だけが激しく燃え盛っている。その火も次第に燃えるものを求めて、地面へと近づいていく。バランスを崩した組み木が崩れた。

ロイの玉の汗が冷たい風に乾かされた頃、その火はくすぶり、消えた。積まれていた木々はロイの腰ほどまで高さを減らし、黒い炭と煤に成り果てた。
ロイはその場に仰向けに倒れた。カルコンが倒れたロイへと歩み寄る。しかし、視線は意識を失っている弟子ではなく、ロイが燃やした炭に注がれていた。
ゆっくりと口を小さく開いた。
「ばかな・・・・・・」
頬には一筋の汗が流れている。
「・・・・・・とはいえ、やはり限界だったか」
首を動かさずに、目線だけで睨むようにロイを見下ろした。そこには弟子に対する称賛も、心配する感情も何もない。いつも通りの感

情のない視線だった。
「カルコン！」
聞き覚えのある声がした。ギンが3人を従え駆けてくる。ロイが熾した炎を見て駆けつけてきたのだろう。必死な形相をしている。
「何があったんだ？ロイは無事か？」
ギンはロイのそばにしゃがみこみ、カルコンを一瞥して問いかけた。
カルコンは肩をすくめ、静かに答える。
「ああ・・・。だが、術の使いすぎだろうな。この通りだ」
それを聞いたギンは先ほどからの厳しい表情を崩すことなく、カルコンを睨んだまま後ろの3人に言った。
「ロイを連れて行って休ませてやってくれ」
3人は同時に頷くと、ヘルゲンがロイを背負い、3人で来た道を戻っていった。

第6話　ディアボロス　2

「・・・・・」
ギンは3人の姿が見えなくなったのを確認すると、カルコンに近くの切り株に座るように促した。カルコンが素直に座ると、自分も傍の切り株に腰掛けた。眉間にしわを寄せた厳しい顔のまま、カルコンを睨んでいる。
「どういうつもりだ？」
表情同様厳しい口調でギンが詰問する。
「何の話だ・・・？」
カルコンは肩をすくめ、低い声で返す。ギンは自分の腿の上の右手の人差し指を激しく上下にトントンと動かし、苛立ちを露わにしていた。
「俺は普通に修業をしたまでだ」
「しらばっくれるな。ロイはまだ修業を始めてから半年と経っていない。そのロイに対して、この修業はあまりにも危険すぎる。忘れのか？術の限界を超えると、術者は死ぬんだぞ！」
術の限界。“熱”や“風”を自在に操ると言う代償はとても大きい。
ギンは再度カルコンを睨んだ。
そんなギンの激しい口調に物怖じすることなくカルコンは口元を吊りあげ、冷静に答える。
「ここ半年足らずで、ロイはみるみるうちに才能を開花させた。師として、弟子を強くする為にしただけだ。確かに、予定をかなり早めてはいるがな」
ギンはいきなり立ち上がると、カルコンを見下ろし、極力怒りを抑えながら言った。
「本当に、それだけの理由か？」
その言葉を聞いた途端、カルコンは俯くと、肩を震わせた。

「クックック・・・全てお見通しと言うわけだ」
「長い付き合いなんだ、お前の性格ぐらいは熟知してるさ。カルコン・・・ロイを潰すつもりだったのか！？」
お互いの姿勢は変わらない。ギンは立ったままカルコンを見下ろし、カルコンは座ったまま俯いている。ゆっくりとカルコンが顔を上げた。見開かれたその目はギンの方向を確かに見ているが、その目にギンは映ってはいない。
「なに、ロイを試しただけだ。危なくなったら止めるつもりだったさ」
その途端、辺りの木の葉が舞い上がった。
「試した、だと？ふざけるな。お前のその身勝手な嫉妬心で、危うくロイは命を落とすところだったんだぞ！」
カルコンは膝の上に両肘を乗せて顔の前で指を絡ませると、真剣な顔つきに変わった。
「嫉妬心・・・か。確かにそうかもしれんな。あいつを見てると、まるで昔のお前を見てるようだよ。溢れんばかりの才能。進化の天才とでも言うべきか。・・・・本当にそっくりだ。師こそは違ったが、共に力を求めたあの時のお前にな」
ギンは怪訝な顔つきになり、風は静かに流れる。木々から芽を吹き始めたばかりの青葉はまだせわしなく動いていたが、その動きは少しずく遅くなっていた。カルコンの意図が読めないのだ。
「お前は俺の理想だった。お前のような才能が欲しかった。俺を天才と呼んだものは数いるが、俺は俺自身が天才だと思った事は一度としてない。――お前がいたからだ。常に俺より力があるお前がそばにいたからだ。力さえあれば、俺の家族を皆殺しにした魔物も簡単に倒せる。そして・・・・・・ロイはお前以上の才能を持っている。あの修業・・・・・・」
カルコンは積もっている燃えカスを見た。ギンもそれに続いて首を動かした。
「俺がこのレベルに達するのにどれだけかかったと思う？・・・3

年だ。師の下で修業の最終試験として、これと同じ事をした。それをロイは半年足らずでやってのけた。わかるか?これが才能だ。時間という誰にも平等なはずのものを超越する力だ」

太陽が西へ沈もうとしていた。大地は薄暗く、青い葉も赤黒く照らされている。

「なあ、ギン。途方もない力が欲しくないか?」

カルコンが顔を上げ、今度はまっすぐにギンの顔を見た。その目は吸い込まれそうなほどに力強い。なぜか余裕のある笑みを浮かべていた。

「どういうことだ?」

「家族を殺し、俺たちの故郷を滅ぼした魔物。奴らは術よりも強大な力を持っていて、魔獣のような膨大な体力に守られている。例えお前でも、退治しようとすればただではすまないだろう・・・」

ギンは何も言わずに黙ってカルコンの話を聞いている。

「だが、俺は奴らを超える力を手に入れた」

ギンは突然カルコンの口から飛び出した言葉を理解するのに時間がかかった。

「バカな・・・・・不可能だ」

人間が使うのが精霊術ならば、魔物が使うのは能力。術とは違う生得的な力。さらに魔獣や魔物が擁する膨大すぎる体力。それを凌駕することなど人間には不可能だ。だからこそ人間はジエルトンのような組織を組み、集団になる必要があったのだから。

「ディアボロス」

カルコンの口から、ギンへの返答として固有名詞が飛び出した。

「俺が作った組織の名だ。魔物どもを根絶やしにする為の、な」

「・・・・・」

ギンの脳内には14年前の光景が蘇えっていた。ギンとカルコンは同じ村に住んでいた。ボンゴほどでないにせよ、ほとんど人の行き

かうことのない小さな村だった。しかし、その村は魔物に襲われた。
それから1年間、二人で血肉をすするような生活を共にしてきた。
生きるために人から奪った。最初は5人いた仲間たちも病と飢餓で
死に、そして自衛団に殺されて残ったのはギンとカルコンの2人だ
け。
そして偶然近くに住んでいたギンの師に助けられた時、泣きじゃく
っていたギンに対して、涙ひとつ見せること無かったカルコンは言
い放った。

「――――魔物どもは、俺が必ず根絶やしにしてやる」

カルコンは立ち上がった。
「どうやって、と聞きたそうだな。教えてやる」
ギンの表情はいっそう険しくなった。カルコンはそんなことなど微
塵も気にしないで嬉々として話し続ける。
「魔天転器」
またしても固有名詞が飛び出した、だがその言葉には聞き覚えがあ
る。
「この世界と魔界とをつなぐ高エネルギー発生装置だ。妖怪たちが
この世界へ来る唯一の方法だ。俺はジエルトンが残した様々な文献
を調べ、ついに1年前、そのありかを突き止めた」
「何故、魔天転器を？」
「決まっている、契約だ。知っているか？ギン。妖怪には魔物と違
って能力が2つある。その内のひとつは契約よって他者への譲渡が
可能となる。俺はそれを行った」それを聞いた途端、ギンは全てを
理解した。
「魔天転器のありかと言うのは・・・まさか・・・・・・！」
カルコンは笑う。
「そう、ボンゴだ。あの場所は本当に良かったよ。外部との交易が
少なく、人がいなくなっても怪しむものはほとんどいない。ただ、

魔天転器の発動の仕方は分からなかったから少し工夫をさせてもらったがな」

「それじゃああの魔物は・・・」

ギンは目を見開いた。

「そうだ、俺がけしかけた。数年前、特殊な術で魔物を操る一族と偶然に知り合った。それからは全ての魔物が支配できるようになった」

魔物を殺すために魔物を使うのはなかなかの矛盾だがな、とカルコンはくつくつと笑った。その様は、ギンの知っているどんなカルコンとも当てはまらない。まるで妖怪か何かのようだった。

風が舞い上がった。静かに横たわっていた木の葉が、ギンとカルコンとを囲み始めた。

「そんなことをして、どうするつもりだ」

「決まっている。俺が世界の王となり、この世界を支配する。魔物を一匹残らず根絶やしにする為に。だからお前にも言ったんだ。なあ、ギン。昔みたいに俺達で組まないか？」

ギンはこみ上げる感情がよく理解できなかった。だがひとつだけ理解できた。ロイの全てを奪った元凶はこの男なのだと。

「・・・・・随分と、ふざけたことを、言うじゃないか！」

気がつくと、剣を抜いていた。カルコンもそれに続く。

「こうなると思ってたぜ。なんせ、長い付き合い――――だからな」

第6話　ディアボロス　3

「――――ジエルトンの誇りに懸けて、そんなことをさせるわけには行かない。お前はここで私が止める」

「――――俺は世界の王になる。お前には阻ません」

ローブを投げ捨て、剣を構える。ギンは上段に、カルコンは正眼に構えていた。

「見せてやろう、俺の能力を」

そういうとカルコンは左手の人差し指を剣で触れた。赤い血が流れ出す。

「！！」

血は、重力に従うことはせず、カルコンの目の前で、小さな球を形成した。同時に、ギンは全身を包む肌寒さを感じた。

「ヒートボールだ。魔天転器でこちらに来た唯一の妖怪、ガイガンから得た能力。この熱球は自動的に周囲から熱を奪い、能力者の血で作った球に留める。術を使わなくてもこの熱球に触れているだけで俺は自在に熱を集められる。分かるか？つまり、俺には術者にとっての絶対の弱点、“限界”が無いということだ」

にやっと笑ったカルコンに対して、ギンの額には一筋の汗が流れた。

「燃えろ」

カルコンは足元に落ちている枝を、ギンへと蹴った。それは空気中で熱を帯び、火の塊へと姿を変える。

だが、その火はギンへ届くことなく、ギンの前で左右に分かれた。

「風、か」

辺りが突風に包まれる。間髪入れずギンは刃を振るった。風の刃がカルコンめがけて奔った。

「ふん」

熱球がカルコンの前で赤く光った。その熱と、外気の気温差が上昇気流を生み出す。風は、カルコンを切り刻むことなく、上空へと舞っていった。

「くくく・・・。わかるか？ギン。真空波は俺には届かん」

熱球によって外気の温度を下げ続け、熱球によって自分の周囲の温度を上げ続ける。限界のないカルコンだからこそできる技だ。

「つまり・・・」

ギンは瞬間的にカルコンの懐に入り、剣を振った。カルコンがそれを受け止める。

「そうだ、剣と剣の勝負と言うわけだ」

ギンが後ろに跳んで身を引いた。

「そうか・・・」

ギンの周りに風が集まる。ギンから外側に向くように吹く風はギンを中心とした斥力となった。

「これで、お前の刃など私に届きはしないさ」

カルコンと同じ常時発動型の技。術である以上限界はあるのだが、それを可能にするのは天賦の才であり、それはカルコンにはなかったものだ。

しかしカルコンはくっくと笑う。

「やはりな、やはりそうくると思ったぜ。カリースと同じ手だ」

その時、ギンの眉間がピクリと動いた。

「・・・カリース先生」

「そうだ、俺達の恩師。お前を選び、俺をコラヌの様な耄碌じじいの下に送ったあの忌々しい女さ」

「まさか・・・お前」

ギンは怒りを最大限に抑えながら、声を絞り出した。

「お前の考えてるとおりさ、ギン。あの女が死んだことは知っているだろう。・・・そう、あの女は俺が殺した。お前と同じように誘ったんだがな。優秀な風の術者を2人も殺さなければならないとは・・・残念だ」

「きさまぁ！！」
ギンが怒りに任せて剣を振る。風で剣速は目にも止まらぬほどだったが、熱で肉体を強化しているカルコンはそれを止め、瞬時にギンの肩口から振り下ろそうとして、風に阻まれた。剣がはじかれ、バランスを崩した。
「はっ！」
ギンは飛び上がり、カルコンに向けて刃を振り下ろした。
“サウザンド・アックス”
無数に走る真空波。カルコンの生み出した上昇気流は、ギンの放った風を全てなぎ払うことは出来ず、カルコンの体にはいくつもの傷が奔った。
「くっ、無数の風は、千本の刃を相手にする事に匹敵する。これが天才『千本刀』のギンの力、か」
傷から出る血を熱に酔って乾かし、固める。足元がふらつきかけたが、膝をつくことはしない。
「はあ、はあ・・・」
しかし、攻撃をした側のギンは地面に片膝をついている。
「だが、悲しいな。いかにお前が一騎当千の力を持っていても、所詮術には限界がある。お前がただの人間である以上、この俺には勝てん」
カルコンにも既に口元をゆがめる余裕はなかった。傷だらけの両腕で剣を握りなおし振り上げると、ギンへと詰め寄った。
「死ね」
剣をギンの頭へと振り下ろす。

第6話　ディアボロス　4

「お頭ぁ！」
ロイの叫び声が響き渡った。家で伏せっているはずのロイが駆け寄ってきた。右手で剣を抜いている。その突進は凄まじく速く、カルコンを狙っていて、カルコンはそれを避けるために後ろに跳ぶ。全速力の突きは空を切った。
「どういうつもりですか、師匠！！」
ロイは自分の師を鋭い目つきで睨んだ。その敬語はあくまで事務的で、敬意などは一切含まれていなかった。
ロイは家に連れ帰られてすぐに目を覚まし、3人から聞いた話で不審に思い、飛び出してきたのだった。3人も同時に家を出たが、今となってはロイの方が足が速い。
「ロイ・・・・・来ると思っていたぞ」
カルコンは傷だらけの両腕を開いて天を仰いだ。
「お前なら賛同するだろう？俺の魔物を滅するための計画に！」
「？」
「まあ、わかるまい。とにかく俺について来い。憎いのだろう？お前の村を襲った魔物共が」
ロイにはカルコンのいっている意味がまったく分からなかった。が、カルコンの下につけば、魔物を倒すというロイの目的に近づく。それだけは分かった。
「騙、されるな、ロイ！」
ロイの背後で息も絶え絶えにギンが言った。
「魔天転器を、使わせるために、魔物を、けしかけたのは、こいつだ！」
ロイの脳裏にあの惨劇が蘇る。天を泳ぐ魔物、そこから繰り出される水鉄砲。体が吹き飛んだ知人達・・・。そして、村を守るために犠牲になった父親。全てがなくなった生まれ故郷――

ロイはカルコンを睨んでいた。その怒りに反応するように、周囲の温度が高くなる。足元の草木は枯れ、土は乾ききっていた。

「どうして・・・！？」

カルコンは少しも悪びれる様子も無く答える。

「俺が支配者になるために必要だからさ。心は痛んだよ、実に痛んだ。なんせ一つの村を俺たちと同じにするんだからな。なあ、ギン？」

カルコンはにやりと笑い、ギンを見た。ロイは目を細める。目の前の男はロイの知るどんな師の姿とも違う。饒舌で、悪意に満ちている。別人だと言われた王がまだ信用できた。

「俺はこの世界の王となり、魔物を駆逐する。大事のための小さな犠牲だ」

頭の中が真っ白になった。手が震える。体が寒い。目の前に立っているのは自分の師のはずだ。半年以上自分を磨き続けてくれた恩人のはずだ。それなのに、目の前にいるのは自分の敵。どうして自分はカルコンを睨んでいる・・・？

「そのためにはどれだけ人が犠牲になってもいいっていうのか！？」

ようやく絞り出した言葉に返って来たのは嘲笑だった。

「考えてもみろ、ロイ。今までどれだけの人間が魔物に殺された？ボンゴの村人は何百分の一だ？お前は知らないだけだ、今の世の中の惨状を。俺についてくれば教えてやる。この世の真実の姿を。そして俺の下で修業に励めばお前は強くなれる」

「だからって・・・」

ロイが剣を振り上げる。大気中の熱がロイに集まった。

「どうして簡単に他人を犠牲にできるんだ！！」

許せなかった。あの惨劇をただの一部だと言い切ってしまう師が。・・・いや、目の前の男はもはや師ではない。ロイにとってはただの敵だった。

ロイが先ほどと同程度のスピードでカルコンに向かって突進した。

カルコンも剣を構える。

剣が二人の前で交差した。ロイはカルコンを見上げ、睨む。カルコンはロイを見下し、蔑む。剣ははじかれ、またクロスする。カルコンが左足で木の枝を蹴り上げる。剣先に触れるとその枝は燃え上がった。

「・・・・・っ！？」

ロイは一歩下がる。

ロイにとって、炎は熱く感じないのだが、熱で体を守り続けるだけの持久力はまだ無い。第一、先ほどの修業でもう底をつきかけている。

だが、先ほどまでギンと戦っていたカルコンもそれは同じはず・・・。

「駄目だ、ロイ・・・」

唐突にギンが呟いた。戦いの最中、ギンに目は向けないものの、ロイは耳を傾けた。

「やつは既に、術者じゃあ、無い」

訝しげな顔をギンに向けたロイにカルコンが答える。

「俺は妖怪ガイガンの能力を受け、熱を自在に周囲から集められるようになった。つまり、術の限界など俺には無い」

嘘ではないのだろう。その証拠にギンは消耗し、カルコンの顔に疲労はない。ロイは剣の柄の部分を両手で持って体を右に捻り、突きの体勢をとった。時間がかかれば不利になる。

「いくぞ！」

脚力に任せた猛突進。もう後戻りはできない。当たれば自分の師匠を殺すことになり、避けられれば自分が死ぬ。鼓動が加速する。全身の血が煮えるように熱い。もう目の前には剣を構えたカルコンがいる。ロイは全身のバネを一気に開放し、剣を突き出した。

目の前にふいに炎が現れた。そのせいで一瞬カルコンの姿を見失った。

左の脇腹に強い衝撃を感じる。アバラの折れる音が全身に響き渡った。足が地面から遠ざかっていく。

ロイは5メートルほど離れた樹の幹に体を思い切り叩きつけられた。喉が焼けるように熱くなり、喉の奥から血が溢れる。

「ガハッ」

突きは避けられた。カルコンの周りで、今にも消えそうな炎がうなり声を上げている。あの炎でロイの視界を攪乱し、熱で増幅した筋力で突きを避けてロイの左に出て、蹴りを繰り出したらしい。カルコンはにやりと笑っている。

「まだまだだな、ロイ」

ロイは両腕をだらりと下げていて完全に無防備になっている。その右手に剣はなかった。ロイはゆっくりとその右手を掲げ、カルコンの足を指差した。炎が消えたその瞬間、カルコンは自分の足に刺さっている物に気がついた。

剣がカルコンの左腿を貫いている。蹴られた時に咄嗟に刺したロイの剣だ。

「くっ、そ。キサマ！・・・よくも」

ロイは血の滴る口をにやりとつり上げ、言い放った。

「まだまだだな、カルコン」

悔しかった。自分の人生がこの男のされるがままになっていることが。だから一矢報いたかった。どうやらそれは成功したようだ。痛みよりも、何よりも自分の弟子に出し抜かれ、見下されたことが、カルコンの理性を引き裂いたらしい。

「ふざけるなぁ！！」

カルコンは瞬時に足から剣を引き抜いた。勢いよく噴き出す血を左手を当てて熱で乾かすと、両手でロイの剣を強く握った。

鋼でできたロイの剣は、固体としての形を失い、雫となって地に落ちた。その様を、ロイは全身がばらばらになりそうな痛みの中で見た。

「はあああああ」

先ほどまでカルコンの背後で光っていた赤い球がカルコンの手の中に戻る。そしてそれを強く握り締めた。

カルコンが両腕を頭上に掲げると、そこから先ほどの何十倍、いや何百倍もの大きさの熱球が現れた。辺りが一瞬にして高温に包まれる。その熱球はあまりにも熱が高すぎて、直視する事も適わない。眼球が焼けてしまいそうだった。

「死ねっ！」

“メテオ・フレア”

カルコンが両手を伸ばしたままのロイのほうに掌を向けると、赤い球は砲弾のようにロイに向かって発射された。

あまりにも大きすぎるエネルギー。とても自分の体を守ることはできない。ロイは悔しさと無力感、疲労で指一本動かすことができないでいた。村のみんなの敵が目の前にいるのに、どうする事もできない、

ただ死を待つのみで・・・。

「・・・・・お頭」

ふいに熱が止んだ。顔を上げたロイの目の前には、金色の髪が躍っていた。ギンが両手を熱球を押さえるように突き出し、風でそれを食い止めている。

「諦めるな！」

ギンが叫んだ。その言葉が、ロイの胸に深く突き刺さる。

「まだお前にはやらなくちゃならないことがある。そうだろう！？」

ロイはハッとした。ギンの口からは血が滴っている。修業の時に聞いたことがある、術の限界――。

「ぐ・・・がはっ」

そのエネルギーに耐えかね、ギンの風が弱々しくなる。熱球が徐々に近づいてくる。今にもギンを飲み込みそうだ。

「くそっ、ここまでか」

ギンが血の流れる口で呟いた。

「おおおおお」

その時、男の低い声がステレオで聞こえてきた。

「お頭ぁ、遅くなりました！」

ヘルゲン、オルソー、アンゴラの3人が、ギンの横で熱球を風で受け止めている。熱球は5人から少し遠のいた。が、それでも微塵も勢力を落とすことはない。

「おい、ロイ！」

ヘルゲンが叫んだ。

「いいか、俺達はこれを止めることはできても、跳ね返したり消したりはできない。お前がやるんだ！」

一時的に止められていた熱球はしかし、じりじりと詰め寄ってくる。あんな凄まじい熱を風で押し返すことなどできるはずが無い。

「やるんだ、ロイ！・・・・・・やれっ！！」

ギンが血を吐きながら叫んだ。その言葉を受けたロイは、目の色を変えて立ち上がり、熱球に向かって突進した。火球のせいで気温の落ちた周囲にその熱をばらまき続ける。

――熱い、体が燃えているみたいだ。・・・・・・でも、ここで死ぬわけにはいかない！

「バカな・・・」

その熱球の向こうで、カルコンは先ほどのギンのように片膝をついていて、眩暈の止まない頭を手で押さえていた。全てを飲み込む灼熱の火球。それが自分の目の前で霧消し、ギンはオルソーに抱かれるようにぐったりしているのが見える。

確実に殺せるはずだった5人全員が残らず生きていた。

「今のは、能力と術を合成させた、あのカリースさえも死に至らしめた俺の最高の技だ。お前などに破れるはずが・・・」

ギンがオルソーに支えられながら顔を上げた。その顔は弱々しくも微笑んでいる。

「甘く見たな、カルコン。ロイは、私などはるかに凌ぐ天才だ」

カルコンは怒りの表情で、唇を噛み締め、拳を握り締めた。そして、ゆっくりと立ち上がり、叫んだ。

「キリシエ！リック！ザバン！」
その瞬間にカルコンの背後に3つの人影が現れた。一人は若い女、一人は若い男、そして一人は筋骨の逞しい中年の男。カルコンが振り返ると、3人は左ひざと右拳を地面についた。
「アジトに戻る」
カルコンはそれだけ言うと、眩暈をおこし、ふらついた。
「カルコン様！」
若い男が近づき肩を貸す。カルコンと3人はロイたちに背を向けた。
女が長い髪を揺らしながら振り向いて言った。
「命拾いしたわね」
そして、現れたときと同様に瞬時に消えていった。

第7話　旅立ち　1

あの事件から2週間が経過した。あれからしばらくの間、ロイは歩くこともままならないほどの疲労に見舞われたが、それもすっかり癒え、普段通りの生活をしている。しかし、ギンはいまだに昏睡状態が続いていた。

「お頭・・・大丈夫かなあ」

「俺達は、どうなるんだろうな」

オルソーの呟きに対してヘルゲンも呟いた。完全なる師弟制度の下に成り立っているジエルトンでは、師匠が死んでしまった場合、弟子は新たな師につくか、独学で訓練し、試験に合格して弟子を持つ資格を得るのが通例らしい。しかし昏睡ではどうすればいいのか判断もつかない。

ロイは、眠っているギンのそばの椅子に腰掛けている。顔の前で指を組み、何かを考えている。そして時折拳を強く握り、何かを思い出すように呟いた。

「カルコン・・・」

その様子をドアの外で見ていたヘルゲンは、二人の元に戻った。

「ロイのやつ、日に日にやつれてやがる」

「師の裏切りだ。心の傷は大きい」

「・・・・・・」

「だが、このままってわけにもいかねえよな・・・」

3人は、目線を合わせると、急に立ち上がった。そのまま、ギンの部屋へと歩いてゆく。

「おい、ロイ」

ヘルゲンがギンに配慮をした小さな声でロイを呼ぶ。

「なんスか」

ロイは感情のないくらい目でそれに応えた。

「行くぞ」

「どこへ？・・・って、ちょっと！」
ロイの体はいとも容易くヘルゲンに持ち上げられ、抱えられて外へと運び出された。
「やるぞ」
ヘルゲンはロイが素振りをするのに使っていた野原でロイをおろすと、肉弾戦用の薄いグローブをはめた。アンゴラはいつもロイが座っている外の丸太の椅子に腰掛けている。
「いやっス」
「あ？」
「だから、イヤです。何でそんなことしなくちゃならないんですか？めんどくさい」
ロイはそれだけ言うと、家のほうへ行こうとヘルゲンに背を向けた。ロイの襟首を掴まれ、足が宙に浮き、３メートルほど後ろに投げ飛ばされた。
ズザアアと言う擦れる音が耳を叩き、頬にやすりがけされたような痛みが走った。
「いってぇ、何するんスか」
ロイが生気のまったく感じられない目をヘルゲンへと向ける。ヘルゲンの怒りはピークに達し、拳を振り上げた。
ロイは反射的に後転し、ヘルゲンの拳を交わした。先ほどまでロイの体が横たわっていた地面には、小さな穴が空いていた。手加減など一切ない、殺すつもりの拳だった。
「ああ、もう！何がしたいんスか！そんなに殴りたきゃ勝手に殴ればいいでしょ」
ロイは服についた砂埃を払いながら立ち上がった。
ゴッ
ロイの体が、右側へ飛んで行った。ドシャアアと言う派手な音を立てて、ロイの体が地面を転げる。ヘルゲンは、ロイの頬を殴った右手を、握ったり開いたりをくり返している。
ロイは上半身を起こすと、赤くはれた左頬を手で押さえた。頬骨が

砕けんばかりの鉄拳だった。幸い折れてはいないものの、ロイの顔面は明らかな左右不対称を作り上げていた。ロイはヘルゲンを睨みつける。太陽を背にしているヘルゲンが叫んだ。

「ダセえんだよ、お前！」

その声に、ロイがびくっと肩を震わせた。

「悔しいのはわかる。そりゃあそうだろうよ！だけど今お前がするべきことは引きこもってうだうだやることじゃあねえだろうが！」

ロイが頬を押さえながらうつむいた。

「確かに家族も知り合いも親しい人みんな吹き飛ばされて、その上師匠には裏切られりゃあ落ち込むもだろうよ。だがな、そんなふうに塞ぎこんでて何かが変わるのか？変わりゃしねえだろうが！」

ロイがうつむいたまま叫んだ。

「あんた達に何が分かるんだよ。ただ、魔物に人生を壊された“だけ”のあんた達に何が分かるんだよ！」

顔を上げ、ヘルゲンを睨んだロイの目には涙がたまっていた。それが自然と流れ出て、平らな右の頬と、山をつくっている左の頬に等しい量が流れる。ヘルゲンも、椅子に腰掛けていたアンゴラも暗い表情をしていた。

「・・・わかんねえよ。なんせ俺達は親の顔すら知らねえんだからなあ」

ロイから見て、ヘルゲンは逆光で、その表情が分からなかった。しかし、怒っているんでも悲しんでいるんでも無く、ただ懐かしんでいるようにも見えた。

――魔物に親を殺された俺達は、孤児院で育てられた。まあ、実際牢獄みたいなところだったよ。軍隊のような管理、豚の飯のようなまずい飯。確かに１００人近い子ども達を１０人程度の大人で管理するのだから仕方がないんだろう。だが、あそこには同じように辛い境遇を共にする仲間がいた。毎日一緒に生きる仲間達がいたか

ら俺達は笑って生きていくことができたんだ。

だが、俺達が12歳の時のある日――――

「昼飯の時間だ。全員自分の食器を持って一列に並べ」

大人の一人が叫んだ。無駄口を叩けば飯抜きになる事を知っていた空腹の子ども達は皿を片手に一列に並んでいた。そんな中、

「痛いよ～、ヘルゲン、アンゴラ～」

オルソーは臭いトイレの個室の中でおなかを抱え、うずくまっていた。そのドアの外で、ヘルゲンとアンゴラが待っている。

「だたら拾い食いなんてやめろって言ったんだよ。早くしろよ、オルソー。俺たちまで飯抜きにされちまうぞ」

「待ってくれよ」

「分かってるって」

30分ほど過ぎて、腹を持ち直したオルソー、そしてヘルゲンとアンゴラは急ぎ足で食事の配られる集会場へ行った。

そこには、まさに地獄の光景が広がっていた――――

口から泡の混じった血を流し、白目のまま痙攣する子ども達。あーあーと言う小さな呻き声が部屋中にこだまし、真っ赤に染め上げられた床は足を進めるたびにピチャピチャと音がする。まだ生きているその子供たちを大人たちは一人ずつ――――1個ずつ麻袋に詰めていく。

「かはっ、がっ・・・おえっ」

「・・・っ!!」

アンゴラが嘔吐する音で、大人たちはこちらを振り向いた。口を動かしながら、ピチャピチャと音を立てながらこちらに近づいてくる。

その時、突風が吹き荒れた。

大人たちが目を閉じ、次に開いたときには3人の子供たちの姿は消えていた。

「戦争による疲弊で、これ以上食料を調達できなくなっていたらしい」

声が震えている。目を閉じ、一人ひとりの顔を思い出すようにヘルゲンは語った。

「身寄りのない俺たち3人は死のうがどうしようが誰も困らない。いや、あの状況では死んだ方が国のためにはよかったのかもしれない。だがな、お頭は俺達を生かしてくれた。俺たちを生かし、俺達に人を守る義務を作ってくれたんだ」

ヘルゲンは一度言葉を区切った。自然とロイの顔が上がる。

「だから俺たちは強くなって、弱さにあえぐ人々を救う。・・・お前の目的はなんだ!?復讐か?逃避か?それはお前が決めるんだ!」

初めてギンにつれられてきた時、無性に嬉しかった。死が迫っていたときにギンが救ってくれた。ロイの目的。それはきっと復讐なんかじゃなく・・・。ロイは涙を拭った。

「俺は、お頭や・・・カルコンに強くしてもらったんだ。だから、この力で魔物に脅える人々を助けたい」

ヘルゲンが嬉しそうに叫んだ。

「そうだ!俺達には無限の空が広がっている。お頭が風を与えてくれた空だ」

ロイは立ち上がった。大地を踏みしめ、拳を握り締めると、神経を集中させた。

「一発は一発だからな!」

「ふっふっふ。よし、来い!」

ヘルゲンが構えると、足元に風が巻き起こった。

「行くぞ!!」

周囲の熱が上がっていく――――

はあ、はあ、はあ

ロイとヘルゲンは野原に仰向けになると青空を見上げていた。2人

とも顔はもうぼこぼこで、一回りも二回りも大きい。
アルゴンとオルソーが二人の顔を覗き込み、呆れた顔をした。二人はにやっと笑う。二人は抱え上げられ、家の中へと引きずられていった。

――家の中のギンの部屋。昏睡状態のギンは確かに微笑んでいた。

第7話　旅立ち　2

「お頭が、お頭が目を覚ました！！」
ロイのその言葉を受け取った3人は、一斉に椅子から立ち上がった。
我先にとギンの部屋へ掛けると、部屋に押し入った。
「お頭！お頭！分かりますか！？」
ロイの問いかけに、ギンは目を開け、首を4人の方へ回した。
「大丈夫、なんですかい？」
ヘルゲンの問いに、口を少しあけ、小さな掠れた声で「ああ」と言う。
「夢を、見ていた」
ギンが天井を見る。長く眠っていたせいだろう、視界はまだぼんやりとしていた。
「大きな羽を持った若鳥の夢だ。その鳥は羽ばたきを大きな山に阻まれ、声を雨に遮られていた。私はそれを見守ることしかできなかった。だが、その鳥は何度行く手を阻まれようとも羽ばたき続け、最後には吸い込まれそうな青い空へと飛んで言ったよ・・・。」
ギンは一度目を閉じ、椅子に座っているロイの方を見た。
「ロイ、お前に風はまだ吹いているか？」
「はい！」
ロイはその言葉の意味を悟り、返した。
「お頭、本当に大丈夫なんですか？」
その目にはロイの安堵の涙がたまっていた。ギンは軽く微笑む。
「大丈夫だ。お前たちに風が吹いている限り、私の命も潰えはしない」
ロイの目から涙が止め処なく溢れてくる。しかしこれはボンゴを出たときのような悲しみの涙ではなく、喜びの涙だった。ヘルゲンが

ロイの肩に手を置く。

それから、ギンが起き上がれるようになるまで3日かかった。その間にロイはギンの身の回りの世話を任されていた。

「よし！ロイ、一緒に来てくれ」

3日後、ギンはかつての透き通った声を取り戻していた。まだ歩けるはずではないのに、ベッドから降りようとしたので、ロイが制止しようとすると、

「大丈夫だ。とりあえず外まで肩を貸してくれないか」

ロイはしぶしぶ肩を貸し、ロイを小屋の外へと導いた。ギンはいつもの自分の椅子に座ると、目を閉じた。

「ふう・・・！！」

ロイが熱を移す時のように全神経を集中させる。ギンは集まった風を纏い、体を宙に浮かせた。歩くような格好だが、足は地面から数センチ離れている。

「ロイ、行くぞ！」

「え？」

それだけ言うと、ロイのジョギングくらいのスピードで空を舞い始めた。ロイはギンについてゆくために駆け始めた。

「ちょっと、どういうことっすか！？」

ロイはギンの風に阻まれないように大きな声で叫んだ。その問いに悪びれない態度で答える。

「リハビリさ。術はこの通り使えるみたいだけど久しぶりだからね、体に慣れさせないといけない」

なるほど、とロイは呟き。ひとつの疑問を抱く。

「何で俺もついていくんですか」

「私が倒れたら、誰が運んでくれるんだい？」

ギンがロイの耳に十分届く声で叫ぶ。ロイは呆れた。

「お前もよかったら術を使うといい」

ギンはそう加えたが、熱の術は低スピードで長距離だと逆に疲れる。

これは自力で走るしかないと考えているところに、ギンが叫んだ。
「よし、スピードをもっと上げよう」
そのまま、鳥ぐらいの速さで飛んでいった。
「オニ～！！」
ロイはそう叫ぶと、仕方なく術を使いながらギンについてゆくことにした。空は青くどこまでも澄んで、木々は枝を力いっぱいに揺らしていた。

ロイがふらふらになりながらギンに続いて小屋に入った時、辺りは夕闇に包まれていた。扉を閉めると、食指を動かすにおいが鼻を突いた。食卓に目を向けると、珍しく3人が料理をしたらしく、食事が並べられていた。ギンが定位置に座るように促す。
「いやあ、久しぶりに訓練なんかしたなあ。疲れた。なっ、ロイ」
そう余裕そうに言うと、まだ息を切らせているロイを一瞥した。ロイは口をとがらせ、目を逸らした。
「こっちの方が燃費悪いんだからしょうがないじゃないっすか」
と言いたかったが、修業が足りないとか嫌味を言われそうだったのでやめた。隣を見ると、3人が自分たちで作った料理をほおばっている。ギンも食べ出したが、今のロイにその体力は無い。しかし、食べないと、目の前にあるものを食べられてしまうので、ゆっくりと口に運び出した。
おおかた食事が済んだ頃、ギンがロイに話しかけた。
「ロイ、お前はいつ出発するんだい？」
その言葉を聞いてロイははっとした。確かにカルコンもいなくなり、ギンも目覚めた今となってはロイがここに残る意味は無い。ここにいたところで術の修業ができるわけでもない。更に、ここにいては『魔物から人々を救う』という目的を果たす事も出来ない。
しかし、正直ここを出て一人で生きていくなんて考えたことも無かった。
俯くロイに対してギンが言う。

「カルコンはそう遠くない間にジエルトンに宣戦布告する。もし、このままディアボロスが力を付け続けたら、ジエルトンでも太刀打ちできなくなってしまうだろう。だから、ロイ。お前は世界を見て、自分の力を磨かなくてはいけないよ」

わかっている。ここにいても守られているだけ。自分一人ではギンはおろか自分自身でさえ守ることはできなかった。それではカルコンには敵わない。

「わかってます、でも・・・」

果たして魔物が出ている外の世界でロイの力が通用するのか。ロイには自分の力を過信できるほどの経験が無かった。実戦と言ったらガイガンを目の前にして足がすくみ、カルコンと対峙して剣を腿に刺したくらいか。言ってしまえば2戦全敗のようなものだ。

3人は立ち上がって、食器を片付けていた。ロイの分まで片付けている。ギンの真剣さを感じ取っているということだろう。ここがロイの人生の中で大きな分岐点になることが3人も分かっているのだ。

「迷う気持ちは分かる。だが、カルコンを止めるためにもここにいてはいけないだろう」

だが、非力な自分に何が出来るのだろうか・・・。

その様子を見てギンは溜息をついた。ゆっくりと立ち上がると、初めて来た夜と同じように倉庫の中へ入っていった。

5分ほどたって、出てきたギンは剣を握っていた。

「お前の剣はカルコンに融かされてしまったからな。代わりだ。それともうひとつ話しておく。私の剣を振ってみなさい」

ロイはギンが倉庫から出した剣を右手でギンが腰に携えている剣を左手で受け取った。自然と左手が頭上に上がってしまった。

「えっ？軽い・・・！」

普通の剣と同様の重さだと思い、ロイは腕に力を込めた。しかし、ギンの剣はおそろしく軽く、自然と腕が上がってしまったというわけだ。

「そうだ、術者にとって、通常の剣は戦闘の時邪魔になる。だから、

例えば私の剣が軽い物質で作られているように、特注品にするわけだ」

なるほど、これでカルコンの剣がカルコン自身の発する熱で融けなかったことにも納得がゆく。熱の術では確かに融けない程度に熱を逃がせても、劣化は免れない。融点の高い金属を使っていれば問題ないわけだ。

「ジエルトンの協会本部の地下に鍛錬場があってね。術者はそこに出向いて作ってもらうんだ。術者の体に合ったものを作るわけだから、実際に出向かないと作れないわけだね。どうだろう、とりあえずそこに行くことを目的とするのは」

“世界を救う”なんて漠然としたゴールの見えない旅ではなく、目的のある旅。

「無理だと思ったらいつでも私の下に戻ってくるといい。私たちもそろそろ拠点を動かさなければならないけど、ちゃんと連絡はとれるようにしておくから。

「はい、分かりました」

ロイは背筋を伸ばし、そう答えた。

朝焼けがロイの体を包み、西の方向に長い影を作っていた。ロイはそれを眩しそうに見つめると、目を閉じた。

背後に広がる森からは朝早いせいか鳥の鳴き声は聞こえず、静まり返っている。その暗がりの中にロイとロイの恩人達の姿がある。

「ロイ、覚悟はいいかい？」

ロイは力強く頷き、ギンの問いへの肯定を示した。

ヘルゲンがロイの方へと歩み寄り、自分の胸くらいの高さのロイの頭を軽く叩いた。ロイの茶色い髪が少し揺れる。

「カリューの山は高くはないが広い。野垂れ死ぬなよ」

ロイは歯を見せてにこりと笑った。ヘルゲンも同様に笑う。そして、二人は拳を突き合った。ロイも成長期の後半に差し掛かったとはい

え、やはりヘルゲンの手も背もロイよりずっと大きい。
ギンもロイのほうに歩み寄ってきた。首のネックレスを外し、ロイに掌を出させた。
「これをあげよう」
そのネックレスは、細いチェーン状の物で、石のような物が三つ通されていた。真ん中は大きく、両端の二つははやや小さい。
「私が師匠からもらったものだ。女物だが、勘弁してくれよ」
ギンはにこっと笑った。ロイはつられて笑うと、それを首に回した。ここに来てから首も一回り太くなったらしく、鎖は短かったが、胸の剣状突起ぐらいの位置に石が触れている。
ギンは左手の中指にはめている銀色の指輪を目の前にかざした。ヘルゲン、アンゴラ、オルソーも同様にする。ロイも同じようにかざす。
「――ここに新たな旅立ちが約束された。気高く、強く、勇気あるこの者を見守り給え」
詠唱を終え、手を下げると、ギンはロイの肩に置いた。
「常にジエルトンの誇りを忘れるな。心はいつも共にある」
「はい」
ロイは力強く答えた。４人に深く礼をすると、振り返り、右頬に朝日を受けながら、歩き出した。両脇の森からは、旅立ちを祝福するように、鳥達が合唱を始めていた。

第8話　田舎者、都会を知る　1

「あ～・・・あち～！」

太陽が容赦なくロイを照り付けていて。ロイにとって熱を体外に逃がすことは造作もないが、それに使うエネルギーの消費は抑えられない。旅立ってわずか三日で、ロイはホームシックにかかりつつあった。ギンところへ戻ろうか。いや、こんなに早く戻ったらヘルゲン達に笑われる。ロイの中では葛藤が渦巻いていた。

ロイの脳裏では、冷たい飲み水が喉を潤す感覚が蜃気楼のように不安定に揺れていた。しかし、ここにあるのは太陽の熱にやられてぬるくなった水のみ。それもこの三日で雑菌が入り、飲むことは出来ないようになってしまった。しかし、煮沸すれば何とかなりそうなので、捨てることなく、とっておいてある。今は、樹になっている木の実や果物の水分で何とか渇きを潤していた。カリューの山道は広すぎるせいか人があまり通らないため、道は悪いが木の実は自然のままなっていた。

「くっそ～、疲れた～」

ロイは、側の石に腰掛けた。ちょうど木の陰になっていて、少し涼しい。ロイは布の袋から昨日採っておいた果物を取り出すと、ひとつを手に取り、かじった。拳大ほどの大きさで、少し酸っぱい。ロイはもうひとつ取りだして食べようとしたが、袋の中をちらと窺い、溜息を付いて果物を戻した。

小屋から持ってきた食べ物は昨日食べつくしてしまったので、もうそこらの物を採って食べるしかない。大体食べられるものは知っているが、見たことのないものは毒が怖いのでやめておいた。そうすると、中腹の小屋周辺と山頂近いここではなっている果物が違うのか、食べられるものが限られてくる。動物でも狩ろうかと思ったが、ここ2，3日の暑さではなかなか遭遇する事は出来なかった。虫は

ロイに吸い寄せられるようにいくらでも寄ってきているのだが、さすがに虫を食べようとは思わない。
ロイは膝に手を置き、前かがみになると、勢いよく立ち上がった。ここにいるといつまでも休んで居たくなる。それよりも早く歩かなくては。夜の森は危険だとガイに教わった事がある。危険な動物が徘徊していて、こちらと違って獣は夜目が効くから太刀打ちできないし、目標が分からなくなるから、同じところをぐるぐると廻ってしまうらしい。ロイはキョロキョロと周りを確認しながら歩き始めた。

太陽は西に傾き、暑さも和らいできた。ロイは、大きくなった袋を肩に担ぎながら坂を下っていた。顔もどことなくほころんでいる。ロイは西の夕日をちらと見ながら、暗くなる前に寝る場所を探すことにし、辺りを見回した。見ると、ちょうどよく平らな大きい石がある。ロイはそこに腰掛け、鼻歌を歌いながら袋の口をあけると、なんとそこには体長1メートルほどの蛇が入っていた。その鱗を持っていたナイフで剥ぐと、細かく切って皮をはいだ。ナイフについた血を木の葉で何度も拭いた。それから術を使って火をおこし、肉を焼く。しばらくすると異臭がロイの鼻を突いた。それは鼻を覆いたくなるような臭いだったが、空腹の今のロイは気にならなかった。次第に模様が分からなくなるほどに黒く焼けていき、ロイは肉を噛み千切るようにして食べ始めた。
小屋でもたまに蛇は出された。食糧不足のときの緊急だけで、はじめのうちはとても口に入れることなど出来なかったが、食べなければとられてしまうので仕方なく食べていた。確かに「美味い！」といえるほどでもなく、硬かったが、無いよりはましである。
全てすっかり食べ終わると、辺りの骨を森の中へと投げ捨てた。こうしておかないと、獣が狙って近づいてくるからだ。その後ロイは痛そうに顎をさすりながら横になり、眠ってしまった。

ザザザ、という葉と葉が擦れ合う音にロイは目覚めた。辺りは暗く、月だけがロイの表情を辛うじて映し出していた。風は全く吹いていないのに先ほどから続く物音に、ロイは自然と剣の鞘をつかんでいた。物音は複数のところから聞こえ、絶えず動いている。

「おい、こそこそしてないで出て来い！」

声を張り上げる。そのロイの言葉に動きがぴたりと止まった。つまり、周囲にいるのは動物ではなく、言葉を解する人間だという事だ。辺りを沈黙が包む。ロイの額から一筋の汗が流れた。その沈黙が２０秒ほど続いた後、ロイは痺れを切らして行動を起こした。

「出て来ないならこっちから行くぞ！」

ロイは剣を抜くと、すばやく頭上の枝を切り落とした。それを左手でつかみ神経を集中させると、枝が発火した。それを誰かいるであろう草陰のひとつに投げ込んだ。その場所から自然と火が上がり、辺りを明るく照らす。その中に黒い影がうごめいた。ロイは草陰に飛び込むと、その影の襟の部分を掴み、グイと引っ張った。服に火が付いているその陰はあわてて火を消している。それが消えた時、その喉元にはロイの長剣が突きつけられていた。

「何の真似だ？」

ロイは目を細め、少し顎をひいて威圧感を出した。１６歳のまだ幼さの残る少年の立ち振る舞いに驚いたようで、その男はぽかんと口を開けてロイを見上げていた。

ガサガサ、と言う葉がすれる音が増した。

「早く出て来い」

ようやく観念したのか、同じ格好をした６人の男が出てきた。真っ黒いその衣装は容易に闇に溶け込んでいた。気配は感じるが姿が見えなかったのは、その衣装のせいだったらしい。いまだロイに剣を突きつけられている男を含め、７人はじっと黙ってロイのほうを見ていた。ロイが睨み返すと、呟く声が聞こえてきた。

「おい、お前が言えよ」「ヤダよ、怖そうだしよ」「見たか？さっきの・・・。丸焼きにされちまうぞ」

ロイは白い額の眉間に皺を寄せ、左手で頭をかくと、一歩下がり、7人に剣を向ける。先ほどまでそれを喉元に突きつけられていた男は後ずさり、仲間の足元まで下がった。
「そこのお前、言え！どうして俺を狙った！？」
座り込んでいる男を剣で指し、威圧するようにそう言うと、男はどもりながら返した。
「えっ、えっと、俺達は、あの、その・・・と、盗賊です」
ロイの目つきが先ほどの数段悪くなった。とてもじゃないがこの軟弱そうな集団が盗賊には見えない。
「盗賊？カリューにいて何の仕事がある？」
カリューに人は通らない。果物の採集以外に人が入る理由はないからだ。
「そ、それは・・・。ちょっと前までお頭が麓の街ケムトに稼ぎに行ってたんですが・・・」
ここまで統率の取れていないのだから、その“お頭”とやらは今いないのだろう。その“お頭”はギンのように物静かな感じではなく、1人で盗みに行くような激しいタイプのようだ。ギンはものぐさなので自分で行動したりはしないだろう。
「それで、その“お頭”というのは？」
声を低くし、威圧感を出すのも慣れてきた。どうやら7人の盗賊に敵意は無さそうなので、というか戦意そのものがもうないようなので、ロイは剣を納める。それを見て安心したのか、6人の足元に座っていた男は立ち上がった。
「それが、1週間ほど前にケムトに行ったきり戻ってこなくて・・・」
先程よりスムーズに喋るようにはなったものの、頬を伝っている汗が男のひ弱さをかもし出している。
ロイが左拳を顎に近づけて目線を下げ、考えていると、7人のうちの一人が、前に出てきた。
「貴方はケムトを目指しているんですね？」

ロイは焦点を男に合わせた。スキンヘッドは威圧的だが、細いその目はいかにも温和そうに見える。やはりどこからどう見ても盗賊ではない。

「恐らくお頭は捕らえられています。是非、お助け願いたい。このままでは我々は飢え死にしてしまう」

7人が揃って頭を下げた。ロイの眉間の皺が増えた。

「ふざけるな。自分たちで何もしないで『助けてください』だと？それに俺に何のメリットがある？」

「しかし、我々にはそれだけの力量が・・・」

ロイは失望した。大の大人が7人揃って、一人の人間を助けに行く勇気すらないなんて。それとも、この世の中の人間は皆そうなのだろうか？確かにロイが今まで会ってきたのは世間から隔離された村人と、世界を救った人物が作った組織の者たちだ。ロイが今まで会ってきた者達が異常なのかもしれない。

「情けないな。それに気に食わない。もっと必死になってみろよ」

ロイは踵を返し、荷物を背負った。まだあたりは暗く、月の位置も先ほどとほとんど変わらない。ここは休んで明日の早朝に歩き始めるのが通常だろう。しかし、いつまでもここにいたら怒りを募らせそうなので歩くことにした。すると、7人が短剣を抜いた音がした。背後から襲う気だと推測したロイは、左手の親指で鍔を上げ、右手を柄にかけた。

「ああ、さようならお頭」

その言葉に驚き振り返ると、スキンヘッドの男をはじめ全員で喉元に剣をかけていた。

「おい、ちょっと、やめろ！」

ロイは7人の下に歩み寄り、必死に叫んだ。今しがた「必死になれよ」と言った自分が必死になっているようでは本当に恰好がつかない。

「しかし、お頭がいなくては我々に生きる道はありません。貴方様の言う通り、ここで必ず死ぬことにします」

スキンヘッドの男は糸の様に細い両目から涙を流し、ロイの方を見ていた。
「ぐ・・・分かった、分かったよ。街で“お頭”について聞いておくから」
「でも助け出してくれないんでしょう?それならばこの命など、必要もなく・・・」
「分かったってば、助け出す!助け出すよ!分かったから、剣をしまえ～～!!」
7人は剣を鞘に納めた。ロイははあ、はあと粗く呼吸をしている。一度に叫びすぎたせいだろう。スキンヘッドの男は涙を黒装束の袖で拭うとそれが嘘みたいにニッコリと笑っていった。
「では、よろしくお願いします。旅のお方。ああ、申し遅れました私の名前はリュウコウといいます」
この態度の変わりようは・・・。
「あんたら、盗賊団と言うより詐欺師団だな。で、何で盗賊なんてやってるんだ」
流行の後ろにいる6人も嬉々とした顔をしているから立派な詐欺だ、これは。
「ええ、我々は、まあ言うならば恋敵でしてね」
リュウコウが照れくさそうに言った。
「はあ?」
「ですから、お頭に惚れて集まった連中なんです」
「お頭って、女なのか?」
だとしたら随分と平和ボケした話だ。
「ええ、そうですよ。黒くて長い髪が似合う素敵な方でしてね。その彼女が『あたしと結婚したければ部下になれ』なんて言ったものですから」
ボケはボケでも完全な色ボケって事か、とロイは呆れた。
「この魔物が出始めているっていう時に」
頬を赤らめていたリュウコウが怪訝な顔をして首をかしげた。

「貴方がどこからいらしたのかは存知ませんけど、この辺り・・・というかそもそも私は魔物に襲われたと言う話を聞いたことがありませんよ。魔物は生きているという噂は立っていますが、しかし根拠はありません。まあ、その噂の影響でケムトの警備が強化されましてね、お頭の捕まったのはそのせいだと思います」

ギンは『結構襲われている』と言ったが、大きな町は襲われていないから語られていないのか。それともギンが間違っているのか。前者ならカルコンが狙って襲わせているのかもしれないし、あるいは魔物自体に知恵があるのかもしれない。

「で・・・その“お頭”の特徴は？」

それを聴いた瞬間、7人の目つきが変わった。髪の立っている男がロイの肩をぐっと掴み、叫んだ。

「お前、そんなこと聞いてお頭に手を出すつもりだろう！？クソ～、またライバルが増えるのか！」

そういうと、膝立ちになり、両手で顔を覆って仰け反り、苦悩のポーズを取った。

「・・・・・・」

まったく、返す言葉もない。どこまでもその“お頭”にぞっこんらしい。

「違う。何か特徴が分からないと見つけようが無いだろう？」

「それは確かにごもっともです」

そういって答えたのはさっきロイに剣を突きつけられたひ弱そうな男だった。

「お頭は美しく、強くて厳しいところもあるけれど、その中に優しさを見せる例えるならバラのような方なのです！！」

どもらなかった。この男、こんなにスラスラ喋れたのかとロイは感心してしまった。

「いや、だからそんな主観的な特徴じゃなくて・・・」

この7人と話しているとおかしくてふきだしてしまいそうだが、日が明けるどころかもう一度暮れてしまう。一番話が伝わりそうなリ

ユウコウにもう一度訊ねた。
「ですから、バラのように美しく――――」
「それはもういい」
思わず溜息をついてしまった。人間関係って大変だ。これからこんな様なことが続くのだろうか。
「まあ、背は貴方より少し低いくらいです。年齢は今年で１９です。ちなみに私と知り合ったのは１２の時ですよ。先ほども申したように黒くて長い美しい髪もしています。ちなみにその美しさだけを目に焼き付けるために私は髪を剃ったのです。これぞ・・・愛！」
なんだかな、と思いつつ、ロイは苦笑いをして頭をかいた。もはや何が正しくて、何が誇張した表現なのか分からない。
「俺より背が少し低くて、長い黒髪なんだな？ほかには・・・例えば好んでつけているアクセサリーとか・・・・・・」
「そういえば、亡くなられたお父上の写真をロケットに入れていつも下げていましたよ。そのお父上と言うのはケムトでは立派な商人でしてね、お頭は小さい頃から遊んでもらえはしなかったものの、大事に育てられたのだと笑って言っていました。またその笑顔が素敵で、素敵で・・・」
成る程、ロケットか。ロイは自分の首にかかっているネックレスをちらと見た。
「ああ、そういえば忘れていた。その“お頭”の名前は？」
「お前はどんだけ探りを入れるつもりだ～～～」
「・・・・・・」
凄まじい苦悩っぷりを発揮した髪の立っている男が復活した。ロイの体をがくがくと揺さぶる。相手にしていると話が進まないので、完全に無視してリュウコウの方を見た。
「シルク、といいます。美しくて清らかないい名前でしょう？」
ロイは忘れないように頭の中で連呼した。シルクね、シルク。
「僕は、キリクっていいます。あなたの名前を教えてください」
ひ弱そうな男はロイのほうに顔を向けた。朝焼けに照らされたその

顔はどこと無く爽やかな感じがするのだから不思議なものだ。
「ロイ＝クレイスだ」
「ロイさん、お頭を――――シルク様をよろしく頼みます」
ロイはわかったと返事をすると、踵を返し、右頬に太陽のぬくもりを受けながら歩き始めた。
「このままっすぐ行けば道があります。その道に沿っていけば夜にはケムトに着くでしょう！！」
キリクの叫ぶ声が聞こえた。ロイは振り返らず、左手を挙げて答えた。

第8話　田舎者、都会を知る　2

ロイの眼に灰色の壁が映った頃には、キリクの言った通り日が沈みかけていた。ロイは肩に下げていた袋を持ち直し、壁に向かって足を進めた。途中からけもの道が均された道に変わった。道は西と東にも伸びている。ここを通って東西には行き来があるのだろう。

灰色の壁が見えてからその巨大さが理解できるようになるまでにさらに１０分以上の時間を費やした。その壁は街を囲む防壁になっていた。近づくと、見上げた首が痛くなるくらい高かった。ちょうど道なりに来たロイの正面に鉄で造られた大きな扉があった。横幅は大人１０人が両手を広げても端から端までは手が届かないであろうほどあって、もちろんいくら力をかけても開けられないだろう。扉の横には対比で相当小さく見える部屋があり、ロイが近づくとがっちりとした体格の男が出てきた。

「何か身分を示すものは持っているか？」

ロイはほとんど何も入っていない鞄をひっくり返し、身分など証明できないことを確認した。どうやら街というのは入るために手続きがいるらしい。背中に冷や汗が流れるのを感じた。門番は訝しげにロイの方を見ている。

門番がすっと近づいた。ロイはたたき出されるのかと思い、身構えたが、ロイの左手を見ると、口を開いた。

「その指輪を見せてみろ」

ロイは中指にはまっている指輪を外して門番に渡した。門番はそれとロイを交互に見つめると、無言で指輪をロイに返し、小さな部屋に戻っていった。

２分ほどして、門番が出てきた。手にはなにやら拳ほどの大きさの石が握られている。門番はもう一度ロイから指輪を受け取ると、その二つを近づけた。

「えっ！？」

音も無く、門番が持っていた石が光りだした。黄色い淡い光で、弱々しい。

「ジエルトンの方ですか。失礼しました。只今門を開けますので、しばらくお待ちください」

ロイには意味がわからない事ばかりであった。聞くのは恥かもしれないが、聞くしかないので門番に尋ねた。

「この指輪でどうして通れるんですか？」

門番は表情を崩さずに答えた。

「この石に反応する銀色の指輪を持つものは許可証が無くても街に入れると協定で決まっているのです。しかし、知っているのは国権の責任者や幹部、それと私のような門番だけです。一般人は知りません。盗まれたり、壊されたりされぬようご用心ください」

扉はからくりで開くようになっているらしい。ギイイィと言う重苦しい音をたてて扉が開いた。

「さあ、ケムトの街にお入りください」

そうロイを誘導し、ロイが中に入ると再び大きな音をたてて門が閉じた。

「すげえ・・・・・」

夜の闇に包まれている街並みが広がっていた。中心にまっすぐに伸びる石畳の道路があり、その両脇にレンガ造りの家が建てられていた。話には聞いていたものの、ロイは木造以外の家を見たことがないので、その強固な建物に感動すら覚えた。少し歩くと左右に道が広がる。隙間無く道を形作っている家々と足元に広がる石畳はある種の芸術性さえ感じさせた。ロイは自分に芸術を感じる心など無いと思っていたが、どうやらそれは改めなければならないようだ。ずっと歩いてきて疲労はピークに達しているのだが、それすら忘れてきょろきょろと左右を見回しながら道を歩いていると、正面から黒い波が押し寄せてきた。

「なんだあれ？」

ロイは剣をつかみ、臨戦態勢を調えた。黒い波はドドドという地鳴りを続けながらロイの方へと近づいてくる。それが近づいてきて、人の波だと気付いた時にはロイはその波に巻き込まれていた。

「えっ！ちょ、ちょっと、何かあったんすか？」

その波に巻き込まれ、踏みつぶされないようにと１００メートルぐらい走らされ、門が近づいてきたとき、ようやく隣で一緒に走っている男と話すことが出来た。

「なにかあったんですか？」

「モンスターだ！町の中央広場にモンスターが出たんだよ！！」

「モンスター？魔物か魔獣？」

男はコクリと頷き、スピードを落としたロイを引き離していった。

ロイは両足に熱を込め、後ろ方向に大きく跳んだ。木をのぼる技の応用で、家の屋根へと登る。黒い人間の頭髪が作っているその波はロイが今まで見たことが無いほど多くの人で構成されていてる。余りの人の多さにめまいさえ覚えた。とにかく、屋根伝いに波の進む逆方向へと走り始めた。その先には夜とは思えないほど明るく燃え盛る炎が見える。

「魔物か・・・？」

ようやく波が途切れ、地面へと降りると、目の前にある広場へと走った。

ゴオオオオ

燃え盛る炎が音をたててうなっていた。その広場の中心には噴水があり、炎の中にも関わらず蒸発することなく水を放射し続けていた。広場は円形になっている。度胸試しだろうか、ちらほら人の姿が見える。

「でかっ！！」

街を囲んでいる壁よりも遥かに高さのある大きな赤い竜が炎を吹き出していた。その炎は周囲の建物をにまでうつっている。首が長く、胴体はずっしりとしている。ロイの体はその竜の足の爪ほどしかない。それは近づいていくロイの姿に気がつくと、首をこちらに突き

出した。

キシャアアア

耳を劈く咆哮があたりに響いた。先ほど周りにいた人々も慌てて逃げ出し、ロイを含めて3人だけになった。

「いって～、くそっ」

ロイは耳を押さえながら剣を抜くと竜の体のほうへと走った。

「シルク！！」

突然叫び声が聞こえ、ロイの視界が黒くなった。そう思った途端、後ろへ突き飛ばされた。

「つう」

ロイは顔をしかめる。石畳に頭を強く打ちつけたらしく、後頭部ががんがんする。どうやら誰かに突き飛ばされたらしい。文句を言おうと顔を上げると、そこに立っていたのは長い黒髪の少女だった。ロイは立ち上がって服を払う。なんと怒鳴ってやろうかと口を開くと、それを遮るようにして少女が叫んだ。

「あなた、危ないじゃない！」

危ないのはお前だろうと言いたかったが、少女（と言ってもロイよりは幾分か年上のようだが）からしてみればロイを助けたつもりなのかもしれない。

「俺なら大丈夫だ。その魔物は俺が倒すから・・・どいてくれ」

ロイが深刻な面持ちで言うと、数秒間、静かな空気が流れた。

「ぷっ」

少女が吹きだした。

「何言ってんの？あんたみたいな子供が行ったって死ぬだけよ！モンスターのことならモンスターハンターのシュート様に任せなさい」

そう言い放って振り向いた。黒髪の少女の存在に呆気にとられて気がつかなかったが、そこには男が1人立っていた。男はちらとこちらに視線を向けた。

「ああ、その通りだ。シルク、そこの少年を連れて少し下がっていてくれたまえ」
「はい」
シルクと呼ばれた少女は嬉しそうに頬を赤らめて返事をすると、ロイのほうへと歩み寄ってロイの腕を掴み、引っ張った。
「ほら、ここにいるとシュート様の邪魔なのよ」
歩行に合わせて、波のように流れる黒髪を見て、手を引かれながらロイは考えていた。
「シルク・・・シルク、え～～と・・・・・・あっ、そうだ！」
ブツブツと独り言を言い、突然叫んだ。シルクはびくっとしてロイの方を見た。
「な、何？」
「アンタ、“お頭”だろ。リュウコウやキリクたちが心配してたぞ」
シルクはこれ以上に無いほどの驚いた顔をした。
「何であいつらのこと知ってんの？」
引きずる手は止まったものの腕は掴まれたままだ。その力は華奢な体つきにしては強かったが、ロイは何食わぬ顔で答えた。
「カリューの山で会ったんだよ。なんだ、あんた捕まってたわけじゃないのか。どうして戻らないんだ？」
突然ロイを掴んでいた腕がほどけた。ロイが掴まれていた手首を見ると痣になっていた。
「いてて・・・ん？」
シルクは唇を噛み、ロイをにらんだ。
「迷惑なのよ。勝手に婚約者になって、勝手にあたしについてきて・・・」
そう言うと、そっぽを向いた。ロイには小刻みに震える肩しかシルクの感情を表すものは見えなくなった。
「そういうつながりだったのか。じゃあ7人も婚約者を？」
「いいえ、キリクだけは親の代からあたしの家に仕えているの。後の6人はパパが勝手に決めたパパの跡継ぎ候補よ」

シルクの父親。既に他界しているとリュウコウは言っていた。大商人だということだが、そんな連中は結婚相手を親が決めるのだろうか。世間のことに疎いロイには分からない。

「それでさっきからアンタの首にかかっているのが父親の写真か？」

とりあえず確認のために言っておく。シルクがロイを睨んだ。ロイは体を起こして地面に座ると、再度ぶつけた頭をさすりながら言った。

「リュウコウが言っていたがかなり凄い商人だったらしいじゃないか」

シルクはロイを睨み続けたまま言い放った。

「そうよ、パパはこの2万人もの人が住んでるケムトの街を支えていたの。誰にでも優しい人だったわ。自分の事なんか後回しにしていつもいつも人のことばかり気にかけていたの。でも神様は残酷ね。そんなパパをケムトから奪い去ってしまったんだから」

シルクの目は潤んでいた。それは家々を燃やし続ける炎に照らされて宝石のように煌めいていた。ロイは俯き、呟いた。

「神様、か。そんなものがいたら俺からみんなを奪ったりしなかっただろうな」

シルクは驚き、視線をロイから外し、魔物によって燃やされ続けている家々を見た。その目はかすかに潤んでいる。

ギャオオオン

魔物の大きな怒声が轟く。ロイとシルクはその声の方をするほうをはっと見た。その大きな魔物に比べて小指の爪ほどに見える人間、シュートは筒状の物を手にし、魔物に向けていた。ロイは勢いよく立ち上がると、剣を握りしめた。するとえり首が勢い良く引かれ、、ロイの尻は吸い寄せられたように地面に密着する。

「いってぇ・・・なにすんだよ」

ロイの頭を掴み、体を地面に押し付けているシルクを睨みつけた。

見かけによらずなかなか力がある。だてに元盗賊団の頭目だったわけじゃないというわけらしい。シルクはロイを解放すると、両手を腰に当て、言い放った。

「それはあたしのセリフよ。素人が手を出すものじゃないわ。シュート様はプロのモンスターハンターなのよ！あなたが行っても邪魔になるだけよ！」

「ふざけんな。あんな棒で何しようってんだよ！！」

シルクは信じられないという顔でロイを見た。

「あなた、もしかして銃を知らないの？」

「ジュウ？」

シルクの顔が「信じられない」という表情になった。

「呆れた。どんな田舎の村から来たの？」

「――――ボンゴだよ」

ロイはぼそっと言い放った。田舎といわれていい気はしないが、ど田舎であることは否定できない。シルクは首をかしげている。

「・・・知らないわ。そんなところ本当にあるの？」

そう言われたロイのほうが信じられなかった。

「おいおい、そりゃあアンタの知識が足りないだけじゃないのか？」

「そんなはずはないわ。あたしはパパにタンタニア大陸の全ての街と国と集落を覚えさせられたもの」

ようやくロイは合点がいった。

「ああ、ボンゴはここ２００年ほど外との交流がほとんどなかったから、記録にはないのかもな」

シルクはため息をついた。

「あっきれた。そんなことにも気付かないなんてよっぽどのど田舎ね」

むっとしたロイは口を尖らせていった。

「うるさいな。それでその“ジュウ”ってのは何なんだよ」

思い出したようにシルクが答える。

「銃ってのは、あの筒の中に入っている金属の弾を火薬で打ち出す

ものよ。人の体も貫通するほど強力なの。あれが開発されてからは商人の護身具から剣がほとんど消え去ったのよ。つまりあなたが手に持っているのは前時代的時代遅れな武器ってわけ」

「ぐっ・・・」

「し・か・も！シュート様の銃は改良型で、圧縮した空気で相手を吹き飛ばすのよ。見てなさい！」

そういって目をやったシュートは銃を魔物のほうに構えている。

「魔物よ、もと来た場所。冥界の彼方へ還るがいい！！」

ズドン

耳を劈く音が空気を震えさせる。銃身から出た空気は巨大な魔物の腹の部分に当たり、魔物は後方に吹き飛ばされた。

「すげっ・・・！」

ギンでもあれくらいのことが果たしてできるのだろうか。ロイは今まで最強だと思っていた精霊術が突然脆弱なものになってしまったかのように感じた。

ギャオオオオオ

魔物は切り裂くような悲鳴をあげた。大地が、空気がビリビリと震える、体を貫くような咆哮。その長い慟哭が静まった時、魔物の姿は霧のように消え去っていた。周りを見ると、激しかった炎もすっかり消えていて跡形もない。焼けた痕跡もどこにもなく、全て消え去っていた。そこにはホルスターに銃をしまうシュートの姿だけが残っていた。

コツ、コツ、コツ・・・

シュートがこちらに近づいてくる。その整った顔は無表情で、しかし誇りと勇気に満ちていた。

――夜が明ける。

「大丈夫か、少年」

にこっと笑いロイの方を見たシュートはロイに手を差し出した。そ

の笑みはギンのそれとは違い、どこか裏のありそうな感じだった。
「ああ」
なんとなく気に食わなかったので、ロイはその手を借りずに自分で立ち上がった。
「シュート様！！カッコよかったです！」
「ああ、ありがとう、シルク」
先ほどの高飛車な物腰とは打って変わって一人の乙女の顔となったシルクは、シュートに近づいた。その姿は朝焼けに映し出されて、きらきらと光っていた。
「君の名前は？」
「ロイ」
ロイは短くぼそっと呟いた。
「ロイ、か。僕はシュートだ。君は剣の心得が多少あるだろうけど、はっきりいって魔物と戦うのは危険だからね、やめたほうがいい」
ロイはむっとし、言い返そうとした。が、言い返す事はかなわなかった。

グギュルルル

腹の虫が限界を訴えていたからだ。シュートは再びくすっと笑う。
シルクは呆れた顔をして首をすくめていた。
「いいよ、僕も一仕事して腹が減ったし、ついでに朝食をおごってあげよう」
踵を返すと、商店街の方へと歩いていった。シルク、そしてロイもそれに続く。
夜が明けて、白んだ空にはうすい雲がいくつか浮いていた。

第8話　田舎者、都会を知る　3

シュートらと共に入った喫茶店で出されたのは、拳大のパンが3つとサラダだった。ロイは久しぶりに見るまともな飯を前にして、無我夢中で食べていた。

「うま～～い。おばちゃん、すげえぞ、これ」

皿を運んできた女性に向かって叫ぶと、４０後半ほどの女性はにこりと笑った。

「坊やは世辞が上手いねぇ。でも料理を褒めるなら奥で作ってる旦那にいってちょうだい」

そう言うと、飲み干されたロイのグラスに水を注いだ。嵐のようなロイの食事に唖然としていたシュートは机に飛び散っているパンのカスを気にしながら食事をとっていた。シルクはというと完全に引いていて、手を止めて眉をひそめながらロイのほうを見ていた。ロイが食事を終え、手を止めたころを見計らってシュートが切り出した。

「君はボンゴというところから来たんだってね」

グラスの水を飲みながらロイは知っているのかと尋ねたが、シュートは首を横に振った。

「腰に提げている剣を見ると君は多少腕に覚えがあるみたいだ。だが、君の為に言っておく。はっきりいって魔物は危険だ。余計なことをすると身を滅ぼすぞ。それにその剣。君のような少年が持つには長すぎる。護身用には持っているが、そんなに振ったこともないんだろう？」

シュートは顔の前で指を組んでいる。その目は口元に反して威圧感たっぷりであった。屈辱を感じたが、言い返すよりも先に聞いておきたいことがあった。

「あんたのその銃っての見せてくれよ。さっきのあれすげえのな。あんなでかい魔物を一撃で吹っ飛ばしてさあ」

それを聞いたシュートは溜息を吐き、ホルスターごと銃を出した。
「これはまだ試作品で、世界中で僕しか持っていない。威力は先ほど見せたとおりだ」
「へえ、あんたがつくったってことか？」
「まあ、そういうことになるね。もちろん製造したのは技術者だが、設計したのは僕だ」
ふーんとシュートの話を聞きながらロイは銃を凝視していた。先ほどの戦闘を思い出し、これさえあればわざわざ体を鍛えて剣の扱いを学ばなくてもいいんじゃないかと思った。毎日を修業に費やしてきたあの日々がとても矮小なものに感じられた。
「副作用とかないのか？」
一転して真面目な顔になったロイにシルクは少し驚いたようだった。シュートは肩をすくめて答えた。
「ないよ。・・・強いて言えば弾を買うのに金がかかることかな。これは動力を使って圧縮した空気を入れているから再装填に時間がかかる。あとは燃料費かな」
科学という人類の膨大な年月の結晶と、材質と言う貴重な地球の資源が費やされてようやく力として使うことができる。
では、精霊術や能力はどうだろうか？
精霊術の対価は術者の生命力だ。カルコンは精霊術を科学で証明できるといっていたが、それはありえないとロイは考えている。術を実際に使えるロイすらも“熱”も“風”も人外の技にしか感じられない。しかし、精霊術の正体などロイがここで考えても答えは出るはずもない。
そしてカルコンの持つヒートボールの能力やボンゴを襲った魔物の水鉄砲。能力と精霊術に明確な区別はない。きっと“熱”や“風”を操る魔物だっているはずだ。唯一異なるのは限界がないという事だけ。しかし、本当にそうなのだろうか？本当はただ妖怪や魔物の持つものを能力と呼び、人間の持つもの精霊術と呼んでいるだけなのではないのだろうか？

ブーン

考え込んでいたロイを店の外でのハエの羽音の何倍もの大きい音が脅かした。ロイがガラス越しに外を覗くと、大きな鉄の塊が石畳の道路の上を走っていた。

「な、なんだ！あれは！！」

またしても表情が一気に切り替わったロイにシュートは溜息をついた。シルクは何も言わず、相変わらずのあきれ顔でロイを見ている。

「あれは車といってね。僕の銃の燃料と同じもので動いているんだ。それはそうと、君はもう少し社会勉強をしたほうがいい」

シルクが大きく頷いて同意した。シュートは小さな紙にペンで字を書き、ロイに手渡した。その時、シルクの表情が凍りついたのをロイは見逃さなかった。

「ここに行くといい。僕の知人の商人でね、紙に書いてある住所を尋ねてこれを渡せばきっと仕事をくれる。・・・字は読めるよね？」

さすがにむかっ腹が立ったが、確かにロイはシュートの言う通り知らないことが多すぎる。それに仕事も斡旋してくれている親切を無碍にするわけにもいかないので、黙って頷いた。

「――ボール・グリン、中央３番街２２１４　この少年に仕事を斡旋していただきたい。　シュート」

紙にはそう書いてあった。顔を上げるとシルクは下唇を噛みながら、机に視線を向けていた。

「どうかしたのか？」

ロイが訊ねるとなんでもないと早口でまくし立て、首を横に振った。シュートはシルクに何か囁く。シルクはその言葉に頷きながらも、暗い顔をしていた。

二人に礼を言ってロイは喫茶店を後にした。太陽が頂点に近づき活気付いている街を眺めながら紙に書かれた住所へと向かう。

中央街は先ほどまでロイがいた東街とはうってかわって歩行者の数が減り、それと引き換えに車の数が倍ほどもあった。さらに家の一つ一つが信じられないぐらい大きく、そのすべてが高い塀で囲まれていた。つまり、この辺りには金持ちが多く住んでいるということらしい。傍から見れば浮浪者に見えるロイの格好は人目につきやすいらしく、ボール・グリンの屋敷にたどり着くまでに5回も空き巣扱いされた。

「やれやれ、やっと着いた」

ロイは5回、空き巣扱いされた。人に聞きながら、なんとか到着した屋敷の戸口に備え付けられている鐘を鳴らした。ゴーンと言う脳髄に響く鐘の子が鳴ってから2，3分して門が開けられた。

「何の用だ?」

大きな鉄の門を開けて出てきたのは初老の男だった。その老人はロイを軽蔑した目で見、物乞いだと思ったらしく言い放った。

「ここはお前のようなみすぼらしい者が近づいていい場所ではない。とっとと出て行け」

老人は皺の入った手でしっしとやると、門を閉めようとする。

「ちょっ、ちょっと待ってくれよ!」

そこまで言うか、とロイは泣きそうになったが、ここで引いたら負けだと思い、ロイは慌てて男に近づいて、シュートから渡された紙を老人に見せた。

「・・・・・」

老人はその髪をまじまじと見つめ、眉を吊り上げてちらとロイの風貌を見た。

「入れ」

ぶっきらぼうにそう言うと、紙を懐にしまい、ロイを中へと招き入れた。

迷路のような屋敷の廊下を通り、案内された部屋には中年太りした男が椅子にどっしりと腰掛けていた。肘掛に肘をつき、いかにも金

持ち風の男だ。名前はボール＝グリン。その商才で親から引き継いだ会社を見事成長させ、築き上げた財力でケムトの商人連合のトップにいるのだそうだ。そのグリンは怪訝そうな顔でロイを見る。執事の老人はグリンに近寄り、先ほど懐に入れた紙を渡した。グリンは眉根を寄せてその文面とロイを見比べた。ロイは所在なげに男の正面に立っている。グリンは人差し指をロイに向けた。

「名前は何と言うのかね？」

少々高く、頭に響く声だった。ロイはすぐに自分の名を言った。

「フム、わかった。ほかでもないシュート殿の頼みとあっては断れないな。して、ロイ。君は何が出来るのかね？」

グリンの言葉はどちらかと言うと諦めのように聞こえた。それほどにシュートは影響力が大きく、ロイはみすぼらしく見えるのだろう。

「剣の腕なら・・・」

それを言うと執事とグリンは顔を見合わせた。

「フッフッフ・・・ハハハ」

グリンは大声で笑い出した。

「面白いことを言う坊やだな。剣の腕がいくらたったって銃を前にしたらそれに意味はないんだよ」

「でも・・・」

ロイは言いかけてやめた。現時点で分かっている剣が銃より勝る点はコストだけだが、この男にとって金は湯水と同じだろう。となると精霊術を披露するべきか。しかし、一応ジエルトンの秘密とされる精霊術はあまり多用すべきではない。ロイは拳を握りしめながらも顔を上げた。

「じゃあ、俺をテストしてください。それに俺が受かったら雇ってください。テストに落ちたら雇ってくれなくていいです。シュートには俺の力量不足だったと言っておきます」

グリンはニヤニヤ笑いをやめて言った。

「そうか、それは面白そうだな。ではこうしよう、この屋敷の中庭にペイント弾――殺傷力はなく、服に色をつける弾を持つ私の部

下を3人配置する。撃たれずに木刀で3人とも叩けたら合格。どうだ？」
執事は動揺していたが、ロイにとっては願ってもないことだった。もし、これで勝てれば剣が銃に劣らない証明にもなり、雇ってももらえる。
「それでお願いします」
お互いの目を見合うロイとグリンを執事だけがおろおろと見比べていた。

中庭の広さは一般的な家ほどで、ペイント弾の射程と同じぐらいだった。隠れる場所もないので、ロイには明らかに不利だった。
「さて、それではじめるか」
ロイは先ほどグリンから借りた木刀を握り締めていた。その周りを三人が正三角形の形で取り囲んでいる。ロイは一蹴りで切り込めるように両足に熱を集めていた。
「始めっ！」
鈴の音が開始の合図だった。同時に周りの三人は一斉にペイント弾を撃ち出した。薬莢が弾ける音が鼓膜を叩き、ロイに向かって弾が走る。
「・・・遅い」
ペイント弾だからか、先ほどシュートの改良型の銃を見たからか、ロイにはそう感じ取れた。
ペイント弾が空中でぶつかり合った。その中心にいたはずのロイはいない。弾を撃った三人はおろか、見物をしているグリンすらその姿を見失っていた。
突然三人の男のうち一人が倒れた。ロイが男の腹部を薙いだからだとわかったのは、やられた男ではなく倒れてない二人の男の方だった。
二つの銃口から弾がロイに向かった飛び出した。ロイは一歩だけ後ろに下がると、その弾を二つとも木刀で受け止めた。周囲に赤いペ

イントが弾け飛ぶ。
グリンが驚きのあまり椅子から立ち上がった。そしてペイントが地面に落ちきるよりも先に男が一人倒れ、ロイが最後の一人の男の後ろで剣を振り下ろしていた。それは男の肩口に当たり、男を地面に叩き伏せた。
「・・・どうでしょう？雇ってもらえますよね？」
ロイはニッと笑ってグリンを見た。グリンはといえば驚きのあまり腰を抜かし、床に尻もちをついていた。
終了を告げる鈴の音が響く。

第9話　Ｄｏｕｂｔ！　１

ロイがグリンのボディーガードとして働き始めてから2ヶ月が経った。とは言っても仕事はほとんどない。この2ヶ月でボディーガードとして働いたのはわずか5回。グリンはケムトを代表する商人のようで、暗殺を目論む者がいる。それからグリンを守るのがロイの役目だ。

グリンは相当ロイが気に入ったらしく、わが子のように物を教え、着る物と食べる物、そして屋敷の中に部屋をを用意してくれた。ちなみにグリンに子供はいない。妻とは昔に死別したのだと執事が教えてくれた。

ある日のこと。ロイは太陽と同時に目覚め、水道で顔を洗っていた。夏真っ盛りだというのにひんやりと冷たい水道水は心地がよい。

その日は遠い国から旅商人が来ており、取引をするからとグリンがロイを呼んだ。ロイはすぐにグリンのもとへ行く。家の門の外には既に車が停めてあり、運転席には運転手、助手席にはグリンが既に座っていた。ロイは急いで後部座席に乗る。そこにはケムトの名産品やら何やらが詰められており、グリンの今日の商売への意欲をまざまざと見せ付けられた。旅商人、特に今日のような遠い場所から人間はひと月に一回ほどしか来ない。それゆえに外の文化を多分に受け入れるチャンス――ひいてはケムトを栄えさせることに繋がる、とグリンは豪語していた。シルクの父親といいグリンといい、ケムトでは商人とは町を守る役割でもあるのだろうか。商人は皆町の発展を常に第一に考えているようだ。

「グリンさん。ご一緒していいですか」

そういって車に駆け寄ってきたのはシュートだった。季節の変わり目のせいで強く拭きつける風がその黒髪を揺らしている。

「おお、シュート殿、後部座席は狭くてすまないがそれでも良けれ

ばぜひどうぞ」
シュートはありがとうございますと短く言ってロイの横（と言っても大量の荷物を挟んでいるが）に座った。
「やあ、ロイ。久しぶりだね。どうだい、仕事には慣れたかな？」
相変わらず上から目線で話す、という言葉をロイは飲み込んだ。シュートはこの街では救世主のような男だ。敵に回すのはまずい。ロイはこの２ヶ月のうちに流れに身をおくことも学んだ。
「そういえば、今日はシルクは一緒じゃないのか？」
シュートは一瞬気まずい顔をして溜息をついた。シュートの代わりに助手席に座っているグリンが答える。
「あの娘には困ったもんだ。私ではないというに・・・・・・」
「？」
ロイが首をかしげていると、グリンが続けた。
「シルクの父親がこの街の大商人だったことは知っておろう？知略、話術、どれをとっても完璧な上に、誰にでもわけ隔てなく優しい。私はあの男にだけは絶対に敵わないと思っていたし、それでもいいと思っておった。しかし去年の春、中央広場に街のシンボルとして鉄塔を建てようとしていたときに、それが崩れてあの男を始め５０人の犠牲者が出た。そしてその時資材を提供し、後に名を轟かせるようになった私が真っ先に疑われたのだよ」
「なるほど・・・」
どうりで２ヶ月前、シュートがグリンのことを話したとたんにシルクの表情が翳ったわけだ。
「まあ、街の大半の者は不慮の事故と言ってくれるが、あの娘は終始私を疑ったままだ」
グリンは深い溜息をつく。
「僕も諭しているんですけどね。まあ、その場にいなかったから断定できない僕じゃあ彼女の心を動かせないようですが」
「まあ、いいさ・・・。そのうちあの娘もわかってくれるだろう」
「着きましたよ」

重苦しい雰囲気を運転手の声が打開した。グリンは表情をパッと切り替えた。車が止まると、すぐさま下り、既に来ていた部下達に荷物を下ろすように指示を出した。

キシャアアア

「！！」

ロイとシュートは声のした方を見た。獣の咆哮。魔獣か魔物に違いない。ロイは駆け出した。シュートも同時に駆け出したが、ロイの足にはかなわない。ロイは全力で走り、一目散に声の咆哮へと急いだ。

「きゃあああああっ！！」

広場の方から悲鳴が聞こえる。同時にはじめの夜と同様に人の波が見えた。道路の家の屋根に飛び乗り、広場を目指す。はじめの夜と同じように。

キシャアアア

ロイがその青い竜のような魔獣の目の前に立ったとき、魔獣は口を大きく開き、ロイの目の前で大きく吼えた。耳を劈くその声にロイは耳を覆う。

「うるせー！」

更に口を大きく開け、ロイを飲み込もうとするその魔獣の首を避け、剣を抜いたロイはその首に切りかかった。

「あれぇぇっ！？」

手ごたえは全くなかった。硬そうなその皮膚を傷つけることができるだろうかと思っていたロイは、その抵抗感のなさにバランスを崩し、着地の際に左手をついてしまった。手首が痛む。

キシャアアア

「え?!」
本日三度目の咆哮。青い竜はロイが切り落としたはずの首を振る。
大きく息を吸い込むと、溜めた息を一気に吹きだしてきた。
「うわっ」
その突風にロイは吹き飛ばされ、その魔物二体分くらいの距離の所で着地した。魔物とロイはお互い向かい合う形になる。
「まさか、こいつ・・・」
ロイは一気に距離を縮め、その首に再度躍りかかる。しかし、今度は剣を抜かない。拳を握り、その長く、あまりにも無防備な首を殴った。
またしてもロイの攻撃は手ごたえがなかった。それどころかバランスを崩したロイの体までもがその首をすり抜けた。
「・・・これは実体じゃないってことか?これが能力だとしたら、でもどこかにあるはずだ」
もう一度ロイを吹き飛ばそうと魔物は息を大きく吸う。その反り返った首の下をロイは悠々と抜けていき、その胴に剣を突き刺した。

グギョオオオン

魔物は心臓が揺さぶられそうな悲痛な悲鳴をあげた。次の瞬間、その姿がかすみのごとく消え去った。
「ロイ、倒したのか!?」
シュートは肩を弾ませながらロイのほうへと詰め寄ってきた。ロイは頷く。
「大した相手じゃなかったらしい」
シュートは顔色を変え、先ほどまで魔物がいた街の壁を見る。見るとそこは人が1人ギリギリ通れる位の穴が空いていた。シュートは銃を取り出した。
「あの魔物は狡猾だ。機を待って攻撃してくるつもりかもしれない。

僕が行く。君はここにいろ」
そういうと駆け出し、穴へと急いだ。
「・・・・・・」
どうにも解せない。始めの夜にシュートの銃によって魔物が消えた時、同時に炎も消えていたし、何も燃えてはいなかった。街の人々の話だと、魔物が出るときはいつそうだと言う。ロイは何か嫌な予感がして穴へと駆けた。

第9話　Ｄｏｕｂｔ！　2

「はあ、はあ、はあ」
山の斜面を息を弾ませながらシュートは走っている。握られた手にはその運動に由来しない汗が握られており、耳には先ほどの悲鳴がこだましている。
「・・・無事でいてくれよ、リート」
その背後、シュートが無我夢中でなかったら確実に気づかれるような位置にロイはいた。そのまま声をかけようかとも思ったが、ロイの悪い予感がそれを妨げていた。倒木をシュートと同じように跳び越え、一定の距離をとりながら涼しげな顔で走っている。
山頂に達し、視界が開けた。しかし、シュートの視線は風景ではなく、うずくまっている魔物に注がれていた。
「大丈夫か、リート！」
シュートは駆け寄り、魔物を抱き寄せる。ロイはその光景を唖然とした顔で見ていた。もちろん、気付かれないように木の陰に隠れている。その魔物は大きさは人間と同程度で、その姿は熊の様である。ただ、それが熊でないとわかるのは、手足があまりにも細長いからであろう。
ピクリとその魔物が体を動かす。
「リート、気がついたか・・・。よかったぁ。ゴメンな、怪我させて」
見るとその魔物の肩に傷があり、血が流れていた。先ほどロイに斬られた傷だ。
「シュートっ！！」
我慢の限界を感じたロイはシュートの名を叫んだ。シュートが緊張した面持ちで振り返る。
「ロイ・・・。どうしてここへ・・・？」
シュートはぐうの音も出ないような表情でロイを見る。ロイは肩を

震わせて叫んだ。
「お前、街の人達を騙してたのか・・・。その魔物を利用して、街のヒーローにでもなりたかったのか！？」
シュートは真剣な眼差しに戻り、魔物を抱きよせながら答えた。
「否定はしない。こうでもしなければリートは生きていけないからな。リートはその未熟さゆえに親に捨てられた魔物だ。それを僕が拾って小さい頃からこっそりと世話をしている。ここが人に見つかれば討伐と称して殺されてしまうだろう」
シュートは街の人々にこの山こそが魔物の住処なのだと説いてきた。そのかいがあって、この数ヶ月間、この山に近付いた人間はいない。全く悪びれた様子もない返答にロイはシュートを指差して言う。
「お前のしでかしたことを町の人達に暴露する」
怒りをたたえたロイの発言にシュートはピクリと眉を動かす。
「それは結構だが徒労に終わるだろうよ、ロイ。この数か月間街を守り続けてきた僕と、故郷も定かでなく、浮浪者のようにこの街に来た君、どちらの言葉が信じられるとおもう？」
ロイは奥歯をかみしめた。罵声を浴びせてやりたい衝動に駆られたが、シュートの言葉には一理ある。言いふらしたところで誰も信じやしないだろう。ロイは少しの間だけ目を閉じ、ゆっくりと剣を抜いた。
「斬る」
その瞬間、シュートの顔色が真っ青になった。ロイの前に両手を広げ、魔物をかばう。
「やめろ！！こいつは俺の大切な友達なんだ。お前は魔物だという事だけで命を斬り捨てるのか！？」
ロイは躊躇なく剣を抜き、振り上げる。
「いっそ哀れだな、シュート。魔物が友達だなんて笑えもしない。俺の友達は全員魔物に奪われた。友達だけじゃない。家族もだ。俺が見知っていた人全ては一夜で滅ぼされた」
魔物は憎い。『魔物から人々を救う』なんて目標を立てても、あの

惨劇から一年が経過した今でもその怒りは収まるものではない。
高く構えた剣を振り下ろす。シュートは魔物を抱きかかえるようにして庇った。
「シュー・・ト・・・ダイ・・ジョ・ウ・・ブ・・？」
その時、魔物が小さく声を上げ、剣を振り下ろすロイの動きが止まった。
「喋った・・・！」
驚くロイにシュートは言い放った。
「魔物は賢い。言葉を教えれば話すし、字を教えれば書く。それぞれに意思を持った命なんだ」
ロイはシュートと魔物を見比べた。何か考えるように目を閉じると、溜息をつき、剣を納めた。踵を返し、街の方へと足を進める。
「ロイ・・・・・・」
「・・・気が変わった。魔物ってだけで全て殺そうとする・・・。これじゃああいつと同じなんだよな」
ぶつぶつと呟き、もう一度シュートと魔物の方を見た。
「・・・・・でも、その魔物が人を襲うようなことがあったときは容赦しないぜ」
ロイは山道を下ってゆく。その様をシュートは何をするのも忘れて見ていた。

その昼、ロイが立ち去った後、リートの手当てを終えたシュートは言った。
「しばらく街に近づかないほうがいい。それと僕もしばらく来れそうにない。飯は自分で取れるだろ？」
「ウン・・・デモ、ヒトリハヤダヨ・・・イッショニイテ？」
シュートは首を横に振った。リートは絶望する。シュートはきっと自分のことを見限ったのだろう。シュートの「オシゴト」を失敗してしまったのだから。
「ツギハ、ツギハチャントヤルカラ・・・」

またしてもシュートや首を横に振る。そしてリートに微笑むと言った。

「そうじゃないさ。ただ、今はまだ危険かもしれない。しばらくしたら戻ってくるから・・・な?」

シュートは立ち上がり、山道を下っていく。背後からリートの叫び声がする。

「ヤダ!シュート!イッショニイテヨ!!」

しかし、シュートは振り向くことなく下り続けた。その背中に突き刺さった言葉はシュートの心を縛りつけるように痛めたが、その痛みがリートに伝わることはなかった。

その夜、リートは山頂でうずくまっていた。その目から涙がとめどなくあふれ出している。

「シュート、シュート・・・・・イッショニイテクレルッテ、ヒトリニシナイッテ・・・イッタノニ!」

その時、リートの体中の毛がなびいた。巻き起こった風は木々を揺らし、葉はかなたへと舞って行った。目を向けるとそしてそこには一人の人間が立っていた。

風が止むまで、リートは身動きひとつ取れなかった。その視線はその人間へと注がれていて、目をそらすこともかなわなかった。青い髪、そして見たこともないような薄い絹を身にまとっている。髪も絹も風そのもののようになびいている。その姿は神々しく、月光が後光のように射していた。なぜかよくわからないが、その人間の左胸に無性に手を伸ばしたくなった。

その人間はゆっくりと滑るようにリートに近づき、リートの額に手を置いてその唇を開いた。

「哀れなるドビルジャベリンの子よ。痛みを怨め、憎しみを怨め、苦しみを怨め・・・・・」

徐々に意識が遠のいていく。

「――――魂を、解き放て」

リートは自分の頭に何かが刺さったような気がした。思いの一切が憎しみに溶け込むような恍惚とした気分が全身を駆け巡る。目の前の人間は少しだけ微笑み、リートの顔を覗き込んでいる。頭の中で声が響いている。「ウラメ、ウラメ」と・・・。

「ウラメ・・・」

リートがその言葉を発した時、すべてが消えた気がした。

第9話　Ｄｏｕｂｔ！　3

ロイは部屋のベットに横になり、天井を見上げていた。

――――それぞれに意思を持った命なんだ。

シュートの言葉が頭を何度も掠める。ロイはこれまでカルコンを怨みながらも魔物の撲滅にだけは賛同していた。人間を滅ぼす力を持った魔物たちと共存できるはずもない。そう考えていた。

「でも、それは人間だって同じなんだよな」

天井に向かって呟いた言葉は跳ね返ってロイの心に響いた。魔物は人を喰らう。魔物は人を殺す。魔物はザイガを人間から奪う。この街の人々が口にしていたそれらの言葉はどれもこれも人間の視点だ。しかし魔物にだって心は在るという。その魔物は住処を数百年前にカオスやジエルトンらによって奪われた。そして今の世の中――――人間が魔物におびえる世界がある。

人は魔物から全てを奪った。だからこそ人間からすべてを奪いたい。そうしてお互いが滅ぶまで永久に殺し合いが続いていく。生存をかけた戦争に果てはない。

「――――どうしてただ生きるだけなのに、こんなにも悩まなくちゃいけないんだろ」

「・・・・・っ！！」

突然激しい音が響き、地面が揺れた。ロイはベットから起き上がり剣を取ったが、その剣は腰に装着される前に止まった。

「どうせリートだよな・・・・・」

そう思い、剣をベットに立てかけ、また横になる。しかし、またしても轟音が響き、地鳴りがする。その音に、男の叫び声が重なった。部屋のドアが激しくノックされ、開けられた。こちらからドアを開ける前にグリンが血相を変えて部屋に入ってきた。

「ロイ、魔物じゃ。すぐに向かってくれ！」

ロイは慌てて剣を取り、腰に差そうとしたが、おかしなことに気付き、手を止めて訊ねた。

「シュートは来ていないんですか？」

グリンは俯き、答える。

「それが・・・」

「シュート殿を連れてきました！！」

使用人の声がした。グリンとロイは急いで声のした方へ駆ける。そこにはぐったりと横たわっているシュートの姿があった。胸にクマにでも襲われたような大きな爪痕があった。

「空気銃は紙一重で避けられ、反撃を食らってしまったそうです。直ちに医者を呼んで治療させます！」

使用人の言葉に、グリンが頷く。そして振り返り、ロイに言った。

「頼んだぞ、ロイ。街の者たちを魔の手から救ってくれ！！」

しかしロイにはその言葉の意味がよくわからなかった。わからなくなってしまった。

――魔の手？なにが？それはどっちの手だ・・・・・？

混乱するロイの耳にシュートの呻き声が届く。

「ロイ、いるか・・・？」

ロイが駆け寄り魔物のことを訊ねるとシュートはか細く、周りに聞こえないように答えた。

「リートだ。だが、僕のことがわからない様子だった。まるで何か

に取り付かれたかのようだ・・・」
ロイは頷き、立ち上がる。背後から「僕も行く」と言う声が聞こえ、振り返った。
立ち上がったシュートの足はふらふらで、歩くこともままならない。
ロイは何も言わず屋敷の扉を開け、外へと駆け出した。
その背後で、シュートは気を失い、崩れた。

ロイがそこに駆けつけたとき。その場に人影は見当たらなかった。
しかし、瓦礫の山の中心に佇むリートの姿があった。先ほどの人間のように表情のある顔つきではなく、獣のように凍った目で、牙をむき、ロイのほうを睨んだ。
「ニン、ゲン・・・！」
そう呟くと、近くの瓦礫を掴んだ。拳大の瓦礫は一瞬で髑髏の形となる。更に、ロイが瞬きをした瞬間に、リートの足元の瓦礫が全て髑髏に変わった。リートは髑髏の山の上に立っている。

――――あれがリートの能力か？

その一瞬の変化に戸惑いながらも今までに見てきた竜の姿を思い出していた。その姿は映像のようなもので、当たってもダメージはないし、攻撃も出来ない。だが・・・
リートは髑髏を手に取り、次々とロイに投げ始めた。それが瓦礫であることはわかっているが、その形はロイの恐怖心を揺さぶる。その動揺が、ロイの抜刀を一瞬遅らせた。
「つう、・・・くそっ！！」
髑髏が顔に、腹に、手足に当たる。魔物という人を遥かに凌駕したその筋力を持って、リートは目にも留まらぬ速さで次々と髑髏を投げる。ロイは剣を抜き、なんとか応戦しようとするが、その重い石の塊を全て叩き落せるはずもなく、体に痣が次々に浮き出、血が噴

き出した。
流石に耐え切れなくなり、左右に跳んでそれをかわす。すると、今度は髑髏は大きな岩に形を変え、ロイに襲い掛かった。逃げ場のない無数の岩が四方八方から飛んでくる。もちろん幻であることはわかっているのだが、瓦礫のひとつでも頭にあたれば大怪我をする。剣を抜き、なんとか叩き落そうと身構えた。
「がっ！」
左のこめかみに大きな圧力を感じ、ロイは右側に倒れた、こめかみから頬を伝って血が流れているのを感じる。ロイはすばやく立ち上がると、左の方を睨んだ。

「グフフ」

そこにはリートが立っている。しかし確かに髑髏の上にもリートは立っていた。つまりその姿や、岩はリートの能力による幻覚で、それにロイが気を取られている間にロイの左に回り、瓦礫を投げつけた、と言うわけだ。
「・・・・・くそっ！」
魔物は賢い、というシュートの言葉が真実味を帯びてくる。自分の能力を最大限に生かす方法を知っている。そしてその知能はやはり、戦闘に特化しているものだ。ならば今の姿は魔物の本能というやつなのかもしれない。
「なんでだよ、リート・・・」
口の中だけで呟くと、リートをもう一度睨み、深く目をつぶった。

――悪く思うなよ、シュート！

目を開き、リートのほうへと走った。そしてリートの脳天めがけて剣を振り下ろす。しかし、リートは間一髪でそれを避け、ロイに襲い掛かった。

「・・・はっ！！」
一瞬にして、あたり一面に熱気が立ち込める。身の危険を感じたのか、リートは後ろに飛びのいた。ロイは一瞬にして体勢を立て直すと、一蹴にしてリートの懐に飛び込み、剣を突き刺した。
「！？」
ロイの手には皮を突き、肉を貫き、血が噴出す感触は残らなかった。剣は空を切ったようにリートの体を通り抜け、ロイの手がめり込んでいる。
突然、殺気を感じたロイは左に飛び退く。右頬に三本、爪の痕が走った。血が吹き出て宙を舞う。ロイは自分の血液越しにリートの姿を確認した。
いつのまにか４体のリートがロイを囲んでいた。
「・・・なるほど」
ロイは剣を正眼に構えなおした。能力で作られた三体の映像と、リート本体が目の前で同じ構えをしている。ロイは左のこめかみから流れ出る血を左の掌で、右の頬から流れ出る血を左手の甲で拭った。
「はっ！」
地を蹴り、一番左にいた一体に切りかかった。手ごたえなし。と同時に、背後に気配を感じ、右脚で蹴る。しかし、それも手ごたえない。と、同時に残る二体が地面を向いているロイの体の背中に爪をつきたてようとしている。ロイは残った左足で地面を強く蹴り、跳び上がった。バク宙し、爪を振り下ろして隙のできた一体に切りかかる。またしてもはずれ。自分の運のなさに自嘲気味に口元をゆがめた。だが、
「終わりだ！」
リートの左肩めがけて剣を突き立てる。こんどこそ鈍い感覚が手の中に残った。吹き出た血が血だらけのロイの顔に飛び散った。剣を抜くと、リートは顔をゆがめながらその場に倒れた。グルルルと喉を鳴らし、なおもロイを攻撃しようとするが、それよりもロイが剣を振り上げる方が圧倒的に早かった。

あとは振り上げた剣を勢いよく振り下ろすだけ。それだけで目の前の魔物は絶命する。

ズドン

ロイが振り下ろすよりも更に早く、人のいない町に轟音が響き渡った。ロイの手から剣は吹き飛び、１０メートルほど宙を舞って、石畳の地面を転がってゆく。

ロイは驚きのあまり声もなく痺れる手を見て、その音源を強く睨んだ。

「シュート！・・・なぜここに！？」

銃を構えたシュートが立っていた。その銃からは硝煙が上がっている。恐らくあれがロイの剣を撃ち、吹き飛ばしたのだろう。

シュートは胸をかばいながらふらふらとこちらに向かって足を進めた。

「シュート・・・シュートォォォ！！」

突然唸り出したリートは立ち上がり、シュートの方へまっしぐらに駆け出した。切られた左肩をだらんと下げ、右手を大きく挙げる。

シュートは銃を構え、リートと向き合った。しかし・・・

「シュート、マモッテクレルッテイッタノニ！！」

そう叫びながら走る魔物を前にして、目を細めると銃を放り投げた。

ゆっくりと瞬きをし、泣きそうな目で呟く。リートを受け入れるように両腕を大きく広げた。

「ゴメンな、リート」

シュートの胸に3本赤い傷が走った。間髪いれず血が吹き出る。なおも腕を振り上げようとするリートに、シュートが抱きついた。一瞬、リートの動きが止まる。

「ゴメンな、リート。一人ぼっちにさせちまって」

吹き飛んだ剣を拾い上げ、その様を遠目に見ていたロイは目を見開いた。リートの刺々しい殺気がみるみるうちにおさまっていく。

シュートがその場に倒れた。胸から血が噴出し、地面を赤く染めている。リートがその肩をゆすった。

「ヤダ、ヤダヨシュート、オイテカナイデ！！」

ロイがすぐさま駆け寄り、シュートを揺さぶるリートを突き放した。目を閉じ、手を傷口にかざした。

「ぐわあああああ！」

シュートの悲鳴が響く。リートが再び殺気を取り戻してロイに攻撃しようとした時、ロイが叫んだ。

「違う、傷口を塞ぐだけだ！どいてろ！」

シュートの傷を熱する。カルコンが自分の腿を止血したのと同じ方法だった。しばらくすると血が止まり、リートがシュートに駆け寄る。シュートはほんの少し目を開け、左手でリートの顔を触った。

――――突然、一陣の風が吹いた。

「何をしている、リートよ。お前の憎しみはどこへ行った」

月が何倍も大きくなったように錯覚した。それほどまでに青白い光りが闇の空を照らしている。ロイは立ち上がり、振り返ると、それを見た。

「お前は・・・誰だ！？」

青い髪と薄い衣。目を合わせることも憚られるほど神々しい姿をした少年は、赤い巨大な鳥に乗り、ロイを見下ろしている。

「お前がロイか。カルコンがしきりに言っていたぞ」

「カルコン・・・！？」

すると奴もディアボロスの一味に違いない。ロイが怒りと憎しみを讃えた目で睨むと、その少年はロイなど見ずにリートを見ている。
「人間に飼いならされた哀れなる魔物よ。自由がいらないと言うのか？」
リートは人間のようにシュートのみを案じ、立ち上がって少年を見上げた。
「イイ、シュートトイッショニイキルコトガ、オレノ“ジユウ”ダカラ」
少年はふんと鼻を鳴らし、再度ロイを見た。

「誰だと聞いたな、下賤な民よ。僕の名はレギュラス。レギュラス＝アイティオン＝カノトリアス。“操”の術を持つカノトリアスの末裔。覚えておけ」

「レギュラス」
ロイは口の中で呟いた。あの少年がカルコンの話の中に出てきた“魔物を操る術者”だろう。
「お前が、ボンゴを襲わせたのか！？」
ロイは肩を震わせて叫んだ。
「ふふ」
反対にレギュラスは小さく笑う。
「愚かな。大義の前のほんの小さな犠牲。小さなお前が何を言う。仇とでも称してカルコンを討ち、ザイガを滅亡させるつもりか？」

――目を閉じればいつまでも映っている。村人一人ひとりの笑顔。祖母の、母の、尊敬する父の笑顔。そして・・・、すべてが無に帰したあの光景。

ロイは目をゆっくりと開き、言い放った。
「カルコンに言っておけ。お前が正しいと信じ込んでいたものは全

部間違っている。お前の弟子がそのすべてを否定しに行くとな」
レギュラスは明らかに不快そうにロイを睨むと、何かを呟いた。同時に辺りに熱風が起こる。

ケキャアアア

赤い鳥が叫び声を上げたそれは家一軒を翼で抱きこめるほどの巨大で、くちばしは鋭く黄色に光り、目は爛々とこちらを睨んでいる。その鳥が素早く下降してきた。
ジジジという音を立てて石畳が唸り始めた。辺りは陽炎が立ち込めている。その怪鳥がロイに向かって熱気を巻き起こしているのだ。
ロイは左手を大きく振った。ロイの周囲を取り巻いていたその熱気はしだいに収まっていき、秋口の夜風が改めて空を舞った。
驚くレギュラスめがけてロイは跳び上がった。剣を抜き、怪鳥に切りかかる。
「飛べ！！」
ロイの剣は空をきる。しかしロイは体勢を崩すことなく地面に着陸した。見上げると、レギュラスを乗せた怪鳥は遥か上空に飛び上がっていた。ロイを見下ろし、叫ぶ。

「見ていろ！じきにディアボロスが目的を達成する日が来る。僕たちは魔物を駆逐し、お前は何も出来ない。ただ、世界が変わりゆく様を見ているがいい」

レギュラスは怪鳥に何かをささやく。怪鳥は叫び声を上げ、西の空へと去っていった。

第１０話　幸福の終わり　１

街中が騒然としていた。グリンが中心街に着いたとき、そこには傷だらけで倒れるシュートと、それを心配そうに気遣う魔物の姿があった。騒ぎが静まり、人が大量に集まってきただけに、その裏切りは隠しようもなかった。ロイのたっての頼みで、弾圧されかかっていた意識不明のシュートを屋敷に運び、手当てした。

ロイは迷惑を掛けたくないと言って、魔物をつれて街を出た。どうして魔物を庇うのか、どうして魔物はシュートに懐いているのか。なぜ発狂し、街を破壊したのか・・・。全くの謎。グリンはシュートが目覚めるまで気が気でなく、仕事も手につかなかった。

「やはり、我々は騙されていたのでしょうか？」

落胆したように自室の窓から外を眺めているグリンに執事は言った。その答えを否定しようにも、住人の大半は反感を持っており、下手をすればケムトの住人全員を敵に回しかねない。事件から三日経ったが、何一つ進展はない。唯一真相を知っている二人のうち、一人は行方をくらまし、一人はいまだ重体で生死の境をさまよっている。医者の話では初期治療は（荒っぽく、傷は残るが結果として）よかったものの、傷自体が大変深く、出血量も多い。意識が戻るかどうかは解らないとのことだ。

グリンはふぅと溜息をついた。ため息は風の一部となって窓の外へと飛んでいった。シュートもロイも、溜息でさえも自分の知らないところへ行ってしまう。長いこと生きてきたが、これほどまでに不測の事態が続いたことはこれまでにない。しかし、ケムトの街を守るものとして、このまま尻尾を巻いて逃げることは出来ない。何か進展をさせなければ・・・。

「そういえばエルクトルの娘、シルクはどうした？」
「今朝、自宅に倒れていたとのことです。ここ3日何も食べていなかったと使用人が言っていました。現在病院に搬送され、意識もあります。・・・・・失敗でしたな」

大商人エルクトル。グリンが最も尊敬する人物であると同時に、最大のライバルでもあった。そんな2人の関係の中起こったあの事故。グリンを疑うも当然だろう。
それからグリンは償いと言うわけではないが、ケムトの守護者を買って出た。そして、ライバルの一人娘を守る責務を自分に課した。その直後、シルクは盗賊と称してグリンの仕事の妨害を始めた。最初のうちは「それで気が晴れるなら」と考え、護衛の為に何人もの男を［父親が生前に立てた婚約者］と称して送り込んでいたグリンだが、付近の盗賊集団が快く思っていないと聞いた。
さほど腕がたつわけではない少女を盗賊団から回避させるため、言葉巧みに街に引き込み、護衛の7人には盗賊団の牽制のためカリューに残らせた。
一番苦心したのが、どうやってシルクを街に引き込むか、だった。これにはシュートを利用した。盗賊団の動きのほんの少し前に街にやって来て、その日のうちに出てきた魔物を倒した。顔も頭もいい。シルクをお姫様とするのならば、さながら憧れの白馬の王子様と言ったところだろう。実際、グリンが想像するよりも遥かにシルクはシュートを慕っていた。全てが上手く回っていたのだ。3日前のあの事件が起こるまでは・・・。
シュートの詐欺はシルクの耳にも当然入ったのだろう。グリンは街の人々のようにシュートを責めることは出来ない。シュートが町の人々を利用していたのと同様に、グリンもシュートを利用し、盗賊団とシルクとの抗争を回避させることが出来たのだから。
願わくば、形だけのヒーローでなければよかったのだが・・・。
「今から娘に会いに行く。車を出してくれ。・・・シュートも病院

に連れて行きたいが、それは出来んからな」
執事は頭をたれて部屋を出る、すぐに車が用意され、グリンは病院へと向かう。

コンコンッ
「どうぞ」
ガチャ、キイイ
木製のドアがうち開きに開かれた。その１２畳ほどの部屋には大きな窓があり、そのそばに白いスーツのかかるベッドがある。そのベットに身を起こして座り、窓の外を見る黒髪の少女の姿があった。
「グリン・・・・・・！！」
ドアの側に立つ初老の男を見て、敵意むき出しの表情で睨んだ。グリンは溜息をつくと、廊下にいる執事に二人で話がしたいと言ってドアを閉めた。
「そんな顔をするでない、折角の美人が台無しじゃぞ」
ほっほっほ、と笑ってみせるグリンを見て、シルクは下唇を噛む。
「わかったわ、パパみたいにあたしも殺すつもりなんでしょう！？好きにすればいいわ、もうあたしには何も残ってないんだから！！」
「それはちがう！おぬしの父親は事故で死んだ。わしがやった事ではない」
グリンは真面目な顔をしてシルクを見据えた。
「嘘よ。そんなの嘘に決まってる」
シルクは口の中で嘘と何度も呟く。
「わしが今日ここに来たのは、おぬしに謝るためじゃ」
「え？」
シルクは怪訝な顔でグリンを見た。グリンは床に両膝を突き、頭を床に当てた。ゴツンと言う音が響く。
「すまん、本当にすまん」
「え？え？」
シルクはわけもわからずおろおろとする、グリンは膝を折ったまま

顔を上げ、事の顛末をシルクに話し始めた。

「・・・・・・」

全て話した後、もう一度グリンが謝る。そのままグリンは顔を上げない。シルクも何を言えばいいのかわからない様子だった。今の言葉が嘘だとは考えにくい。だからこそ、今まで目の敵にしていた男を許すことも憎むことも出来ないでいた。

「えっと・・・・・・顔を上げて、グリンさん」

グリンは申し訳無さそうに顔を上げる。目には涙がたまっていた。老獪ゆえに謀略を練り、若者の心を深く傷つけた。その罪の意識に懺悔するようにグリンは背後から光の差し込むシルクを見た。シルクは自分の三倍生きた男の涙を見て、何を言えばいいのかわからなかったが、膝の上に置いた手を見ながら口を開いた。

「・・・グリンさん。あたしも謝るわ。ごめんなさい。・・・あたしね、本当はグリンさんがやったんじゃないって分かってた。パパは事故で死んだんだって事もちゃんとわかってた。でも、誰かを憎んでないと悲しみに押しつぶされそうで・・・。

でもね、シュート様のことだけは憎めなかった。今度はちゃんと憎んでいいはずなのに、どうしても憎めなかったの。そしたら悲しみに負けちゃって。それで気づいたの。あたしは悲しみを憎しみで覆ってただけなんだって。それじゃあ前に進めないんだって・・・」

グリンは鼻をすすり、裾で涙を拭った。シルクが「立って」と言うと申し訳無さそうに立ち上がり、シルクの顔を見た。シルクが言う。

「シュート様が目覚めたら、あたしに教えて。モンスターハンターじゃなくたって、あたしの愛しい人だもの」

そして恥ずかしそうに笑った。コンコンとドアをノックする音が聞こえる。執事が「仕事の時間です」とドア越しに声をかけた。

「やれやれ、親友の娘とゆっくり語り合う時間もないのか」

グリンは肩をすくめ、微笑む。シルクもくすっと笑った。グリンはノブを掴み、ドアを開けた。背後から声がする。

「グリンさん!!」
グリンはドアノブに手をかけたまま振り返った。

「――――ありがとう」

グリンは目を見開く。風になびく黒髪と年頃の美しい少女。そこにいるのはシルクなのに、別の女性の影が重なった。今は亡きグリンの最愛の人。昔から病弱で、二十歳まで生きられるかと医者に宣告されていた。グリンが２２歳、彼女が１８歳の時に結婚し、そのわずか一年後に一生を終えた。
グリンは溢れ出しそうな涙を溜めるように上を向き、大きく深呼吸して目をつぶった。

――――今でもこうすれば会うことができる。瞼に映る愛しい人。

「では、また」
グリンはシルクに微笑んでそう言うと、ドアを開け、部屋を後にした。

「――――パパ、グリンさん、ありがとう」

今まで愛してくれて。守ってくれて・・・。
再び窓を見て、風を浴びた。その頬には一筋の涙が流れていた。

第１０話　幸福の終わり　２

時を同じくしてグリン邸。日ざしを避けるようにして作られた部屋に風が舞い込んでいた。その風に誘われるようにして、シュートがゆっくりと目を開けた。

シュートは部屋を見渡してすぐさまここがグリン邸であることに気がついた。質素ながら格式があるつくりで、どことなく間借りしていたシルクの家のたたずまいに似ている。

「リート・・・」

そしてすぐに思い出す。自分がリートによって受けた傷で倒れてしまったこと、街人を騙していたことがばれてしまったこと。そしてすぐに頭を回転させた。

――ここにいてはいけない。

「！！」

階段を登る足音が耳に飛び込んできた。そして、その音はゆっくりとこの部屋に近づいてくる。それは死神の笑い声のようにかすかに、しかし背筋を凍らせるのに十分に強く聞こえてくる。街人を騙し続けた自分はよくても懲役刑、下手すれば死刑になりかねない。

シュートはベットから起き上がった。その両足は運動不足と恐怖とでがくがくと震えている。奮い立たせるように両足を叩くと、窓を大きく開けた。風は止み、汗ばむような陽気が全身を襲った。遠くに見える入道雲は、押しつぶされそうな圧迫感を放っていた。

「シュート！！待てっ！！」

その背後からの叫び声と同時に窓枠に足をかけた。そのまま振り向

きもせずに跳び降りる。
着地の瞬間に辺りの芝がなびいた。2階から地面まで3～4メートル。下が芝生だったとはいえ、長い間動かさなかった両足は相当弱っていたらしく、衝撃がビリビリと伝わってきた。幸い足をくじくことはなかったので、足の痺れの回復を待たずに、転がるようにして屋敷の塀の方へと駆け出した。
その時、上から声が響いた。
「待つんじゃ、シュート！外は危険じゃ！ここを出たらお前をかくまってやることは出来ん！！」
シュートの足がぴたっと止まる。飛び降りた窓からは血相を変えたグリンが叫んでいた。シュートは体をグリンのほうへと向け、訊ねた。
「どういう・・・事ですか？」
右手は部屋の机の上においてあったホルスターを触れている。それを使わずに済むかもしれないというほんのわずかな希望の中、その手は震えていた。その様を見て、グリンは悲しそうに事の顛末を話した。

「・・・・・と言うわけじゃ。おぬしを利用していた罪が私にもある。わしはこの罪を償いたいんじゃ」
じっと黙って聞いていたシュートは顔を上げ、グリンに言った。
「それでは、僕の罪はどうなると言うのです？あなたが僕をどう利用しようが僕はこの町の何万人もの人を騙した。それは疑いようのない事実です。それを償わず、このままのうのうと生きてゆけと？」
グリンは押し黙った。若いからいいじゃないか。そんな説得力の欠片もない言葉が脳裏によぎったが、口には出さなかった。シュートは悲しそうにグリンを見て、
「それでは」
と言って踵を返した。グリンは窓枠に手をかけ、身を乗り出して叫んだ。

「では、シルクのことはどうなる！？」
一歩を踏み出したシュートの足がピタッと止まる。
「シルクを騙したことは罪ではないのか！？それを償わずに死ぬのか！？」
シュートがもう一度グリンのほうに振り返った。
「あの魔物もそうじゃ！一緒にいると誓ったのではないのか？お前はそれを投げ出すと言うのか！？」
ゴホゴホと咳き込む。声を張り上げるのは老体には相当応えたようだ。
「シルクとリートは今どこに？」
間髪いれずシュートが尋ねた。
「シルクは今こちらに向かってきておる。あの魔物のほうは・・・・・・ロイと一緒に消えたまま、まだ行方が分からん」
シュートは足元の風になびく草を見つめた。少なくともグリンにはそのように見えた。突然顔を上げると、グリンに向かって叫んだ。
「分かりました。・・・でもけじめはつけたい。手錠をかけてください」
グリンは目を見開いた。しかし、シュートの目を見て、静かに頷いた。使用人の一人をシュートの下へ行かせ、手錠をかけさせた。

「本当にいいのか？」
シュートは先ほどまで眠っていた部屋に連れて行かれた。その部屋の中に居たグリンに問われ、静かに頷いた。
「シルクが先ほど到着した。応接間に行こう」
使用人の一人が扉を開けた。シュートは自分のほうに振り向いた妙齢の女性を見る。大きな窓から光が差し込み、さながら後光のようにその女性を神々しく見せていた。シルクはシュートを見て、その体の前でつながれた両腕に驚き、キッとグリンを睨んだ。グリンは首を振って言う。
「いやいや、わしの指示ではない。シュート自身の依頼でな」

そのやり取りをじっと聞いていたシュートの背中を使用人が押した。シュートはソファに誘われ、腰を下ろした。シルクはその向かい側に座る。グリンと使用人は部屋を後にする。閉じる扉の音がいやに重く響いた。

「・・・・・・」

沈黙が流れる。シュートが申し訳無さそうにチラッとシルクの表情をうかがうと、今にも泣き出しそうな顔で俯いていた。

――――これが僕の罪なんだ。

シュートは思う。最初は彼女が富豪の娘であることを知ってついて来させた。シュートには出資者が必要だったからだ。だが、それもすぐに変わった。利害なんかじゃなく、純粋に一緒に居たかった。だが、その夢のような時間もこれで終わり。ここに来るまで、街から出ればそれで良いと思っていた。

しかし、この表情がシュートの罪を再認識させる。明るく、愛しい目の前の人。言葉に出来ないほど傷つき、シュートを怨んでいる。

シュートは目をつぶった。

「シルク、お願いがある」

シルクが顔を上げた。その目には涙がたまっていたが、シュートはその顔を見つめている事がかなわなかった。つながれた両手でホルスターから銃を抜く。ハンマーを上げ、シルクに差し出した。

「これで僕を殺してほしい」

シルクが驚いたように目を見開いた。震える唇が『どうして』という形に動く。それは聞き取ることも出来ないほどにか細い声だった。

シュートは一度大きく深呼吸をした。シルクの目を見るように自分に言い聞かせる。

「僕が罪人だからさ。罪の果てに待つのは罰。僕は罰を受けなけれ

ばならない」
シルクの目を見ているものの、もはや焦点は定まっていなかった。
ぼんやりと見える彼女の顔にはどんな色が浮かんでいるのだろうか。
「リートのことはあいつの勘違いだ。それにあいつはもう一人でも生きて行ける。そして街人たちは僕が死ねば納得するだろう。そして・・・」
シュートは一度言葉を切り、心を落ち着かせた。

「そして僕を最も怨む君に僕の命を捧げよう。さあ、僕を大罪から解放してくれ」

シュートの手からおもりがなくなった。シルクはシュートの銃を持ち、銃口をこちらに向けている。シュートは目を閉じ、銃口が眉間に当たるように頭を下げた。すぐに死ねるように全身の力を抜く。

パシン

火薬の爆発音はしなかった。その代わりに左頬に痛みが走る。シュートは驚いて顔を上げ、痛む頬に両手を当てた。シルクはボロボロと涙を流していた。
「許さないわよ！全部捨てて逃げるなんて絶対に許さない！！」
シュートは茫然とシルクを見る。その目から溢れる涙はとどまることを知らずに流れ続ける。
「死んで全部終わりにするなんて、ただ逃げてるだけじゃない！！そんなのは償いでもなんでもないわ！！」
シルクは嗚咽を漏らした。涙がぽたぽたと零れ落ちる。シュートは頬を押さえたまま言った。
「じゃあ、僕にどうしろっていうんだ？僕は・・・僕には・・・」
一瞬言葉を飲み込もうとしたが、顔を上げたシルクの目を見ると、その気は失せた。

「・・・・・僕には君に怨まれてまで生きていく理由がない」
止まりかかっていたシルクの涙がまたしても溢れ出した。シュートが焦ってあたふたする。
「だからっ、その銃で僕を撃ち殺してくれ!!」
今度はその動きを目で捉えていた。左手が上がり、振り下ろされようとしている。長年の経験から、シュートの手が無意識に体を守ろうとしたが、シュートはそれを必死にこらえた。

パンッ

再び乾いた音が響く。自分では見えないが、両頬とも真っ赤に腫れている事だろう。
「どうしてあなたはそうやって、いつも一人で抱え込むの?どうしてあたしが怨んでるって思い込むの?」
「・・・・・え?」
シュートの思考が止まった。顔を上げる。ただシルクの嗚咽だけがシュートの脳に響いている。
「だって、僕は・・・君を・・・」
「怒ってるわよ!!」
間髪いれずにシルクが叫んだ。その目にたまった涙が止め処なくあふれ出す。
「あたしはあなたに信頼されたかった。あたしにだけは本当の事を言って欲しかった。でも、怨んでなんかいないの。あなたはパパが死んで生きる希望をなくしていたあたしに光をくれた。あたしに生きる喜びを教えてくれた。だから、だから・・・」
いつのまにかシュートの目にも涙が滲んでいた。涙を通して見た目の前の女性はいっそう美しく見えた。
「どうすればいいんだって言ったわね。勿論絶対ってわけじゃないんだけど・・・」
シルクが頬を赤らめる。

「あたしと一緒に生きて欲しいの。あたしはあなたに恩を返したい。あなたはあたしに罪を償いたい。きっとあたしたちならお互い支え合っていけるはずだから」

シュートの頬に一筋の涙が流れる。シルクを見ると、微笑み、こちらを見ている。シュートは静かに口を開いた。

「――――約束する・・・・・・絶対に」

第１０話　幸福の終わり　３

シュートが目覚めた日の昼。ロイは木から果物をもぎ取り、持っていたかごに入れていた。かごをいっぱいにして坂道を登り、頂上付近の小さな洞窟の中に入った。中には毛むくじゃらの魔物が座っている。じっと壁の方を見据え、ロイに背を向けている。

「なあ、リート。もういい加減喋ってくれよ。これで３日経つぞ」

そういってかごに入っていた果実の一つをかじった。酸味と甘みが上手く溶け合っていて美味い。

「なっ！一緒に食おうぜ」

そういってかごを差し出す。しかし、リートは相変わらず背を向けたままこちらを見向きもしない。

――――やれやれ、困ったもんだ。

事件から３日。街に近づくとシュートと魔物を探せと、街人たちは殺気立っていた。ロイも一緒にいるところを見られてしまったから、街に入れるはずもない。シュートの容態を探ろうとしたが、不可能だった。おまけに無理やり連れてきたこの魔物は一言たりとも喋らない。置いといたバスケットは空になっているからロイが持ってきた物を食べてはいるみたいだが。

「リート。多分そろそろシュートが目覚める。そしたら俺はケムトに行く。お前はどうする？」

「・・・・・・」

ロイは溜息を付いて果物をほおばった。その時、

「ロイ～～！」

ガサガサと草を掻き分ける音がする。そして草を踏む３人分の足音。ロイは立ち上がって洞窟の中から出た。グリン邸の若い使用人たちだった。

「おお、ロイ。やっぱりここに居たのか。シュートさんの言う通り

だ」
「どうしてここに？」
チラッと振り返ると、リートがこちらをうかがっている。
――なるほど、気にはなっているんだな。
「シュートさんが目覚めた。それでグリンさんがロイと魔物を街に連れてくるように、と」
今度はバッと振り返った。リートは少し顔を綻ばせたが、ロイと目が合うと目線をそらした。
「分かりました。準備が出来次第行きます・・・と伝えてくれ」
「了解した。ああ、あとあれだ。魔物は人間の姿に変身しろよ。よく分からないけどそういう力があるんだろう？」
「ああ、わかってる」
ロイは頷いた。それを確認すると3人は踵を返し、坂道を下った。
ロイは洞窟の中に戻り、リートに声をかけると、自分の荷物を担いだ。荷物の中身はここに来た時よりも軽い。水は少ししか手に入らなかったので、元々持っていたものを使わなければならなかった。
「行くぞ、リート」
そのまま一瞥もせずに山を降りた。太陽は頂上より少し傾き始めている。後ろは見なかったが、足音がしたので、どうやらついて来てはいるらしい。ロイはふっと笑って足を進める。

「グリンさん・・・久しぶりです」
ハアハアと肩で息をしながらロイは屋敷の玄関でグリンに挨拶した。
グリン邸の門の前に群がる人々は予想以上に多く、ここに商人の姿に変身させたリートと入るまでに15分もかかった。何とか門の中に入り、扉を開けると、グリンが出迎えてくれた。
「おお、ロイ。ご苦労だったな。もう聞いていると思うが、今朝シュートが目覚めてな。して・・・」

グリンはロイの後ろに立つ長身の男に向き直った。
「おぬしがリートか。シュートから聞いておる。もう大丈夫なのであろうな？」
リートは何も答えず、ロイが代わりに答えた。もっともシュートの前に出たらまた暴走するかもしれないので、その時はロイが全力で止めなければならない。
「シュートは今客間に居る。シルクも一緒だ。さあ、行こうか」
応接間は一階の奥の部屋にある。その扉を開けると、大きな窓の側で紅茶を飲んでいた二人の陰があった。その内の一人は、ロイたちが入ると、立ち上がって駆け寄ってきた。
「リート！！」
ロイの後ろでリートの体がびくっと震えた。ロイはリートの後ろに廻って背中を押す。シュートはリートの両腕を掴んだ。
「ゴメンな、リート。お前を一人にして。ロイがバラすかもしれなかったから少し間を置こうと思ってただけだったんだ。ホントにごめん」
震えるシュートの肩にリートが手を置く。
「ウウン、リートガアヤマルンダヨ。シュートヲコンナニキズダラケニシタカラ。ゴメンネ」
シュートが顔を上げ、にっこりと笑った。
「そっか、許してくれるのか・・・。よかった」
二人が抱き合っている間に、ロイはシルクの方へと歩み寄っていた。
「あいつ、どうするって？」
シルクは口元に近づけていた紅茶を上品に置き、答えた。
「一生かけて償うって言ってくれたわ。これからどうなるかは分からないけど」
「そっか」
「それよりアンタはどうするの？このままここに居続けるわけじゃないんでしょう？」
「そうなんだよな・・・・・」

「まあ、それはいいとして、キリクたちは呼び戻しといたわ。もうあたしは盗賊になる気はないから」
「・・・・・・？」
ロイは１０秒ほど考えて、ようやく人物像が浮かんだ。
「ああ、キリクとかリュウコウたちか。グリンさんの作戦だったみたいだな」
ロイが忘れていたことに眉を少し吊り上げ、微笑んだ。
「そうね、あたしもほんとのことを聞いたときはびっくりしたわ。パパが勝手に決めてた婚約者なんて。だいたいキリクはあたしの家に代々仕える使用人の子よ！？どうしてあたし信じてたのかしら」
ロイは３ヶ月前のことを思い出していた。やはり盗賊というにはバカすぎるというロイの考えは間違っていなかったようだ。
「そんな人達に監視させられてたなんて気味が悪いわ」
シルクは頬を膨らませ、外を見ながら悪態をついた。
ロイがふきだし、それをシルクが怪訝そうに訊ねる。
「いや、何かあんたらしいなって思ってさ」
その時、シュートがロイの体を抱えあげ、体の場所を自分と入れ替えた。鍛えているとはいえ、１６歳で細身のロイは軽く、楽に上がったようだ。ロイの耳元でシュートが囁く。
「変なこと吹き込むなよ」
どうやら楽しげに話しているのが妬ましかったらしい。分かりやすい。
「して、シュート、ロイ。これからどうするつもりじゃ？」
グリンが話しかける。ロイはシュートの腕から開放され、グリンに向き直る。シュートが答えた。
「ひとまず山にいようと思います。リートも俺もここにはいられないし」
「でもっ！！」
シルクが立ち上がって声を上げた。
「シルク、駄目なんだよ。君が許したとしても街の人々は許さない。

数日、数ヶ月、ひょっとしたら数年かかるかもしれないけど、人々が許してくれるまで待つしかない」

「・・・・・・」

シルクは押し黙っていた。言いたい事はわかるし、認めざるを得ないとも思う。だけど・・・

「なに、これから決めていけばよいことじゃ。お前達は私と違ってまだまだ長い人生があるんだしの」

シルクは静かに頷いた。グリンは少し微笑み、ロイを見る。ロイはその視線に気づき、言った。

「バーカギルのジラークってとこを目指してるんですけど・・・」

「・・・・・・」

部屋の中の全員の視線がロイに集まる。シルクは驚き、カップを落としそうになった。シュートは「頭大丈夫か」と言いたげな顔でロイを見ている。グリンは目を大きく広げている。

「ロイ、おまえ正気か？バーカギルなんて歩いて1年以上かかる場所だぞ？」

その言葉に、ロイはバッとシュートを見る。

「ええっ！そうなのか！？」

シュートは呆れ顔で溜息を吐く。

「そういえばおまえは世間知らずだったな。カリューなんて地図ではホントちっぽけな丘だぞ。バーカギルまで行くにははその何百倍も歩いて、何倍もの山を越えなくちゃならないんだ」

ロイは唖然とした。世界が広いという事は知っていたが、それほどまでとは。

「まあ、まあ・・・。しかし本当に行くのかね？」

「いや、まあそこに行くまでに世界を見て来いって師・・・とは違うな、先生に言われたんで」

「なるほど・・・まあ行けないわけではないからな。ほかに目的が

無ければ行けばよかろう。ここから北東の方に砂漠が広がっておる。その砂漠を東に抜けて、北に行けば、上手く大陸中央の山を避けられるはずじゃ。とはいえ砂漠越えもまた難儀じゃからの。まずは北に行くといい」

「なるほど。ありがとうございます」

ロイは頭を下げた。グリンはまたシュートに向き直り、訊ねた。

「それで、いつ頃出立するのじゃ？」

「・・・・・できるだけ早く、明日の明朝にでも」

シュートは少し考え、言った。シルクは黙ってシュートの横顔を見つめている。

「じゃあ俺もその時一緒に出ます」

グリンは顎をさする。

「ずいぶんと急じゃの。まあ、確かに行動は迅速にが商人のモットーじゃ。それでは今夜は宴じゃな。それまでゆっくりしているといい」

シュートとロイの送迎会は人数も少なく壮大とは言えないものの、今まで食べたことのないような豪華な食事が並び、ロイはずっと舌鼓を打っていた。シルクはずっと浮かない顔をして、シュートが必死に宥めていた。しかし、しだいに受け入れ始めたのか、最後の方はいつもの笑顔に戻っていた。

月が空の上に上り詰めた頃、料理はすっかりなくなり、場は解散となり、各々就寝場所へと分かれていった。

そして朝日が昇る――その少し前。

「ロイ！ロイ！！シュートを見ていないか！？」

目を覚まし、まとめ終わった自分の荷物を肩に担いだとき、扉が勢いよく開き、グリンが血相を変えて入ってきた。

「まさか、いないんですか！？」

グリンが勢いよく首を縦に振る。ロイは急いで剣を腰に差し、部屋

を出た。
「あのバカ！まさかもう・・・」
ロイが舌打ちをする。グリンが少し遅れてホールに出て、今にも走り出しそうなロイに言った。
「ロイ、渡したいものがある。裏に来てくれ」

第１０話　幸福の終わり　４

街を出れば広がるのは草原。西に向かってシュートと大柄の男は歩いていた。

「シュート、ホントニヨカッタノ？ナンニモイワズニシュッパツシテ」

その男はリートが変身した姿だ。しぐさや表情が何処となくぎこちない印象を受ける。

「・・・・・・」

シュートは答えない。その答えを振り切るようにして足を速める。それ以降リートは何も聞かず、シュートの速さにあわせてただ歩いた。

右手には草原。左手にも草原。ただ一本の道を歩く。ふと、その静かな道に似つかわしくない音が聞こえてきた。

ゴトン、ゴトン

その音はしだいに大きくなる。シュートとリートは振り返った。すると、今来た道から土煙が上がっている。それはしだいに近づいてきて、少しずつ茶色の馬の姿が確認できるようになった。馬車だ。

「シュート～～！」

馬車にはロイが座っており、馬の手綱を引いている。後ろの荷台には幌がかぶせてあり、結構大きい馬車だ。

ロイの姿を確認し、シュートとリートは顔を見合わせた。その姿はしだいに大きくなり、二人の前で停まった。

「ロイ、どうしてここが？」

皆には一度山に戻るといったし、こんなに早く追いつけるはずがない。ロイはニカっと笑って答えた。

「グリンさんがこっちだろうって言っててな。まあ、全部お見通し

だったわけだ」
そうか、とシュートは軽い溜息をつく。そのシュートにロイが尋ねた。
「どうしたんだ？わざわざ黙っていなくなることないだろう。シルクに別れを告げなくてよかったのか？」
シュートは真剣な目でロイを見据える。
「言ったろう、僕は罪人だ。その業までかぶって生きろなんて彼女には言えないよ」
リートは黙って二人の話を聞いていたが、ふと、ロイに尋ねた。ちなみにこれがロイとリートの始めての会話だ。
「コノバシャハドウシタノ？」
ロイはリートのほうを向き答える。
「グリンさんにもらったんだ、砂漠までは乗っていくといい、ってな。高価だからって断ろうとしたんだが、シュートに届け物をする駄賃だって言うからな」
「届け物？」
ロイは思い出したようにポケットの中をゴソゴソと探ると、茶色い皮製の小さな袋を取り出した。それをシュートに投げる。
「これは・・・？」
シュートがそれを受け取るとずっしりと重い感触がした。中を見ると、宝石が入っている。
「路銀にするといいってさ」
シュートは中をじっと見る。
「・・・・・どこまでも世話になるな」
ロイは小さく笑いながら言った。
「ケムトに戻ってきたらうちで働いてくれればチャラにする、ってさ」
「そうか」
利のないことはしない。さすがは商人だ。
シュートはそう思いながらその袋を大事そうに懐にしまった。

「これからどこへ行くんだ?」
ロイが唐突に尋ねる。シュートは顔を上げ、答えた。
「僕の故郷が西にある。リートの生まれた山もね。一度原点に帰って考え直そうと決めたんだ。・・・それに、リートの仲間の魔物とも対話できるかもしれない。そう二人で話し合ったんだ」
「そっか。でもシルクのことはほんとにいいのか?」
「しつこいぞ!どっちにしろ君には関係ないことだ。大方誰かに問い質すように言われたんだろうけど、僕は彼女を連れて行く気はない。彼女にとってもそれが一番いいはずだ!」
そう言うと、踵を返し、ロイに背を向けた。
「僕にこれを渡し終えたなら用は済んだだろう?それじゃあ、僕はもう行くことにするよ。せいぜい君も道中気をつけたまえ」
不機嫌に早口でまくし立てると、ツカツカと歩き出した。リートも慌てて後を追う。その背中に向かってロイが叫んだ。
「シルクのことを裏切るのか!!お前は自分の心まで騙すのか!!シルクのことが好きなんじゃなかったのかっ!?」
シュートの足がぴたりと止まる。3秒ほど、3人ともまったく動かなかった。

「好きに決まってんだろ!!」

シュートが叫んだ。空気がビリビリと震える。シュートの思いは確かな重みを伴ってロイに響いた。
「奇跡でも何でも良い。今すぐにでもこの罪がなくなるなら、いつでも側に駆け寄ってこの両腕で抱きしめてあげたい!!」
その声は重く、深く、厚く、空気に紛れて世界の一部になった。
「でも・・・それでも僕は・・・」

「――――だってさ、シルク」

「え・・・・・・？」
シュートがゆっくりと振り返る。そんなはずはないと心に言い聞かせながらも、淡い期待を胸に抱いて。
「シルク・・・・・・」
そこには馬車から降り、こちらに歩み寄ってくるシルクの姿があった。
「ちゃんと聞こえただろ？」
ロイがシルクにそう告げる。シュートは目に涙を溜めて立ちすくんでいた。シルクはゆっくりとシュートに近づき、その両腕を首に回した。
「シルク、どうして？」
涙ながらに尋ねたシュートにシルクは微笑む。
「あなたは間違ってる。あたしは誰よりもあなたのことが好きよ。あなたと一緒にいられるのなら、罪でも何でもかぶってみせるわ」
シュートがシルクの体に腕を回し、抱きしめた。そこに言葉はなかったが、確かに思いは届いていた。
その長い抱擁が終わり、シュートがロイに向き直る。その顔はロイが今まで見たこともないほど穏やかで、そして幸せそうだった。嬉しく思う半面、自分が失ったものを思い出し、深い闇に落とされたような気分にもなる。そう感じてしまう自分がいやだった。
「ロイ、ありがとう。ここまでシルクを送ってきてくれて。僕たちは一緒に行くことにするよ」
シルクの顔がぱあっと笑顔に変わる。明るく眩しい太陽のように。
「送ってきてくれてってのは違うんだよ」

ロイは馬車から降りた。
「これはお前達の馬車だ。次に来た時に返してくれればいいってさ。一流の商人が戻ってくるかも分からない俺にこんな高価なものを貸すわけないだろ？」
ロイは肩をすくめる。それに合わせて肩の荷物が上下し、中の重みが分かる。シュートの分よりも少し重い。グリンがくれた銀粒の袋は底のほうで眠っている。商人は利益のためにしか動かない。だからこれは商人としてではなく、３ヶ月育てた子への親としての愛情。
「そういうわけだ、これはお前達が乗ってってくれ」
シュートはフッと笑う。
「なるほど、グリンさんらしいな」
ロイも笑った。
「ははっ、違いない。ほんとに、最高の人だよ」

がたごとと音をたて、馬車が行く。その道に残ったのは少年の影ひとつだけ。馬車の荷台の幌が開き、二人の男女が手を振った。
「じゃあな、ロイ！また会おう！！」
男は叫び、女は手を振る。少年は片手を少し挙げ、馬車が消えるまで見送った。辺りは夜が開け白んだ空。うすい雲が浮いていた。それはまるで二人が出会った朝日が別れを惜しむかのようだった。

第11話　戦士の村　1

大地が広がっていた。草原と言うには赤茶けた土が目立つが荒野と呼ぶほどにも荒れてはいない。その中に一本の道が続いていた。何百年も人が歩き、そうしてできた道。その道を、一人の少年が歩いている。茶色い髪に少し汚れた白い肌。華奢な体つきであるが、やせ細っているというほどでもない。その少年の前方にも背後にも道が続き、その先端は地平線の彼方へと消えていた。その延々と続く変わらない光景が、少年の覇気を失わせていた。

「あっちい～～」

太陽は容赦なく少年を照りつける。夏ももう終わりを迎え、そろそろ涼しくなっても良さそうだが、そんなことは関係ないといわんばかりに太陽は無休で働いていた。

「カリューのときよりも暑いな」

周囲には誰もいない。少年は一人の寂しさを紛らわせようとしているのか、口にすれば暑さが和らぐのか、ブツブツと言っている。

「村はまだか・・・？」

数日前にこの道で旅の行商人とすれ違った。ずいぶんと気前のいい男で、ロイがグリンへの紹介状を書くと、食料やら水やらを色々くれた。その男の話によると、もうすぐガルガイアという村が見えてくるはずなのだが・・・。

ロイはそう思い返して空を見上げた。背後の空には大きな鳥が飛んでいた。それがゆっくりとこちらへ近づいてくる。

「あれは・・・・・鳥か？」

背中に生えた大きな翼。遠くから見る分には鳥と相違ない。しかし、違和感は近づくごとに鮮明になる。その生き物には人のような頭部があり、そして小さな角と牙が生えていたからだ。

「魔物だ！！」

その魔物は翼を大きく動かしながらロイのほうへ近づいてくる。いや、正しくはロイの進行方向をひたすらに目指していて、こちらには気づいてはいない。
魔物が羽ばたくたびに風切り音が聞こえる。先ほどまでは鳥に顔がついたと思ったのだが、正しくは人間のような体に羽が生えているのだった。ロイにはその姿に見覚えがあった。

「ガーレイシャ！！」

ジエルトンの「ｒｅａｌ　ｗｏｒｌｄ」の挿絵に似たような魔物がいた。人間の数倍の力を持ち、音波で物を破壊する魔物。
ガーレイシャはロイには気づかない様子で、ロイの頭上を通り過ぎていく。
「くそっ」
ロイは左手の剣を握りしめながら走った。リートのように人間と和解できる魔物もいるのだろうが、あの魔物はそうは見えない。特にガーレイシャはジエルトンが「要注意」としていた危険な種族だ。
ガーレイシャとの差は一向に縮まらなかったが、しばらく走ると森が見えてきた。恐らくガルガイアはあの森の中にあり、魔物はそこを目指しているのだろう。

数分走って到達した森は見た目よりもずっと鬱蒼としていた。木々は折り重なって鳥が飛ぶ空を奪い、草は生い茂って獣や人の行く手を阻む。まるで城壁のようだとロイは直感的にそう思った。しかし、その森には奥行きはなく、平地の部分を森が覆い囲んでいるように見えた。森の真ん中にはいくつかの木造の家が立ち並ぶ村があった。
「はあ、はあ・・・・・」
膝に手をついて息を整える。突然頭上から羽ばたく音が聞こえてきた。顔を上げると、先ほどの魔物が村の周りを旋回している。その様は警戒しているふうにも仲間を呼んでいるふうにも見えた。

「どっちみち村を襲う気のようだな」
ロイは剣を抜く。しかし、魔物の高さまではどうやっても届きそうにないので、木の枝を切り、術を使って燃やした。その燃えている枝を魔物に向かって勢いよく投げつけた。

ゲギャ？

枝は魔物には当たらなかったが、驚かせることには成功したようだ。魔物は奇声を発すると、ロイに向かって飛びかかって来た。ロイは剣を構える。周りの気温が上がり、足元の草がしおれた。ロイの件と魔物の爪とが交差する。魔物はロイがその爪を止めたことに驚いたのか、少し飛び上がった。ロイもまた体勢を立て直し、次の第二撃に備える。
「こんな時、お頭みたいに風の術者だったら楽なんだけどな」
わざわざ相手が飛びかかってくるのを待たなくても真空波で切り裂けるだろう。

ゲギャアアア

魔物は叫びながら飛びかかってくる。
その時、風を切る音がロイの耳に飛び込んだ。そして、ドスッと言う音と共にその音も止んだ。目の前にいた魔物がロイの目の前に落下し、地面が揺れた。首元には大きな矢が3本刺さっている。これが先ほどの音の正体だろう。

「大丈夫か、少年？」

村の方から叫び声が聞こえた。そちらを見ると、屈強そうな男達が3人、こちらに駆け寄ってくる。一人は手に弓矢を持っており、残りの二人は巨大な剣を背中に背負っていた。ロイは魔物が動かない

ことを確認すると、剣を納めた。男達に向き直る。
「危ないところだったな。しかし、君が注意を引いてくれなければこうして射殺すことも出来なかっただろう。礼を言わせてもらう」
弓を持つ男がそう言った。ロイは少しむっとして言い返した。
「別に・・・俺一人でも大丈夫でしたよ」
男達は目を合わせ、大声を上げて笑った。ロイはケムトの時と同じ悔しさを感じていたが、なんとか押し殺した。
「それで、こいつはどうしてこの村に？」
男達の笑いがようやく収まった。にじみ出た涙を拭いながら弓の男が言う。
「君は、この辺りの出身じゃないんだね？」
「ボン・・・・・ケムトから来ました」
もう一度嘲笑される勇気は出ず、ロイはそう答えた。男は頷き、続ける。
「この辺りの森の水源はとても豊かでね。私たちはもう何年も魔物とその取り合いをしていると言うわけさ」
なるほど・・・どうりで武装が行き届いているはずだ。
「そういえば、君はこの村に滞在するんだろう？ついてくるといい、私の家に招待しよう」

太陽は相変わらず容赦なく照りつけている。しかし、村の中は驚くほど涼しかった。村を囲む森が冷気を送っているのだろう。村人のほとんどは肌を隠すような衣服をまとっていた。家は２０件ほどしかなく、そのすべてが木で作られている。そして村の中心には家の５倍近くも高い見張り台がある。今は武装した男二人がその頂上にいた。
「ここが私の家だよ。どうぞ」
弓の男はそういってロイを招きいれた。ロイはお邪魔しますといって中に入った。

「あら、リーエン。お客さん？」
中から出てきたのは男と同世代の女性だった。男がそうだと言うと、ニッコリと優しそうな笑顔でロイを見た。
「さあ、どうぞ。あなたは・・・ロイって言うのね。何にもないところだけどお茶を出すわ。座って」
ロイが口をはさむ間もなくまくしたて、奥の部屋に入って言った。
ロイがまごついていると、男がロイの背中を押した。
「さあ、そこの椅子に座ってくれ」
それは木製の椅子だった。ロイが座ると、男はその向かいに座った。
「さて・・・ロイ君と言ったかな。私はリーエンだ。ガルガイアへようこそ」
そういって右手を差し出した、ロイも手を出し、握手をする。
「君はケムトから来たと言ったね。あそこは今魔物の被害はどうなんだい？」
「・・・・・？」
ロイが何故こんなことを聞くのかと怪訝な顔をした。それを察してリーエンが言う。
「ああ、この村にいるとどうにも外の情報が入ってこなくてね、この村の客は2ヶ月に一回来る行商人くらいだ。その行商人が先日来てね、東の方はいろいろと聞いたのだが・・・」
ロイは数日前のことを思い出した。
「ああ、あのドートリアから来たって言う人ですか」
「そうだ、会ったのかい？」
ロイは頷く。その時、先ほどの女性がお茶を持って現れた。
「緑茶でよかったかしら？」
ロイはまた頷いた。ボンゴでは茶と言えば麦で入れるものをさしていたが、ケムトで何回か炒った葉でいれたを飲んだことがある。あっさりしている麦茶と違い、ほんのりと甘い香りがする。
「リーエン、今日はもう仕事はいいの？」
女性はリーエンに尋ねた。リーエンは茶をすすりながら答える。

「ああ、折角旅人が来たんだ。だから仕事は任せてきた」
女性は腰に手を当て、溜息を付いた。
「まあ、みんなかわいそうに」
そうして微笑むと、奥の部屋へと戻っていった。
しばらくその姿を見ていたロイが視線を戻すと、リーエンと目があった。リーエンは肩をすくめる。
「やれやれ、私は叱られてばかりだよ。ああ、紹介してなかったな。あれは私の家内、アレルナだ」
リーエンは微笑みながら言う。その後思い出したように、
「それでケムトは今？」
と言った。
ロイは魔物に関する事件はあったが今のところ魔物に襲われてはいないこと。恐らく大きな街を敬遠しているだろう事などを伝えた。
その一部始終をリーエンは真剣に聞いていた。
「そうか。実は先ほど見せたとおり、この村の者は腕がたつ。だから付近の町や村に用心棒をかわれることも少なくないんだ。実質、村の収益はそれがほとんどで、それでこの村は成り立っているようなものだ」
これでようやく合点がいった。生活に密接に関わることならば敏感になるのが当たり前だ。
「それで・・・」
とリーエンが続けた。
「君はケムト出身じゃないんだろう？」
「！！」
突然の質問に驚きを隠せなかった。
「簡単なことさ。魔物の被害がないケムトで堂々と魔物に対抗しようとするものはいないだろうし、さっき街の規模を比較するようなことを言っていたからね。ケムトよりも小さな街か、あるいは村から来たのだと思うがどうだろう？」
この男は相当洞察力があるらしい。ロイが感心していると、そのま

ま続けた。
「それで、出身はどこなんだ？」
ロイは諦めたように息を吐いた。
「ボンゴって知ってますか？」
リーエンは顎に手を添え、深く考える素振りを見せた。数秒して何か思い出したような顔をすると、ロイに断り、後ろにあった本棚から古い本を取り出した。
「あった、あった」
そういうと、飲み干したお茶のカップを脇に置き、本を開いた。
「『ボンゴ。完全自給自足を貫く、タンタニア最南端の村。』なるほど・・・。しかし、この本は１００年ほど前のものだ。まだ実在していたとはね」
ロイはその言葉を聞くと俯き、呟いた。
「もう・・・ありませんよ」
リーエンは目線を本からロイへと移した。ロイはまだ俯いている。
リーエンが声をかけようと口を開いた時、ロイが喋った。
「魔物に襲われて、俺以外のみんなは消えました」
ロイはあえて死にましたとは言わなかった。ガイガンの話を信じるならば、まだ魔界で生きている可能性はある。口にしたらその希望を失ってしまう気がした。
リーエンはロイが家族の死を受け止めたくないと考えていると思ったのだろう。それ以上の追求はしてこなかった。
「そうか、それで一人で旅を？」
ロイは頷く。ロイの旅を説明するにはギンたちのことを挿入しなければならないのだが、今日会ったばかりの者にそこまで言う必要はないように思えた。
「この村もじきにそうなってしまうかもしれないな」
先ほどアレルナが持ってきたティーポットを自分とロイのカップに継ぎながらリーエンは言った。
「ずいぶんと軽く言いますね」

ロイはできるだけ感情を殺すようにして言った。
「ああっ、いや、軽くとかそういう事じゃないんだ。気に障ったなら謝ろう。ただ、私たちは小さい頃から戦士として育てられてきたからかな、常に死はそこにあるものなんだ。相手より自分が強ければ生き、弱ければ死ぬ。その考えが染み付いているだけだよ」
それでもロイには納得が出来なかった。親しい人が目の前で死ねばそんなふうに言える筈がない。しかし、それを追求する意味はないのでロイは話を切り替えた。
「そういえば、行商人が言ってたドートリアというのはどんなところなんですか？」
リーエンも気まずく思っていたらしい。渡りに船とばかりにその話題に食いついた。
「ああ、ここから東に行くと砂漠が広がっている。その砂漠のオアシスにある国でね、私も何度か行った事があるんだが、ずいぶん文明が発達しているところさ。でも今は戦争中らしい」
「戦争？・・・人間同士が殺しあう？」
リーエンが首肯する。
「とは言ってもどうやら相手は人間じゃないらしいがね。ほんとかどうかは知らないが空を飛ぶ機械があるのだとか」
「空を・・・飛ぶ・・・？」
リーエンは真剣な目をして頷いた。
「私も詳しくは知らないのだが・・・。魔獣を操り、心を殺し、機械に改造する事もしているらしい」
レギュラスの姿が脳裏をよぎる。あの男ならばそれも可能だろう。しかし辻褄が合わない。レギュラスの、そしてカルコンの理想は魔物のいない世界だ。なぜ人間相手に戦争を起こす必要があるのだろうか？
「その相手の国は実質大きな組織の支配下にあるらしい。確か、ディア・・・なんとか」
リーエンは脳を振り絞るように頭を動かした。ロイが言う。

「ディアボロス！」
リーエンがロイに目を向ける。ロイは身を乗り出した。
「知っているのか？」
「ええ、まあ。少し因縁が・・・」
ロイの両目は深く、暗い。数々の戦いを経験してきたリーエンでさえ、踏み込むのをためらうほどだった。足を踏み入れた瞬間に、生を迷ってしまうかのような。そのただならぬ予感のために、リーエンはそれ以上何も訊ねなかった。
「次はそちらに向かうのか？」
リーエンの問いにロイは腕を組んだまま、コクンと頷いた。リーエンは続ける。
「ここからは1週間ほどかかる。砂漠も難儀だしな。2，3日ここで休んでいくといい」
そういわれてロイは椅子に座りなおし、顔を挙げた。リーエンは戦士のその緊張感を解き、微笑んでいる。ロイのこわばった顔も自然にほぐれた。
「じゃあ、よろしくお願いします」
リーエンは満足そうに頷く。それから、と言ってロイを指差した。
「その敬語は目上の者に使うものだ。私達は戦士、お前も戦士。私たちは対等だ。だから敬語は必要ないからな」
ロイは微笑んだ。
「ああ、わかっ・・・た。ありがとう」
リーエンはニカっと笑うと、奥の部屋にいるアレルナに声をかけた。
「ロイが2，3日泊まるって言うから客間に布団出しといてくれ！！」
数秒して、返事が返ってきた。
「はーい。話が住んだなら仕事に戻りなさいよ。みんな大変なんだから」
リーエンとロイは目を合わせる。リーエンが肩をすくめ、笑った。

第11話　戦士の村　2

「おーい、見張り役交替だ。二人とも休んでくれ」
村の中心にそびえる見張りやぐらの天辺に、二人の男がいた。その二人は下から自分たちを呼ぶ声に気がつくと、はしごを降りた。
「ようやくかぁ」
二人は一度ロイを一瞥し、リーエンを見る。耳元でぼそぼそと何か言うと、リーエンは頷いた。リーエンと掌を叩きあい、二人は去っていった。
「さあ、行こうか」
リーエンは先にロイにはしごを昇らせた。木製のやぐらは足をかけるたびにぎしぎしと音を奏でるが、しっかりとした作りなようで、ぐらつくことはない。
頂上に着くと、そこは下から見上げるよりもずっと高かった。辺りを見渡すと、森が村を取り囲んでいる様子が良く見える。なるほど、これならどこから魔物がやってきても大丈夫だ。
「ここ最近、3日に一度くらいのペースで魔物が現れる。大体が先ほどの種族だ。よっぽどこの土地が欲しいらしい」
ロイは相槌を打ちながら周囲を見渡す。日は既に沈みかけ、世界は赤々と照らされている。魔物の陰は見えない。
「この土地を何の為に襲うのか、詳しいことは分からないけど、もしかしたら人里はなれた村は魔物の標的になっているのかもしれない」
リーエンはロイの方を見る。夕焼けの光を孕んだ風がその髪をなびかせている。ロイは夕日からリーエンのほうへと目線を移した。
「・・・俺は、そう思う」
リーエンは押し黙った。先ほどは故郷を滅ぼされ、たいそう落ち込

んでいるただの子どものように見えた。しかし今は真実を受け入れ、立ち向かう戦士の目をしている。果たして自分がその目ができるようになったのはいつからだっただろうか。少なくともロイの年齢よりもずっと後になってからだ。

「魔物が知恵を持って人間の反撃を避けていると？」

ロイは頷く。夕日はいまだその右頬を照らし続けていた。

「魔物は言語を覚えるし、会話もできる。もしかしたら人間以上に知能が高いのかもしれない」

リーエンにも心当たりはあった。確かに魔物には人間のように偵察を行ったり、集団を組んだりと計算高いところがある。

「しかし――」

そのとき、ロイの頬に陰が走ったのをリーエンは見逃さなかった。慌てて太陽の方を見た。

「魔物だっ！！」

それも先ほどのような単体ではない。数匹、もしかしたら十数匹のガーレイシャがこちらに向かってきている。人間の目を欺くかのように太陽を背にしていた。

「みんな！魔物の群れだ！！」

リーエンが村全体に響き渡るように叫んだ。外で畑仕事などに勤しんでいた人々が一斉に家の中へ入っていった。数十秒後、武装を固めた人々が家の中から出てくる。上は５０近い男から、下はロイより少し年上の少年まで、剣や弓などそれぞれの武器を手に持っていた。

既に魔物たちは森の上空にまで来ていた。大きな羽を羽ばたかせ、甲高い奇声を上げながら猛スピードで近づいてくる。

「行くぞ！！」

リーエンは弓を既に番えていた。ロイも剣を抜く。長い刀身は夕日に煌めいた。

リーエンが矢を放った。矢は先頭にいたガーレイシャに向かってまっすぐに放たれたが、左手で悠々とはじかれた。次いでガーレイシ

ャから怒声が上がった。

ゲギャアアア

それを合図にして、魔物は左右に分かれ、村を取り囲むような陣形を作った。村人達も臨戦態勢を調える。気がつくと、見張り台にはリーエンのほかに弓を番えた男が3人が上っていた。

「ロイ、魔物を斬れるか！？」

リーエンは弓を番えたまま叫ぶ。

返事をする間もなく、魔物の一体が矢倉に向かって突っ込んできた。ロイは手摺に足をかけ、跳んだ。

「任せろ！」

空中で大きく振りかぶる。そしてそのまま振り下ろす。リーエンにはそれが後先を考えない捨て身の無謀な攻撃のように見えた。それを自由に飛びまわる魔物にそんな大振りな攻撃があたるはずがない。しかし、

「はあっ！！」

百戦錬磨のリーエンにもその剣閃を見ることはかなわなかった。その一振りは凄まじく迅く、そして鋭かった。魔物は地面にまっさかさまに落ちてゆく。左肩から心臓にかけて真っ赤な線が走っていて、そこから血が噴出した。

「ロイ！！」

見ると、ロイも一瞬だけ空中に静止し、落下していた。１２、３メートルの高さから無事で済むはずがない。

ゲギャアアア

半分ほど落ちたとき、別の魔物がロイめがけて襲い掛かった。ロイ

はその攻撃を見事な身のこなしでかわすと、その背中を踏みつけた。落下の速度が一時的に止まる。魔物は体を一回転させロイを振り落とそうとしている。

ロイはその背中に必死にしがみつきながら、剣を掲げ、背中から心臓を一突きに刺した。魔物は絶命し動きが止まる。その背中を蹴って、衝撃を殺しながら地面に着地した。

「なあ、リーエン。あいつは何者だ？」

衝撃を全身に分散するようにして着地した。足をくじいた様子もない。

「・・・・・わからない」

リーエンは驚き、ロイを見ていた。周りの村人も同様である。魔物を臆すことなく、むしろ正面から立ち向かっていく。その姿はとても人間とは思えなかった。

「リーエン！！」

その注目の中、ロイは叫んだ。そして魔物を指差す。その魔物は矢倉に向かっている。リーエンは番えていた弓の標準を合わせ射た。先ほどと同じのように手で払われる。魔物との距離はしだいに近づいている。リーエンはすぐさま次の矢を取り出し、番えた。今度は先程よりも強く引き、羽を少しねじった。

「くらえ！！」

ガーレイシャはまたしても矢を手で払おうとした。しかし、払った左手に何かが当たった感触はなかった。矢はガーレイシャの爪をかわして弧を描き、左側から首に刺さった。ガーレイシャは途端に力が抜け、真っ逆さまに落ちた。

グ・・ギャアア

首筋に矢が刺さりながらもなおそれを抜こうともがいている魔物の首をロイが斬りおとす

魔物の目は首から先のない自分の体を一瞬だけ捉えた。しだいに何

も見えなくなる。
ロイは魔物の首を切り落とした剣を一回振り、血を落とした。できる事なら返り血だらけの顔を洗い、衣服も着替えたいと思った。しかし、今はそんなことを言っている場合ではない。

「ここは戦場で、俺は戦士だ」

リーエンの手前、意地を張って「任せろ」といったが、実際にロイが剣で敵の命を奪ったのはこれが初めてだ。魔物といえども今ロイが奪った命はこれまで祖先の代から何百年もかけて紡がれてきた命なのだろう。その重みは胃を揺らし、心臓の鼓動を加速化する。体の力が抜けてゆく。
ロイは剣を地面に突き立て、何とか体を支える。先ほどまでそれを握っていた両掌を見た。

「――――真っ赤だな」

皮を裂き、肉を切り、骨を断つ感触はいつまでもそこに残っていた。魔物の返り血はロイを人間ではない何かに変えたような気がした。
「もう、戻れない」
ロイは確信を持ってそう呟いた。そして両手を組み、握り締めた。
「でも、これが俺の選んだ道だ」
ロイは地面から剣を抜くと、立ち上がった。急に胃がぐらぐらとゆれ、中の物を全て吐き出したい衝動に駆られた。
「ぐわあああ」
ロイは声のした方を振り返った。その光景を見た途端、膝をつき、嘔吐した。

グガアアア

魔物の奇声が上がる。そこにいた村人は肩から先をガーレイシャの鋭い牙にむしりとられていた。ロイの脳裏に一年前の光景が蘇る。血だらけの村。魔物は友人の、知人の命を片っ端から奪っていった。今、この場にいる名前も知らない人々に彼らの顔が映っているように見えた。ボンゴの最期の光景はロイの脳に強く、強く焼き付いていた。

「ごっ、がはっ」

うずくまっていたロイが顔を上げると、その村人は上半身を魔物の強靭な腕によって吹き飛ばされていた。

「がはっ、はあ、はあ・・・くそっ」

俺はこんな所でうずくまるために為に生きることを選んだんじゃない。そう何度も自分に言い聞かせ、立ち上がった。

「おおおお！」

剣を振り上げ、その魔物に振りかかった。しかし、振り下ろした剣の先にその姿はない。代わりに肩に激痛が走った。

「・・・・・ぐあっ」

見上げると、ガーレイシャは飛び上がり、その足の鉤爪でロイの肩を引き裂いていた。もはや魔物たちにも村に来た当初にはあった人間に対する慢心はない。人間の強さを認め、全力を尽くさなくてはならないことを学習していた。

「くそっ・・・！」

ロイは考えていた。今だけではない。リートと戦った夜からずっと。魔物を殺すことに意味はあるのか、それはカルコンと同類なのではないか、と。

しかし、今気がついた。いくらカルコンを怨んでも、その歩む道を否定しても、結局自分は魔物が憎いのだと。

「・・・コロセ・・・」

誰かの声が聞こえてきた気がした。勿論村人の声かもしれないが、しかしもっと近く、もっと鮮明に聞こえてきている気もする。ロイは剣を振り上げた。

ギャアアア

背後から魔物の叫び声が聞こえる。ロイはその方向へ剣を、投げた。

グギイイィ

魔物の悲鳴が上がる。剣は深々と魔物の腹に刺さっていた。ロイは駆け出し、地に足をついて苦しんでいる魔物の目の前に来ると、その剣の柄をつかみ、薙いだ。

「――――――」

その魔物が大口を開け、叫ぶ声はもはやロイの耳には届いていなかった。代わりに頭の中で声が響く。

「・・・コロセ・・・コロセ・・・」

その声がロイから思考を奪っていく。ロイは口元をゆがめると、魔物の体に手を当てた。そこからしだいに蒸気が上がる。魔物の苦しむ声がしだいに弱まっていった。

地上で応戦している村人、矢倉で戦っているリーエン、そして魔物さえもその異常に気が付いた。

「何だ、この熱気は!!」

リーエンは周囲の者と顔を見合わせた、燃え上がるような熱気が見張り台の下の方から上がって来る。下を見ても異常はない。ただ一人、死んでいるであろう魔物に手を当てているロイ以外は。

――――何だ、あれは!

その異様な光景に魔物でさえも手を止め、ロイの方を凝視していた。なんと、魔物の体がみるみるうちに炭のように真っ黒になっていく。

「うぐっ」

ロイの近くにいた者たちは、その熱気と臭いに思わず顔を覆った。

そして、炭のようだという比喩が間違いであることに気が付いた。

実際に、炭と化したのである。ロイは真っ黒になった魔物の体を蹴り倒した。バスッという柔らかい音がして、その屍骸が粉々になる。

ゲギャアアア

村人の活躍で、残る魔物の数はあと3体。その3体は攻撃の手を止め、村を囲むように旋回した。それはあまりにも速すぎて、とても弓の標準をあわせることが出来なかった。そして、その動きがピタッと止まった。

空気が振動していた。先ほどまで村を包んでいた熱気が魔物のほうに集まっていく。みるみるうちに、ガーレイシャの胸部が何倍にも膨れ上がっていった。

キィィィィィン

ガーレイシャたちは声ではない、何かの音を口から出した。そこにいた全ての人間は一瞬戸惑ったが、すぐに攻撃しようと構えた。

「・・・くっ」

しかし、視界が歪み、膝をついてしまう。少しすると、地面がどこにあるのかわからないような感覚に襲われる。それは目を回してしまったときと全く同じ感覚だった。

ゲギャアアア

その音と、声が混ざった。恐らく3体のうち、2体が攻撃をするつもりだろう。

（これが、音波攻撃か・・・）

ロイは耳を塞ぎ、できるだけダメージを和らげようとしたが、一度音を拾ってしまった三半規管は、容易にはそれを拒絶できない。

「ぐわあああ」

ロイの後ろで男の叫び声が聞こえた。恐らくガーレイシャにやられたのだろう。

「くそっ、このままじゃ」

ロイは左手で耳を押さえながら、音波を出している一体に向かって剣を投げつけた。間を置かず、それがはじかれる音があたりに響いた。その間にも音は容赦なくロイを襲う。ロイは内側から脳を破壊するかのように揺さぶる振動に耐え切れなくなり、地面に突っ伏した。

魔物の悲鳴が轟く。いつのまにか音波は止んでいた。残る2体でさえも驚いたように苦しむガーレイシャの姿を見ている。

見ると、ガーレイシャの首筋に何かが刺さっている。それは矢だった。どこからか放たれた矢は寸分の狂いもなくガーレイシャの首筋を貫いていた。村人は顔を上げ、その勇者を見ている。ロイは間髪いれずに飛び出し、地面に落ちていた村人の剣をつかむと、矢が刺さっている魔物に切りつけた。魔物はもはや何も発することなく地面に倒れた。

ギャアアア

耳を劈く叫び声が轟く。残る二体の魔物は爪を振り上げ村人に襲いかかっていた。しかし、その攻撃はあまりにも無駄が多く、自棄になっているようにも見えた。

グアアア・・・

そのうち一体が倒されると同時に、もう一体も地面に仰向けに倒れた。

あたりにもう敵はいない。月光の下、静かな夜の空気が当たり一面を覆っていた。

第12話　破滅の村　1

「エルノフ！エルノフ！！」「うわあああん」「スバル！！」
辺りは騒然としていた。魔物の撃退には成功したものの、それによる被害は計り知れない。屋内に避難していた子どもや女、老人達は家を飛び出して愛するものにすがり、悲しみに嘆いていた。
「・・・・・・」
ロイは呆然と突っ立っていた。ただじっと、グリンに読まされた物語の本の挿絵を見ているような、そんな気分になった。自分はよく戦ったとは思う。それでもこれだけの人が死に、または傷付いている。勝ったか負けたかでいえば確かに勝ったのだが、ロイの心の中には敗北感が満ちていた。
「ロイ」
リーエンがぽんとロイの背中を叩く。その表情は未だに緊張が解かれておらず、険しい顔をしていた。当然だ。ロイがボンゴの人々を失ったのと同様に、リーエンもたった今、親しい人を失くしたのだから。
「俺は同士の埋葬をしなければならない。お前は家に戻って着替えて来い。そのような返り血だらけの服ではいささか居心地も悪いだろう」
ロイは静かに首を振る。そのたびにガンガンと頭痛が走った。
「俺も・・・手伝うよ」
「・・・そうか」
リーエンは少し表情を緩ませた。すぐさま踵を返し、仲間の元へ向かった。ロイもその後に従う。仲間の亡骸の側で膝をつき、黙祷する。ロイも目を閉じたが、その途端に倒れてしまいそうだった。術の限界が近いのかもしれない。数十秒黙祷すると、その家族がすっと身を引いた。3人で頭、腰、足を持つと、墓地へと運んだ。

やけにに手際がいい、とロイは訝しんだ。
ボンゴで人が死ぬとき、こんなふうに静かではない。死体を埋める時でも遺族はすがり、泣き続ける。
この戦士の村ではさっきリーエンが言ったとおり、誰もが死を日常として受け入れているのだろう。
墓地は地面に穴を掘ってその上に木で作られた碑を立てる質素なものだった。老人や女性を中心にして、ロイたちが到着した時には既に人一人ぶんの穴がいくつも掘られていた。
3人ずつで協力して遺体を穴の中に横たえていく。もう一度全員で黙祷をして上から土をかぶせた。
「・・・・・戻ろう」
リーエンは未だに険しい顔をしている。その表情はどこか泣いているようにも見えた。その顔を見て、村の惨状を眺め、ロイは尋ねた。
「なあ、リーエン。どうして戦わなくちゃいけないんだ?」
リーエンが振り返り、暗い目をしているロイを見た。
「戦わずに・・・どうして大切なものを守るんだ!?」
強く言い放ったその言葉は、怒っていると言うよりも自分に言い聞かせているようだった。
そのままリーエンは一言も言わずに家に向かった。ロイもその後を追ったが、眩暈がし、景色が歪んで見えた。
意識が朦朧とする。何も考えることが出来ず、ふらふらと糸に操られるマリオネットのようにリーエンの背中を追った。
突如視界が暗転し、ロイの意識はかなたに沈んだ。
ドサッ
リーエンが物音に驚き、振り返ると、ロイが地面に突っ伏していた。
「おい!どうした!」
肩をゆするが反応はない。
――――これは夢だ。

直感的にそう思った。真っ白な世界。地面も天も周囲も全てが白く、宙に浮いているような気さえする。天はどこまでも続く白い壁のようだ。影は一切なく、狂おしいほどに白い。

――影・・・・・・？

目の前、その一転だけ黒い闇が広がっていた。始めは拳のように小さかった。しかし、しだいにロイの体ほどの大きさになり、そのまま膨張し続けていた。

――・・・・・・っ！

足を絡め取ろうとする闇から一歩後ろに跳んで逃げた。この闇には触れてはいけない。そんな感覚が脳裏によぎったからだ。しかし、闇はロイの後を追い続ける。まるで影が体に戻ろうとしているかのように伸びている。

ロイは踵を返し、走った。正しいかも分からない自分の直感に従っていた。これまでにないくらい全力で走った。不思議と疲労感はない。体は羽のように軽かった。

チラッと後ろを見る。こんなに速く走っているにもかかわらず、影はロイと同等の、いやそれ以上のスピードで追いかけてきている。しかも、先程よりも大きくなっているようだ。

前を向き、更に加速しようとするロイの視界に影が映った。影は上から覆いかぶさるようにして、ロイの体を包んだ。

――これは夢、夢だ！

影がロイの体に吸い込まれるようにして消えた時、全身の筋肉が突っ張るような感じがした。めまいがして、右手を顔に当てる。

――なんだこれは！！

固い爪が顔に当たった。慌ててそれを見ると、長く尖った爪が生えている。驚いて顔をしかめ、歯を噛み締めた時、異物が当たった感触がした。触れると、鋭利な牙がそこにあった。

――何だこれは！？まるで・・・妖怪みたいだ。

いつのまにか目の前に鏡がある。ロイは、恐る恐るそれを覗き込んだ。そこには・・・

――うわあああああ！！
恐れ、驚く妖怪の姿。茶色い髪に白い肌。尖った耳と鋭い牙に、鋭利な爪が生えている。自分とは似ても似つかない姿。しかし、そこにいるのは紛れもない自分。
ロイはそこにうずくまり、両手に顔をうずめた。額に爪が刺さる。
――嘘だ・・・嘘だ・・・。
そういってみた鏡の先にいるのはうずくまる自分の姿。その妖怪がこっちを見て見て笑った気がした。
――うわあああああ！！

「ロイっ、ロイっ・・・しっかりしろ！！」
「ちょっと、病人なんだから静かになさいよ！！」
肩を大きく揺さぶる感触と、耳を劈く声でロイは目を覚ました。視界に二人の人間の顔が映っている。
「ロイ、大丈夫か？」
リーエンが叫ぶ。ロイは周囲を見渡して、何が起こったかを悟った。
「俺はどれくらい眠っていた？」
ロイの体はベットに横たわっていた。小窓からは見張り台が見える。確か、リーエンの家に向かう途中で倒れて・・・そこから先は記憶にない。覚えているのは、自分にそっくりな妖怪の姿。
いや、あれは夢だとロイはかぶりを振った。
「あの日からまだ一日も経っていない。とはいえもう昼過ぎだがね」
リーエンの顔は気のせいか少しばかり嬉しそうに見えた。
「あなたの服は洗っておいたからね」
リーエンの後ろでアレルナが言った。見ると、ロイは別の服に着替えさせられていた。
「それで、ロイ。聞きたいことがある・・・」
リーエンの顔が険しくなった。すぐにアレルナが言う。
「ちょっと、リーエン。まだ熱は引かないんだから後で良いじゃな

い！」
「しかし・・・」
リーエンは振り返って困った顔をする。
「いや、良いよ。魔物の身体を炭にしたことだろう？」
リーエンの眉根がピクリと動いた。すぐにアレルナが口を出す。
「ちょっと、ロイも。あなたまだ結構な高熱なのよ？」
ロイは微笑んで見せた。ここでリーエンに世話になっている以上、隠しておくわけにもいかない。それに、精霊術がいかなるものか、もう一度思い出したかった。
「もう」
アレルナが溜息をつく。
「勝手にしてちょうだい。また倒れても知らないわよ」
そういうと、リーエンに小言をいいながら部屋を後にする。リーエンは扉が閉まるまでアレルナの背中を見つめ、振り返ると苦笑いを見せた。
「では、教えてくれ。あれがなんなのかを」
ロイが頷いた。

「・・・なるほど。私にもまだまだ知らないことが多いな」
ロイがすべてを話し終えた時、村は赤い光に包まれていた。その夕日の中に魔物の姿は見えない。が、窓から差し込む真っ赤な光は嫌が応にも昨日の事件を思い出させる。
リーエンは大きく息を吐き、首を振った。
「ひとつ聞いていいか。その術を得て、満足だと思っているか？」
ロイはリーエンの目をじっと見る。その細められた目は、睨んでいるようにも泣いているようにも見えた。ロイは目を閉じ、故郷を思い出す。そして、ゆっくりと首を振った。
「いや・・・俺はずっと家族と暮らしていきたかった。平和に・・・でも」
俯くように自分の掌を見つめていたリーエンが顔を上げた。

「ボンゴだけじゃない、今、ザイガの平和が奪われようとしている。そして俺には力がある。それなのに戦わずにそれを見ているなんて真似は出来ない。だから俺にはこの力が必要なんだ」

「・・・・・・」

リーエンは黙ってじっとロイを見ていた。その少年は小さい頃から戦士として鍛えられてきた自分と比べてなんと華奢な体つきなのだろう。

――――それなのに、この子は戦うことを選んだのだ。

「しかし、私にはカルコンというものが悪だとは思えない・・・」

ロイがこちらを睨んだ。その目は猛猛しい炎が宿っているように爛々と輝いている。それは、百戦錬磨のリーエンにすら恐れを抱かせる表情だった。

「落ち着け。・・・確かに今のカルコンは独りよがりな独裁者だ。自分の目的の為にボンゴを踏み台にした。しかし、しかしだ。もし、魔物を駆逐する事が出来れば、それは人間の平和を意味する。魔物と戦い続けた私達には、その考えが分かる気がする」

ロイは奥歯を噛み締めた。怒りがふつふつと湧き上がってきて、怒鳴り散らしてやりたかった。しかし、ある感情がそれを阻んだ。それは魔物への怒りと恐怖。その相反する想いが頭の中をぐるぐると駆け巡っている。

ロイは上半身を倒し、ベットに仰向けに倒れ込んだ。リーエンが驚き、腰を上げた。

「・・・ウッ・・・ウッ・・・」

嗚咽が静寂の中の部屋に響いた。ロイは右手で顔を覆っている。その目からあふれ出しているのは、旅立った日に捨ててきたはずの涙だった。

「じゃあ・・・俺はどうすればいいんだ・・・・・・?家族を奪わ

れた怒りと寂しさを忘れられるほど、俺は大人じゃない」

ベットに横になり、涙を流すロイに、リーエンは微笑みかけた。

「怒りたければ怒ればいい。寂しければ泣けばいい、苦しければ叫べばいい・・・。何も我慢する必要なんてない。お前はまだ子供なのだから」

そう、なんてことのない普通の子供。それが突然戦いを余儀なくされた。リーエンと似た境遇ではあるが、ロイにとってそれはあまりにも突然で、その嘆きを口に出す暇もなかったのだろう。

リーエンはロイの胸にそっと手を置いた。

「お前はやはり、一度そのカルコンという男に会ったほうがいい。カルコンが魔物を駆逐すること、世界を掌握すること、お前の故郷を奪い去ったこと・・・。果たしてそれがザイガの為に良いことなのか。世界を見て廻ったお前の目で判断するべきだ」

顔を覆ったまま、ロイは頷いた。リーエンは立ち上がり、ドアに向かった。

「腹が減ったな、飯を持ってきてやるからここで待っておけ」

そう言ってドアを開いたリーエンに、背後からロイが声をかけた。

「ありがとう、リーエン」

リーエンはふっと笑って部屋を出た。

第12話　破滅の村　2

真夜中。村は寝静まり、木々が風に揺られてざわめく音だけがかすかに聞こえてくる。その音を聞きながら、ロイは天井を見つめていた。まだ熱は引かなかったが、心はいつになく落ち着いていた。

――あんなに泣いたのは、ボンゴを出た時以来だな。

不思議とボンゴのことを思い出しても寂しい気持ちにはならなかった。それはきっと、その痛みを人に分けたからだろう。

「『二人で心を分かち合えば、喜びは倍になり、悲しみは半分になるんだ』って、父ちゃんが言ってたっけ」

自然と笑みがこぼれた。掌を掲げ、握って見せた。いつのまにかその手は大きくなっている。そんなことに気づくこともないほど、今までの自分の心は荒んでいたのだろうか。

ロイがそう思ったとき、木々のざわめきがはっきりと聞こえた。

「？」

風が強くなったのだろうか。ロイはいぶかしんで、小窓から外を見た。

「・・・・・っ！！」

月の光に照らされる黒い塊が見える。一度目を瞑って目を凝らす。それは紛れもなく、魔物の一団だった。

「ガーレイシャ！！」

しかも、数は前回よりも多く、中でも一体、ほかと比べ物にもならないほど巨大なものがいる。

「くそっ」

ロイはベットを飛び降り、剣をつかんだ。まだ少し眩暈がしたが、そんなことを気にしている余裕はなかった。内開きのドアを勢いよ

く開け、外に出ようとしたとき、強い力によって引き戻された。
「・・・・・っ！リーエン！！外に魔物が！！」
ロイは叫んだ。リーエンは強張った顔をして頷いた。この襲撃はさしものリーエンにも予想外だったのだろう。
「分かってる。俺たちは今から応戦する。だが、ロイ。お前はここに残れ」
ロイにはリーエンの言っている言葉の意味が判らなかった。
「どういう事だよ！？俺も戦う！！」
リーエンは首を振った。
「お前のような子どもを戦わせるわけにはいかない」
二人はにらみ合った。その空気に堪りかね、ロイは剣を握ると、強引に部屋を出ようとした。
ゴッ
腹に衝撃を感じた。意識が次第に遠のいていく。
「リー・・・エン・・・」
ドサッと音をたて、ロイはうつ伏せに倒れた。その頭をなで、リーエンは呟く。

「許せ、ロイ。お前はまだ、死んではいけない」

耳を劈く大きな声に、ロイは目を覚ました。腹に痛みを覚え、リーエンに殴られて気を失わされたことを思い出した。
「そうだ、魔物だ！」
ロイは勢いよく家を飛び出した。
「あ・・・あ・・・」
そこには凄惨な光景が広がっていた。人と魔物の死体が入り混じり、死臭が鼻を付く。人間は老人も女も子どもも、皆武器を手に握ったまま息絶えていた。

ゲギャアアア

村の中心、矢倉の下で大きな魔物と人間とが向かいっていた。その人間の手の中にはぐったりとした女性の姿があった。

「リーエン！！」

リーエンは右手に剣を持ち、左手でアレルナの亡骸を抱え、魔物と対峙していた。その体から発せられる闘気は、ロイがそれ以上近づくことを拒んでいた。

「おおおおお！」

リーエンが剣を振り上げ、魔物も爪を振り上げた。互いにそれを振り下ろす。一瞬間を置いて、魔物の首が吹き飛んだ。

「やった！リー・・・」

「ぐっ！」

リーエンの首筋から血が噴き出る。そして、アレルナを抱えたままその場に倒れ伏した。

「リーエン！！」

ロイは一目散にリーエンの側に駆け寄り、血が流れる首筋を布で押さえた。しかし、間近で確認してみると、傷は首筋だけではない。全身のあらゆる部分の皮膚が裂け、肉が断たれ、骨が折れていた。とっくに死んでいてもおかしくなく、今から治療しても間に合うわけもない絶望的な損傷。最後まで生き、戦ったのはリーエンの執念以外の何物でもない。

「リーエン。どうして・・・」

涙がリーエンの顔にぽたぽたと落ちる。リーエンの目が、ロイの顔を捉えた。

「ああ、ロイ。無事だったか。・・・良かった」

その声はか細く、今にも息絶えてしまいそうだった。しかしそんな状態にもかかわらず、リーエンはロイを見て笑った。

ロイがリーエンの体を抱きかかえる。リーエンは右手の剣を離し、

その手でロイの顔に触れた。
リーエンは再度微笑む。
「何でだよ、リーエン！どうして俺にも戦わせてくれなかった！！」
涙が落ちる。リーエンは口から血を吐きながらか細い声で言った。
「お前を死なせたくなかった。俺達の戦いに巻き込むわけにはいかなかった・・・」
リーエンを抱えるロイの腕に力がこもる。涙が止め処なく溢れ出ていた。
「お前に頼みがある。ここに俺達の墓を作って、弔って欲しい。・・・いつまでも、この地を守れるように」
それは静かな願いだった。戦士として生き、死後も戦士でい続けること。それがリーエンの願い。ロイは何度も頷いた。
「分かった、約束する」
「そして、決して歩みを止めるな。世界の真実を・・・ゴホッ」
「リーエン！！」
リーエンが血を吐き、ロイの顔にかかる。しかし、そんなもの微塵も気にならなかった。
「はあ、はあ・・・世界の真実を見極めて、生き続けろ」
ロイは目を強く瞑って涙をこらえようとした。
「感情をこらえる必要はないんだ。怒りたければ怒ればいい。寂しければ泣けばいい、苦しければ叫べばいい・・・。そう言ったろ？」
リーエンはまた微笑んだ。反対にロイの目からは涙が止め処なくあふれ出していた。
「だが、ロイ。憎しみを持つな。私は幸せだ。戦士として生まれ、戦士として育てられてきた。そして最愛の人と、仲間と共に死ぬことが出来た。・・・戦士として」
リーエンは残りわずかに残る力でアレルナをぎゅっと抱きしめた。
その力に呼応して、首筋の血が吹き出る。そして、リーエンは天を見上げた。雲ひとつない青々とした空がそこには広がっていた。戦士たちが守った空だ。

「――ああ、なんて美しい世界なんだろう・・・・・・」

そして、リーエンは目を瞑った。その表情は安らかに微笑んでいる。

「リーエン!?リーエン!!リーエン!!!」

ロイはその体を揺する。何度も、何度も・・・。しかし、リーエンはもうピクリとも動かない。

「・・・リーエン」

ロイは嘆き、虚空を仰ぐ。涙は頬を伝って地面へと流れ、慟哭が虚空へと響き渡った。

だが、その声を聞き届けるものはもうどこにもいなかった――

第12話　破滅の村　3

「遅かったか・・・」
その男は村の様子を見て落胆した。年は20代前半といったところだろうか。痩身な上に小さめの服を着ているのでかなり細く見える。村の建物はめちゃくちゃに破壊され、地面か血の海かの判断も付けがたいほどの惨状がそこにはあった。
「死臭が酷い」
そう呟き、鼻を覆った。しかし、すぐに怪訝な表情に戻った。村ひとつ破壊されたというのに村人の姿も死体もひとつとしてない。目に付くものはどれも人より少し大きい魔物の死骸だけだ。
「・・・おかしい」
そう呟くと、腰に下げている短銃に手をかけながら足を進めた。一歩踏み出すごとに血がピチャピチャと音が響く。それがなんとも気味悪く、男は進む足を否応なく速めた。しかし、足を出すたびに死臭は増し、それに比例するように血の量が増していった。
「・・・あれは？」
大きな建物が見えた。血が跳ねて靴を汚さないように気をつけながら男は急いだ。
――ザッ、ザッ、ザッ
布の擦れるような音が響いていた。それはその大きな建物に近づくほど大きくなる。その建物が見張り台だと判断できた時、その下に一人の少年の姿が見えた。
「・・・・・！？」
少年は手にスコップを持ち、穴に土をかぶせている。かぶせられた穴の一つ一つは人間ほどの大きさがあり、それが何十とある。どうやら墓らしかった。男は一心不乱に墓を掘る少年の姿になにか根源的な恐怖を感じずに入られなかった。
「お前は何者だ」

そう言いながら、男の両手は両腿の銃にかけられていた。その少年が不穏な動きを見せればすぐさま発砲できるように。

少年はその声に気が付くと、地面にスコップを突き刺し、ゆっくりと振り向いた。茶色い髪に白い肌。確かに背格好は少年のそれだが、その無表情の顔と雰囲気が違和感を醸し出していた。目には淀んだ泥のように光がない。

その少年には見覚えがあった。

「お前はロイ・・・・・・ロイ＝クレイス」

ロイと言う名の少年は目を細め、その顔を思い出していた。一度しか見たことはなかったが、はっきりと覚えている。ロイは剣に手をかけた。

「カルコンの・・・手先だな！？」

空気がぴりぴりと張り詰めた。そのあまりにも鋭い殺気に男は震え上がった。男は銃から手を離し、降参するように両手を挙げた。

「そうだ。僕はディアボロスの三騎士の一人、リック＝ローラン。魔物を倒す援護に来たのだが、遅かったらしい・・・」

その男の言葉はとても信用できなかったが、闘気もないその男の風体にロイは右手を剣から離した。それを合図に両腕を下ろすと、リックは腕を顎に当てた。

「これがロイ＝クレイス。・・・カルコン様の弟子か。そして村人の墓を作っている。・・・なぜだ？」

リックには独り言を言う癖があった。

「おい、あんた！」

ブツブツと独り言を言っているリックにロイが言った。

「カルコンは今どこにいる」

リックはロイをじっと見つめた。今度は剣に手をかけてこそいないものの、重苦しい殺気は先ほどと変わらない。

「残念ながら教えられない。カルコン様はそうは言っていなかったが、僕は君を敵じゃないと考えられるほど楽天家じゃない」

リックはロイのほうへと歩み出した。

「だがその前に墓作りを手伝おう。何をすればいい？」
「は？」
ロイは困惑した。リックはそれを気にも留めず、スコップを持って土を盛ろうとしていた。ロイはスコップを強引に奪い返すと、リックは肩をすくめた。
「いいだろ、別に。僕が間に合えば村は救えた。これは最低限の懺悔だ。それともほかに仕事でもあるのか？」
ロイは少し考え、手を広げて言った。
「これくらいの大きさで、平たい岩を探してくれ」
リックはわかったと言い、「岩、岩・・・」と独り言をいいながら森へと向かった。その後姿を困惑しながらロイは見ていた。

「お～～い、見つけたぞ！」
そう叫びながらリックは駆け寄ってきた。しかし、その手には何も持っっていない。先ほどと変わらない格好であった。
「あっちだ、あっちの森の中」
リックはそういいながら指差した。ロイは全ての墓を作り終えて休んでいた重い腰を上げ、不本意ながらもリックに従って後をついて行った。
「おい、あんた。それくらい自分で持って来れないのか？」
さっきの「自分がいれば村は救えた」などという言葉は大言壮語だったということだろうか。
リックがぴたりと足を止めた。
「そういえば、君は僕の術を知らないんだったな。そうだな・・・その剣で僕を斬ってみるといい」
「どういうことだ？」
同じように足を止めたロイにリックは背を向けたまま肩をすくめた。
「どうせ、敵の幹部なんだ。斬れれば幸運だろう？」
「・・・後悔するなよ」

そういってロイは剣を抜き、その腕を切り落とそうと振り下ろした。
「あれ？・・・切れない」
剣はリックの体をすり抜けた。
「そういうこと」
「！！」
そういいながら振り返ったリックの体前方には色がなかった。顔の全て、そして胸も腹も足も全て影のように真っ黒だった。
「これが僕の術、“光”だ。光の屈折を使って錯覚を引き起こさせる。いや、正しくは錯視か」
その姿が消え、少し前方にリックの姿が現れた。リックは木の葉をちぎって自分が本物であることをアピールした。
「カルコン様が言っていた。『完璧すぎる力は暴力しか生まない。能力の限界は人間としての本分を忘れないためのくさびだと俺は思っている。このくさびがあるからこそ、我々は体を鍛え、強くなろうとするのだ』ってな。僕の術には力が無い。それがくさびだ」
再び歩き出したリックの後を追いながら、ロイは思った。

――――似ている・・・。リートの能力“映像”に。それに、“熱”に似た能力をレギュラスが乗っていた魔物も持っていた。やはり、術と能力に境界線はないのか・・・？

ロイは昨日見た自分が妖怪になる夢を思い出し、ぶるっと体を震わせた。
「・・・これだ」
リックは立ち止まった。そこにはロイが示したような形と大きさの岩があった。なるほど、確かに生身の人間一人では、運ぶのは不可能だ。
「手伝おうか？」
リックは言ったが、ロイは首を振った。敵にそこまでしてもらう謂れはなかった。

「・・・ふう」
ロイは小さく息を吐くと、神経を集中させ、術を発動した。前回の戦闘での限界は既に癒えていた。強化した筋力で悠々と岩を持ち上げると、村へと運び出した。その後にリックが続いて歩く。
「・・・凄いな。たった一年足らずでここまで術をものにするとは。さすがカルコン様が見込んだ少年だ」
ブツブツと、独り言を言いながら。

「・・・ふう」
先程よりも大きく息を吐き、ロイは墓の群れの正面に岩を立てた。疲労が募ったが、さして気にするほどではなかった。筋力量のように術の容量も増えたのかもしれない。そういえば、容量は増やすことができるといつだったかギンが言っていた。
「それをどうするんだ?」
ロイの後ろでリックが訊ねた。ロイは返事をせずに息を整えると、もう一度神経を集中させた。熱を、指先に集める。
ロイの指先が光り輝くのをリックは見た。その光景よりも、瞬時に高熱を1点に集めるセンスに驚きが隠せなかった。
“熱”の術は使用する時、常に自分の身を守らねばならない為、非常に燃費が悪いと聞いていた。しかし、目の前の少年はそれすら厭わない。リックの想像を絶するほどの力を秘めているのかもしれない。
「まるで・・・魔物みたいだ」
二人の距離は近く、その呟きは聞かれて然るべきだったが、集中しているロイの耳には届いていなかった。
ロイは頬に汗をたらしながら、ゆっくりと指先を岩に近づけていった。
「そんな、無茶な。岩の融点は４０００度近いんだぞ!?カルコン様の能力でも苦労するほどの温度だ。一点集中させてもそう出来るものじゃ・・・」

必死にその行為を否定しようとしたリックは、その目でそれが可能であることを確認せざるを得なかった。
ロイは岩を溶かし、文字を刻んだ。

〈リーエン、アレルナ、そしてガルガイアの戦士たち、自らの村を守り、ここに眠る〉

「・・・ぷはっ！！」
ロイが勢いよく息を吐いた。はあはあ、と肩で息をしている。その場に倒れ空を見上げる。顔や服の血は既に渇いて久しかった。太陽は頂点を越え、下り坂に差し掛かっていた。
――ああ、きれいだなあ
リーエンの最後の言葉。しかし、ロイにはその空がきれいだとは思えなかった。なぜか涙が溢れ出てきた。それは目尻を伝わり地面に消える。
「・・・・・・」
その姿を、リックは無言で眺めていた。

ロイが立ち上がると、リックが手持ちの食糧をロイに差し出した。
もちろんロイはそれを受け取らない。
「毒は入ってないさ」
リックが少しだけかじる。ロイは空腹だったのも手伝ってそれを口に入れてしまった。確かに毒は入っていなかった。
「ところで、ロイ。やはり君もディアボロスに入らないか？カルコン様も君を見込んでいるし、僕も君の力は凄まじいと思う。共に世界を救わないか？」
リックはそうは言ってみたものの、返事を予想していた。ふざけるな、俺の家族を奪った奴の味方になれるはずがない。必ず潰してやる。・・・そう言うに決まっている。
そして、そのつもりならば、ここで戦わなくてはならない。自分の

盟主はロイ＝クレイスを殺すことをよしとしないだろうが、そんな悠長なことを言っていては手の打ちようがなくなる。そんな予感がして、両腿の拳銃に手をかけた。

「今は、それは出来ない」

「・・・・・今は？」

だが、ロイの返答は想像だにしないものだった。

「確かに俺はカルコンを憎んでいる。でも、あそこに眠っている人に誓ったんだ」

ロイは石碑のすぐ後ろにある墓を指差した。

「『世界の真実を見極めろ』ってな。俺は子どもだ。世界のことを何も知らない。今はディアボロス――カルコンが正しいのかどうか分からないんだ。・・・だから、今は出来ない」

「・・・・・」

リックはぐうの音も出なかった。しだいに警戒は薄れ、敵としてではなく目の前の少年を見た。少年の目はどこまでもまっすぐで、その言葉が真実であることが見て取れた。

「そうか・・・。それじゃあ、ともに戦える日を楽しみにしている」

ロイは何も答えなかった。そんなのは御免だと返したかったが、目の前の男は悪だとはどうしても思えない。思えないけれどもボンゴ襲撃を許せたわけではない。２つの思いの中、ロイの心は揺れることなく、中立を保っていた。

「・・・いつか、会いに行くと、カルコンに伝えておいてくれ」

ロイは言った。リックは頷き、踵を返した。任務地に赴いた時には既に魔物も村も全滅していた、と報告しなければならない。

「リック！」

リックは足を止め、振り向いた。

「墓、手伝ってくれてありがとな」

少しだけ手を上げてロイが言う。リックは手を振ってそれに答えると、森の中へと消えていった。

ロイはその場所に尻餅をついた。村は閑散としている。木々のざわ

めきすら聞こえない。まるで音というものがこの世から消し飛ばされたかのように、静寂を保っていた。

「さて・・・」

ロイは無表情のまま、リーエンの家に入り、アレルナが洗ってくれた服に着替え、自分の荷物を確認した。ロイの胸元でギンのネックレスが躍っている。ロイはそれを固く握りしめた。

何一つ村の者を持っていくつもりがなかったが、アレルナが入れてくれたのだろう、袋に入っている保存食やら水やら、止血用の布やらはもらっていくことにした。既に日は傾いていた。明日の朝は早く出立しようと、ロイはベッドに横になった。

太陽が沈み、幾分か経った。月光が小窓から差し込み、そこに寝ている少年の顔を照らし出す。その少年の目尻には、ほんの少し月光を照らし返すものが煌めいていた。

第１３話　砂漠の少女　１

ロイがガルガイアを出てどれくらいの時間がたっただろうか。夜明け前に村を出て、何日か歩いた。その景色はとっくに砂漠へと移り変わっている。そして現在太陽は真上。布で頭を隠し、日射病を避けなければ直射日光で干物になってしまうだろう。しかし、その程度では避暑にすらならず、ロイは延々と続く砂漠の道を徘徊するかのように一定の調子で歩いている。

「・・・・・・」

既に暑いと言う独り言すら発することはなくなった。今までと違い、その暑さは生命を左右するもので、体力を消耗したくないという上に、風が強く、口を開けると砂が口の中へと投げ込まれていくからだ。そして何よりロイが落胆していたのは、雲ひとつない空と、砂しかない大地だった。たまに覗く枯れた草や石を見ると感動すら覚えるほどだ。もはや意識せずとも足は動き、目は砂の傾斜だけを追っていた。今、何を訊ねられても考えることは出来ないに違いない。目を瞑っていても砂はそこにあり、金色の光にもうんざりしていた。前方に巻き上がる砂が見える。恐らく砂嵐だろう。砂嵐には既に２、３度襲われていた。この砂漠は風が強く、ひとたび突風が吹くと、つむじ風となって砂を巻き上げる。それはゆっくりとこちらに近づいていた。砂嵐に巻き込まれれば、うずくまって通り過ぎるのを待つ以外に方法はない。しかし、見えたもののまだ遠かったので、もう少し近づいたら対処しようと決め、ロイは再び歩き出した。

「・・・・・・！！」

十分ほど歩いたとき、ロイはその違和感に気が付いた。まき上がる砂から逃げるようにして、一台の車がこちらへ走ってくる。そして、車を追うように、巨大な鳥のようなものが見えた。

「・・・襲われてるのか？」

口を布で覆いながらロイは呟いた。その大きな鳥のようなものは黒い塊を車の上に落とそうとしているようだ。車の運転席にはフードをすっぽり被った人間が乗っていて、左手で運転しながら、体を後方にひねり、右手で器用に鳥に大きな銃を向けて発砲していた。ロイは近づこうと少し足を速めた。

「・・・なんだ、あれ？」

驚嘆の声を出すと同時に、口の中に砂が入った。それを少ない唾と同時に吐き出し、もう一度前方を見る。

それは鳥のようで、しかし明らかに違っていた。

エンジン音が乾いた空に響く。同時に銃声が轟いた。運転手は今度は足でハンドルを操作し、両手で大きな銃を構え、撃ち始めた。器用なことをするものだと感心した時、鳥のようなものは黒い塊を落とした。

ドスと言う思い音がして、塊は砂の上に落ちた。そうとうな質量の物体のようで、きめ細かい砂が高く舞い上がる。どうやら先ほど巻き上げられた砂は風によってではなく、あの塊のせいらしい。車は辛うじてそれを避けたものの、明らかにバランスを崩したようで、運転手は銃を後部座席に投げるように置き、前を向いて運転に専念した。

「・・・・・・！！」

前方にいるロイに気づいたのだろう事が、フードの上からでも見て取れた。

「――――――」

運転手は何かを叫んでいるふうだったが、エンジン音で聞こえない。エンジン音は車よりもむしろ鳥のほうから聞こえてくる。鳥のような物はよく見ると体が鉄でつくられていた。巨大な鷲の様であるが、その大きさは車をすっぽりと覆いかぶせるほどであったし、羽の部分は小さな鉄が何枚も張りあわされている。風を切ると言うよりも、大きく羽ばたくと言う感じだった。足はなく、腹部から、金属の球を落としている。

ロイは車に向かって駆け出した。もしあれに襲われているのなら、助けてやらねばなるまい。事実、運転手がもう一度銃を取り、撃とうとしたが、弾切れで断念していた。それからはとても焦ったようにひたすらアクセルを踏み込み、車を走らせていた。
足を一歩踏み出すごとに砂の中にめり込んでいくが、既に靴の中は砂だらけで、気にするほどのことでもなかった。ロイは剣を抜く。
「――――――」
運転手はまた叫んだが、今度は黒い塊を落とす音にさえぎられた。
続いてロイが叫んだ。

「止まれ！！」

ロイを轢く寸前だったからか、それとも声が聞こえたからか、車が急ブレーキをかけた。タイヤは砂の上ですべり、車体は９０度右にきれた。ロイはそこまで駆けると、ボンネットを踏み台にして高く跳び上がった。
剣に熱を込める。機械は動力の中の燃料で動いているとグリンに教わったことがある。そしてそれは火に弱く、簡単に火がつくらしい。そのまま剣を振りかぶり、その機械の羽の付け根の鉄と鉄の間に差し込みんだ。肉を裂くような柔らかい感触が手に残った。それはつまり、鉄でつくられているのは外側だけで、内側は獣や魔物と同じだという事だろう。ロイは、そのまま十メートルほど落下したが、上手く足から砂の地面に着地した。
ドオオオン
機械は空中で爆発した。炎上したままロイの頭の上に落下してくる。転がるようにして辛うじて逃げた。
「あっち！」
なんとか衝突は避けられたようだが、熱された金属片が手の甲に触れた。少し無茶が過ぎたようだ。
手の甲をさすりながら立ち上がると、振り返ってその機械を見た。

燃え続けているそれは完全に沈黙し、ガラクタと成り果てていた。
黒い異臭を放つ煙だけが、モクモクと立ち上がっていた。
「・・・・・・」
その光景を見て運転手はフードを取り、呆然としていた。
「女？」
そこには金色の髪を翻す少女の姿があった。少女は信じられないと言う表情で、機械とロイとを交互に見ている。
立ち込める黒い煙と陽炎のせいで、少女の姿は少し歪んで見えた。
しかし、フードを取り、地面に落としたのは見て取れた。フードは薄手の布で、日射しから体を守るために全身を覆うものらしい。
その炎の激しさはとどまることを知らず、依然として燃え続けている。しかし、その鳥が完全に沈黙したことを確認すると、ロイは剣を納めた。そのとき、陽炎の向こうの影がふいに動いた。
「すっご～～～～い！！」
あまりにも感嘆したその声に驚き、身をすくませたロイを無視し、少女は跳びついて来た。間一髪のところで後ろに下がり、それを避けた。瞬間的に感じた恐怖に額には汗が滲む。それは照りつける太陽や、燃え続ける炎のせいだけではないだろう。人生経験の少ないロイにとって初対面の相手に飛び掛るようなテンションの高い人間に対しての抵抗力は皆無なのであった。
「すごい！！」
間髪入れず二撃目が来る。慣れない砂の足場に掬われ、今度は回避する事はかなわなかった。少女の手ががっちりとロイの手を上から掴む。恐らく人間同士の“手をつなぐ”という行為はこうではないはずだ。恐らく今の状況を見た人１００人のうちのほとんどは“手を捕まえた”と表現するだろう。２，３人はボケたような表現の仕方をするかもしれないが・・・。
少女は感激のあまり手をガッチリと両手でつかみながらも、ロイのことを不審そうに見た。その表情を見てロイは納得する。確かに豪傑な男ならいざ知れず、ロイのような少年がこれだけの事をしたと

いうのは信じられないことだのはずだ。とりあえず手を“握った”まま、先ほどとは違う警戒の目でロイをじろじろ見た。だんだんと手にこもる力が強くなる。

「・・・・・・」

ロイもロイで少女を警戒を込めた目で見る。自分が不審だという事は十分に自覚しているが、こんな砂漠で1人で戦っていた少女もかなり不審だ。じっと見つめると、少女はなかなか整った顔立ちをしていた。ちゃんとした格好をすれば、シルクと並んでいても違和感は無いだろう。ただし、今は女性のものとは思えない武骨な格好をしていた。金の髪は腰まで伸び、青い両眼はどこまでも深い。その少女は少女と言ってもロイより少し上、16，7歳くらいに見えた。

「・・・何？」

ロイの視線に気づき、少女が問う。それは突然手を“捕まえ”られて、じろじろ見られている俺のセリフだという大きなつっこみを心の中で盛大にしたあと、ロイは答えた。

「手、痛いんだが・・・」

ああ、と少女は思い出したように手を離した。ロイの日に焼けてもまだ白い肌に、赤い手の痕がくっきりと残っている。ロイは両手を少し振って血行をよくする。

「あなた、何者なの？」

怪訝そうな目と警戒は全く解けていない、いやむしろ先程よりも増したようだ。

「・・・ロイ＝クレイスだ」

その答えは質問の的を得ていないと自分の中では分かっていたが、そう答えた。少女がロイを警戒しているように、ロイもまた少女を警戒している。車を足で運転しつつ大きな銃を乱射している少女を普通だと形容できるほど、ロイは適当な人生を歩んでいないつもりだ。

「そう・・・あたしはエリナリア＝スタンフィーナよ。エリナって呼んでね」

状況によっては友好関係が芽生えるようなセリフだが、剣呑な少女の声色はそれを許そうとしない。少女はロイと一歩の間隔を取ったまま、言った。

「・・・何をしたの？ただ斬ったわけじゃないんでしょう？あの機械は鋼でできていて、銃でさえほとんど効かないんだから」

ロイは肩をすくませ、少し微笑んで見せた。あえて言うなら斬ったのは鉄の部分ではなく肉体の部分で、倒したのは斬撃ではなく、燃料を爆発させることが偶然できたからなのだが。

「・・・企業秘密だ」

「・・・は？」

少女は面を食らったような顔をした。しかし、元の険しい表情に戻ると、いっそう敵愾心を募らせた。

「・・・そんなことより」

リーエンのような戦士ならともかく、ごく普通の一般人（とてもそうは見えないが、一応そういう事にしておこう）に術のことをばらすわけにもいかない。ロイはできるだけ自然に話をそらそうとした。ロイの拙いコミュニケーション能力では不自然極まりなかったのだが。

「さっきの布、羽織ってなくていいのか？火傷するぞ？」

「あなたはどうなの？」

「・・・・・」

息もつかせないほど早く切り返してきた。確かに、先ほど走るときに邪魔になったので布は投げ捨てたから、そのセリフは自分自身にも言ってやらなければならない。だがあれは今頃砂の中に埋もれているだろう。とても探す気にはなれない。

「・・・ふぅ、まあ、いいわ」

少女は軽く息を吐き、警戒を解いた。

「助けてくれたんだから敵じゃあないんでしょう？一応信用するわ」

「敵？」

ロイのその反応を見て、少女は首を傾げた。

「ああ・・・あんた、ドートリアかカルタゴラの人間か！」
「ドートリアよ！カルタゴラなんかと一緒にしないで！」
少女はむきになって言った。よほど敵国と同一視されたくないらしい。ロイとしてはどちらも同じように感じられるのだが、それは伏せておこう。
「この砂漠を東へ歩いてたって事は、あなたもドートリアを目指しているんでしょう？送ってあげるわ。車に乗って」
一度断ろうとしたが、却下された。この少女、相当強引だ。シルクもこんな感じだったからこの年ごろの女性というものはこれが普通なのだろうか。残念ながらロイの少ない経験では断言できない。そう思いながら助手席に乗ると、少女はエンジンをかけた。必要以上に肩に力が入っている気がする。どうやら覚悟を決めておいた方がよさそうだ。
「わっ」
少女はいきなりアクセルを思いっきり踏んだ。後輪は砂を捕らえきれずしばらく空回りしていたが、やがて一気に走り出した。突然の勢いに首は後ろに引かれ、ガクンと言う音が脳に響いた。ムチ打ちになりそうだった。
「ああ、ごめんね。あたし運転はあんまり得意じゃないのよ」
そう言いながら少女はいきなりハンドルを右に切った。砂丘を回避するためなのだろうが、車体は右に傾き、左の車輪が少し浮いた。
「・・・先に言ってくれ」
ロイはそう呟いたが、その声は少女には届いていなかった。真剣な顔つきで前を見ている。ロイは大きく息を吐いた。すると少女が前を見たまま一言――
「溜息をつくと、幸せが逃げるわよ」
もはやただただ苦笑いするしかなかった。

第１３話　砂漠の少女　２

太陽は変わらず頭上を照り付けている。じりじりと焦がされるような感覚。体力が奪われているため、二人の口数は自然と少なくなっていった。もっとも、ロイは今、自分が乗っている車がいつ横転するかと恐怖し、喋る気もなくしていたのだが・・・。車が砂丘を越えるたびに前輪が砂を巻き上げ、ロイめがけて襲い掛かってくる。衣服の上に積もる砂を払いのけることが無駄だと気づいたのはどれほど前だっただろうか。すっかりと砂に覆われてしまい、傍から見ると砂を着ていると言われてしまうだろう程になっている。ドートリアはまだ見えない。

「なあ・・・・・・？」

道が平坦なことを確認し、ロイは口を開く。口の周りの砂が少し落ちた。大きな布で身を包んでいる少女を羨ましく思う。

「・・・・・・まだ？」

「うるさいわね！！」

息もつかせないほどの勢いで少女が反論した。始めは車輪の跡を行けば大丈夫と意気込んでいた彼女だったが、２度の砂嵐に襲われ完全に帰り道を見失ってしまってからは徐々に機嫌が悪くなっていた。勿論ロイの方は見ない。こんな平坦な道でそんなに肩に力を入れる必要はないだろう。

「あっ！何あれ！？」

前方に何か盛り上がったものが見える。少女は嬉しそうに声をあげ、アクセルを踏み、それに近づいた。

「・・・・・・」

ロイは助手席を降り、体の砂を払うと、それに近づいた。大きな鳥のような機械がそこに眠っていた。太陽光に照らされたボディは焼

けるように熱かったが、煙や炎はもう上がっていなかった。
「何だろうな?これは。う〜〜む、ドートリア軍が撃退した機械だろうか?ということは近くに国がある。まったくもってはっぴぃなことだな、おい」
間違いなくこれはロイの仕業だった。
ロイはたまりにたまった鬱憤を吐き出し、大げさなボディランゲージを交えながらそうまくし立てた。
「・・・・・・で?」
少女はというと運転席で完全に固まっていた。エンジンを切り、うなだれている。
「うう」
と弱々しい声を上げた。先ほど力の入っていた反動だろうか、その両肩はがっくりと下がってしまっている。しかしロイの口撃はやまない。
「なんと!羽の付け根に斬撃の痕があるな。これは斬られてから二時間以上経っている・・・!」
ボディをコンコンと二回ノックした。火傷しそうに熱かったが、それを顔に出さずに少女に近づき、少女の目の前で腕を大きく広げた。
「ううう」
「・・・さて、どうしましょうか?」
言いながら、こんなに悪態をつくのは久々かもしれないとロイは思った。ギンの所にいたときの自分はこんな感じだっただろうか。グリンのところでもリーエンのところでも相手が相手だけに当然だったのかもしれないが、こんなふうに話したことはなかった。恐らく自分を大人のように見せたかったのだろう。それで今まで大人になったかのような錯覚に陥っていたが、ガルガイアでそうでないと気づいた。
もっとも、もしかしたらこんな感じに遠まわしに悪態をつくギンのような話し方がロイの“大人”の姿なのかもしれないのだけれど・・・。

ロイが運転席の左に廻ると、少女はキッとこちらを睨んだ。
その突然の動作にも驚いたが、何よりも驚いたことは、少女の両目が涙で潤んでいたことだった。ボンゴの子供以外で人を泣かせたのは初めての経験。
「責めたければ堂々と責めればいいでしょ！！」
少女は歯をくいしばり、涙をこらえているようだった。これにはさすがのロイも申し訳ない気持ちになった。
「いや・・・えっと・・・あのー、その・・・ごめん、言い過ぎた」
少女は下唇をかんでいる。じっとロイの顔を数秒見つめると、また下を向いた。その表情はフードに隠れて見えなかったが、泣いているようにも見えた。
「ま、落ち着け。死ぬわけじゃないさ」
その背中をポンポンと叩く。それは紛れもない少女の背中で小さい。少なくともロイはそう感じた。自分の母親はもっと大きい背中を持っていた。それは母親だから大きく見えていただけなのかもしれないが、もう触れることはできないのだから確かめようがない。その背中とは違って、今触れた小さな背中はその背中は嗚咽でかすかに揺れていた。
「・・・まあ、元の場所に戻れただけでも良かったじゃないか。俺なんかこんな小さかった頃、父ちゃんが出した舟で遭難しかかったことがあるんだ。釣りに出かけてさ、父ちゃんが途中で寝ちまったんだよ。俺はボーっと海を眺めてたらいつのまにか沖でさ。俺もう死ぬんだと思って大泣きしたんだよ。それに比べたらマシってもんだろ」
「・・・・・・」
少女は何も言わなかったが、少し嗚咽が収まってきたようだ。もう一度、背中をポンポンと叩く。ロイの手を振り払った後、フードの陰の中で、少女が尋ねた。
「・・・それからどうなったの？」
ロイはほっと胸をなでおろし、答えた。

「ああ、俺の泣き声に父ちゃんが気づいて起きたんだけどさ、太陽の位置とか風向きとかで方角測って、すぐに港の方向を見つけてさ。そのままま っすぐ帰れたんだ。なんでも父ちゃんは漁場の風の変化は熟知してるって言ってたけど、釣りを忘れるくらいはテンパってたらしいな」

少女は顔を上げた。目尻の涙を拭く。目は赤く染まっていたが、嗚咽は収まっていた。

「・・・ありがと、ロイ」

少女に見つめられ、名前を呼ばれただけで、心臓が高鳴るような錯覚を覚えた。何か気恥ずかしい気持ちになる。

「それでもどうしましょう。砂の海じゃ風も分からないでしょ？・・・もっともあなたのお父さんがここにいればの話だけれど・・・」

現実世界にグイっと引き寄せられたような感じがした。現状が危ういことに代わりはない。まだ日没まで時間があるが、移動時間を考えると、早々に決断しなければならない。

「・・・あんた、こんなことは初めてなのか？」

ロイが神妙な面持ちで尋ねると、少女は肩をすくめた。

「それどころか私は一人で国の外に出るのも初めてよ」

そう言った少女は少し得意げに見えなくもない。ロイはあちゃーと右手で額を覆う。予想以上に後先考えない性格のようだ。

「それよりロイ、その『あんた』ってのやめてくれない？なんだか距離を置かれている気がするわ」

右手の指の隙間から少女を見た。どうやら、思った以上に気――と言うよりも精神力が強いらしい。ロイは右手で頭をかき、肩をすくませていった。

「じゃあ、なんだ。『あんた』じゃなければ『貴女』か？それともももう少し親しげなふうに――」

少女は少し剣呑さを募らせている。ロイは一瞬間を置き、言った。

「――『貴様』？」

「・・・・・」
少女は無言で立ち上がり、車から降りると、ロイの正面に立ち、左手を掲げ、ロイめがけてチョップした。
「いって～～」
さして力を込めてはいないふうだったが、その言葉が口をついて出てきた。少女は腰に手を当てていった。
「エ・リ・ナ、よ！エリナリア＝スタンフィーナ！！」
頬を膨らませ、そっぽを向く。ロイはやれやれと肩をすくめた。
「わるかったよ・・・」
エリナがチラッとこちらを見た。
「スタンフィーナさん！！」
今度もチョップが来るだろうと心構えをしていたが、思いもよらないローキックが右脚を直撃して、膝がガクッと崩れた。
「いや、冗談だ・・・・・エリナ」
鬼だこの人。冗談が通じない。そんなロイの気持ちをよそに、エリナはニッコリと微笑み、腰に手を当てると、
「それでいいのよ」
と言った。

第１３話　砂漠の少女　３

それから３０分ほど経っただろうか。日は東に傾き始めた。まだ涼しいと言うには太陽の力は強すぎたが、先程よりはマシ、と言う感じだった。ロイは袋から水筒を取り出し、少し口に含んだ。エリナも自分の水筒から水を飲む。あからさまな困惑を面に出していないものの、状況の悪さを感じさせるような無表情だった。

暑さは次第に和らいでいたが、帰り道がわからず立ち往生しているのは変わっていない。

「さて、どうしたものか」

ロイが腰に手を当てて体を反らせながら言った。大した解決策は返ってこないと分かってはいたが、どうにも沈黙を続ける気に離れなかった。

「何かないのか？」

言いながら車の後部座席を探った。

「何にもないわよ」

と呆れた声が返ってきた。そこにあったのは先ほど持っていた大きな銃が一丁、ハンドガンが2丁と弾薬、そして何か筒状のものがあった。

「ん？なんだこれ？」

ロイは手に取ったものをエリナに見せた。その筒の端には紐が付いている。

「あっ、忘れてたっ！！」

エリナが身を乗り出して、それをロイから奪った。体が触れそうだったので、ロイはあわてて身を引いた。エリナはその筒が壊れてないかを注意深く確認しながら言う。

「信号弾よ。これを引くと赤い煙が上がるの。運がよければ助けが来るわ」

嬉々とした表情でガッツポーズを決めた。
「早く気づけ!!」
ロイが叫んだ。エリナはしょうがないでしょと言い放って車から降りた。
「結構面倒な事になるのよ。使い勝手が悪いから記憶から消去してたの!当たり前だけど、これは特定の人だけに見えるってもんじゃないんだから」
「?」
ロイが怪訝な表情で首をかしげたのを見て、エリナは言い放った。
「忘れたの?あたしたちは戦争をしているのよ!?敵が来るって事もありえる。五分五分といったところね」
ああ、と口の中で呟き、さっきの様子を思い出していた。仮に敵が信号に気づけば先ほどの機械がいくつも襲ってくるかもしれない。それに太刀打ちするような戦力はエリナにはないのだろう。そういうことだ。
「・・・ロイ、あなた腕はたつのよね?さっきのあれはまぐれじゃないわよね?」
心配そうにエリナが尋ねた。ロイは肩をすくめた。
「なんならこの車でも斬って見せようか?」
ふっとエリナが笑った。
「じゃあ、いくわよ!!」
車から離れると筒を上に向けて、紐を引いた。どういう原理なのかは知らないが、轟音と共に赤い煙が空高く打ちあがった。それは螺旋を描き、雲ひとつない空にまっすぐと上がっていった。
「へえ、すごいな」
ロイは感嘆を呟く。エリナがゴホゴホと咳き込みながら戻ってきた。フードの上に赤い粉がかかっている。
「良かった不発じゃなくて。不発だと今頃あたしはもっと赤い塊みたいになってたかしら。とにかく用心しておいてね。一応ここはドートリアの領地のはずだけど、敵が来るかもしれないから」

わかってる、と言って肩を回した。とは言ったものの、集団で攻められたらどうなるかはわからない。単体ならどうにかなるかもしれないけれど。さっきはかっこつけてみたが、もしかしたらまぐれだったかもしれない、と不安になった。

エリナは車に戻ると、布を脱いで少し払ってまた被り、運転席に座った。しばらく思案するようにして、ロイを見た。ロイは今度はどんな重要なことを言うのかと気構えをした。

「そういえば、ロイの出身はどこなの？」

雑談だった。

「・・・ケムトだ」

突然の質問に詰まったが、淡々と答えた。

「ふ～ん、そう」

エリナの相槌は思いの外素っ気無いものだった。砂漠を見渡し、それからロイを見た。その目はとても冷ややかだった。

「ひどい人ね」

そう冷淡に告げる。ロイにはわけがわからなかった。むしろロイ的にはかなり親切にしているつもりだ。

「わざわざ隠すこともないでしょう。そんなに親しくなるのが嫌かしら」

その表情は落ち込んでいるふうにも見える。なぜ嘘だとばれたのだろうか。ロイは焦りながら言った。

「いや、だからケムトだって。そこで育って、まだ二週間も経ってないかな、それくらい前に出て来たんだ」

ふ～～んと口を尖らせながら言う。

「ケムトのどこから海に出たんでしょうね？それともあなたはお父さんと釣りに行く夢でも見ていたのかしら？」

あっ、とロイは声を上げた。そして先ほど自分の小さい頃の話をした事を思い出した。

「・・・ああ、そういうことか」

目を逸らし、申し訳なさげにいった。

「それで、本当はどこなのかしら？」
語尾が必要以上に上がっているような印象を受けた。その口調は軽蔑のような冷ややかなものが含まれていて、責められている様な気分になる。いや、そこまで悪いことはしていないと思うのだけれど。
「ボンゴ・・・って言ってもわからないか。ケムトを更に南にいったところだ」
相槌はなかった。もしかしたらまだ疑っているのかもしれない。
「それで、何で旅をしてるの？」
「いや、それは・・・まあ、色々あってさ」
目を逸らし、砂漠を見る。夕暮れ、とは行かないまでも、太陽は既に西に沈みつつあった。信号はしだいに風になびき、東の方へと流れていた。この暗がりで信号は届くのだろうか。そして左側から冷たい視線を感じた。自然と背筋が伸びた。
「・・・助けてもらった恩もあるから仲良くしようと思っているのに・・・。そう、あなたは嫌なのね」
ちらっとエリナを見ると、冷淡な目がロイを責めている。その冷たさは恐怖すら感じるほどだ。
「ああ、もう！わかったよ！！」
ロイは半ばやけになり、頭をかいた。
「ボンゴは去年の夏に魔物に滅ぼされたんだよ。俺以外全員な！そんでもう村には居られないだろ！？だからこうして旅をしてるわけ！！オーケー？」
口早にそう言うと、エリナの動きも、冷ややかな目つきも止まった。様子をうかがうと、やや顔を赤く染め、恥じ入るように下を向いている。
「・・・ごめんなさい。そんなことだとは思わなくて・・・。えっと、その、無理に訊いたりして。最悪だよね、あたし・・・。ほんとにごめんなさい」
ロイはあたふたと手を振り、言った。
「いや、そんな気にしなくていいって。隠そうとしたのは俺の方な

んだから」
でも、とエリナは言う。
「・・・隠したかったのは、思い出したくなかったからでしょ？」
そういった顔を上げた少女の目は申し訳無さそうにロイを見上げていた。少しだけドキッとした。
「いや、そうじゃなくて・・・まあそれもなくはないけどボンゴなんて誰も知らないだろ？ケムトでも『いやそんな村ないだろ』って何度も疑われたんだ。だから言っても意味ないかと思ってさ」
勿論ジエルトンのことは伏せておく。エリナは顔を上げると、ごめんねと呟いた。ロイは微笑み首を振った。
思い出して苦しくなっても、誰かに負い目を感じさせても失われたものは帰ってこない。ならば、エリナに負い目を与えたくなかった。何より、一方的に謝られるのは、気持ちのいいものでもない。

ブロロロロロ

その時、鳴り響くエンジン音がロイの耳に飛び込んできた。ハッとしてそちらを見ると、太陽の沈むのと反対方向から砂煙と共に一台の車が近づいてくるのが見えた。かなり距離が離れているが、それでも近くのように音が聞こえてくるのは強い向かい風が原因だろう。
「エリナ、どっちだ？」
ロイは神妙な面持ちでエリナに訊ねた。エリナは首を振り、わからないと答えた。車を降りると剣を抜いた。
（どうやら複数じゃないらしい。だったら先制すれば何とかなる）
ロイの二つの細めた目がその車に注がれる。もはや耳には風の音は聞こえず、舞う砂が皮膚に当たっても何も感じなかった。それくらい全神経を目に集中させていた。
「・・・・・・・・エリナ」
警戒を少し解き、前を見すえたまま話しかけた。何？と返事が聞こえた。

「この車は軍用車か？」
「そうだけど・・・」
と後ろで声がする。その声は質問の糸がつかめず、困惑しているようだった。
「・・・これと同じ感じの車で、色は黒い。軍用車なら、ドートリア軍なのか？」
後ろで驚く声が聞こえた。エリナには砂埃をあげる点は機械の塊であるという事しかわからない。それほどに距離があった。音も聞こえない。実際、ロイに言われるまで気づくこともできなかった。後部座席をあさり、ようやく双眼鏡を取り出した。
一度集中を切らしたロイの「いや、さっさと取り出せよ」という突っ込みを無視して覗き込むと、狭い視野の中に車が映っている。乗っている人間は分からないが、間違いなくドートリア軍の車だ。
「間違いないわ。ドートリアのものよ」
ロイはこちらを向かずに頷いた。いや、そう見えただけかもしれない。今だ警戒を解かず、前を見すえている。
「ロイ！もう大丈夫だってば！助けが来たのよ！」
わかってる、とロイは短く言った。しかし、エリナの声は脳まで届いていないのだろうか、微動だにしなかった。
「・・・この見晴らしのよい場所でできるだまし討ちの方法は限られている。あれが敵ではないと言う確証はない」
なるほど、とエリナは呟いた。どうやらこの少年、自分が考えている以上に実戦経験がある、とエリナはロイを見ながら思った。
ロイは車から視線を逸らさない。今あの車からどんな攻撃をされても応対できるだろう。しかし、もし、エリナが奇襲をかけたら確実にやられる。そういった意味では危なくもあった。
エリナは考える。きっとロイは戦争を経験したことがないのだ。隣人でさえもスパイと疑い、証明する手順が必ず必要になる。先ほど会ったばかりの人間など簡単に信用していいものではない。現に、エリナはロイの全ての動作を疑い、気を払っていた・・・・・多

分。それなのにロイは完全にこちらに背を向け、全ての集中力を遠方に捧げている。この少年は人に騙されたことがないのだろうか。
エリナはぼんやりとそう考えた。
「大丈夫だと思うけどね・・・」
エリナはそう言いながら双眼鏡を覗き込んだ。今やその車はエンジン音が聞こえるまでに近づいている。運転手が確認できるかもしれない。
「・・・お兄ちゃん!?」
ロイが改めてエリナの方を見た。エリナはもう一度確認する。乗っていたのは間違いなくエリナの兄であった。ほっと息をつき、双眼鏡から目を離した。
「大丈夫よ、ロイ。あたしの兄だわ」
そうか、とロイは呟き、剣を納めた。つかつかと車に戻り、助手席に座った。手を後ろで組み、後ろにもたれかかる。どこまでも青い空を見上げ、隣りのエリナに聞こえないように呟いた。
「やれやれ・・・危なかった」

第１３話　砂漠の少女　４

ロマリア＝スタンフィーナが妹のもとにたどり着いた時、運転席には笑顔で手を振る妹の姿、そして助手席には憮然として座っている知らない少年の姿があった。

「ごめんね、お兄ちゃん。帰れなくなっちゃって・・・」

ロマリアは大きく溜息をついた。どうして自分の妹は後先を全く考えないのだろうか。

「・・・まあ、無事で何よりだ。戻ったらみっちりと小言を聞かせてやる」

エリナは唇を尖らせた。怪我などもなく、無事な様子にロマリアほっと胸をなでおろした。

ロマリアのところにエリナがいないと言う知らせが来たのは昼前のことだった。奔放な性格なので大して気にも留めていなかったが、車もないと聞かされたときは、正直背筋が凍った。それから3時間ほど、砂漠を縦横無尽に探し続け、赤い信号が上がった時は流石に罠かと疑ったが、実際に来てみて正解だったようだ。

「まあ、いい。・・・それで、後ろの少年は誰だ？」

少年は表情を動かさずにこちらを見ていた。年のころは１５，６歳だろうか。茶色い髪に白い肌。腰に提げている長剣が印象的だった。

「ああ、ロイはあたしが襲われていたところを助けてくれたのよ」

それを聞いてロマリアは愕然とした。そんな危険なことになっていたのかという思いと、それを嬉々として語る妹に対する失望だろうか。

エリナは車を降りて、機械に被さっている砂を払った。そこには鳥のような機械があった。

「・・・Ｍ－４９２Ｆ！！ほんとうか！？」

エリナは無言で首肯した。だが、ロマリアにはあまりにも信じがたい事実だった。大砲やらの大型武器があるならいざ知れず、剣一本で壊せる代物ではない。

――ほんとに・・・人間か？

疑いをかけた視線はロイと交わり、すぐにそらした。少年の目は暗く、深い。まるですべてを飲み込む闇のようだった。

その場所からドートリアまでは一時間とかからなかった。普通迷うはずもない。と、ロマリアが言って、エリナは居心地悪げに頬をかいた。

「誰にだって失敗はあるわよ！！」

とは彼女の言。しかし、ロイは二度とエリナの運転する車に乗らないと心に誓っていた。国に来るまでも、急ブレーキ、急アクセルは当たり前、あまりにも鋭いハンドルさばきに何度も横転を覚悟した。砂漠なのだからまっすぐ走ればいいはずだ。運転を変わろうか？と何度も言いかけたが、真剣そのものの表情を見て諦めた。

――そして、現在、ドートリアの城門にいる。

「でかいな」

開口一番、ロイはそう呟いた。それは国と言うよりも塔や要塞に近かった。オアシスの恩恵の上に建ち、強烈な威圧感で聳え立っている。オアシスを覆うようにして造られた城壁は確かに砂漠の中にあるのだが、冷たい深海のように一切の侵入を拒んでいるように見えた。

建造物を一目見るだけでその国の技術力の高さを窺い知れた。恐らくケムトよりも進んでいるだろう。事実、その高さに違和感すら感じたケムトの街の壁よりもずっと高い。

しかし、考えてみればそうれは当然のことだ。空を跳ぶ敵と戦うのに、低い城壁では意味がない。更に、見晴らしのよい砂漠と相成って、絶好の展望台にもなりえる。

ロイがそれに見とれている間も、二台の車は城壁に沿って走り続け

ていた。
「なあ、まだか?」
ロイが訊ねた。その声は低い。度重なる運転の無茶ぶりに、ロイは精神も肉体も疲弊しきっていた。
「・・・・・・」
エリナは答えない。必死に兄の車の後ろを追っていた。確かに、その質問に答える意味はない。未だに入れていないという事はまだに決まっている。
砂埃が上がって、前の車が止まった。それにあわせてエリナもブレーキを踏む。勿論それは急ブレーキで、ロイの体は前のめりになった。既に慣性に抗えるだけの気力も体力もなかった。確実に歩いた方が疲れないだろう。
ロマリアが立ち上がって赤と白の二つの旗を取り出し、何らかのサインを出した。エリナは黙ってそれを見ている。ロイも同様にしていた。しばらくすると、城壁の2、3階に相当する部分が開き、スロープになった。二台の車はそれを登り、中へと入った。
「へえ、考えてるんだな」
ロイが感嘆の声をあげると、隣でエリナが言った。
「戦争中だからね。城壁に穴を開けるわけには行かないし、外に出ないわけにもいかない。それで戦争が始まった2年前に改築されたの」
ロイがへえと声を上げる。車は車庫のようなところに入り、二台の車は並んで停まった。エリナがニッコリとロイに微笑みかけた。
「ドートリアへようこそ!!」

第１４話　砂漠の要塞　１

にこりと笑った少女の後頭部に拳骨が降った。それなりに手加減したのだろうが、ゴンと言う鈍い音がロイの耳にも飛び込んできた。
「いった～～い！！何すんのよ！？」
エリナは頭を押さえながら振り返った。しかし、はじめは反抗的だったその表情も、兄の顔を見るとしだいにおびえに変わってった。そこには鬼のような顔をした軍人が仁王立ちをしていた。
「さあ、エリナ。言いたい事があるんだろう？存分に聴いてやろうじゃないか」
「・・・・・・あは」
鬼ののような表情の兄にエリナは愛想笑いを投げかけた。瞬時にロマリアの額に怒りマークが浮かぶ。軽い冗談も受け流せないほど怒っているらしい。ロイはその様子がおかしくて、口元が緩んでしまう。しかし、ロマリアはそんなことを気にせずに、エリナを車から降ろし、襟を掴んだ。そのままずるずると後ろ向きに引きずろうとする。
「ちょっと待ってよお兄ちゃん。ロイはどうするの？」
思い出したようにロマリアの足がピタッと止まった。それもそうだな、と小さく呟いた。左腕の時計を外し、ロイに渡した。
「３階に上がってしばらく国を見て回っていてくれ。見慣れない格好だが、うろちょろしなければ大丈夫だ。話が終わったら迎えに行かせる。不審がられたらその時計を見せろ」
なるほど、とロイは手の中の時計を眺めた。その黒い時計版には銀色の文字で、『ロマリア＝スタンフィーナ』と彫られている。この時計ひとつ見ても、この国の技術力の高さがうかがえる代物だ。左腕につけると、わずかに光を反射した。
「・・・それと、地下は軍事施設で立ち入り禁止だ。あと１０階以

上は居住区だから、行かないほうがいい。不審がられるからな。正式な入国手続きは後でしよう」
わかった、とロイが歯切れよく返した。ロマリアは少し考えた後、口を開いた。
「・・・妹を助けてくれて、ありがとう」
「じゃあね、ロイ。また後で」
エリナがブンブンと手を振った。ロマリアはそれを意に関せず、ずるずるとエリナを引きずってゆく。ロイは腰に手を当て、鼻でふっと笑った。二人の姿が見えなくなると、駐車場を出た。

「座れ」
部屋に入るなり、ロマリアはエリナに向かって言い放った。エリナは反抗をせずにそれに従う。その小さな部屋には椅子が二つ、向かい合うようにして置いてあり、ロマリアはエリナの向かいに腰掛けた。
「さて、何か弁解はあるのか？」
前かがみになって、膝に肘を当て、目の前で指を交差する。エリナの表情は多少悪びれてはいるものの、深刻な感じではない。それが更にロマリアを苛立たせていた。
「でも、いいじゃない！結局なんともなかったんだから」
ロマリアは自分の額に皺がよるのを感じていた。いつもと全く違う、にこりとも笑わない兄の表情を見て、エリナはようやく自分のしたことの重大さに気が付いた。
「いいか、エリナ。あのまま捕虜になっていたら、カルタゴラはどんな尋問、拷問を使ってもお前から情報を吐かせていたぞ。その情報は確実な優勢をカルタゴラに約束する。お前の判断ひとつで1万人近い国民すべてが危険に晒されるところだったんだぞ！」
エリナは背中を丸めて俯いていた。確かに短慮だったと思う。ロイがいなければ確実にやられていただろう。
「でもあたしはっ、あたしはみんなの力になりたかったの！！いつ

までもお荷物みたいに扱われるのは嫌なの！みんなに認めてもらいたかったのよ！！」

それを聞いてロマリアは目を閉じた。確かに妹は軍の演習でもいい成績を残してはいない。しかし、それは一年目の軍人としては当たり前のことだ。かく言うロマリアも始めは何度も上官に檄を飛ばされたものだ。

顔を上げるとエリナの目が潤んでいた。ロマリアは優しい口調で告げた。

「始めはみんなそんなものさ。だからこそ始めは上官の指示を仰いで行動することが必要なんだ。焦って無理する必要はない。それに試験をパスしただけでも十分力量はある」

ドートリアの軍入隊試験は厳しい。しかし、愛国心の強い国民はこぞって国を守ろうと応募する。その毎年２００人近い応募者の中から、選ばれるのは２０人ほどだ。女性の場合はただでさえ応募者が少ない上に試験内容は男女平等で、それ故に女性の軍人は少ない。エリナは女性軍人として実に5年ぶりの入隊となっていた。それだけでも十分に評価はなされているのだが・・・。

「それでもあたしは早くお兄ちゃんたちの力になりたい！」

エリナは顔を上げ、ロマリアを見すえた。

「・・・それで、一人で行った、か。だが、エリナ。お前の行動は一歩間違えば軍籍を剥奪されていたかも知れないんだぞ。もし行ったのが俺じゃなかったら間違いなく軍事裁判ものだ！！」

その言葉にエリナはびくっと肩を震わせ、俯いた。

「・・・わかってるわよ。けど、この２ヶ月の沈黙期間にカルタゴラは戦力増強しているのよ。あたしは嫌よ。この国が、みんながいなくなっちゃうなんて！！」

――ああ、わかっているさ。

しかしロマリアは言わなければならない。上官として・・・いや、兄として。

「だからと言ってお前が犠牲になるのか？それに何の意味がある。

お前一人の犠牲でみんなが助かると言うのか！？」
「・・・それはっ！」
二人の視線は微動だにせず、お互いを見据えていた。ふと、ロマリアは目を細めてエリナを見、口を開いた。
「頼むから・・・頼むからお前は生きてくれ」
エリナの胸がズキンと痛む。エリナの脳に今は亡き両親の顔が思い浮かんだ。といってももうほとんど覚えていない。手元に残されたのは、たった一枚の写真だけ。エリナが６歳のときにカルタゴらとは別の国との戦争で死んだ。あれからもう１１年。ロマリアは１６歳のそのときから軍に入り、自分を育ててくれた。エリナにとって、ロマリアは兄であると同時に父親でもある。
「俺はもう、家族を失いたくはない」
胸を締め付ける痛みのせいでロマリアの目を直視する事が出来なかった。
「・・・・・ごめん、なさい」
うつむいたエリナの頭に手が置かれる。その大きな手は、続いて優しく撫でてくれた。
「お前が無事で良かった、本当に」
その声は優しく、いつも自分の身を案じてくれる兄の声だった。
「お兄ちゃん」
エリナは顔を上げた。ロマリアは優しく笑いかけている。
「ごめんなさい。あと、探してくれてありがとう」
「当たり前だ。家族だからな」
ロマリアは微笑みながらゆっくりと頷いた。

「・・・これは凄いな」
３階の中央、庭のような広い場所に出て、ロイは驚嘆の声を上げた。地面は芝で、子ども達が元気に走り回っている。隅のほうにはカフェテリアのようなところがあり、若い母親だろうか、笑いながら語

り合っていた。しかし、時折不審そうな視線がロイに刺さる。まあ、ロイは例によって例のごとく不審者の様な格好をしているので無理もない。

塔の周りの窓は全て硝子張りで、西日を受け、芝を赤く染めている。いい加減腹も減ってきたなと思い周囲を見渡すと、いい匂いが鼻腔を付いた。欲望につられて足が勝手に動き出した。

「おっ、兄ちゃん。食ってくかい？」

カウンターで何かを作っているのは体格のいい四十路くらいの男だった。

「これはなんだ？」

看板には“イェーガサンド”と書かれていた。全く聴いたこともない名前だ。

「ああ、イェーガってのはここら辺りに生息しているオオトカゲのことだ。それをパンで挟んで、豪快にかぶりつくんだ」

トカゲ、と聞いて少し引いたが、それでも悲鳴をあげる腹を見捨てることは出来ない。

「1つくれ」

ロイは言ったが、男は怪訝な顔をして訊ねた。

「金はあるかい？1つ50ピークルだよ」

確かに今のロイの格好は文無しの浮浪者に見えなくもない。ロイは少し考え、袋の底の方にある、小さな袋を取り出した。

「これでいいか？」

グリンにもらった銀粒を1つ取り出し男に差し出した。男は疑わし気にそれを受け取ると、目を丸くした。

「これっ！お前、こんな高価なもの受け取れねえよ！」

「・・・・・？」

グリンが少しの躊躇もなくくれたものだったので大した価値はないと思っていたが、どうやら相当の値打ちものらしい。また1つグリンさんに感謝だな、とロイは考えつつ、目の前の男はかなり正直でいい人だと思った。ケムトの悪徳商人なら何も言わずに懐に入れる

だろう。
「この階のちょうど反対側くらいに換金所があるから、ピークルに変えてくるといい。もうじき閉まっちまうから急げよ。それとまだ持っているみたいだが、換えるなら一つだけにしとけよ」
ロイはわかったと頷き、礼を言った。
「作って待っててやるからな」
ロイは袋の口を縛ると、肩に担いだ。分厚い塔の外壁分を差し引いても、この階層は相当広い。逸る腹をさっさとなだめようと、ロイは駆け出した。

第１４話　砂漠の要塞　２

「――それで、あのロイってのは何者なんだ」
ロマリアは立ち上がり、紅茶を入れると、エリナに手渡した。エリナがそれに礼を言って受け取った時、唐突にロマリアが訊ねた。
「何者って？」
エリナが聞き返す。ロマリアは紅茶を吹いて覚ますと、口に少し含んだ。かぐわしい香りが鼻腔を軽くくすぐった。
「Ｍ－４９２Ｆを斬ったなんて信じられると思うか？それにどうにも隠している事がある気がする。これは直感的にだが、あの少年には警戒させる何かがある」
そう言われれば、心当たりがいくつかあった。あの華奢な体で空中に飛び上がったことも、機械を斬ったことも普通に考えればありえないことだ。
「えっと、ケムトの南のボンゴっていう村とこから来たらしいけど・・・」
「ボンゴ？聞いた事もない」
そもそもケムトこそがタンタニア最南端の街。さらにその南に村があるはずもない。
しかし、どうやらそのロマリアの発言にエリナは更に不審度を募らせたようだ。その反応にロマリアはわずかに眉をひそめた。
「警戒しておくに越したことはない。もしかしたら・・・」
とりあえず話を変え、話の矛先をロイの方へと向ける。
「人に化けている魔物かもしれない。噂に聞くディアボロスが操っている魔物だ。実際に見たというものはいないが、ここ数年一気に勢力を伸ばしてきたカルタゴラの裏にディアボロスがいるのは確実だ」
エリナは否定の声を上げたかったが、兄の考えを否定できるような

情報はない。しかし、自分を助け、慰めてくれたあの少年を、どうしても敵だと思いたくなかった。

「・・・わかった。妖しいと思ったらすぐに連絡するわ」

手の中のカップを口に近づけた。まだ少し熱く、かすかな痛みが舌を走った。

「うまい！！」

ロイはイェーガサンドを掴み、大口を開けて噛り付いた。パンの柔らかい触感と、肉の感触が上手く溶け合う。イェーガは鶏肉のような触感で、油分も少ない。しかし、その淡白さを、秘伝のタレなるもので補っていた。

「美味いぞ、おっさん！！」

破顔し、口に頬張りつつも言ったロイに、男は豪快に笑って言った。

「だろ！？こちとらこれに２０年かけてるからな！！」

ロイが全速力で換金所に向かい、銀粒を差し出すと、スーツ姿の男がてきぱきと応対した。この国は天然資源が少ないため、貴金属類は高値で取引されているらしい。一粒だけで５００ピークルになった。１つだけでいいのか、と聞かれたが、男のアドバイス通り、ひとつだけにした。その後、袋いっぱいの１０ピークル硬貨を渡されたので、そのときは男に感謝した。銅製の硬貨は重く、とても銀全部分を持っていくことは出来そうにない。男のにこやかな挨拶を背にして、ロイは換金所を出て、まっすぐに屋台に向かい、今こうしてイェーガサンドを頬張っているわけだ。

「暗くなってきたな・・・。おっさんまだ店仕舞いしなくていいのか？」

男はロイを訝しげに見たが、何かに気づいたように頷いた。肉を焼くためのヘラで天井を指した。

「見てろ。あと2，3分だ」

「？」

ロイは怪訝な顔をしながらもそれに従った。夕日は既に見えない。黄昏も既に過ぎたようで、男の顔の皺すらも定かでなくなっていた。そのとき、

「・・・すげえ！」

男が頬の上に皺を寄せ、笑った。辺りが一気に明るくなった。突然昼間に戻ったようだが、そうではない。天井の無数の照明が建物の内部を照らしているのだ。

「お前さんが何処から来たか知らんがガス灯くらいは見たことあるだろ？」

かっかと男が笑った。ロイの腕の時計がきらりと光った。イェーガサンドを口の中に放りこむと、時計を見た。それに気づいて男が声を張り上げた。

「おい！ちょっとそれを見せてみろ！！」

それはものすごい剣幕で、到底拒否など出来そうにもなかった。しぶしぶ外して男に手渡す。男は険しい顔をしてそれを見、その表情のままロイを見た。

「これをどこで手に入れた！？」

その重低音は威圧感に溢れ、有無を言わせないものがあった。

「ああ、えっと、さっき入国した時にそれの持ち主が後で探しに来るからそれまで持っていろって」

「本当か？」

体から溢れ出ているんじゃないかと思うほど警戒のオーラが出ている。ロイは頬に汗が伝うのを感じた。そのとき、

「ロイ～～！」

おっさんの声とは正反対、高い声が聞こえた。エリナの姿を確認して息を吐く。こんなに緊張したのも、こんなに安堵したのも久しぶりかもしれない。

「ごめんね、ロイ。結構説教くらっちゃってて・・・。それで、何してたの？・・・って！！」

エリナはおっさんの顔を見て、豆鉄砲を食らったような顔をした。

その後ろにいたロマリアも驚いている。ややあって、二人は我に返り、敬礼をした。
「ブラハム軍団長!!こんなところで何を・・・？」
ロイは愉快そうににやりと笑った男と緊張した面持ちで敬礼している二人とを見比べた。
「おっさん、実は偉い人だったのか？」
そういった途端、ロイの頭上にチョップが降ってきた。頭を抑えながら振り返ると、エリナが囁いた。
「ちょっと、ロイ！口に気をつけなさいよ！この人はブラハム＝レンジェン軍団長。ドートリア軍の統括者よ!!」
「そんなに偉いのか！」
ロイも男に聞こえないように声を落として言う。
「かっかっか。家業だ家業。今日はオフだからな。だから今は軍団長じゃねぇ。敬礼はしなくていいぞ」
「はあ」と二人が戸惑いながらも右手を下ろした。と同時に男――ブラハム＝レンジェンがロマリアに手招きをした。
「――この少年。気配が只者じゃない。人間であるとも言い切れん。監視しておけ」
「ええ、わかってます」
小声で話す二人の会話は、不自然なまでに突然にエリナが語りだしたドートリアの歴史１ページのせいでロイには聞こえなかった。

「それじゃあ、ロイを部屋に案内してくるわ」
エリナが唐突に言い出して、ロイは首を傾げた。
「ああ、いいのよ。軍用施設だから家賃はサービスしてあげる」
いや、そうじゃなくて・・・と言う声も次々と続く説明に遮られる。
「でも、食費は自分で賄ってね。簡単な仕事もあるし、バイト代くらいなら出るわよ」
「すいません、エリナさん。質問いいですか？」
ロイはびしっと手を挙げた。エリナの腕が振り下ろされ、びしっと

ロイを指差す。
「はい、ロイ君」
「俺そんなに世話になっちゃう感じになってるんですか？」
エリナの動きが止まった。明らかに動揺している様子である。助け船を出してもらおうと一度ロマリアの方を見たが、目をそらされた様子であった。ようするに自分で何とかしろという事だ。
「そっ、そんなの当たり前じゃない。子供が一人でほっぽり出されたら危ないでしょ！！」
「子供って言ったって俺もう１６だぞ！！」
エリナは胸を張った。
「あたしは１７よ。あたしの方がいっこ上。何か文句ある！？」
『ある』が強調されており、有無を言わせない感じになっていた。しかしロイとしても寝床を貸してくれるのは非常にありがたいことではあるので両手を挙げ、降参の意を示した。エリナがにこりと満面の笑みを浮かべた。
「それでいいのよ」

第１４話　砂漠の要塞　３

「ちょっと！弾の補充まだなのー！？」
周りの銃声に負けじと張り上げた声が響いた。噛み殺したような笑い声は銃声に負けて聞こえないが、笑っていることは表情で見て取れる。一律に正面を見据える隊員たちの背後を、ロイは大またに歩いていた。その額には大粒の汗が滲み、髪の毛が頬に張り付いている。顔を拭いて、髪を整えたかったが、両手を塞ぐ重い荷物がそれを妨げていた。
そこはドートリアの１階、軍用訓練施設の一角だった。軍人たちが横一列に配備された仕切りがあるだけの個室で、正面にある的を狙って撃つ。射撃の訓練だ。
「はいよ！！」
ドスンと言う音とともに地面が揺れてエリナの標準が乱れた。的から目を離し、顔を上げると額に怒りマークを出さんばかりの表情でロイがエリナを見ていた。汗が溢れ出ていて、軍用のシャツに汗の地図を描いていた。
「遅いじゃない」
そんなロイの怒りを無視し、再び的に注目しながらエリナが言った。その発言を聞いてロイの怒りがピークに達した。
「大体なあ、お前しっかり狙えよ！！弾の消費量が他のとこの４，５倍はあるぞ！！」
ロイが無造作に転がっている大量に空薬莢を指差しながら言った。もはや足の踏み場もない。エリナはもう一度顔を上げ、口元を吊り上げ言った。
「あら、『お前』なんてやめてくださる？ここではスタンフィーナ三等兵よ。それにあたしが撃つのが早いのは、反動をうまく流しているってことでしょう？」

仕切りの向こうでくつくつと笑う声が聞こえる。ロイは壁をドンと蹴ったが、それでも笑い声は止まない。こんな銃声の中でも、人間は自分を小ばかにする声は聞こえるものだ。

「・・・・・・」

ロイは前を見据えるエリナを見下ろしている。狙撃用の銃で連射しているように次々に引き金を引き続けるエリナは、速射ならば？1だろう。ただし、的に当たらなければそれは戦闘の能力ではなく、無駄遣いの能力だ。

連射に次ぐ連射。一度標準を外し、もう一度標準を合わせても当てるまでに１０発はかかる。９発の無駄弾を使って微妙に修正しているのだ。さらに、的に当たりだしてからも反動のせいでそのポイントは乱れに乱れている。

「・・・ちっ、当たらないわね。壊れてんじゃないの、この銃」

そうブツブツ言う声に、ロイは大きな嘆息を漏らした。

「・・・溜息がうざい。私の幸せが逃げたらどうするのよ」

エリナはロイの方を見向きもせずにイライラしながら言った。

「幸せは自分で掴みとるもんだ。逃げたらまた捕まえればいい」

そう言ったロイに、言うじゃないと一瞥もせずに返すと、また連射ショーが始まった。傍目から見てるといらなくなった弾の処分にしか見えない。事実、先ほど話した他の隊員も似たようなことを言っていた。

「ちょっと貸してくれ」

突然の申し出にエリナはロイを目を細めて一瞥すると、口を開いた。

「へえ、撃てるの？」

「引き金を引いたことぐらいはあるさ。それに弾の無駄遣いするほどは撃たない」

地面を覆う空薬莢を足で転がした。エリナは何か考えるようにすると、いいわと言って場所を譲った。

さっきから口うるさいこの少年を黙らせるには銃の扱いが見た目よりも難しい事を教えるのが一番だと考えたからだ。

しかし、銃を構えるその姿はなかなか様になっていた。実はロイはケムトでグリンに銃の訓練を何度かさせられたことがあった。反動の感覚と体が動かせないことが嫌で、ロイはあまり好きではないのだが。

ロイは目を細め、標準をあわせた。距離を目算し、銃口のだいたいの角度を計算する。

エリナのように感覚ではなく、理詰めで標準をあわせていく。

引き金を引いた瞬間、何かが背骨を這うような恐怖にも似た感覚がした。銃声が鳴り響き、硝煙が鼻につく。

「・・・・・・っ！」

それもようやく収まって、正面を見ると、人の形をした的の右胸の位置を弾痕が貫いていた。

「・・・・・・」

顔を上げてみたエリナは絶句していた。

「・・・・・どうよ？」

そういってエリナに銃を手渡す。エリナはプイっと横を向いた。

「・・・な、何よ。あんなに時間かかってたらその間に殺されてるわよ！！」

目が泳いでいる。どうやらロイをけなして優越感に浸り、なかなか当たらない苛立ちをぶつけるつもりだったようだ。

「・・・当たらないよりはいいだろ？」

肩をすくめて言う。むっと頬を膨らませていたエリナは息を吐いた。

「それもそうね。・・・ところでロイ、どこで習ったの？」

話をそらしたようにも思えたが、ロイが簡単に説明するとエリナは恥ずかしげに目をそらしながら言った。

「ちょっと教えてくれないかしら。あたしどうも狙撃が苦手で。機関銃なら腕はいいって言われるんだけど・・・」

やはり少しは気にしているらしい。エリナはチラッと上目遣いにロイを見た。

「ああ、いいよ」

同時に仕切りの向こうからヒューと口笛がなった。ロイはエリナにちょっと待ってくれ、と言うと、怪訝な顔をしているエリナを置いて仕切りの隣りへ行った。

「うっせー」

隣にいた男はへらへら笑いながらも、左手で『ごめんごめん』とポーズを取った。同時に近づいてロイの耳元で囁いた。

「なかなかいいアタックだな。だが、エリナは手ごわいぞ。もう同期の男を5人ほどフってるからな」

「そんなんじゃねえ!」

ロイは隣のエリナに聞こえないギリギリの声を張り上げた。

「ははっ、いや冗談冗談。・・・だけど気をつけろよ。スタンフィーナ少佐が黙ってないからな。まあ、頑張って教えてやれよ」

「だからっ!」

今度の声はエリナに聞こえたらしく。ひょこっと顔を覗かせた。

「どうしたの?」

「いやいやいやいや、なんでもないなんでもない」

ロイと話していた男が実に楽しそうに言った。この男の名はアレン。ロイの泊まっている部屋の隣の男で、本人曰く『エリナに振られた同期?1』らしい。なかなか気のいい男だが、実はかなり優秀なのだそうだ。自分でそう言っていたので信憑性は薄いのだが・・・。

「・・・ロイ、早く!」

エリナはロイの腕を掴んで引っ張った。アレンに言われて意識してしまったからか、手袋を外したその手に触れられた部分が術を使っているわけでもないのに少しだけ熱くなる。引っ張られていくロイにアレンが手を振った。

「つかれた・・・・・・」

部屋に戻ると何も考えず、ベッドに倒れこんだ。結局、一日中エリナの銃撃練習に付き合わされることになった。耳当ては使っていた

はずだが、なれない発砲音が耳に残っている。ドアを閉める音まで轟音に聞こえるし、視界がクラクラと揺れている。

「・・・雑用の方が楽だったかも」

唯一の救いはエリナがもの凄い速度で成長してくれたことだろうか。これで進歩なし、では報われない。疲労感は波のように襲い掛かってきて、もう少しでロイの意識が睡魔に全てを委ねそうだったが、ドアを叩く音がそれを遮った。

「おーい、飯だ、行くぞ！」

通路に出ると、アレンが立っていた。不敵な笑みを浮かべている。ロイが歩き出すと、横に並んだ。

「しっかし、おいしいよなあ。あのエリナ相手にマンツーマンで指導できるなんて」

不敵な笑みの中に憎しみがこもっている。ロイは舌打ちをしてアレンに睨みを利かせた。

「・・・勘弁してくれ。今日一日で身に受けた数々の逆切れを思い出しそうだ」

アレンがふき出した。

「ははは、お姫様はじゃじゃ馬ですか、王子様？」

いつもなら突っ込みどころ満載な発言だが、生憎今のロイにそれをこなす体力は無い。無視した。

「明日の訓練はなんだ？」

てっきりムキなると思っていたアレンは肩透かしをくらい、肩をすくめた。

「明日は基礎トレーニングだ。残念だったな。エリナのお手伝いはできないぞ」

どんだけ根に持ってんだこいつ、と言いたい気持ちを抑えた。だが声を荒げたら面白がるだけだ。ロイは顔を上げて首をもんだ。ずっとしゃがんだ姿勢のまま顔を上げていたので、相当凝っていた。

「そういえばさ、お前どこ目指して旅してんだ？」

夕飯をスプーンですくいながらアレンが尋ねた。ロイは口に頬張ったものを飲み込み、もう何度もした答えを繰り返した。
「とりあえずバーカギルが最終目標かな。色々世界を見て回れっていわれているけど・・・」
「誰に？」
そう聞かれて言葉に詰まった。恩人、というのが一番ピッタリなのだが、それを言えば、自分の身の上まで話さなくてはいけない。
「・・・先生。あとは、今は亡き戦士かな」
アレンは半分納得、半分疑念の顔でうなずいた。ロイは話を逸らそうと、かねてからの疑問を口にした。
「カルタゴラって強いのか？」
アレンは何か言いたげな様子だったが、真剣な顔をして言った。
「強い。お前、Ｍ－４９２Ｆを倒したんだってな。なぜかエリナに自慢されたよ」
にやっとからかうように笑う。ロイは苛立ちを抑える。
「だが、カルタゴラの戦力はそれだけじゃない。数年前、ディアボロスが手を貸してから、機械化魔獣が量産されるようになった。それに、何でも奴等は奇妙な妖術を使うらしい」
奇妙な妖術とは間違いなく精霊術のことだろう。ロイはカルコンの側近、リックの顔を思い出した。光の屈折、反射を操り、人の視界から自分の存在を消す。どこにいるかもわからず、ゆえにあらゆる攻撃を回避でき、気付かぬままに攻撃できる。確かにあの力は強大だ。
「そういえばエリナがお前もありえない動きしてたって言ってたけど？」
アレンは銀色のスプーンでロイをびしっと指した。行儀が悪いので、ロイはアレンの手を払った。
「ただの筋力だよ。鍛えれば誰にもできる」
肩をすくめるが、どうやら騙せなかったようだ。アレンは「まあ、お前が何者かなんて今に始まったことじゃねえか」と呟きながら、

残ったカレーを胃に流し込んだ。
「だけどっ！」
ガシャン、と皿をテーブルに置いた。本当に行儀が悪い。こいつの親は何をしていたんだと思ったが、言わないでおいた。
「俺たちはお前のことを信じていいんだよな？」
いつもとはまったく違う。アレンの目は真剣そのものだった。ロイは少し威圧されたものの、微笑を湛えながら答えた。
「俺はただのしがない旅人さ。お前達を騙す度量なんてない」
「・・・そうか」
ロイが断言しなかったからか、アレンはいまだ不審そうにしている。しかし、ロイにはその不審感を拭い去ることは出来ない。なぜならば、自分が敵か味方かなんて、ロイ自身にもわからないのだから。それを知るためロイはカルコンを目指しているのだ。
「・・・ただ、カルタゴラなんて国に行った事がないのは確かだ。それは本当だから信じてくれていい」
ロイはアレンの目を見つめ返した。青い目がこちらをのぞきこんでいるが、しばらくすると目を閉じた。
「・・・わかった。今のところお前を信用しよう。スパイには見えねえし。一応ずっと見張ってはいるしな」
「そうなのか？」
「あれ、気付いてなかったのか？・・・お前が国を歩く時は常に誰かが側にいたろ？それが今は俺だって事だ」
「・・・随分警戒されてんだな」
ロイは人ごとのように呟いた。確かに、こうして周りを見ると、軍人たちの目がこちらに注がれているのがわかる。その視線は喋ってしまったアレンへの非難も含んでいる事もわかった。
「不快に思ったのなら謝るよ。でもこっちも戦争してるからな」
「いや、かまわねえよ。そんな長居する訳じゃねえし。ていうかそれって俺に言っちゃダメなんじゃなかったのか？」
「あ、やべ」

慌てるアレンを見て、ロイはにやっと笑った。アレンもにやりと笑い返す。

第１４話　砂漠の要塞　４

翌日は基礎訓練だった。新人は地下１階の訓練場に集められ、重い荷物を担いで走っている。走る距離は決められておらず、ただひたすらに走らされる。先の見えない苦痛により、２２人の新人軍人のうち、８人が脱落していた。ロイの仕事は脱落者の救護の補佐だ。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ・・・」

脱落者の中にエリナはいなかった。１４人がまとまって走っている中、遅れることなくついていく。苦しさに表情は歪んでいるが、それでもなお食らいついている。

また１人、隊列から後れを取り、その場に倒れ込んだ。ロイが駆け付け、荷物をはぎ取り、水を飲ませた。

「よし、やめ！」

上官の声とともに隊列の走行が徐々にゆっくりになった。残る１３人は荷物をひとまとまりにすると、しばらくジョギングしたり、歩いたりと足に疲労が蓄積しないようにする。

「おつかれ」

ロイが１人づつに水を配る。配られた水は一瞬にして消え、「おかわり！」という声がそこここから上がった。

「２０分休憩後、筋力トレーニングに移る。それまでに荷物を片付け、整列しているように。どちらかを怠ったらもう一度走らせるからな！」

力強い返事が返る。その隙にロイはもう一度水を汲んだ。

「ハァ、ハァ・・・ロイ、見てた？」

エリナが息も絶え絶えに言った。

「ああ、見てたよ。なんか必死な顔してたな」

ロイがそう言うとエリナは顔を真っ赤にした。

「体力が戻ったら八つ裂きにしてやる」

そんな怨みの言葉をロイに投げかけた。ロイは「冗談だ」と言い、水を渡した。

「相当厳しい訓練を積んでるんだな」

ロイだって一緒に訓練を受けろと言われればもちろん達成できる自信はある。“熱”の術者は体力がものをいうため、カルコンには徹底的にしごかれたのだから。だが、余裕でこなせるかと言われれば首を振らざるを得ない。

「新人は基本的に伝令係なの。砂漠だと余計に体力も奪われるから体力は大事なのよ」

ロイは納得して頷いた。戦争というものを直に見たことはない。決して見たいとは思わないが、とにかく基礎体力が必要というわけだ。

「荷物、持ってくぞ」

ロイは空いたコップを受け取り、荷物を担いだ。中には砂袋が入っているようだ。慌ててエリナが立ちあがり、それを制する。

「ダメ。片付けも含めて訓練だもの。ロイは倒れたみんなの介護をお願い」

そう言うが早いかエリナは荷物を背に担いで歩いていった。その後ろ姿をしばらく眺め、ロイは救護の手伝いに行った。

２０分後、上官の前に１３人が整列する。結局９人は脱水症状を起こし、隅の方でぐったりとしたままだ。

ウウウウウウウウ

突然だった。心臓を鷲づかみにするようなサイレンの音が訓練場に響き渡った。

「カルタゴラ軍だ！！」

誰かが声を上げた。

「総員、戦闘準備！！」

上官の恫喝で、一瞬のうちにざわつきが収まった。全員疲れなど微塵も感じさせない動きで走って行く。
「ロイ、早くっ！！」
その背後で、ロイは立ち尽くしていた。ぼーっとではなく、整然と立ち尽くしていた。
「どうしたの？早くしなきゃ！！」
ロイは小さく首を振る。隊員は全て訓練場から消えていた。倒れていた新人も動いたようだ。残っているのは広い空間に向かい合うロイとエレナの2人だけ。焦るエリナに向けてロイは言った。
「俺は戦わない」
エレナは信じられない、という顔をしてロイを見た。ロイは口を開く。
「戦争をしているって話を聞いてからずっと考えてた。分からないんだよ。俺は何と戦えばいい？・・・人間と戦うのか？何のために？・・・魔物と戦うのか？人間に操られてるだけなのに？なあ、エリナ。教えてくれよ。お前は一体何のために戦うんだ？」
ボンゴで魔物に家族を奪われ、カリューでカルコンに裏切られ、ケムトでシュートとともに共存しているリートと出会い、ガルガイアで仲間を守るために戦ったものたちを亡くし、そして――
――ドートリアで操られているだけの魔物を殺すのか？
それは矛盾だ。今のロイには自分の敵は魔物なのか、人間なのか。その立ち位置がわからない。色々な立場の人と出会い、様々なことを知ってなお、あるいは知ったから、自分の進むべき身とを見失っていた。
「知らないわよ、そんなの。やらなきゃやられる。戦わなきゃ故郷を失うのよ！？」
「・・・それは人間のエゴだ。自分達のために幾多の命を殺す。それは本当に正しいことなのか？」

エレナは火がついたように叫んだ。
「関係ないのよ。身近にいる人、身近にあるもの。それを守りたいと思うのが人間よ。少なくとも私にとって、ドートリアを守るのに理由はいらない！！」
ボンゴを失ったときはそう思っていた。あの時力があれば、なんて後悔は山ほどした。けれど、その後悔に意味はなかった。ボンゴはもうないのだ。そして極めて冷静に、ロイは口を開いた。
「・・・俺の故郷は魔物に滅ぼされた。確かに俺は魔物を怨んでるけど、それ以上にその魔物を操り、故郷を奪ったやつらのことも怨んでいる」
リーエンが言った死に際の一言。憎しみに囚われてはいけないということ。だが、そんな事は到底無理だ。何度心から排除しようとしても憎悪は消えることはない。
「そして、その頂点にいるのは俺の師匠だ。師匠は魔物を憎んでいる。でもさ、俺にはその気持ちが分かるんだ。確かに魔物は操られていた。でも俺は魔物より人間を殺したいとはどうしても思えない」
冷静なはずなのに、頭は何も考えていなかったらしい。なぜこんなことを口走ってしまったのか、自分でも答えが出ない。そんなロイに対して、エレナは不機嫌そうな面持ちで口を開いた。
「知らないわよ、そんなの！」
「・・・・・」
見事なまでの一蹴っぷりだった。ロイは絶句する。
「そんな過去をずるずるずる引きずって何になるの！？大切なのは今なんだよ！？そのときのあなたと同じような立場のあたし達を見捨てるの！？」
エレナは目を潤ませている。ロイは何かを言おうとして・・・言えなかった。
本当は気付いていた。今のドートリアは1年前のロイとまるで同じ立場であると。しかし、考えれば考えるほど怖かった。同じように失ってしまうのが。自分が無力だと考えてしまうのが。自分の存在

に意味が無いと気付いてしまうのが・・・。
「もういい！！」
エレナはロイが後ろにひっくり返らんばかりの大声で叫ぶと、踵を返し、隊員たちの背中を追っていった。
ロイは１人立ち尽くす。今度は呆然と立ち尽くしていた。

第１５話　やめた　１

ロイは砂を踏みしめ、前に進んでいた。ドートリアの北の方では既に砂埃が立ち始めていた。もうしばらくすれば、お互いの力と力が交錯し、黄色い砂は赤く染まる。尊いはずの命はボロくずのように引き裂かれる。その光景を見る事を避けるため、ロイは東側に足を進めていた。

太陽の位置は高く、燦々とロイを照りつけている。しかし、ロイはそんなことまったく気に留めていなかった。ずっとエリナが言った言葉を考えていた。

――――引きずっているのだろうか。

ボンゴを出てからいつのまにか一年が経った。ロイの人生の１６分の１。間違っても短い期間とは言えない。それでも本当にあの怒りを、あの憎しみを忘れていないのか。本当にカルコンを憎んでいるのか。あの思いは風化していないのか。自分で自分が分からなくなる。魂だけが身体から抜け出て自分を上から見つめているようで、目的もなく歩いているその姿はひどく滑稽だった。

振り返れば、いつのまにかドートリアは小さくなっていた。そして、そのサイズに反比例するようにして、今戦っているだろう人々の存在はロイの中で大きくなっていた。あの砂埃の中にはエリナやアレンもいるのだろう。

ロイは立ち止まって目を瞑った。少し考えて足を踏み出そうとしたが、正面と背後のどちらに踏み出せばいいのか分からなくなってしまった。

「ロォォォイ＝クレェェェェイス」

考え込んでいたロイは、その言葉が自分の名前をさしているものだ

と気付くのにしばらくの時間を労した。ロイは身構えたが、辺りには誰もいない。

「誰だ！出て来い！！」

背後で、かすかな音がして振り返った。誰もいない。あるのは当たり一面の砂のみ。

またもや背後で音がした。砂を蹴りつけるような音。何かがいるのは間違いない。しかし、その姿はどこにもなかった。

三度音がしたとき、ロイは高くバク宙した。空中で剣を抜き、着地と同時に音の方向に刃先を向けた。

「ヒヒッ、さすが。やるね」

ロイの剣の先にいる相手。砂の中から現れたその男はロイに背を向ける形になっている。真っ黒な布を全身にまとっていた。男は甲高い笑い声を上げた。

「・・・何者だ、お前？」

ロイは目を細める。砂の中から出てくるなんてとても人間業とは思えない。しかし、目の前にいる男には妖怪の特徴は１つもなかった。

「ヒヒッ・・・おいおい、勘繰るのはやめなよ。耳は尖ってないだろ」

ロイは驚いて１歩後ろに跳んだ。男はゆっくりと振り返る。黒い装束に覆われた細い身体が露になった。もっとも、全身黒ずくめなので、露も何もないのだが。

目の部分以外は手先足先さえも皮膚が露出している部分はない。ただし、砂漠の中ではその黒装束は隠密というには余りに目立ちすぎた。

しかし、何よりも、ロイの考えたことを察知した。人間業ではない。

「ヒヒヒッ、おいおい冗談だろ？そんな分かりやすい表情しといて・・・。人間業じゃない、とか考えてるんじゃないのか？」

ロイの表情が一段と険しくなった。

「ヒッ、図星だね。こんなの単純な読心術だろ？サトリのやつじゃなくてもこれくらいなら俺様でも分かる」
「・・・何者だ、お前？」
いっこうに変わらない相手ペースを打開しようとロイは警戒心を露にしたまま再度訊ねた。
「ヒヒッ、俺様かい？俺様はディアボロスの諜報部隊〈七聖〉が１人。＃４スナグモ様だ」
ディアボロス、という言葉にロイがピクリと反応する。剣を構えなおし、少しスナグモに近づいた。
「何の用だ？」
「ヒッ、そんなに俺が不気味かい？・・・まあいいさ」
スナグモの装束は目しか露出させていないが、口元を大きくゆがめたのは容易に想像できた。
「ヒヒヒッ、お前に会えたのは偶然だが、ついでに一応挨拶はしておこうと思ってな。俺様は律儀なんだ。だからお前はおまけ。俺様の本当の目的はドートリアを陥落させること」
ロイは目を見開く。
「兵士が出払ってる間に俺様が水源に毒を仕込むって戦法だ。ヒヒッ」
「・・・カルコンめ」
そこまでやるのか。そんなことに一体何の意味がある。・・・しかし、この男は本当に諜報部隊なのだろうか。こんなにべらべらと任務を漏らして。
「ヒヒッ、何を言ってるんだお前。今ここにいるという事はドートリアを見捨ててきたんだろ？あの国はどの道戦争で滅びる。俺様はただ、それを速めてやるだけだ。つまり・・・」
スナグモは笑った。そんな気がした。
「・・・お前と同じさ。お前は見捨てることで消極的にドートリアを殺し、俺様は毒を仕込むことで積極的にドートリアを殺す。どちらも変わらない。ただ行動するかしないかだけだ」

ロイの両腕から力が抜けた。急に重くなったように構えていた剣が自然と下がった。

「さてと、俺様はもう行くぜ。ぐずぐずしてると・・・ヒヒッ、あの国が先に滅んじまう」

「待てっ」

スナグモはしゃがみ込んだ姿勢のまま、わずらわしそうにロイを見た。

「なんだよ、うっとうしい。うっとしいったらない。お前の話はレギュラスやリックから聞いてるがつくづく思うぜ」

スナグモは笑わない。笑わずにロイを指差し、内側から引き裂く言葉を投げかけた。

「お前は何がしたいんだ?」

ロイは口をつぐんだ。

「見苦しい。本当に見苦しい。お前はカルコン様を否定しているようだが、その思想に行動がまったく伴ってない。まるでガキだ。目の前の問題を全部感情で解決しようとして、ゆらゆらゆらゆら馬鹿かっての」

魔物は憎い。カルコンは憎い。しかし、エリナにはああ言ったものの、怨んでいるかと聞かれると本当のところは分からない。本当に怨んでいるのは自分。

いや、怨みとは少し違う。これは怒りだ。力が無い自分。カルコンを止められない自分。決意の一つすら持てない自分自身に対して強い憤りを感じていた――。

「俺は・・・」

「自分の考えもなく相手を頭ごなしに否定するなんてクソだぜ。だから俺様はガキが死ぬほど嫌いだ」

「俺は・・・」

スナグモは溜息をつく。しゃがんだまま腕を振り上げた。

「じゃあ、もう行くぜ」
振り上げた手を砂の中に差し入れた。そのまま身体ごと砂の中に入り、消えていった。

「俺は・・・・・・・・・・・・」

広い砂漠の中にただ1人。剣はロイの手から落ち、ほんの少しだけ砂を舞い上げた。ロイは唇を噛み締める。そのまま後ろ向けに倒れて真上にある太陽を見上げた。
「なあ、あんたはどう思う?俺は間違ってると思うか?」
太陽は答えない。いや、答えるまでもないのかもしれない。ロイは目を覆う。瞼の中で、太陽の形が緑色に残っていた。

第15話　やめた　2

「ヒヒヒッ、さあて」
ドートリアの城壁。スナグモは高いその建物を見上げていた。首をこきこきと鳴らしながら仕事の準備に取り掛かる。
「おっと」
取り出した拍子に、ガラス管が砂の上に落ちた。これぞドートリアを壊滅させる毒。
スナグモ――――
七聖の名は本名ではない。言うならば自分の領分を示すコードネーム。スナグモというのはサソリのことだ。砂と毒。それこそがスナグモの領分だった。
――――まあ、バシリスクほどじゃないけどな。
スナグモはとある人物の姿を思い浮かべる。しかし、あんな敵味方の区別もない毒は自分にはいらない。バシリスクにはバシリスクにしか出来ない仕事があり、スナグモにはスナグモにしかできない仕事がある。この仕事も唯一自分だけが出来る仕事だ。
スナグモは毒を懐に入れ、顔を上げた。
「お前は・・・」
そこにいたのはロイ＝クレイス。自分の盟主、カルコンの弟子にして敵。盟主が警戒しつつも最も味方にしたいと言っていた少年だった。その少年は肩で息をしつつも隙はない。スナグモに敵意をむき出しにした臨戦態勢を保っていた。
「ヒヒッ、何のまねだ？」
スナグモは声だけでは笑っていたが、決して愉快ではなかった。むしろ不愉快。極めて不愉快だった。1回殴られたから殴り返すまで怨み続ける。目の前に立っているのはそんな小さな子供じみた存在だ。そして何より不愉快なのはその子供が盟主の一番のお気に入り

という事だ。
「ヒッ、やっぱりお前に意思はないな。意思はなく、意志はなく、あるのは感情だけ。戦うのが嫌だったから逃げたんだろう？今度はなんだ、見殺しにするのがいやだから逃げるのをやめたのか？」
ロイは剣を抜いた。スナグモは警戒し、1歩後ろに下がる。
「なんだその目は！？」
スナグモは強くロイを睨んだ。ほんの1時間前まで話をしていた目の前の少年がまるで別人のように感じていた。さっきまでの濁った目ではなく、澄み切った湖のような、澄み切っているが底が見えない、そんな目。それはまるで自分の盟主が理想を語るときのような・・・。
「・・・やめたんだ」
ロイはよく分からない言葉を呟いた。しかし子供の言葉はそんなものだとスナグモは溜息をつき、そんなことより次第に整っていく息を観察していた。
スナグモの『砂潜り』は高速の移動法だ。その速度に走って追いつき、それを瞬時に回復させる。“熱”の精霊術はその燃費の悪さが最大の弱点のはず。だとすれば、目の前の子どもは術を使わずにここまで追いついてきたという事。
「・・・人間か？」
奇しくもほんの一時間前、ロイがスナグモに対して思ったこととまったく同じことを考え、呟いた。幸い装束によって顔は隠れているし、ロイに読心術の心得はないので気付かれなかったようだ。
スナグモは小さいナイフを取り出した。一歩離れてもロイの闘気が感じられる。さすがの七聖といえどもこんなむき出しの闘気相手に丸腰でいる余裕はなかった。
じり、とロイがすり足をし、砂でできた地面を蹴った。
ロイは瞬時に跳躍してスナグモに切りかかったが、今度は既にスナグモの姿はなかった。
「うわっ！」

ロイは着地と同時に背後から飛んできたナイフを辛うじて避けた。
やはりあのナイフは接近戦用ではなく投擲用らしい。加えてスナグモの固有スキル『砂潜り』とそれに適したこの砂漠。まるでスナグモのために作られたようなフィールドだ。
「ヒヒッ」
スナグモは笑ったが、やはり愉快ではなかった。むしろ緊張していた。筋力を最大限に生かす“熱”の術とそれを扱うのが若干１６歳の少年という事実に対してある種の畏れさえ抱いていた。
だが、砂漠においてスナグモに勝てるものはいない。地中深くならいざ知れず、そして硬い土ならいざ知れず、砂海の『砂潜り』は捕らえられる速さじゃない。潜り始めるのに多少時間がかかるが、相手は砂に足をとられてどうしても動きが鈍る。その一瞬があれば『砂潜り』には充分だった。
スナグモは再び砂に潜る。後ろに任務が控えているため、そんなに無駄に出来る時間はない。
「ヒヒッ」
スナグモは一瞬にしてバランスを崩したままのロイの真下に現れ、ナイフを突き出した。そこに塗られているのは致死量のサソリの毒。喰らえば１０分もしないうちに毒が回り、苦しみながら死に到る。
だが、そのナイフは再び空を切った。驚き、一瞬動きが止まる。そして、その一瞬の隙をスナグモのすぐ傍で剣を構えていたロイは見逃さなかった。剣を横一文字に薙ぐ。
「ぎゃあ！！」
ぎりぎり身を引いてかわしたつもりだったが、左肩から血が吹き出ていた。スナグモは一気に距離をとり、右手を押し当てて止血を試みた。
「ど、どうして・・・どうして俺様の出てくる場所が分かった！？」
ロイは剣先の血を払い、答える。
「アンタのその技。速いし見えないし厄介だけど、アンタは人をからかうのが好きなんだろ？だからかどうかは知らないが、あんたは

必ず相手の背後か真下に出る。そしてどんなに速くてもどうしてもあんたは相手から目を離してしまう。だから俺はその瞬間に振り返り、剣を構えた。・・・もう少し遠かったら反撃できなかったけど、少なくとも出てくるところがわかっていれば攻撃は受けないからな」

「・・・・・・っ！」

甘く見ていた。スナグモの過大評価は本当は過小評価だったとでも言うのか。この冷静な判断力、まるでさっきまでとは別人だ。あの感情的な少年とはまるで違う。

「そんな一瞬で、俺様の癖も『砂潜り』の欠点も見抜いたというのか・・・」

「やめたんだ」

少年は言う。さっき意味の分からなかった言葉を。今度は呟くでなくはっきりと。

「・・・どういう意味だ」

「やめた。余計なことを考えるのはやめた。・・・俺はアンタの言う通り考えと行動がちぐはぐだった。目の前の問題を全部行き当たりばったりで片付けてた。・・・でも、やめた」

「何を言ってる？俺様の足止めをしようというこの行動。これこそまさしく感情的そのものだろうが！」

ロイは首を振る。ゆっくりと、何かを振り払うかのように。

「俺は自分が嫌いだった。嫌いで嫌で、嫌で嫌で憎んでいた。憎んでいたし、自分を信用しようとも考えなかった。だから自分で考えるんじゃなく、周りの人間の考えに同調していたんだ。

ケムトでもガルガイアでも。あるいはカリューでも・・・。言われたとおりに生きて言われたとおりに歩いて、言われたとおりに戦って・・・。だから俺はふらふらしてて、ふわふわしてて、どっちつかずになったときにどうすれば良いかわからなくなってた」

ロイは一度だけ目を閉じ、今までに出会った人たちの顔を思い浮かべた。

「・・・・・・だから、やめた」

ロイは剣を構えなおした。その構えには一片の隙も迷いも見当たらなかった。

「俺は俺のやりたいことをやる。今の俺はここで同じように故郷を失いそうになってる人を助けたい。・・・だから俺は、ここであんたを倒す！！」

闘気。かなり距離があるのにもかかわらず思わずスナグモは後ろに退いた。先ほどまでは殺気はないからと甘く見ていた。確かに今でも殺気はないが、その気迫に射殺されてしまいそうだった。

「なんだその目は。やめろっ、そんな目をっ！」

スナグモの超敏感な視力に映るロイの目は深く澄んでいて溺れそうになる。カルコンと同じ。いや、カルコンを凌駕するほどの強い意思。強い意志と天性のセンス。まるで敵わない、とスナグモは思った。思って、畏れて、

――――恐れてしまった。

「ヒッ」

笑い声ではなく、恐れの声とともにスナグモは砂に潜った。策はない。勝機もない。しかし、ここでロイを足止めしていかなければ任務が遂行できない。まるでそれは『ガキのよう』なヤケクソだった。

「ぐわあああ」

一瞬後、悲鳴をあげたのはスナグモ。ロイは砂の中に深々と剣を突き刺している。乱れたその精神では気配はおろか地中で砂を掻く音さえも消すことはできなかったらしい。ロイが剣を抜いてしばらくした後、遠くの方にスナグモが現れた。今度は右肩を出血している。

「くそっ・・・くそっ！」

「・・・ありがとう」

遠くで両肩をぶら下げ、こっちを睨んでるスナグモに対して、ロイは深々と頭を下げた。ゆっくりと顔を上げる。

「アンタのおかげで自分がわかった。アンタのおかげで迷いが吹っ切れた。だから、命までは奪わない。その代わり、ドートリアから手を引いてくれ」

「はあはあ・・・ヒッ、ヒヒッ、ヒヒヒッ」
スナグモは笑う。両腕をぶら下げたまま、顔を上げ、声高々に笑った。
「『命までは奪わない』ヒヒッ、よく言うよ。殺す気なんてない、人を殺したこともない、そんな度胸もないガキがっ！！」
いつのまにかナイフを3本口にくわえていた。上げた顔を下ろすと同時に口でナイフを投げた。
「なっ」
その驚くべき速さに驚き、剣でいなす事も出来ず、転がるようにしてナイフをかわした。
「逃げられた・・・」
スナグモはいつのまにか『砂潜り』をし、消えていた。ロイは再び全身に緊張と集中力を回帰させるが、位置は全く分からない。ロイの足元から声がした。
「ここは退く。この両腕じゃ任務はこなせないからな。覚えておけ、次はこうはいかない」
声はしたが、やはりそれがどの辺からしているのか分からなかった。スナグモは完全に冷静さを取り戻している。しかし、確かに音は遠ざかっていくのを感じ、ロイは安堵の溜息を漏らした。
「さて、と」
ロイは剣を納め、自分の心を探る。今自分が何をしたいかを考える。考えるまでもなく、それは明白だ。

「ごめん、父ちゃん。迷っちゃった」

生きてるか死んでるか分からないけど、正真正銘自分の誇る父親。
今の自分を見たらきっと笑ってくれるはずだ。

第１５話　やめた　３

「くそっ、まずい」
ドートリア軍軍団長ブラハム＝レンジェンは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
「――被害報告！死者１５名。重傷者５６名。他軽傷者多数！！」
ドートリア軍は決して大規模ではない。だからその戦力は装備と訓練に頼ったものだ。しかしそれだけに、自軍よりも優れた兵器を出されたらひとたまりもない。
「煙幕を立てろ。一時撤退だ！！」
ドスの聞いた声を震わせた。更に険しい顔をする。
――だが、それでどうする。ここで退いても相手は機械化魔獣。必ず国まで来る。どうすれば・・・。
煙幕が上がった。機械化魔獣がその感覚のほとんどを視力に頼っていることは実証済みだった。つまり、空を飛べるＭ－４９２Ｆはムリだが、地上を駆けるＸ－００ＧＴはこれで足止めが出来る。
「隊長！！一体こんなことに何の意味があるんですかっ！！じりじりと下がっても結局は同じでしょう！？」
奇しくもブラハムと同じことを考えたのは軍の中で１番若い、それも女隊員のエリナリア＝スタンフィーナであった。今年の新人は首席のアレン＝マクーガ以外は伝令役として戦地を駆け回っている。まだ戦力として使えないという判断である。
「いや、意味はある。少なくとも敵軍の多少の分断は謀れるし、こちらも一時休息できる」
「だけどそんな一時的な・・・」
「黙れっ！！」
ブラハムは叫んだ。
「現在こちらの被害は甚大だ。前線に立ってないものが滅多な口を

利くな、スタンフィーナ三等兵!!」
軍団長の言葉に返事をするでもなく、ブラハムの声に怯むでもなく、エリナはブラハムを睨んでいた。
「・・・早くしろ、撤退の伝令だ」
エリナはしばらくブラハムとにらみ合った後、踵を返した。突然近くに置いてあった前線用のマシンガンやらを装備し始めた。間違っても伝令役が持つ装備ではない。そのまま振り返ることもなしに走り去る。
「おいっ、待てっ」
ブラハムは叱責したことを激しく後悔した。ここに彼女の兄であるスタンフィーナ少佐がいれば彼女を止められたかもしれない。彼女の性格――若い頃の自分と同じようなその性格を考慮すればこうなることはわかりきっていたのに・・・。
「くそっ!・・・おい!!」
ブラハムは立ち上がって自分の装備を取る。近場にいた伝令に告げた。
「俺が何とか持ちこたえさせる。その間に撤退するように伝えろ」
「し、しかし、隊長」
「黙れ!!口答えは許さん!!」
「は・・・はい」
急がなければ。彼女は間違いなく死ぬ。当時の自分と違って今の彼女の敵はあまりにも強大だ。間に合うだろうか・・・。
ブラハムは素早く装備を整え、駆け出した。

エリナは疾走していた。既に伝令が伝わっていたらしく、エリナの前には誰もいない。立ち上る煙幕が砂埃と混じって白と黄色の微妙なグラデーションを醸し出していた。
「あたしだってやるときはやるんだから」
エリナは今自分の足を進めている感情が愛国心ではなく残酷な正し

さへの反発であることに気付いていなかった。そして、相手の強大な戦力に対していかに自分が無力かも考えていなかった。ブラハムに対してかなりの軽装備――大型のマシンガンのみ、なのでエリナのほうがブラハムよりも圧倒的に速い。とてもじゃないがブラハムの援護は間に合わないだろう。実戦経験の乏しい彼女は1人で死地に向かうという事がいかなる恐怖かも、その行為は勇気ではなく無謀と呼ぶことも知らなかった。

「よし」

煙幕のすぐ傍まで来て、銃を構えた。煙幕は少し拡散しているので多少は視界が効くようになっている。一歩踏み出すと、不快な煙のにおいが鼻を突いた。エリナは眉間に皺を寄せ、ほんの少し集中力を切らせてしまった。

・・・グルルル

はっとして再び身構える。今のは間違えなく獣の唸り声。すなわち魔獣。しかし地面を走るX－００GTは煙幕を越えられないはずだ。ではこの兵器の声はなんなのだろうとエリナは困惑した。

再び、いや、繰り返し続く唸り声。エリナは周囲を見回したが、それらしき姿はない。姿が見えない分とても不安だ。1対1でも破壊できる保証はないのに囲まれてる危険性もある。

「・・・ううん、大丈夫」

X－００GTは感覚のほとんどを目に頼っているので、この煙幕の中ではこちらを察知できないはず。少なくともエリナはそう教わっていてた。そしてその情報が誤りである可能性などまったく考慮に入れていなかった。

・・・グルルル

エリナは立ち止まって周囲を見回す。煙幕によって、視界は今や伸

ばした手が辛うじて見える程度。普通ならばここで引き下がるのが正解だろう。しかし、頭に血が上っているエリナは引き下がるなんてことはまったく考えてもいなかった。

Ｘ－００ＧＴ特有の重苦しい足音は聞こえない。まだ大丈夫。エリナはもう1歩足を進めた。

・・・グアァァン！！

刹那、エリナは左目の端に何かが映ったような気がした。気付いた時には後ろ向きに吹き飛ばされていた。煙幕の中から吹き飛ばされ、視界が開けた。自分でも気づかなかったが、足が竦んでいたらしく、あまり進んでいなかったようだ。

「・・・あ・・・あ・・・」

頬に鋭い痛みが走った。触れてみるまでもなく、左頬から血が溢れ出ていた。溢れ出ているという表現はまさに正鵠を射ていて、もう既に軍服の左肩は血みどろで、頬の血が素肌にまでしみこんでいた。ねっとりとした感覚に思わず身震いをした。

グルルルルル

雲ひとつない空から降り注いでいたはずの太陽光がさえぎられた。顔を上げると巨大な兵器がエリナに覆いかぶさり、唸っていた。立ち上がれば触れられる位置に魔獣の牙があり、口を開いている。エリナの小さな身体など容易に噛みちぎれるだろう。

「・・・あ、あ・・・」

エリナは後ずさる。ここに来てようやく身の危険と死の恐怖を感じた。陸型機械化魔獣Ｘ－００ＧＴは鋭い牙をむき出しにし、先のほうが少しだけ赤い爪を振りかざす。どうやらさっきの攻撃はかすっただけだったらしい。しかしそれだけでもエリナの戦意を喪失させるのには十分だった。唯一持っていた武器、マシンガンは吹き飛ば

されたときに煙の中に取り残されたままだ。

グアァァァン！！

魔獣は声を上げると、爪を高々と振り上げ、エリナめがけて振り下ろした。エリナは声を上げる事さえ出来ず、硬く目を閉じた。

第15話　やめた　4

エリナを瞬時に肉塊に変えんばかりのその爪は、しかしエリナに届くことはなかった。エリナはゆっくりと目を開ける。
「えっ！？」
何が起こったのか把握するよりも先に身体を抱えあげられ、宙を飛んだ。魔獣から10メートルほど離れた所に下ろされる。
「ロイっ！！」
真白い肌と褐色の髪。時代錯誤な長い剣。ロイ＝クレイスは不敵な笑みを浮かべて立っていた。
「ほらっ」
ロイから何かが投げ渡された。
「戦士の一族秘伝の血止め塗り薬だ。左頬ザックリいってんぞ。痕になる前に塗っとけ」
痛みは既に麻痺していたが、出血はまだ止まっていなかった。エリナは大人しくそれを受け取り、塗った。確かに瞬時に血が止まった。
「・・・・・・・・・・・ありがとう」
エリナは小声で言った。ロイは右手の剣を肩に乗せ、左手を腰に当てて、どうでも良さそうに答えた。
「何が？エリナを助けたのはついでだよ、ついで」
沈黙が2人の間に広がる。ロイの言葉を3回ほど噛み砕いたところでエリナが声を上げた。
「はあっ！？」
「・・・まったく、俺は何やってたんだろうな」
ロイの独り言とも取れるその言葉にエリナは怒りを保ちつつ困惑する。
「自分が大人とでも思ってたんだろうな。・・・なあ、エリナ。俺は大人に見えてたか？」
エリナは首を傾げつつも、かねてから思ってたことを告げる。

「・・・背伸びしてる、というか無理してるようには見えてたかも」
ロイは苦笑した。その顔が今までで1番人間らしい顔だとエリナは思った。人間に化けた魔物なんかにはできないであろう、ロイ＝クレイスの表情だった。
「だよな・・・。だから、やめた」
「やめた？」
「ああ。自分を追いやって他人に答えを任すのはやめた。意思にそぐわないことをするのはやめた。・・・そしたらいつのまにか戻ってきてた」
幸せに満ちていて、生きることが楽しかった頃の自分のところに。そして今の生活を必死に守ろうとしている人たちの所に。
「ありがとう」
エリナは満面の笑みでそう言った。
「だから、俺はただついでに・・・」
「うん！戻ってきてくれてありがとう！」
ロイはエリナに背中を向けて赤面を隠した。太陽を見上げてみるがもちろん太陽は何も告げない。それでもいいと思った。
「立てるか？」
ようやく赤面が治まり、振り返ってエリナに手を差し出した。エリナはそれを掴み立ち上がる。
「もうすぐ団体さんがご到着だ。おてんば娘が迷惑掛けると悪いから少し下がっててくれ」
エリナは額の怒りマークをローキックに変換した。ロイは向う脛を押さえて悶絶する。
「・・・悪かった、言いなおす。危険ですから下がってて下さい、お姫様」
殴勲に膝を折り、礼をする。エリナは噴き出し、素直に下がった。なぜかわからないが今のロイなら信じられる気がした。機械化魔獣が来るというのに、まったく怖くない。
「さあて、と」

ロイは口元を吊り上げつつ剣を抜いた。振り返るとＸ－００ＧＴ３体と、空にはＭ－４９２Ｆが２体待機していた。もしかしたらロイを待っててくれたのかもしれない。考えてみたものの、そんなことはありえないと苦笑した。

「悪いな。お前達には恨みもないんだけど、あの国を襲うつもりなら容赦はしない」

グルルル・・・ガアッ

飛び掛ってくるＸ－００ＧＴ。ロイはそれを左に避けた。太い腕が砂地にめり込み、ロイは剣でその腕を薙いだ。

「・・・・・つう」

魔獣の装甲にかすり傷をつけただけだった。剣がはじかれ、ロイの手が痺れた。遠くでエリナが叫ぶ。

「ダメよ、ロイ！そいつの装甲はＭ－４９２Ｆ以上よ。鋼製性の剣じゃ太刀打ちできないわ」

魔獣は再度唸った。その瞬間、ロイの背後にもう一体が現れ、ロイめがけて爪を振り下ろした。ロイは瞬時に跳んでそれをかわしたが、着地点では既に２体がスタンバイしていた。

連携の取れた攻撃――――。どうやら見た目に反して知能は高いようだ。いや、機械化魔獣はレギュラスが操った魔獣を機械に改造しているだけだから、この知能はそのままレギュラスのものなのかもしれない。

「・・・参ったな、エリナの前では隠したかったんだけど」

ロイは空中で神経を集中させた。自分と剣が一体になったイメージ。剣の先の先まで神経を介在させているイメージ。

カルコンが恐れた天賦の才。それはここまでの多くの経験によって更なる進化を遂げていた。

ロイを貫こうとする爪に剣を当て、反動を利用して２体から離れる。着地後砂を蹴り、敵に向かって突きを繰り出した。

「おおおおっ！」
確かに鋼よりも硬く、融点が高い金属は溶かすことも切ることもできない。しかし、剣と違って複雑な動きをするならば、Ｍ－４９２Ｆと同様に関節がなければならない。ロイが狙うのはそこだ。
グガアァァ
丸太のように太い腕といえど剣が深々と刺されば稼動するはずもない。４足歩行のその魔獣はたやすく地に伏せた。苦しみの声を上げる魔獣の後頭部に向かって跳び、首の後ろに剣を突き刺す。しばらくすると、呻き声も悶絶も絶えた。
ロイが剣を引き抜くと血しぶきが上がりロイの白い頬に走った。しかしロイはまったく気にした様子を見せず、再び剣を構えなおす。

グルルルル

背後から襲いかかる爪を再び空中に飛んでかわした。
「・・・ははっ、当たんねえぞ」
１体を倒し、見せた余裕。しかし、これがあだとなった。
「うわっ！」
速度はそれほど速くないものの、自由に空を舞うＭ－４９２Ｆはまだ２体も残っているのだ。そのうち襲い掛かってきた１体を腰を捻って何とかかわした・・・つもりだったが、左肩に鋼鉄の羽の先が当たり、裂傷が走った。
「・・・・・・っ！」
そして、着地を待たずに３体目のＸ－００ＧＴが爪を振りかざしていた。
血が吹き出る。肘から先の皮膚が裂け、皮膚の隙間から肉が見えた。
「・・・・・・くそっ」
応急処置。熱を加え、血だけを乾かす。傷口自体を焼くと、一生消えない痕になるし、痛みも尋常じゃない。とても戦闘中に出来るとは思えなかった。

俺は馬鹿か、とロイはひとりごちた。
「ロイッ！！」
エリナが叫び、こちらに駆け寄ってくる。そして、その丸腰のエリナにＸ－００ＧＴが襲い掛かった。
「エリナッ！！」
ロイは再びやめた。また１つのことを諦めた。また１つ捨てることにした。
「うおおおお」
全身の筋肉を限界まで活性化させる。セーブすることなく術を使うというのはギンのように命を危険にさらす行動だ。しかしロイはそんな事には一切構わなかった。
「きゃっ！」
魔獣よりも速くエリナの肩を突き飛ばした。出来るだけ圧力は弱めたつもりだったが、勢いがそのまま左手に乗り、エリナは予想以上に遠くに飛んでゆく。そして、ロイの左手からは再び血が噴き出した。
魔獣は攻撃対象をエリナからロイに変えた。鋭く大きな爪がロイに向けられ、振り下ろされた。
「うおおおおおおおおっ！！」
ロイの剣が魔獣の爪と交錯する。信じられないことに、こらえきれずに魔獣の方がひっくり返った。ロイは露わになった喉を剣で一気に突いた。魔獣は数秒間びくびくともがき、やがて動かなくなった。

グルルルル

最後のＸ－００ＧＴが背後から襲いかかる。ロイは振り返らずに喉から抜いたその剣を後頭部を守るようにかざすことで、繰り出された爪を後ろ手で受け止めた。そのまま左足を軸にして半回転し、腕を両断する。
「はっ！！」

ロイは跳び上がり、、バランスを崩したその巨体の脳天に剣を振り下ろした。
魔獣の頭は半分に裂かれた。動物としての、生命としての証である頭部の中身が露になった。しかし、その代償も決して安くはなかったようだ。
「剣が・・・！」
ロイの剣の刀身の長さが半分ほどになっていた。折れた先のほうは死んだその巨体の頭部に刺さったままだ。
「・・・・・・っ！！」
Ｍ－４９２Ｆの腹部の装着された機関銃がロイに向けて連射される。転がってそれを避けようとするものの、２発ほど右脚を掠めた。
Ｘ－００ＧＴの死骸を踏み台にして左足で飛び上がった。敵は第二撃のために低空飛行をしており、うまくその背に乗ることができた。巨大なコンドルのような魔獣はスピードはあまり速くない。しかしロイを振り落とそうと、上下に滑空した。ロイは羽の付け根にしがみつき、刀身が半分になった剣を刺した。二日前斬って爆発したことから、どうやらＸ－００ＧＴとは違い、燃料で動いているらしい。つまり、Ｍ－４９２Ｆは装甲だけではなく、内部まで改造されているということだ。
「うおっ！」
ロイの身体が３６０度回転する。出血したままの左手が離れ、右手だけで宙ぶらりんになった。左手には折れた剣を掴みつつ、右手で何とか羽にしがみつき、落下を阻止している。
ロイはもはや十全には動かない左手に力を込めた。しだいに剣の柄が真っ赤に染まっていった。右手で懸垂をして身体を魔獣の身体に引き寄せ、左手の剣を依然と同じ部位に突き刺した。続いて剣に熱を込める。熱によってその体内の燃料が発火し、魔獣の身体は空中で爆発した。
ロイは熱によるダメージを最大限に減らしたものの、爆風を避けることはかなわず、Ｍ－４９２Ｆの身体とともに吹き飛ばされた。

「ロイ～～！！」
エリナが駆け寄ったが、ロイは砂の上に倒れ込むことなく、空中で回転しながら両足で見事に着地した。
「え、え・・・！？」
ロイのあまりにも人間離れした身体能力に言葉を失うエリナを一瞥もする事なく、最後の一体に目をやる。残った一体のＭ－４９２Ｆはロイから逃げるように北の空へと去って行く。
「待てっ！」
ロイは１歩踏み出した・・・はずだったが、膝が意思に反して曲がった。膝だけではなく、全身に力が入らない。
「ちょっと、ロイ！」
エリナの声が遠く聞こえた。砂がこちらに向かってゆっくりと迫ってくるのが見えた。手を出して身体が衝突するのを避けようとするが、その両腕も上がらない。そして極めつけに腹の底から熱い液体が込み上げ、目の前の砂が赤く染まった。
――あ、やばいかも。
もはや自分の意識があるのかないのかもわからない。今目の前にあるビジョンが現実なのか夢なのか、それすら判断がつかない。それなのにロイはなぜか冷静だった。自分のしたいことを完遂した。そこに後悔がなかったからかもしれない。
人間の限界を超えた術の使用。ギンのような必要な場面ではなく、避けられた限界。今まで自分を大人に見せようとしていたロイだが、改めて自分の愚かさを自覚した。
――ま、いっか。
ドシャ
ロイの身体が砂に埋まる。しかし、その頃には既にロイの意識はなかった。

第16話　戦争　1

――ああ、夢だ。
いつかも感じた感覚。日常から乖離したようなありえない風景。その世界の真ん中にロイは居る。真ん中と言っても本当はどうかは分からない。地面以外は何もない世界で、すべてが同じ色をしていたからだ。
しかし、いつかとは画然と異なることがあった。あの頃は真っ白で眩しいくらいの世界だったのに、今は少し黒を混ぜた灰色。今にも雨が降り出しそうな灰色の世界の中に、ロイは1人佇んでいた。
ロイは走り出した。明確な意味などなく、走る先にはゴールもない。けれどじっとしていられない。何かに追われているような焦燥感。何か、とは疑うべくもなく、いまだに脳裏に焼きついている妖怪になった自分の姿だ。逃げる動作に意味などなくても、走らなければ胸が張り裂けてしまいそうだった。
――はぁ、はぁ、はぁ・・・。
足音は聞こえない。この世界にある音は自分の呼吸音だけ。いつもならなんでもないようなランニングだったが妙に身体が重かった。まるで全身が鉛で出来たようだ。
もしかしたら自分が殺した機械化魔獣たちもこんな気分だったのかもしれない、とロイは状況を忘れて苦笑した。
ロイは立ち止まる。疲労は全身を素早く駆け巡り、心臓を揺さぶる。肺は酸素を供給しようと異常なまでに速く動いた。
――よお。
ロイははっとして顔を上げた。そこにはいつか見た闇。しかし、今度は不定形ではなく、完全な人の形をしていた。ロイと同じくらいの体格の影。いや、その体格はまさしくロイ自身だった。しかし、その姿は真っ黒な影で、顔の中で目だけが白く、こちらを見ていた。

そして、その額には一対の龍が赤く煌めいている。それはまるで額に彫られた彫刻のように美しく、生きているかのような輝きを放っていた。

――お初にお目にかかるぜ。

影は笑った。いや、口の形はおろか、口がどこにあるのかも分からないので定かではないが、目が少しだけ笑っていた。

――おいおいどうしたそんな姿で。まるで妖怪だな。

――え？

ロイは両手を見る。鋭く尖った長い爪。

ロイは口元に触れる。長く伸びた牙。

ロイは耳を掴む。後ろ向きに尖った耳。

――なんだ、これは・・・！

それは妖怪そのもの。いつか見た夢の続き。更に考えるべきは、目の前の影に言われるまで一切そのことに気付かなかったことだ。まるで、それが当然であるかのように。

影の右手がロイの頭を掴んだ。開かれた冷たい目がじっとこちらを見ている。

熱い。額から熱が通じて、身体全体が燃え上がりそうだ。身体全体が焼き切れてしまいそうだ。

意識が再び遠くなった。まるで自分の後姿を彼方から見ているかのような錯覚。そんな幻想の中で、影の声が頭に響く。

――次に会うときまでに強くなれ。お前は俺の　　なのだから。

「うわあああああっ！！」

ロイは立ち上がる。いや、立ち上がろうとして失敗し、落ちる。頭から落ちるところを両手で受身を取ろうとしたが、なぜか両手が出ず、額を思いっきり床にぶつけた。

「・・・いってえ」

ロイはしばらくの間そのままの姿勢でいた。下半身に触れている羽毛は恐らくベッドだろうと推測できる。それはベッドというよりも

床にそのまま布団を敷いたような簡素なものだったが、床よりも一段高いのでベッドと形容してもいいだろう。そして腕にも足にも一切力が入らないが、どうやら腕には手錠がはめられているらしい。両手が前でつながれていた。

・・・そこまで把握できても、今自分がどこにいるのかや、なぜ手錠をはめられているのかはまったく分からなかった。

「・・・何やってんだ、ロイ」

頭の上のほうで聞き覚えのある声がした。鍵を開ける音、次いで格子戸を開ける音がした。

「おお、アレンか。起こしてくれ」

ロイは顔を床にうずめたままいった。頭の上で、アレンは大きく溜息をついた。

「・・・あいたたた。悪い、助かった」

額がズキズキと痛む。きっとこぶになっているだろう。アレンに身体を起こされ、布団の上に座った。あたりを見渡すとそこは牢屋の中だった。ベッド以外はトイレもない。手錠は結構丈夫なもので、力任せでは壊れそうになかった。ロイはその手を見て、繋がれた両手で歯に触れ、耳に触れ、ほっとする。やはりあれは夢だったようだ。

「なあ、アレン。俺は何日寝てた?」

顔を上げてはにかみ、聞いたロイにアレンは再び大きな溜息をついた。

「・・・あのなあ、お前今自分の状況分かってんのか?」

ロイは肩をすくめようかと思ったが、術の酷使の反動でまだ身体が以上に重い。結局それは叶わなかった。

「さあ。状況ってどういう意味の言葉だ?」

「そこがわからねえのかよ・・・」

アレンはがくっ、と崩れる。まあいいや、と説明してくれた。

「エリナを助けて魔獣を4体撃破したまでは覚えてるよな?」

ロイは頷く。敵を倒してそして起きたらこの仕打ちとはどういう事

だろうか。
「そのまま倒れたわけだが、お前を手厚く看護するか牢屋にぶち込むかで意見が分かれた」
「だからそれがなんでか、って・・・」
「お前はやりすぎたんだ」
アレンはロイの言葉を途中でさえぎった。珍しく真剣な目をしていた。
「おかしいだろ、どう考えても。ドートリア軍全軍で向かっても敵わなかったんだぞ。それこそ一騎当千だ。いや、４体で一騎当四千か」
自分のいった言葉が言いえて妙だったらしく、アレンは笑った。ロイは笑えない。こんな状況で笑えるわけはない。
「俺は一応信用する側についたけどな、それでお前はカルタゴラ軍の新兵器兼スパイなんじゃないかと疑われてるわけだ」
「・・・なるほど」
ロイは頷く。ロイの言い分からすれば単純に相性がよかっただけ（どうやら機械化魔獣は火気と接近攻撃が苦手のようだった）だ。純粋に人間対人間だったら一騎当千とまでもいかないだろう。せいぜい一騎当八くらいか。
「だいたいエリナのやつがちゃんと説明すればよかったんだ。『見えないくらい速く動いた』とか、『斬ったら敵が爆発した』とか。・・・英雄の帰還に浮かれる気持ちは分かるけどな」
「・・・・・・」
再びアレンは笑い、ロイは笑わなかった。ロイの記憶が確かであれば全部本当のことである。アレンの「やりすぎた」という言葉が骨身にしみた気がした。
「意見が分かれたといっても兄妹げんかのようなもんだ。少将対エリナだな。それで、軍団長が仲裁に出て、とりあえず治療をして軟禁した。つまり手厚く牢屋にぶち込んだわけだ」
ロイは手錠を見て、牢屋を見回した。

「軟禁・・・？・・・これが？」
「しょうがないだろ。少将が予想以上に強く出たんだから。俺が観察役についただけでもありがたいと思え」
「・・・・・・・・・わかったよ」
ロイが大きくうなだれた。
『やりすぎた』
まさにロイにとってぴったりの言葉だ。少なくともギンがこの場にいたらロイの短慮をくどくど責め、その笑顔のままこっぴどく説教をするだろう。一時のテンションに身を任せるやつは身を滅ぼす。今回で大きく学んだことの１つだ。
「マクーガ、入るぞ」
低くて渋い声がした。アレンは身を引いて敬礼する。ブラハムが身をかがめて格子戸をくぐった。その後ろにはロマリアがいた。
「あ～～」
ブラハムは何をいおうか考えるようにしている。
「そうだな。まずは礼を言おう。ドートリアを救ってくれたこと、感謝する」
ブラハムはびしっと敬礼した。後ろのロマリアもしぶしぶといった顔でそれに従う。
「・・・そして聞かなければならないこともある」
ロイは首肯した。ブラハムがどっちはかは知らないが、黙っているとそのままスパイに仕立て上げられそうなので、自分から話し出す。
「まず、ジラークという国を知っているか？」
敬語を使うべきなのかもしれないが、ファーストコンタクトの屋台で散々喋ったので、省くことにした。
ブラハムは首をかしげ、後ろのロマリアを見る。どうやらブラハムは知らないらしい。
「・・・ジラークはバーカギルにある研究機関です。我々が使用している銃火器もジラークで発明されたものだという話です」
ロマリアが説明すると、ブラハムは大きく頷いた。ロイも感心して

頷いた。それがまた、ロマリアを不審がらせる。
「それで、お前もそこで作られた兵器という事か？」
言葉に渋っているブラハムの前に出て、ロマリアがロイに尋ねた。
ロイは疲れた表情をして首を振る。どうやらロマリアは完全にロイのことを疑っているらしい。
「ジエルトン、という組織については？」
これについては望み薄だった。ここまでの間、ロイの手の指輪に気付かなかったというのがその証拠である。案の定、ロマリアは知らないようだった。
「この国には門番、もしくは王は？少なくともこの二者なら知っているはず」
ロマリアが何か言いたそうにしたが、ブラハムが制止して、アレンに門番を呼ぶように命じた。
「“ジエルトンの者だから石を忘れずに”とも伝えてくれ」
ロイがアレンに言うと、わけのわからない言葉にアレンはいぶかしみながらも頷き、牢から出て行った。
「お前は随分落ち着いているな。もしかしてこういう事は初めてじゃないのか？」
アレンが出てゆくのを見届けて、ロマリアが聞いた。
「ジエルトンについては秘匿義務があるから話せないけど、俺のような存在の組織、ってやつかな」
「なんだそれは？話せないじゃ証明にならない！」
ロマリアは食い下がった。
「だから今から来る門番がそれを証明してくれるって。それに――」
ロイは告げる。今にもロイに食って掛かってきそうな青年と、尋問を諦めてあくびをしながら伸びをしている中年に。
「――知らない方がいい」
ロイの暗く深い目にロマリアは押し黙った。ロイもそのまま黙り、上のほうにある窓を見る。明るい光が差し込んでいた。

あ、そういえば何日たったか聞いてないや、とロイは思った。

第16話　戦争　2

しばらくして、アレンが戻ってきた。その後ろから入ってきたのは1人の男性と初老の女性。ロマリアとブラハムは異常に驚いた顔をして、初老の女性に向かって敬礼をした。女性は笑って応え、ロイの前に進み出た。

「指輪を」

その声は顔の皺が表す年に不釣合いなほど力強い。ロイは無言で繋がれたままの両手を差し出した。女性はロイの手から指輪を抜いた。振り返ってもう一人の男から拳大の石を受け取ると、その2つを近づけた。突然、石が淡い光を放った。

女性は微笑んでロイに指輪を返した。

「先日はありがとうございました。もっとも、要請に応えてくれた、というわけではなさそうですが」

ロイは怪訝な顔をする。女性の背後の軍人三人はぼーっと呆けていた。

「ジエルトンには前々から救助要請をしていたのですが・・・。まあ、あなたが丁度来てくれていてよかった。要請は取り下げておきましょう」

ロイは決して多くない脳細胞を最大限にフル活用させて考える。カルタゴラが機械化魔獣を使っている時点でジエルトンは動いても良さそうなものだが、カルコンの事もあるので慎重になっているのかもしれない。というかロイはこういった問題にジエルトンが対応していたことすら知らなかった。

「議長。そろそろご公務に戻られては?」

ブラハムは少し声を高めに作っている。目上の相手に少しでも威圧感を与えないための彼なりの配慮だろう。

「やれやれ、そうですね。前回の戦線は何とか乗り切ったとはいえ、

まだまだ劣勢が続いていますからね」
「・・・面目ありません」
ブラハムは目を伏せた。
「いえいえ。ここまで劣勢の中、何とか持ちこたえているのはあなたのお陰だと思っていますよ、レンジェン将軍」
「まさか！」
ブラハムは少し自嘲気味に笑った。
「完全に手詰まりでした。私は軍人にあるまじき考えをしました。生きながら敗北を覚悟したのです」
ブラハムは唇を噛み締めた。その姿を複雑そうな顔でロマリアは見ていた。
「まあまあ、そう気を落とさずに。所詮我々にとって魔獣は専門外です。ここにプロフェッショナルがいる事ですし、我々がすべきことは国を守ること。あなたはそれを守った。十分誉れに値することですよ」
「・・・・・・」
ブラハムは黙って頭を下げた。ロイは押し黙る。別にプロフェッショナルではない、という意見をぐっと飲み込んだ。これ以上話をややこしくしたくない。
議長がそのまま去ろうとし、扉を塞いでいたアレンはすっと身体を引いた。
「危ないっ！！」
突然アレンは議長を突き飛ばした。身体が細い議長は簡単に突き飛ばされ、その体を何とかロマリアが支えた。
次いで轟いたのは爆発音。
「ロイ～～！助けに来たわよ」
「・・・・・・」
鉄格子の向こうにはまさに全身兵器という言葉が似合うほど重装備のエリナが立っていた。火器などが体中を覆っていた。どうやら今のは小さな爆弾らしい。

その姿を冷たい目で見る6人の目。12個の目。
「はあ」
ロマリアは右手で頭を抑え、大きく溜息をついた。

「じゃあね～～。後でお見舞い行くから」
ロマリアに襟首を掴まれ、引きずられながらもエリナはロイに手を振り、消えていった。議長と門番は既にこの場を退いている。
「・・・申し訳なかったな。マクーガ、部屋を移してやれ」
そう言ってブラハムは駆け足で牢屋を出て行く。アレンの話だと戦後処理でバタバタしているらしい。ロイは手錠をはずされ、立ち上がった。
倒れた。
「・・・・・・」
「おーい、アレン」
ロイはうつ伏せのまま言った。額が熱い。もしかしたら血が出ているかもしれない。
「腹が減って力がでない。ここを出る前に飯持ってきてくれ」
アレンの大きな溜息が聞こえた。牢屋から出ていく足音だけがロイに聞こえる。
術の後遺症により力が入らないロイは、なんとアレンが戻ってくるまでそのままの体勢だった。

しばらくして、食事を持ってきたアレンに体を起こしてもらい、一瞬で飲み込んだ。
どうやらロイは3日間眠っていたらしい。ギンが2週間昏睡状態だったことを考えると、かなり早い回復といえるだろう。
「そしてその間、エリナは独断専行やらお前の救出のための破壊工作やらでむこう二年、減俸になったけどな」
「いや、そんな目で睨まれて言われても・・・」

ロイのせいではないのだが、アレンの目つきが恐ろしい。ロイはつい目をそらしてしまった。
「あ、そうだ。今の状況はどうなんだ？」
アレンはしばらくの間鋭い目つきのままロイを見ていたが、しばらくすると普通に戻った。
「あの後すぐ、エリナとお前のところに軍団長が駆けつけて、お前を背負って戻ってきた。カルタゴラ軍からはまだ声明は出ていない。だから次はいつ攻めてくるかもわからない。この３日間、軍はずっと臨戦態勢だ。また攻めて来たときにはお前にも出てもらうぞ」
「・・・・・・多分無理」
手は上がるようになった。少なくとも食事が出来る程度には力は入るらしい。しかし足がほとんど動かず、歩くこともままならない。術は使えるので、ギンのように術で移動できれば戦場には出れるのかもしれないが、ロイの戦闘法は両足での機動力が重視されている。とてもじゃないが戦うことは出来そうにない。
「だいたい訳が分からない。戦って、いきなり血を吐いて倒れて３日昏睡。それで起きたらまったく身体が動かないなんて」
ロイは満面の笑みでウィンクした。しかしアレンはごまかされず、更に不快感をあらわにした。眉間の皺が３本に増えている。
「・・・・・・やれやれ。そんなにカリカリするなよ。みんな無事・・・ではないか。でもなんとかなったんだからいいじゃないか」
「ああ、被害は甚大だ。死者も出てる」
アレンはあえて感情がこもらないように淡白に言った。
「そっか・・・・・・」
ロイはそれ以上何も言わない。アレンは一度宙に視線を泳がせた。
「議長の言葉。ジエルトンとかいう組織、信用していいのか？」
ロイは溜息をついた。どうやら説明の義務は回避できないらしい。しかし、暇つぶし程度にはなるか、とロイは説明を始める。
ジエルトンという組織。ディアボロスという組織。ロイとカルコンの関係。説明のために、ほんの少しコップに残っていた水は沸騰し

て蒸発してしまった。
「信じろとは言わない。別に疑ってくれて構わない。俺だって常に俺自身を疑ってる。俺に怯えている。魔物への憎しみがカルコンのように暴走してしまうんじゃないかといつも恐れてる。でもエリナに会って、ドートリアに来て思ったんだよ」
アレンは真剣な眼差しでロイを見ている。ロイは一度微笑んだ。
「俺のやりたいことは復讐じゃない。俺はただ、俺を生み出したくないんだ。カルコンを生み出したくないんだ。俺もカルコンも悲しい。悲しすぎる。みんなそうさ。俺の先生も、その弟子達も、旅先であった人々も、多分ジエルトン本部の連中も・・・。傷だらけだ。ボロボロだ。・・・だから、俺はここに戻ってきた。戦うために戻ってきたんだ」
「・・・・・・」
アレンは黙る。黙ってロイを見る。ロイはアレンを見ている。ややあってアレンが口を開いた。
「・・・わかった。俺はお前を信じるよ。そして感謝する。ドートリアを守ってくれてありがとな」
ロイは笑い、アレンも笑う。狭い部屋の中で2人はお互いの拳を合わせた。

第16話　戦争　3

「全面戦争だそうだ」
ロイが目覚めてから一週間後、ようやく身体が動かせるようになり、食堂で昼食を食べていると、目の前に座ったアレンがロイにそう言った。そういえば今日は軍人の誰もがそんな感じの単語を言っていた気がする。ロイが顔を上げると、アレンはとても険しい顔をしていた。
「昨日カルタゴラに派遣しているスパイから情報が届いた。連中は装備を整えている。早ければ明日にでも進軍して来るそうだ」
「・・・そうか」
ロイはそれだけ言うと、残りを一気に口の中に流し込んだ。アレンはロイのあまりにも素っ気無い態度に表情を更に険しくした。
「わかってたのか？」
ロイは手を合わせた。コップの水も一気に飲む。
「だいたいな。多分俺の存在も間違いなく原因のひとつだ」
「それはあるかもな。恐らくこちらの装備が完全でないうちに、と考えているはずだ」
ロイと対照的にアレンは目の前の食事に手を伸ばさなかった。険しい顔をしたままロイを見ている。
「・・・勝算はあるのか？」
ロイは尋ねた。
「わからない。結局将軍の采配にかかってるだろうな。ただ、誰かさんがこの前いとも簡単に魔獣を追っ払っちまったから士気は上がってる」
「ふうん。そんな馬鹿がいたのか」
「ああ。散々暴れた挙句、3日間も目を覚まさなかった馬鹿だ」
二人はにやりと笑いあった。ここでようやくアレンは昼食を口に含

んだ。
「魔獣のほうは任せることになるかもしれない」
アレンは咀嚼しながら再び顔を上げた。怪訝そうにロイを見る。
「ロイ＝クレイスがいるっていう事が知られていれば間違いなくディアボロスの術者が絡んでくる。どんな術者か知らないけど、精霊術ってのは基本的に複数相手のほうが戦いやすいんだ。だから被害を抑えるために俺が1対1で戦う」
アレンは口の中の物を飲み込み、ロイに言った。
「こう考えると、お前らって兵器みたいだな」
「・・・・・そうかもな」
前だったら明らかに傷つく言葉だったが、しかしロイはそれほど気にならなかった。それはアレンが他意の無いように言ったからかもしれないし、ロイが心の内でそれを認めてしまっているからかもしれなかった。
「俺にも魔獣やら妖怪やらが使う能力と、人間が使う精霊術の違いが分からない。ていうか同じにしか見えない。反動だって魔物に無いって言う証明がなされた訳じゃないしな」
「ふーん、そっか」
今度はアレンが素っ気無かった。
「ま、考えても無駄だろうな。使えるもんは使えるんだからしょうがない。お前らだって銃の構造を把握してる訳じゃないんだろ？」
「俺はしてる。材料さえあればつくれるぞ」
アレンは胸を張った。
「・・・・・ああ、そうですか」
アレンもいつの間にか食べ終わり、二人は席を立った。

次の日は何事も無く訪れた。緊急会議が開かれてカルタゴラ軍が攻めて来る旨が伝えられた。色々と作戦が錯綜したが、ロイには結局分からなかった。ともかくも、心配していた夜の襲撃はなかったら

しい。ロイは部屋の中で軽く身体を動かし、折れた剣の代わりにもらった剣（前のより少し重いやつだ）を腰に帯びた。身体が少し左に傾いた。

「おっと」

術によって常人ならぬ力を出すことは出来るがあくまでそれは術を使ったときの話。ここの軍人でも軽くひくと豪語できるくらいのトレーニングは積んでいるつもりだが、それでもロイの身体は細い。要所要所に筋肉はついているが、生まれ持った基本的な体型だけはやはりどうしようもないのだった。左側の剣の重さを誤差とする事が出来ず、ついつい右側に踏ん張ってしまう。

「いやいや、普通だよな」

誰に言うでもなく、ロイは負け惜しみを言った。もちろん誰からも返事は返ってこない。

ウウウウウウウウ

以前も聞いたサイレンの音にロイはハッとする。心臓を鷲掴みにされるような感覚が走った。ロイが部屋を飛び出すと、ちょうどアレンとはちあった。横に並んで走る。

「間違いない、カルタゴラの襲撃だ」

アレンが全速力で走りながら言い、ロイは頷く。詰め所に急ぐと、軍人のほとんどが装備を手にしていた。

「ロイ・・・とマクーガ。お前達は俺と一緒に来い。それとエリナリア！」

ロイたちに叫んだブラハムが次に呼び止めたのはエリナだった。全身ありとあらゆるところにナイフやら拳銃やらを仕込んでいるので、サイボーグみたいだった。

「・・・お前もだ。口答えは許さん。ついて来い」

「あ、はい！！」

エリナは敬礼をする。アレンが３０秒で装備を整えるのを見届け、

ロイとエレナはブラハムの背中を追う。

「敵の規模は？」

ブラハムは低い声で伝令役に聞いた。伝令役は背筋を伸ばして応えた。

「Ｍ－４９２Ｆ４体。Ｘ－００ＧＴ８体。やはり今回も陸軍の姿は見受けられません。しかし、なぜか魔獣の中に人間が１人――」

「歩兵か？」

「いえ、それが、手にしているのは身の丈を越えるような金槌だけだそうです」

「何者だ？」

「・・・ディアボロスだ」

傍で聞いていたロイの呟きにそこにいるすべての目が集まった。

「間違いなく術者。そいつは俺が戦う」

「・・・本気か？」

怪訝な声を発したのは隊長付きのロマリア。ロイは頷く。

「正直この戦争に興味はない。人間同士の争いに介入する気はない。介入する気はないが、相手がディアボロスなら俺の敵だ」

ロイのその強靭な眼差しにロマリアは口をつぐんだ。

「・・・わかった。そいつはお前に任せる。そして出来るだけ戦場から離れろ」

ブラハムの声にロイは頷いた。

「こちらはなんとかする。お前の提案した長距離の大砲もある程度用意できた」

３日前、ロイは機械化魔獣の抵抗手段として大砲を提案した。遠距離射撃じゃボディに傷をつける程度だし、近づくのも危険。しかし、重量のある砲弾なら効果的だろうと考えた。ちなみに前回は装填に時間がかかる上に、小回りが利かないとして大砲は使われていなかったようだ。

「エリナリア。お前の度胸を買って前線の伝令を頼む」

「はい！」
「マクーガ。お前には後方支援を頼む」
「はっ！」
2人は敬礼をして持ち場へ去って行った。
「ロイ、絶対に負けるなよ」
驚いたことにそのセリフを言ったのはロマリアだった。ロイは強くうなずくと、戦場へと消えていった。
「さあ、行くぞ。ロマリア」
「はっ！」

――戦争が始まる。ドートリアの命運をかけ、ここに今激突する。

第17話　土使い、ザバン　1

ロイはここに来てから快晴以外見ていない。そして、今現在においてもそれは同様だった。あるいはそれはあの国に住んでいる人々の心境を表しているのかもしれない。1万人近くの人口を有しながらも家族のようなその集団。まさに一枚岩。その中にいるのは心地よかったが、一枚岩だけに自分の入り込む隙間は無かった。少しだけ寂しさを感じる。世の中には1人で生きていける人間がいるらしいが、自分にはとてもできないとロイは心の底から感じていた。

「・・・・・・よお」

そんな快晴の空の下、その男はそこに立っていた。自分の身体より大きな大金槌を持っている。ロイにはその男に見覚えがあった。

「カリュー以来か。もっとも、そのときはほんの一瞬の邂逅だったか。がははは。まあいい。一応自己紹介しておくか。儂はディアボロス三騎士の1人、ザバン＝ド＝ヴォルダンだ」

がははは、と男は笑う。浅黒い肌に筋骨隆々の中年。どことなくガイを思い出させる。

「一応言わなきゃいけない決まりなんだが・・・どうだ、ディアボロスに入らないか？」

ザバンは勧誘のセリフだけ妙に棒読みだった。ロイは目を細める。

「がははは。聞くわけがねえよな。いや、わかってる。お前は素直にこちらに来るようなタマじゃねぇ。だからこそ俺たちは警戒してるんだ」

「1つ聞いていいか？」

ロイはそんなことどうでもいい、というように話をさえぎった。

「なぜドートリアを攻撃する？それにどうしてカルタゴラは陸軍を出さない。ここに来てまだ温存か？」

「がははは。多いな質問が。3つじゃねえか」

「揚げ足取りはいい」

「がははは。元気なガキだ。まあいい。ひとつにまとめて答えられる質問だ。正解はただ一つ。この国を攻撃するのは兵器のモニタリングのためだからだ。カルタゴラにいる人間は科学者共とレギュラス。それと今は儂だけだ」

そういうことか。つまり、カルタゴラとしてはこの戦いはただデータを取るだけのもの。勝敗なんてどうでもいいわけだ。

「気にくわねえな、ますます」

「がははは。当たり前だ。主義が違うんだからな。しかし、儂から見ればそれは王の道よ。すべてはカルコン様の目的のためだ」

魔獣の軍団は既にこの辺りから姿を消し、ドートリアに向かっている。もうじき衝突が始まるだろう。カルタゴラのことは気に食わなかったが、これ以上増援がないのは好都合だ。この襲撃さえ切り抜ければ戦争は終わる。

「しかし戦争ってのは厄介なもんだ。もうあらかたのモニタリングは済んでいるのに報復を恐れてどちらかが倒れるまで終わらないとは。おっと、失言失言」

ザバンは巨大な金槌を頭の上でまわした。

「というわけで負ける訳にはいかねえんだ。さっさとお前を倒さなきゃな」

「それは、こっちも同じだ！」

ロイは駆け出した。剣を抜く。術者に対して警戒心を持つにはロイはあまりにも経験がなかった。戦った事のある術者はカルコンただひとり。それもカルコンは自分の師匠で、手の内は既に分かっていた。しかし、今度は違う。ロイは未知の相手に対して真っ向から攻撃を仕掛けてしまった。すぐにそれは決してやってはいけないことだと気づくことになる。

「がははは。威勢のいいガキは嫌いじゃねぇ。嫌いじゃねえが、まず間違いなくわしの敵じゃねえな」

ザバンは頭上で回していた大金槌を地面に撃ちつけた。ロイは怪訝そうにしながらも勝利を確信した。あの手の重量武器は当たればで

かいが攻撃の度に態勢が崩れる。そこを狙えば簡単に打ち崩せる。
「な！おい、嘘だろ！！」
そんなロイの考えは一瞬にして打ち砕かれることになる。
「がははははは、砂津波！」
金槌で叩かれた砂が舞い上がり、ロイなど簡単に飲み込めそうなくらいの高さになった。それはさながら津波のようだ。ただ水か砂かの違いだけ。
ロイは回れ右をして走った。要するに敵に背中を見せて逃げた。小さい頃から高波やら津波やらの恐ろしさを聞かされているので、半分は条件反射だ。そしてもう半分は必然である。
「反則だろ、これ！でかすぎ！！」
二階建ての家がこちらに向かって倒れ掛かってくるのと同じだった。逃げない方がどうかしている。とにかくロイは踏み込みのうまくいかない砂の上を必死に走った。
「ぐわっ！！」
ようやく逃げ切ったとき、背中に鋭い痛みを感じ、前のめりに倒れそうになった。しかし、何とか足で踏ん張り、背後を振り返る。巻き上がっている砂埃の向こうから無数の砂の塊がロイめがけて飛んできていた。間違いなく背中の痛みはこれが当たった衝撃だろう。痛みの鋭さから言って、もしかしたら血が出ているかもしれない。
「くそっ」
ロイは無数のそれらを剣でさばく。体幹部分は何とか守れているものの、手足にかすった。ロイの手足には地面に転んですりむいたような無数の傷ができていた。
「おいおいおいおいおい」
次にロイの視界に入ったのはさっきまでザバンが振り回していた金槌。回転しながらロイめがけて飛んで来る。見た目から推測できる重さから言って、まともに受け止めたら剣が折れるかもしれない。
ロイは剣を構えて身を守りながらも、衝撃を殺すべく後ろに跳んだ。
「うわあああああ」

衝撃を殺したはず。しかしそれなのにロイは5メートルほど後方に吹き飛ばされ、背中を強く打ちつけた。さっき砂が当たった背中が痛んだ。

「くそっ！」

ロイは立ち上がった。すぐさまさっきまで自分のいた位置、今現在金槌がある位置に駆け寄る。今度は考え無しの行動ではない。この金槌がこちらにあれば相手は丸腰だ。かなり重いが、術を使えば持てなくもない。そう考えてロイは金槌の長い柄に手を駆けた。

「なっ！？」

しかし、ロイが触った瞬間、金槌の柄は砂のように脆く崩れてしまった。残ったのは槌の部分だけだ。

「がはははは」

「！！・・・ぶっ！」

背後から現れたザバンが笑いながら両拳をあわせ、それでロイを殴った。ロイは再び吹き飛ぶ。

「がはははは。甘いな。術者との戦闘において重要なのは情報よ。相手の術。相手の技。相手の武器。残念ながらお前のこれまでの戦いは全て筒抜けだ。儂とお前はスタート地点から違うんだ」

ザバンが砂をすくい、金槌にかけると、その砂がさっきのような金槌の柄になった。

「がははは。ミネルバ＝グラン作、タイタンハンマー。特性は個人識別能力。儂が使わなきゃただの金属の塊だ」

「そんな魔法みたいな」

ロイはよろよろと立ち上がった。頭部喰らった衝撃のせいで、まだ膝が躍っている。

「がはは。儂達がそれを言うのかよ。だがこれは術だの能力だのは関係ない。この槌部分の金属の特質だ。その不思議な力により、ジエルトンで武器の鋳造に使われる鉱石は特殊鉱石と呼ばれている」

できの良い息子を自慢するようなザバンの口調。ガイもこんなふうに自分のことを話していたんだろうか。生きているかもしれないが、

その希望はほとんど持っていなかった。兎が人間の世界で生きていけないのと同様、魔界で人間が生きていけるとは思っていない。それはロイにとってあまりにも苦しい事実だったが、そう考えなければ先に進めない。

「始まったな、あっちも」

ザバンに言われてロイは振り返る。いつの間にかロイは随分遠くまで走っていたらしい。あの巨大な魔獣が親指の爪ほどの大きさにしか見えない。

「がははは。あっちもこれで時間の問題だな。そしてこっちも終わりだ」

ザバンがハンマーを地面に落とすと、砂が舞い上がる。ザバンは目の前の砂を少しずつ掴んではロイに投げつけた。

「おらっ、砂弾！」

ロイは何とか回復してきた膝を使って、反射的に避けた。さっきのやつはああやって作っていたのか、とロイはひとりごちる。剣は抜いたが、今度は構えなかった。少しずつ下がりながらそれをかわしていく。銃弾と同じで、避けることさえできればダメージは無い。

「がははは。若い若い。砂散弾！！」

ザバンは舞い上がる砂を両手ではじいた。それは一枚の大きな布のようにロイめがけて襲い掛かってきた。

「うわあああ」

ロイは反射的に頭の前で腕を交差した。砂嵐の中に入ったようで、しかしその砂の一粒一粒には悪意を持った攻撃性がある。ロイの手足は切れ、服は破れてゆく。それが通り過ぎた時、ロイは膝をついてしまった。そして顔を上げる。

「がははは。おらあっ、砂大砲」

ザバンは自分の顔よりふた周りも大きい砂の塊を頭の上で掲げていた。そしてそれをロイめがけて投げつけた。それはまるで質量などともなっていないかのようなスピードでロイを狙っている。

「・・・・・っ！！」

ロイは剣でそれを受け止めたが、やはり受け止めきれず、宙を回転しながら舞った。視界がぐるぐると回る。
「がははは・・・・・むっ！」
ロイが着地した時、既にそこにロイの姿はなかった。まるで砂に潜ったように消えてしまった。
「上かっ！」
影が差すのを感じ、ザバンは上を見上げた。太陽を背負っているロイが剣を構えているのが見えた。ザバンは顔から笑みを消し、身をかがめた。
「！？」
ザバンの足元の砂が盛り上がり、ザバンは吹き飛ばされたように後ろにとんだ。ロイの剣は砂に突き刺さる。
「今の身のこなし・・・なかなかやるじゃねえか」
ザバンは顎をさすりながらロイを値踏みするように見ている。ロイは砂から剣を抜き、再び構えた。
「あんたの技、飛び道具だし厄介だけど、あんた自体はそんなに早く動けない。懐に入りさえすればどうにでもなる」
ロイがそう言うと、ザバンはにやりと笑った。
「ほう。猪突猛進なだけのガキかと思っていたが、なかなか良い観察眼を持ってやがる。まさかこんなに早くこっちの弱点を見破られるとは。がははは。まさか自分の半分も生きてないガキにこの技を使うとはな」
ザバンはハンマーを地面に置き、両手で砂をすくった。それを自分の頭からかけていく。ザバンの体を流れていく砂が身体に密着していった。
「・・・んなばかな」
ザバンの身体は砂漠と同じ色の鎧に包まれた。
「砂鎧！」
その鎧のいたるところに突起物が生えている。恐らく身を守るだけでなく、タックルして攻撃するためのものでもあるのだろう。

「土使い、『ガイアアーマー』のザバン。推して参る！」

第17話　土使い、ザバン　2

ザバンの足元の砂が盛り上がり、ザバンを空中へと弾き飛ばした。
ザバンは空中で両足をそろえ、地面に向けて突き出し、ロイめがけて降ってきた。
「そんなのあたらねえよ」
ロイはその着地予想地点から二歩分後ろに下がった。着地の瞬間切れるように剣を構える。

ドゴォォォオン

気付いた時、ロイは空中にいた。本日何度目か分からないが、とにかく吹き飛ばされているらしい。
「くそっ！」
ロイが何とか体を捻って着地した。ザバンの姿は見えない。着地地点に駆け寄ると、その大穴の中心にザバンはいた。
「おいおいおいおい、うそだろ」
砂漠に大きなクレーターが出来ていた。クレーターの直径は２０メートルくらいだろうか。中心でザバンがこちらを見ていた。
「うおおおお」
ロイは剣を振りかざし、一気に間合いを詰めてザバンに向かって切りつけた。
だが、ロイは失念していた。巨大なクレーターをつくるほどの力と重量。それはつまり、薄く見える砂の装甲は半端じゃないほどの密度を持っているということだ。

ガキィィィン

「がっはっはっは。まるで手ごたえがないな」
ロイの渾身の一太刀は突き出されたザバンの左掌によって阻まれた。
剣をつかまれ、身体ごと宙に持ち上げられた。
まずい、と思った瞬間、腹が貫かれたような痛みが走った。ザバンの右拳がロイの腹を突いていた。
「がっ」
腹が燃え上がったように熱くなり、真っ赤な血が吐き出された。ロイの身体はクレーターの外まで吹き飛んだ。
着地の衝撃が再び吐血を誘発する。どうやら内臓を強打したらしい。尋常じゃないほどの血溜まりが出来た。砂漠の砂は思いのほか水を吸わないようだ。あの拳の強度から言っても、生きているのが不思議なくらいだ。
「がははははは」
日射しが途切れ、ロイが顔を上げた。ザバンが空中に浮き、ロイの頭を破壊せんと両足を突き出していた。ロイは軋む体を何とか奮い起こして逃げ出した。
出来たクレーターはさっきよりは小さいものの、それでも大きな穴だ。
「さっきから逃げてばっかりだな。がははは、カルコン様直伝の術は忘れちまったのか？」
ロイは強いもどかしさを感じたが、しかしどうする事も出来なかった。熱で直接ダメージを与えるには距離が開きすぎているし、リスク覚悟で飛び込んだところで、攻撃が効きそうなのは鎧のない顔ぐらいか。だが、接近戦では確実に相手のほうが上。カルコンも言っていたが、やはり熱の術は不便だ。ギンのような風があれば、相手を吹き飛ばしたりできるのに。
――ああ、だからカルコンは能力に手を出したのかもな・・・。
ロイは1人考える。わかりたくはなかったが、今はカルコンの気持ちが分からないでもない。

――――でも、俺は俺のやり方で戦うしかないんだよな。
ロイは口元の血を拭った。左手にどっぷりと血がついてしまった。
「わかったよ。・・・さあ来い、おっさん」
「おっさんって、言うんじゃねえ！」
ザバンは思いのほか逆上した。どうやらそれなりに年齢を気にしているらしい。
降ってくるザバンの攻撃を何とかかわし、ロイは一目散に逃げ出した。
「がははは。『わかった』ってのは勝てないとわかったって事か。まったくカルコン様はコイツの何を恐れているんだか」
そういうザバンの声は聞こえていて、それなりにはらわたが煮えていたが、ロイは足を止めなかった。

１０分後、ロイとザバンはかなりの距離をとって向かい合っていた。
いや、ロイはザバンを見ているが、ザバンは地面を見ている。
「はあ、はあ、はあ。・・・きたねえぞ」
ロイも肩で息をしているが、ザバンのようにうなだれてはいない。
「この炎天下。そして激しい追いかけっこ。あんたも鎧や砂のジャンプ台に術を使ってるし、俺も逃げるのに術を使っている。追いかけっこまでの消耗は俺の怪我とでおあいこって所かな。
でもそこから先は違う。俺は両足の筋肉を活性化させるだけなのに対して、あんたは鎧を維持し、ジャンプ台まで作らなきゃいけない。どっちが消耗するかなんて、考えるまでもないよな」
術に限界。人間の限界。それは課せられた必然。
「確かに接近戦なら俺に勝ち目はない。でも消耗戦なら、俺のほうが分がある」
「くっ、そ・・・」
ザバンは前のめりに倒れた。鎧は融けるように崩れて、砂漠の砂の一部になった。

ロイはザバンに近づいていく。自分でも卑怯だと思うが、今回ばかりはそうも言っていられない。ドートリア軍は今にも壊滅しているかもしれない。ここで迷って時間を割いている余裕はない。

「！！」

ザバンのほうからロイめがけてナイフが飛んできた。どこかで見覚えのあるものだった。ロイは転がるようにしてナイフをよけた。

「ヒヒッ」

「お前・・・スナグモッ！」

黒い装束。砂を掻き進む人外の技。ディアボロスの諜報部隊の１人、スナグモがそこにいた。

「ヒヒッ。よう、ロイ＝クレイス」

「スナグモ、なぜここへ・・・？」

ザバンが何とか身体を起こした。顔は蒼白で、かなり辛そうだ。その辛さはロイにも十分わかるのだが。

「ヒヒッ、撤退ですぜ、旦那。ドートリアは落ちました」

「なにっ！！」

ロイは後ろを振り返る。しかし、塔からは火の手は上がっていないし、飛んでいるＭ－４９２Ｆの姿もない。

「ヒヒッ、戻れば分かる」

スナグモはそう言い放ち、ザバンを軽々と抱えた。

「逃がすかっ！」

「砂枷！」

ザバンが砂を一掴みロイに向かって投げつけた。それはロイの足元に積もり、硬くなった。

「がははは。せいぜい少しずつ掻き分けて抜け出せ」

ザバンは息も絶え絶えに、しかし楽しそうに言い放った。

「じゃあ、しっかり掴まっててくだせえよ」

スナグモは足元の砂に手を突っ込み、やがてその中へ消えていった。

「くそっ」
ロイは広い砂漠の中で1人悪態をつく。足元の砂を指で掻き分けると、少しずつだが掻ける。そう時間も掛からずに抜け出せそうだ。さっきの鎧は砂自体を術で固めて維持していたが、こちらはどうやら空気圧が関係しているらしい。足と砂の隙間はを完全に密閉されている。濡らした紙を床に置くとはがれにくくなるのと原理は同じだ。これならばずっと術で固めておく必要はないということか。
「よし」
軽くなったところで、力ずくで足を引っこ抜き、ロイは一目散にドートリアを目指した。

第18話　#3・・・・・・POISON！　1

最悪の状況を予想して駆けつけたロイが見たのは、狂喜乱舞する見慣れた人々の姿だった。
「ロイ～～！！」
突進してロイに抱きついたエレナ。肉体の疲労と、何より文化の差異での驚きからロイは後ろ向きに吹き飛んだ。まさに車に轢かれたような衝撃だった。
「あっ、ごめん」
満面の笑みで謝られたのは初めての経験だった。しかし、ロイはそれを咎めることなく微笑み返した。
「・・・ついに、やったな！」
ロイが見上げたその顔には笑顔と涙が浮かんでいた。
「うん！」
日の光をすかし、金色に煌めく髪が舞った。エリナは涙を拭うこともせず、ロイに手を差し出した。ロイは礼を言ってその手をとり、立ち上がろうとした。しかし、エレナのほうがロイのほうへ倒れこんできてしまった。どうやら安心しきって力が抜けてしまったらしい。
「・・・やっぱり、勝ったね」
2人は横になって砂を枕にし、眩しすぎる太陽を見上げていた。
「ん？」
「やっぱり生き残った。私たちは勝ったんだよね。国を守ろうって思う気持ちがカルタゴラに勝ったんだよね？」
「・・・・・ああ、そうかもな」
ロイは太陽を見上げる。しかし、心は先ほどまでの事をずっと追っていた。自分たちは勝利した、と豪語できる自身がロイにはない。ディアボロスは本気で戦っておらず、ロイは敵に一太刀すらも浴び

せていない。相手が消え去っただけで勝った訳じゃない。それに、最後のスナグモの言葉――

『ドートリアは落ちた』

状況から見れば明らかに狂言。しかし、どこか腑に落ちないものがある。喉に小骨が引っかかっているようだった。

ロイは勢いよく起き上がった。エリナは怪訝な顔で体を起こした。前方から手を振り、駆け足でやってくるアレンに背を向け、砂漠に立つ黒い塔に向かって駆け出した。背後でアレンが自分を呼ぶ声はロイには聞こえなかった。

おかしい。

その思いをロイは振り払うことが出来ずにいた。この戦闘はそもそも報復されないためだとザバンが言っていた。仮にカルタゴラを諦めたとしても、中途半端な戦力で攻めて来る理由が分からない。普通なら圧倒的な武力で叩きのめすか、何もしないかどちらかのはず。それなのに、カルタゴラはドートリアに敗れる程度の軍を出した。ロイの中にいやな思惑が浮かんできた。あの軍団は全ておとりだったと考えれば辻褄が合う。

「はあ、はあ、はあ・・・ちくしょう」

まるでロイの考えを証明するかのような穴が、壁に開いていた。大きさとしては人が縦に1人、横に2人は入れるくらいだろうか。穴に近づくと、いやな刺激臭が鼻を突いた。壁は壊されたというよりも溶かされている。ロイは唾を飲み、足を踏み出した。

異様な空気が肌を突き刺す。あたりに立ち込める刺激臭に、嗅覚は一瞬にして麻痺した。しだいに頭がぼーっとしてきて、進んでいるかもわからないほどの前後不覚に陥った。幸いにも奥のほうにかすかな光が見える。その光が近づいているから進んではいるのだろう。

「なんだ・・・ここ・・・？」

そのトンネルを抜けた先には広い空間があった。中心部には巨大な貯水池がある。少し考え、オアシスの水を溜めている場所だと理解

した。しかし、それよりもさらに怪訝なことがあった。
「誰だ、お前!?」
貯水池を覗き込むようにして人間がうずくまっていた。頭から被っている布のせいで性別は分からない。背格好はロイより一回り小さいくらいか。
ロイの言葉で、うずくまっていた者がかすかに動いた。ロイは全身から警戒心を滲ませる。そのまま1歩近づくと、それはゆっくりと立ち上がってこちらを見た。
ロイの目では性別などまるで分からなかった。それには顔が無い。いや、そうではなく、仮面をかぶっていた。まっさらな仮面をかぶり、全身を覆う布の下はミイラのようにしっかりと包帯が巻かれていた。皮膚の見える箇所はない。そして、それはおもむろに自分の仮面に手を伸ばした。
その顔もやはり包帯でぐるぐる巻きにされていた。唯一見えるのは両の目だけ。左目はきれいな淡い紫色をしているが、右目はぼんやりと霞んでいる。そして、それは口元を、正しくは口がある場所の包帯をゆがめた。にやりと。にんまりと。

ウウウウウウ

「!!」
突然鳴り響いたサイレンにロイは驚く。2人の間にある緊迫した空気を加味すればなおさらだ。しかし、相手はまるで驚いた様子も見せず、透き通る左目はじっとロイを見つめていた。
「ここで何をしている!」
少しして、ロイが通ってきた穴から2人の軍人が現れた。ロイには見覚えが無かったが、結構若い。その二人は銃を相手に向けたままゆっくりと近づいた。
ロイは緊迫した空気に縛られているかのように身動きが取れなかった。というよりも身動きを忘れた。動物としての本能がその者に近

づくことを許さなかった。だから、制止する事が出来なかった。無用心に近づく2人の男。その男たちを見る紫色の左目がまるで蛇のように光った瞬間に、二人を助けることができなかった。素早く動いた訳でもなく、力強く踏み出したわけでもない。一瞬後、その者は2人の男の目の前にいて、2人の口内に指を突っ込んでいた。

「・・・がっ!?」

ほんの一秒後、ゆっくりと3歩下がった。2人は怪訝な顔をしてお互いに顔を見合わせ、しかし銃を構えた。その瞬間――――。

「う・・・あ・・・い、息が・・・・・・」

1人がそう声を絞り出し、倒れた。二人目も同じようにして倒れる。二人とも白目を向いたまま痙攣していた。

2人を見下ろす目は笑っていた。口元の包帯も笑顔の形に歪んだままだ。両手の指の包帯がほどけていた。そこから覗く皮膚はどす黒い痣がまだら状に走っている。そして、それはすぐさま顔をあげ、ロイを見る。

「!!」

だが、ロイは一瞬のうちにその姿を見失った。ロイはキョロキョロと辺りを見回す。いつの間にか額からは大量の汗が溢れていた。暑さから出るものではなく、蛇に睨まれたかのような大量の冷や汗だ。

「七聖#3、バシリスク」

高く澄んだ声で囁かれた。ロイのすぐ後ろ。胸がロイの背につくぎりぎりの近さにいた。ロイは身動きが取れない。バシリスクと名乗った女性は、子守唄のような声で続けた。

「・・・殺していない。お前も殺さない。・・・・・・・・・毒で死ぬのは」

子守唄を一度切る。左手を背後からロイの目の前にかざした。瞬間、ロイの意識が遠のいた。

「――苦しいだろう？」

視界が暗転した。全身から一気に力が抜けた。全ての皮膚の感覚が消えた。

そして、ロイの意識はそこで潰えた。

第18話　#3・・・・・・POISON！　2

「・・・・・もう何度目だ」
目覚めてまず始めに、ロイは自分自身に悪態をついた。悪態の1つもつきたくなる。ここ最近はかなりの頻度で気を失っている。特に今回は敵の目の前で、だ。
起き上がってまず周囲の状況を確認した。バシリスクと名乗った女がいなくなったこと以外には何も変わっていない。トンネルの向こう側から団体の足音が聞こえてくる。恐らくサイレンを聞いた一団だろう。という事はそれほど長い間気を失っていたわけではないらしい。
ともかく、と思いなおして、倒れている二人に近づいた。かすかではあるが息をしているし、脈もちゃんとある。どうやら生きてはいるようなので、バシリスクが言っていたことは本当らしい。
――毒で死ぬのは苦しいだろう？
まるで自分がそれを経験したかのような口調。意識の途切れる最後に聞いたその声を頭の中から消すことが出来ないでいた。
「ロイ＝クレイス！・・・これは一体どういう・・・・・」
ロマリアは倒れている二人を見て言葉を途切らせた。多数の足音とともに入ってきたロマリアは額に大量の汗をかいている。表情には今まで決して見られなかった焦りを覗かせていた。
「いや、わからない」
ロイは答えた。一番の当事者でありながら本当になに1つわからなかった。
「・・・ちっ、またお前が容疑者か」
ロマリアは吐き捨てるように言う。その言葉はロイだけで無くロマリアの背後の部下にまで動揺を生み出した。

「そのオアシスには毒がまかれている。既にこの国で水を使った者たちに大量の被害者が出ている。幸い死者は出ていないが、それだけに病院はパンク状態だ。もともとそれほど規模のある医療体制はこの国にはないからな」

ロマリアは唇を噛み締めた。そしてロイに経緯を話すように促した。

ロイはやはり正直に言うが、どんなに丁寧に説明してもロイの首を締める以上の意味を持っていなかった。

「・・・毒を撒いたその女が、ディアボロスだと？」

「ああ、間違いなく#3と名乗った。ディアボロスの諜報部隊『七聖』のナンバーらしい」

ロマリアは再び舌打ちをした。ロマリアとてロイがスパイだと信じたい訳ではない。しかし、妹のエリナのように突然訪れたヒーローなど夢物語だと思っている。そして頭のいいロマリアだからこそ今の状況で辻褄の合う論理的なものを考えてしまう。

汚染されたオアシス。倒れている部下が2人。そして1人立っている男。ロマリアたちが国から連絡を受けてからここに到着するのにそれほど時間は掛からなかった。しかし、ロイが言うような人間は見ていない。砂漠の上を歩いていればいやでも気付くのに、だ。倒れている2人に詳しく聞かなければならない。それで少なくとも4人目がいたか否かは分かるだろう。

しかし、仮に4人目がいたとしてもオアシスに毒をまいたのがロイという嫌疑が消滅する訳ではない。2人が到着したのは毒のまかれた直後。しかも、今のロイの証言ではロイはその人間と交戦していない。だとすれば考えられるのはただ一つ。

「お前とその諜報部隊とやらが手を組んでいるのではないのか？」

それが最も明瞭かつ納得のいく回答だ。

ロイはその言葉を聞いて目を細め、ロマリアを見た。

「・・・・・俺とディアボロスが手を組んで、ね」

ロイはその場にいる全員をあざけるように嗤った。その反応に全員にどよめきが走る。

「はっ、はは・・・。なるほどね・・・・・・」

ロイは笑うのをやめない。ロイは笑う。ロイは嗤う。自分の愚かさを嗤っているのかもしれないし、ロマリアの考えがまるで的外れなことを嗤っているのかもしれなかった。その理由はロイにも分からない。だが笑わずに入られなかった。途方も無くおかしかった。理由もなく、壊れたおもちゃのようにロイは笑った。もはや自分で自分を律することすら出来ない。しばらくしたら自分は笑っているのか怒っているのかすら分からなくなっていた。

「ああ・・・いいや、もういい。どうでもいい。どの道オアシスがなければこの国はおしまいだろう?俺がここに居続ける必要はない。戦争も終わったし、俺はもう用済みだ。そうだろ?

俺は出て行く。また旅を続ける。文句はないな?」

ロマリアは考えあぐねているように曖昧に俯いた。ロイは返事を待つまでも無く足を進めた。ロマリアの脇を抜け、トンネルを塞いでいる兵士達を威圧的ににらみつけた。彼らは自分より一回り以上小さいロイにたじろぎ、道を開けた。ロイを止めようと手を伸ばすものもいたが、結局その手がロイに届くことはなかった。

太陽の下に出ると、やはり日射しが暑かった。しかしそんなことを気にせずロイは足を進める。もはやここにとどまる意味はなかった。

――これでいいんだ。俺はここに心を残してはいけない。故郷があると、決意が揺らぐ。

ロイは1人太陽を見上げる。毎日変わらない太陽と違ってロイの歩いてきた道はまるでちぐはぐだった。ロイの足跡が世界を掻き乱しているように事件ばかりが起きた。それはどれもロイがいようがいまいが勝手に起きた事だ。それでもロイは1人思う。自分がいなければ世界はもっと上手く回っていたのではないか、と。

例えばロイの才能を恐れ、友との敵対を早めた師だとか。

例えばロイが傷つけたことによって誘惑に魅入られ、暴れた心優し

き魔物だとか。
例えばロイを生かすために守るものを増やし、魔物と相討った戦士だとか。
例えばロイを打倒するため幹部を送り込まれたドートリアだとか。

そう思うとやりきれなくなる。まるで自分が世界にとって悪のようにも感じられる。この星ザイガにおいて異物なのかとも思える。
「それでも俺は、行かなくちゃいけないんだ。・・・生きなきゃ、ならないんだ」
ロイは1人、そう呟く。自分自身に誓うように。足跡に誓うように。
そしてそのまま足を速める。もはや太陽は見上げるには眩しすぎた。
照り返す砂でさえも眩しくて目を細めた。ロイを照らすスポットライトの様な光に異様な嫌悪感を覚えた。
ロイは俯いたまま足を進める。逃げるようにそこに背を向けていた。
いや、実際逃げていた。ロイのせいだと怨まれるのが怖かった。少なくと自分イの存在が破滅に一役買っているのは間違いないのだから。

「――――忘れ物よ」

不意に、頭の上で声がした。バシリスクほどではないが、高く澄んだ声。聞き覚えのある声。ロイは顔を上げようとしたが、しかし敵わなかった。頭をぐいと押さえつけられ、見たくもない砂を見させられることになった。その視界にロイの荷物が投げ捨てられる。
「ありがと。じゃ」
荷物を拾い上げ、そして出そうとした右脚を蹴られた。
「・・・・・っ！」
ロイは反射的に顔を上げ、睨みつけた。眩しい太陽に照らされている彼女、エリナリア＝スタンフィーナの表情は1つ、怒りを呈していた。

「こんな非常事態に散歩かしら」
エリナはその表情を変えない。そして、ロイも苛立ちを抑えなかった。両者は太陽の下、睨み合う。
「行くんだよ。今回で痛感した。ここに俺の居場所はない。・・・ここだけじゃない、今まで通ってきたどこにも俺の居場所はなかった。結局俺の居場所はボンゴだけだったんだ」
家族のいたボンゴだけ。だがしかし、それももはや無い。まるで世界のロイに対する罰であるかのように跡形も無く消えてしまった。
「それでも俺は生きなきゃいけない。だから、行くんだよ」
「随分と勝手な考えね」
エリナは一蹴する。一笑に付す。まるでロイの悩みなど些細なことだというように。ロイの存在は矮小でしかないというように。スポットライトなど当たっておらず、ただの観客にしか過ぎないとでも言うように。
「勝手で良いだろ?俺はほかでもないこの国でそう生きるって決めたんだ。だからここで戦った事も後悔してない。ここを守ったことを誇りに思う。だからこそ嫌なんだ。守ったものに牙をむかれることも、これ以上ディアボロスのことでみんなを巻き込むことも耐えられない」
確かにここはロイの故郷じゃない。それでもロイは、この国が好きになっていた。ここの人々と仲間のまま去りたかった。これ以上の嫌疑も、裏切り者と謗られることもごめんだった。
それは決して彩ることの無い、ロイの真実だ。

「・・・それを聞いて安心したわ」

「え?」
「これであたしも安心してついていける」
「えっと、だから、一体何を・・・?」
「よかったよかった。うん、決定」

「スタンフィーナさん？」
「あなたは！」
エリナはびしっとロイを指差す。目の先で。それこそ鼻に指が刺さるんじゃないかってくらい近くに。
「まだ容疑者よ。国を出るには監視が必要。そしてあたしはディアボロスに借りがある。借りは返さなくちゃね。２００倍返しよ」
ロイは状況を整理できず、呆けた顔をした。しかし、すぐに反論しようと口を開く。
「異見は聞かないわ！」
しかしエリナにさえぎられた。
「あたしはもう決めたの。もしかしてあたしの決意を揺るがせるとでも思って？」
それは、その言葉は何よりも非論理的で、しかし何より説得力のある言葉だった。目の前に立つ少女はロイが羨ましくなるくらい自分勝手で我が侭で、前向きだった。太陽の光を浴びて煌めく金髪はどこまでもきれいだった。
「敬礼！！」
突然の号令に、ロイは驚いて振り返る。そこには千人近いドートリアの軍人が勢ぞろいしていた。一斉にロイを見て、敬礼している。号令を発したロマリアも、先頭に立つブラハムも、笑顔を浮かべるアレンも――――。誰も彼もが規律正しい敬礼をロイに向けていた。
「俺たちはお前達が無事に帰ってくるまでに新たな国づくりを終えて待つ。だから、必ず帰って来い！」
アレンが叫んだ。それを皮切りに軍人達から歓声が上がる。ロイに対する感謝の声が口々に上がる。
そして、ロマリアが叫んだ。
「エリナを頼んだぞ、ロイ！」
ロイは笑った。顔を上げて、太陽を見て。微笑んだ。そして口を開く。喉がつぶれんばかりに叫ぶ。
「ああ、行って来ます！！」

空は晴れていた。
青い空に広がる陽光はやはりスポットライトのようだが、その光はロイのみを照らすものではなく、全ての人を等しく照らしていた。

第18話　#3・・・・・・POISON！　3

「さあ、乗って」
「・・・ええ～～～」
車の運転席を陣取るエレナの姿を見て、ロイは早速帰りたくなった。
熱せられた砂で火傷してもいいから裸足で帰りたい気分である。しかし、ロイたちが出発するのを見送っている千人近いみんなの手前、それは出来ない。ロイは覚悟を決め、助手席に乗り込むと、口を閉じた。喋れば間違いなく舌を噛むだろう。
発進と同時に車体は大きく揺れ、ロイは座席にしこたま後頭部を撃ち、車に頭突きした。確かに砂上じゃ上下に揺れるのは仕方無い。だが、この揺れはそれだけじゃないはずだ。
断言できる。運転は自分のほうが上手いと。
「そういえば、何でエリナなんだ？」
背後に人の群れがなくなった頃、ロイはエリナに問いかける。揺れに体がだいぶ慣れてきた。砂の形であらかじめゆれを予測しておけば、舌を噛むことだけは回避できそうだ。
「ん？ああ、とりあえずロイと親しい人間という事であたしかアレンになる訳だけど」
「まあ、そりゃそうだな。知らないやつとの2人旅はごめん被りたい」
だったらアレンでも・・・という言葉を飲み込む。エレナの機嫌を損ねたらなにが待っているかわからない。
「でもアレンは有能だからね。今のドートリアには絶対必要な人材なの。だからあたし」
「・・・なるほど、エレナは有能ではないから必要ないと判断された訳か」

急ブレーキ。前方に投げ出されようとする体を必死に押さえつけた。が、その後に訪れた危険を回避する事は敵わなかった。
エレナが右手でロイの頭を殴った。拳で。
「・・・冗談です」
エレナの射抜くような視線にロイは体を縮める。それこそ座席の下に入り込めそうなくらい小さく。どうやら結構気にしているようだからこの話題には触れないでおこう。車の後部座席にはドートリアから持ってきた武器累々が眠っている事だし、そのうち洒落にならなくなるかもしれない。
「あ、ごめん、ロイ」
突然の謝罪にロイは首をかしげた。今のどこにエレナが謝るポイントがあったのだろう。ロイは左側にいるエレナを見た。しかし、謝罪しているとは思えないほどの笑み。なんだかいやな予感がする。
「タイヤ埋まっちゃったみたい。何とかしてくれる？」
どうやら今後、旅に付き合う従者のようなポジションになりそうだ。ロイは苦笑いと共にそう思った。

辺りが薄暗くなって、エリナが車を止めた時、ロイはかなり汗だくだった。それは降りそそぐ太陽のせいだけでなく、隣にいる太陽を反射する金髪の持ち主のせいだ。そしてこの疲労感。今瞼を閉じたら瞬時に寝られる自信がある。
「はい、じゃああたしは向こうの岩の陰にテント張って寝るから。ロイはここで寝てね。緊急事態以外は近づかないこと。何か質問は・・・ないわね」
エリナはロイの人権を完全に損害して、エリナはそそくさと行ってしまった。ロイはエリナにもらった携帯食料をちぎって食べながら小さくくしゃみをした。砂漠の夜は本当に冷える。２人旅に期待していた訳ではないが、予想以上のエリナの淡白さが残念な気持ちを際立たせていた。

車が砂漠に終わりをもたらしたのはドートリアを出発してから3日目のことだった。エリナは砂漠以外の地面を見るのが初めてらしく、車を止めて大きく伸びをした。ロイも久しぶりに木陰に入り、目を閉じた。急にカリューの山が懐かしく感じられた。

「ま、そうはいってもしょうがないか」

ロイは立ち上がる。過去はすべて今に繋がっている。別れた人々も失った人々も今のロイに繋がっている。そして今は未来に繋がっている。

とりあえず、自殺行為を行おうとしている旅のお供を救おうとしよう。

「エリナ、沢の水を直接飲んじゃだめだ！きれいに見えても雑菌だらけだから地面舐めるようなもんだ」

ロイの言葉を聞いてエリナは両手の受け皿を壊した。水面に水が跳ね返る。ロイが溜息をつくと、エリナはエヘヘと笑った。

「だって綺麗だったんだもん」

「好奇心旺盛なのは結構。でもこんな所で食中毒とかはやめてくれ。生憎俺は腹痛で苦しんでいる運転手の車には乗ってやらねえぞ」

エリナはここ数日と同様にぶすっとした顔をした。しかし、すぐに笑顔に戻る。

「やっぱり変な感じだね、土の地面ってのは。こんな大きな木もはじめて見たし。やっぱり来てよかったな」

エリナは再び大きく伸びをした。

「機嫌は直ったのか？」

ロイはしゃがみ込んでいるエリナの背後に立ち、声をかける。ここ数日エリナの周囲にずっと張られていた威圧感は煙のように消え去っていた。

「あ、やっぱ分かった？」

「わからいでか」

ちなみにわからいでか、はガイの口癖だった。意味は「わからずに

いられるか」ということらしいが、エリナには伝わらなかったらしく、きょとんとしている。
「う～ん、やっぱり悔しかったからね。それに、砂漠はあたしの家であると同時に戦場だから。あそこにいる間は、あたしはスタンフィーナ三等兵なんだよ」
ロイは頷いて見せたが、内心は理解できなかった。それは家を持つものと持たないものの差なのだろうか。
「今は違うのか？」
「うん。今はただのエリナリア＝スタンフィーナ。それに夢がかなったからね。嬉しくって」
エリナは宝石のような笑顔を見せた。
「ずっと森が見てみたかったのよ。やっぱロイと一緒に来てよかった。今は心からそう思ってるわ」
「そうかい、それは良かった。まあ、俺としては最初からそう言ってくれるとここ数日びくびくしながら生きなくてもすんだけどな」
ロイは腰に手を当てて微笑む。少し歩いて木の幹によりかかり、腰を下ろすと、頭上で風をいっぱいに受ける葉を見上げた。不毛な大地を見続けていたせいか、その緑が眩しく見えた。
静けさの下でいろいろなことを思い出す。歩いてきた人のことを思い出す。ロイの人生を狂わせた男のことを思い出す。その思想に賛同するものたちを思い出す。
彼らは一同にロイを否定する。考えが定まっていない、ふらつくばかりだと嘲笑する。けれどもロイはそれでも構わないと思っている。ロイには世界がどうとか人間がどうとか魔族がどうとかなんて分からない。ただ、カルコンが世界の王になる事だけは許せなかった。それは怒りや恨みではなく、はたまた他のどんな感情でもなかった。
――感情からではなく、考えた末にロイはそれに到った。だからきっとそれが今のロイの真実だ。

「おーい、エリナ、そろそろ行こうぜ」
ロイは腰を上げ、エリナに声をかける。もう一度顔を上げる。緑の葉々も太陽もよりいっそう近く感じた。

第19話　人の痛みがわからない国　1

珍しいことに、ドートリア製の車を運転しているのはエリナではなくロイだった。エリナと言えば、金色のまつ毛を重ねあわせ、助手席で寝入っていた。「あたしやっぱり疲れたや、運転変わって」とエリナが言い出し、ロイは承諾。むしろエリナの運転には辟易していたので、嬉々として受け入れた。

だがしかし、エリナの睡眠は安らかではない。疲れたからぐすっり眠っているのではなく、ロイのほうがエリナよりも明らかに運転が上手かったので、不貞寝してしまったのだ。

助手席をちらと見て溜息をついた後、少し笑って再び視線を前方に戻した。車のおかげでももちろんあるが、1人が2人になるだけで随分と愚痴が減った気がする。ドートリアに来るまでは「あっちー」だの「疲れた～」だの延々と一人でぼやいていたロイである。少なくとも前のように苦には感じない。それなりにわずらわしいこともないではないが、それ以上にエリナに救われていた。

――――シュートもこんなふうに感じてるのかな。

懐かしい顔を思い出して、再び笑った。ほんの一ヶ月前の出来事なのに、本当に遠い昔のように感じていた。それはそれだけ波乱を生きてきたという事であり、同時に考えることが多く、感動したことも多かったという事を意味している。通ってきた道が全て自分の成長だといえるほどロイはポジティブではない。けれど、それを無意味と捨て置くほどネガティブでもない。

「うわっ！」

物思いに耽っていると、突然道（とは言っても舗装されておらず、あってないような道だ。この車は良く走れるものだと感心する）に飛び出す影を見て、急ブレーキをかけた。

「なんだ、鹿か・・・」

起こしてしまったかと隣を確認したが、助手席のエリナはむしろ幸せそうな顔をして眠っていた。鹿に驚いてバクバクと動悸が止まらない心臓が脳にその睡眠を邪魔しろ、と訴えていたが、脳は極めて冷静に仕返しを恐れていたので、行動は起こさなかった。

「ロイ、油断は禁物よ・・・」

「・・・・・・ども」

エリナの随分とタイムリーで教養的な寝言に、ロイは返事をする。

前方には国が見えていた。

「それで？入国するの？目的は？いつまで？」

入国審査官は随分と恰幅のいい中年の男だった。ロイとエリナの格好をじろじろと眺めて、めんどくさそうに仕事をしている。

「随分と無礼な人ね、殴ってやろうかしら」

エリナはロイの耳元で囁いたが、かなり険がこもっていて、発せられた声は大きかった。どうやら審査官にも聞こえたらしい、あるかないかわからない首を回してこちらを見た。しかし、よほど仕事が嫌いなのか書類を書き上げると、すんなりと二人を通した。

この国では車は一切禁止らしく、城壁の外にある車庫に止めておくことになったが、ひょっとしたら何十年と使っていなかったんじゃないかと思うほど汚かった。当然エリナは憤慨して、凄い剣幕で大きな布を持ってこさせ、後部座席の物騒な物ごと車を包んでしまった。

庭の柵のような簡素な城壁の内側はなんとも貧しい国だった。木材で組み立てられた家はどれも背が低く、辛うじて屋根は瓦でできているものの、どの家も崩れてしまっていた。ほとんどの家は撥水性の布を屋根にかぶせ、石を重りにすることで雨漏りを防いでいた。土をならした道の両脇には延々と畑が続いていた。国が広いのか人口が少ないのか、畑の面積に比べて作業をしている人が少ない。と

てもすべての耕地を管理できるとは思えなかった。その証拠に、畑の半分ほどには作物は植えられておらず、黒い土が顔を覗かせていた。

「のどかな国ね」

分かれて土地に根ざしている家も、空の下にある畑もエリナにとってははじめて見る物だ。キョロキョロと、ものめずらしげにひとしきり辺りを見回した後、エリナはそう呟いた。確かにドートリアのような慌しさはない。

「だけどな、エリナ。活気があるの対義語はのどかじゃないんだ」

これはグリンの受け入れだ。ロイは疲れた顔をした農民に目を向けた。椅子に腰掛け、うなだれていた。しかし、しばらくすると立ち上がり、畑へ戻っていく。

「普通の国というのは対面を考えて門周辺は飾っておくものだ。しかし、入り口がこれじゃあ・・・・・・」

エリナはふ〜ん、と言ってもう一度辺りを見る。しかし、それから何も言わず、ロイの少し後ろを歩いていた。

３０分ほど歩いて、国の中心部まで辿りついた。エリナはやはりものめずらしそうに辺りを見ていたが、ロイは中心に近づくにつれ、表情が険しくなっていった。それを知ってかしらずか、エリナはロイに話しかけなかった。

ロイの機嫌が悪くなる理由は前方の建物。貧しいこの国には不釣合いなほど巨大な城。だが、その豪華さに反比例するように城周辺の建物はひどく小さい。まるで城が周囲の栄養を吸い取っているようだった。それを見たからだろうか、エリナはその城に関する感想を何一つ漏らさなかった。

「あんたら、旅人さんかい？」

足を止めて城を見上げていたら、傍の家の老婆が話しかけてきた。

ロイは頷く。

「だろうと思ったよ、あんたらの目は死んでないからね」

そういう老婆の身体は皺だらけで、それだけ貧困さを物語っていた。
老婆は2人に待っているようにというと中から茶を持ってきた。ロイたちは礼を言って受け取った。渋くて、かなり苦かった。
「こんなに貧しくて驚いたろう。数年前から税が厳しくなってね。王様一族が無駄遣いするもんだから。おっと、今のは内緒だよ。政治に文句を言うと鞭打ちの刑だからね」
「やっぱり」
ロイは顔をしかめる。道を踏み外した王。あまり無視できる事ではなかった。エリナも顔をしかめていたが、それはきっとロイとは違う理由だろう。
「それにしては、家のない人間はいないみたいだが」
「そりゃそうさ。土地は全て王が管理していて、全国民に分配されるんだ。土地を持っていない人間なんか1人もいない」
「なんだ、いい政策じゃない」
エリナが言ったが、老婆は黙って首を振った。
「土地には重い税が掛かっている。耕地も分配されるがそっちは持たない者も多いね」
エリナは首をかしげてロイを見た。ロイは少し考える。
「税が重すぎて手放してしまうってことか」
老婆は頷く。
「その上死ねば国のもとに戻る。どんなに一生懸命に耕した土地でもね。土地の売買もできるが、土地を買うと莫大な税が待っているからね、売りに出すものはいても買うような酔狂なやつはいないさ」
「じゃあ、この中心街がスラムなんだな」
「そういう事さ。ここにいるのは地税を払えず土地を手放したものばかり。あたしもその1人と言ったところかね。もっとも、あの城を除くこの国全てがスラムみたいなもんさ。おっと、お茶2杯で100ピークルだよ」
2人はお茶を噴き出した。エリナは咳き込みながら反論する。
「お金取るの!?ていうか高すぎるわよっ!!」

ものすごい剣幕でおこるエリナを見て、老婆はカラカラと笑った。
「冗談さね。でも気をつけるんだよ、ここはそういう所だから」
老婆はそれじゃあね、というと家の中へ入っていった。残された2人は閉じられた扉を見ている。
「あーもう、なによあのおばあさん」
頬を膨らめて、エリナはまだ怒っていた。ロイと言えば色々考え込んでいたが、唐突に嫌気が差し、手を叩いた。
「ま、いっか、そんなに長くいるわけじゃないし。日が暮れる前に宿を探そうぜ」
そう言って歩き出したロイの背後で、エリナは立ち尽くしていた。
「どうした？」
「あたし、ちょっとロイわかんないなあ」
ロイは首をかしげる。そんなことを言われても、ロイにはエリナの言葉のほうが分からなかった。
「たまにロイって二重人格じゃないかなって思うのよ」
やっぱり首をかしげるロイに、分からないなら良いわ、と言ってエリナは先に行ってしまった。

第１９話　人の痛みがわからない国　２

そのとき、盛大なエンジン音とともに豪奢な一行が現われた。見える範囲の国民は一人残らず手を止め、一行に向かって姿勢を正す。道を歩いていた人は道を開け、３台の車のための道を作るように端に寄った。ロイとエリナも何となくそれに倣い、端に立つ。

「下賤の民は相変わらず貧乏だ。僕ちゃんとはえらい違いだ」

車の後部座席が高くなっている。１段どころか２段も３段も高い。煌びやかな車の中でもそこはずば抜けて派手で、設計者のセンスのなさが感じられるほど悪趣味だった。

そこに座り、ふんぞり返る男――年のころは２０くらいだろうか、はこの国の国民と逆に、太っている。ぶくぶくと肥えているという表現が何よりも当てはまる。よく椅子が壊れて落ちないものだ。落ちたらよく転がりそうだな、とロイは思い、笑いをこらえるのに必死になった。

しかし、そんなロイのおかしさとは裏腹に道の端に立つ人々の目には怒りが見えた。

「お、お、お、ぬおおおお」

ロイたちの前まで来たところで男が豚としか思えないような奇声を発した。脂肪のせいで首のない顔がこちらを見下ろしている。

「車を止めろ！・・・決めた。この子だ。この子を僕ちゃんの花嫁にする！」

そう言って男が指差したのはエリナだった。ロイとエリナは困惑する。というよりも呆れて顔を見合わせた。

「さあ、花嫁を連れて帰るぞ」

男がそう言うと、２人の黒服を着た男達が車から降り、ロイとエリ

ナを包囲したた。エリナに近づき、捕まえようとした男たちの1人をロイが投げ飛ばし、もう一人をエリナが蹴り倒した。
「な、な・・・僕ちゃんの家来になんて事をするぅ。じい、この国で僕ちゃんがどれだけ偉いかを言ってやれ！」
じい、と呼ばれた高齢の運転手は運転席に立ち上がった。
「この方はジルコナ国王ボルネーニャ＝アルフレッド9世の第一子、次期国王のボルノーニ様であらされる。王子の御言葉は神の御言葉。逆らうことはまかり通らん！」
ロイは呆れて言葉もなかった。王国を見たのは初めてだが、王というのは民のことを考え、政治を行うのだと考えていたし、グリンからもそう聞いていた。
だが、目の前の男はただ権力を振りかざしているだけ。王の資格どころか人間失格である。
「僕ちゃんは父上の次に偉いんだぞ！・・・ロバート！花嫁を捕まえろ！」
助手席に座っていた男が返事もなしにゆっくりと立ち上がって車を降りた。何の感情もこもっていない目がロイを見て、エリナを見た。そのただならぬ風格にロイは身構える。男は一つ、小さな溜息をついた。
「「え？」」
ロイとエリナのセリフがかさなる。それもそのはず、一瞬にして男の姿は視界から消えていた。気付いた時にはエリナの傍にいて、エリナの首筋を手刀で突いた。
「か・・・は・・・」
延髄に強い衝撃を受けたエリナは視線がぐらつくのを感じ、膝から崩れ落ちた。意識を失いはしなかったものの、身体に力が入らなくなった。ロバートと呼ばれたその男はエリナを抱え挙げ、車に乗せた。別の黒服がエリナの手首後ろ手で縛った。
ロイは反応することすらできなかった。それくらい一瞬の出来事だった。

にんまりと、王子は笑い、満足げに帰城の指示を出す。
「待てっ！」
ロイは叫ぶ。車を追おうと駆け出したロイの前にロバートが立ちはだかった。一瞬のその移動に、ロイは警戒して後ろに飛びのく。
「どけぇ！！」
怒りを湛えた目を投げかけ、ロイは叫ぶ。それでもロバートは眉一つ動かさず、じっとロイを見ていた。
「ロバート、後は任せたぞ。僕ちゃんに逆らったんだから死刑にしていいぞ」
王子の言葉と共に車は遠ざかっていく。ロイは足に力をかけ、一跳びでロバートの懐に入り込むとその顎めがけて拳を突き出した。剣は使わない。丸腰の人間相手に剣を抜いて怪我させない自身はなかった。
だが、ロバートは身体を少し反らせただけでロイの拳をかわし、ロイめがけて蹴りを繰り出した。ロイは紙一重でそれを避ける。
「くそっ！」
次々に拳を繰り出す。だが、ロイの手に衝撃は返ってこない。信じられないことに、全ての拳が紙一重で避けられていた。
「ぐっ！」
うめき声を上げたのはロバートではなくロイだった。表情一つ変えないロバートの掌底がロイの腹に突き刺さる。その衝撃は背中まで突き上げ、ロイは後ろに吹き飛んだ。口の中で胃液と血の混じった味がした。
「ロイっ！」
車はもうかなり小さい。その小さな車からエリナが声を張り上げた。ロイは頭を振って術を使う。目の前の男は考えていたよりもあまりに強い。既に手加減する事など念頭になかった。
ロイが蹴った地面はめり込み、砂埃が上がる。ロバートめがけて突進し、寸前のところでブレーキをかけ、飛び上がって背後に回った。振り向きざまに後頭部に右拳を叩きこむ。しかし、完全に意表をつ

いたはずのその攻撃すらもロバートには届かない。しゃがみこむようにして避け、繰り出してきた鞭のような回し蹴りを何とかかわし、乱打を放つ。

――どうしてだ。なぜ、一撃も当たらない。

ロイの表情に焦りの色が現れ始めた。秒間数発の速度で繰り出されている拳はガードすらされていなかった。まるで落ちてくる葉を切ろうとしているようにかわされていく。それはまるで、始めからロイがどこに攻撃してくるか分かっているようだった。

「ロイ～～！！」

エリナを乗せた車はもう米粒ほどの大きさで城門が開くのを待っていた。声が届くのが不思議なくらいだった。いや、もしかしたらこの声はロイの想像の産物なのかもしれない。

ともかくも、ロイは焦りと悔しさを抑え、ロバートを無視して、術を全力で行使して城門に向かって駆け出した。

「笑止」

走り出して十歩程度。これくらいの短距離ならば車よりも速く走れる自身がロイにはあった。だが、ロバートの低い声はすぐ後ろから聞こえる。走り始めたのはロイのほうが先。つまりそれはロバートがロイよりも数段速いという事実を物語っていた。

「敵に背を向けるとは」

まるで感情のない声。ロイは精霊術よりも速く、強い存在を知らない。想像もつかない。ただの人間になら負けることなどない。そういった自負が自信がロイにはあった。だが事実、後頭部を掴まれている。

頭が地面に叩きつけられる瞬間、世界がありえないほどゆっくりに見えた。

第１９話　人の痛みがわからない国　３

気を失ったわけではない。戦う意味をなくしたわけではない。身体が動かない訳でもない。
それでもロイは、身体を上げる事ができなかった。胸の中に渦巻くものはなんだろうか。危ういながらも勝ち続けてきたロイにとって初めての完全な敗北。それも相手が本気だったとは思えない。圧倒的な屈辱感。その中で、ロイは戦意を失いつつあった。悔しさを覚えながら、エリナを助けなければと考えながら・・・。
しかし身体を起こすことはできない。叩きつけられた額が痛む。敗北とともにロイの身体に痛いほど残っていた。
「大丈夫かい？」
頭上から声が聞こえた。それでようやくロイは身体を動かし始めた。地面に座り込み、額を拭うとやはり袖に血がついた。しかも相当量出ている。声をかけてきた男を見上げると、男は驚愕し、すぐに家から包帯を持ってきて処置してくれた。
「ありがとう」
礼を言いながらも、ロイの視線はさっきからずっと城の方へ向けられていた。既に城門は硬く閉ざされ、動くものはない。いつのまにかロバートの姿もなくなっていた。
「あのお嬢さんのことは諦めた方がいい。間違いなくあの王子の妃になる」
「お姫様か。一介の軍人が大出世だな」
王子の姿を思い出しながらロイは皮肉気味に言った。その皮肉には自分に対する怒りがふんだんに込められていた。地面に手をついて重い身体を立ち上がらせ、服についた砂を払い落とす。血に濡れた袖が砂まみれになったが、気にはならなかった。
「諦める訳にはいかねえよ。ロマリアに頼まれちまったからな」

ロイは誰ともなく呟く。そして大きく伸びをすると、男を見た。
「ありがとう。じゃあ行くわ」
「待ってくれ」
足を踏み出したロイの肩を男がつかむ。そのまま振りほどこうかと思ったが、その力があまりにも強く、ロイは足を止めざるを得なかった。
「1人で自首でもする気か？言ったところで何になる？」
そう言った男をロイは睨みつけた。たったそれだけで、男は怯んで手を離す。ロイは笑顔に戻して片手を上げた。
「じゃ」
遠くの大きな城に向かって歩き始める。畑ばかり広がる風景の中に、ロイの行く手を阻むものはなかった。

「さて、と」
ここに来る間に、包帯は赤く染まっていた。だが、さっきの怪我の血は既に止まっていた。この血はロイが怒りを発散させようとした跡である。まるで身体から血を抜くかのようにロイは何度も拳で額を殴った。そうする事で何とか冷静さを保っている。そうでもしなければ今頃剣を抜いて、城の中で振りまわしていることだろう。
城をぐるりと一周する。大きいといっても、ドートリアを見た後では小さく見える。その城は周りの家々と違って、高い壁に囲まれていた。ここを跳んだりよじ登ったりするのは骨が折れそうだ。
その上、城の周りには堀が張り巡らされているので突破するのは難しそうだ。さっきまでの怒り沸騰中のロイならば術を使って壁を壊したりしたのだろうが、血と引き換えに冷静になってそれをしなかったのは大きな成果だろう。ロイは既にロバートとの力の差を認めていた。エリナを救出する事になるためにはロバートともう一戦交えなくてはならない。ここで体力を失うわけにはいかなかった。
――――万全じゃないけど、俺を犠牲にエリナを逃がすくらいはでき

るかな。

そんなことを考えて自嘲気味に笑った。ただ戦うのとは違って守るというのはなんて難しいことなのだろう。それでもロイはエリナを見捨てようとは思わない。そんなこと考えもしなかった。

一周したが、どうやら塀がないのは城門だけのようだ。しかし、そこには常に門番が立っていて、突破は容易ではない。

ロイは血のついた袖を引きちぎる。既に血は乾いていた。ロイは門番から身を隠し、布を縛って丸くした。集中して火をともす。壁よりも布に火をともすほうが圧倒的に容易い。布に十分火が付いたところで、城の前の道に向かって投げつけた。

「な、なんだ！」

突然死角から現れた炎に門番は驚愕し、駆け寄る。幸い門番は1人しかいないので、火に意識を取られている間に門をよじ登るのは手間ではなかった。

「よし、第一関門突破」

下に誰もいないことを確認して敷地内に入る。柱をよじ登って2階のテラスに上がると、ガラスの向こうから声が聞こえた。

「・・・うん、父上。だから結婚式は盛大にしてよね」

「はっはっは、わかっているさ、坊や。しかし二十歳になる前に決まってよかった」

「だってあんな卑しい国民の中から選ぶなんてやだもん」

「ふむ、それは仕方無い。結婚式には金がかかるな」

「もっと税を増やせば良いんじゃない？」

「そうだな。王子のためなら嫌という国民はいないだろう。それで、結婚式はいつにする？」

「うーん、できるだけ早い方が良いな。早く結婚したいな。そしたら今エリナがいる最上階の部屋に一緒に住むんだ」

「はっはっは、意気込んでいるな。しかし準備というものがあるからな。どんなに急いでも3週間といったところか」

「うん、じゃあ3週間後でいいや。ありがとう、父上」
「なあに、パパは坊やのためなら何でもやるさ。はっはっは・・・」
ロイは呆れて首を振った。こんな何も困窮している民から更に奪い取ろうというのか。まるで2人は箱庭で遊ぶ子どものようだ。
そしてそれはカルコンだってそうだ。ただ箱庭かテェスの駒かの違い。そして一国か世界かの違い。
話を聴いて怒りが増してしまった。だが、エリナが城の最上階にいる事だけは把握できた。そこだけは幸せなバカ親子に感謝しよう。
そんなふうに考えていると、突然王がテラスの方へ歩いてきた。その体格は息子をはるかに凌駕した肥満で、どれだけ民から搾取しているかをうかがわせる。ロイは咄嗟にテラスを降り、一階の開いている窓から城内に忍び込んだ。どうやらセキュリティーのほとんどを門に費やしているらしく、城内への侵入は思いのほか簡単だった。
そこは客間のようだ。豪奢なベッドが中心に置かれ、大きな机があった。部屋の中を一瞥し、ロイは足音を立てないように廊下に出た。
だがしかし、肝心なのはここからいかにして階上に行くかだ。廊下に敷かれた赤いカーペットが鮮やかだったが、これも税金で成り立っているものだと考えると、素直に感動できなかった。真っ白な壁には等間隔で燭台がついている。昼間の今は火がついておらず、城の中は閑散としていた。
一階には人の気配がない。恐らく国の規模も雇っている人数も何も考えず馬鹿みたいにでかい城をつくったせいだろう。あるいは昔は聡明な王がいて、栄えていたのかもしれない。
一階は全て客間でほとんど使っていないようだ。
幸いにして、玄関の正面に大きな階段があった。赤いカーペットに沿って階段を素早く上るとその正面の部屋から二人の声が聞こえてきた。さっきのテラスがある部屋だろう。ロイがそちらの方へ近づいた時、角から黒服を着た男が現れた。
ロイは踵を返し、階段の陰に隠れた。ロバートではない。護衛だろうか。なるほど、全く人がいないというわけでは無さそうだ。

足音を殺し、白い壁づたいに先に進む。角は慎重に伺う。何度か遠くに見える人影がよりいっそう緊張感を募らせ、ロイに慎重さを要求する。お陰で壁の燭台に4回頭をぶつけた。うち一階は傷口に当たり、ロイは声にならない悲鳴をあげた。

階段を見つけて3階に上がる。ここでは2階よりも人が多い。コックの格好をした人間が行きかっているから調理場があるのだろう。そういえば腹減ったな、と一瞬考えたが、すぐにそれどころではないと思いなおした。

次の角で向こうを伺うと、最も見たくはない男の姿があった。ロバートだ。1人でこちら向きに歩いてくる。とはいえ距離があるのでさすがにこちらには気付いていないだろう。ロイは顔を引っ込めて壁に寄りかかり、一つ息をついた。

「ここで何をしている」

「!!」

耳元で声がして、ロイは反射的に壁から遠ざかった。あれだけの距離を一瞬にして移動し、ロバートが角の向こうから現れた。

何の感情もない表情。ただ鋭い眼光だけがロイを見ていた。

「なるほど、あの娘を助けに来たか」

ロイは何も言わない。精霊術ではない得体の知らない力に相対し、その警戒心と緊張感で話すことを忘れた。

「よほど私に怯えていると見える」

先ほどと違い、ロバートは口を開く。どうやら無口というわけでは無さそうだ。しかしどこにも隙はない。どこから攻めても切り返されそうだ。

「当たり前だ。貴様とではキャリアが違う」

「なっ！」

ロイは更に1歩下がった。おかしい、口には出していないはずなのに。

「それくらい分かるさ」

鍵括弧とモノローグで会話をするという奇妙な図式が成立してしまっていた。だが、この感覚には覚えがあった。

「・・・読心術ってやつか」

スナグモを思い出す。敵に自分の心が読まれている。こんなに不愉快なことはない。

「致し方ない。私には聞こえてしまうのだから」

「・・・・・・？」

ロイは眉根を顰めた。しかし、ロバートはそれ以降、口を開かなかった。それを戦闘の合図と見て、ロイは剣を抜く。この相手だけは全力を尽くして倒さなくてはならない。そうしなければエリナの下にはたどり着けない。

剣を構えて突進する。目にも留まらぬ速さで剣を突く。しかし、剣の先にロバートの姿はなかった。そんなことはロイも承知で、すぐさま剣を横薙ぎに切り替える。常人ならざる剣の軌道変化。全身の移動スピードを殺すことも、突き出した剣を横に薙ぐことも精霊術がなければ不可能なことだ。ただの人間に対応できるとは思えない。

「微温い」

だが、その剣先はロバートを捕らえていなかった。確かにロバートはロイの左側に動いたはず。ロイは剣を左側に薙いだはず。それなのにいつの間にか姿を消していた。ロバートの姿が何処にもない。自分以外誰もいない廊下に、声だけが響いていた。

頭上で音がして、咄嗟に後ろに下がった。同時に、ロイがいた床の石が割れた。ロバートが降ってきて、床をふみ砕いたのだ。

「なかなかいい反応をしている。しかし、愚か。このような狭い回廊で長得物を振るとは」

再びロバートが跳び上がる。次の瞬間には天井に床のように足をつけている。次には壁に。そして天井に、床に、壁、壁、床――。

「そんなばかな・・・」

踏みしめた場所は陥没していく。それだけの力と速さで跳んでいるにもかかわらず、次の場所にはちゃんと足をつけている。加速し続

けるロバートの姿を既にロイは視認出来なかった。パラパラと砕ける石が一瞬前にそこに誰かがいたことを教えてくれるだけだ。
それだけの速さで飛べば、頭や体を打ちつけるのが普通じゃないのか、とロイは焦る。
確かに、壁や天井を使って加速することはロイにも出来るかもしれない。しかし、これだけのスピードで、しかも次の着地点がランダムならばパニックに陥ってしまうだろう。最終的に自滅するに決まってる。
つまり、ロバートというロイの敵は、ただ速く、力があるだけではない。その状況処理能力、判断力は常人のそれではない。

「終わりだ」

その声が聞こえたのは背後からか、頭上からか、それとも足元からか、ともかくも、一瞬後、身体に衝撃が走った。
「がっ・・・ごほっ！」
狭い回廊を最大限に利用した加速に次ぐ加速。そのエネルギーを凝縮した拳がロイを襲った。
「・・・・・・！」
だが、攻撃の際に驚いたのはロイだけではなかった。ここまで何一つ表情を変化させなかったロバートもまた、驚愕の表情を表していた。
ロイとロバートの間に構えられた剣。お互いに刀身の腹が向けられ、ロイを守るように立てられていた。あのスピードの中、反応できたはずがない。反射的に、まるで本能のようにロイは自身の身体を守ったのだ。
しかし、いかに守ったといっても、これだけの圧力の中では、防御にすらならない。剣はへし折れ、ほんの少しだけ減速した拳はそれでもなお超然たる力を持ってロイの身体に突き刺さった。
身体が貫かれるような衝撃を感じた。いや、剣がなければ本当に貫

かれていたかもしれない。それぐらいの衝撃。一体何本残ったのか、体内に肋骨が折れる音が響いた。
足は簡単に支えをなくして後方に吹き飛ぶ、ちょうど背後にあった窓を突き破り、城の2階分くらいの高さの塀を悠々と越えた。
もし街道に落ちていたら間違いなく潰れたトマトの仲間入りだったろうが、幸いなことに――というよりもこの国内ではそのほうが多いのだが、柔らかい畑の一つに落下した。いや、落下したというよりも突き刺さったと言った方が正しいだろう。それでも身体がばらばらになったような痛みを感じる。拳に襲われた瞬間、ロイは死を覚悟した。ザバンにくらったときには感じなかった死の恐怖。しかし、痛い。ということはまだ生きているということだ。
それでも安堵はできなかった。凍えるように寒い。そして、しだいに痛みも麻痺してきた。身体を動かすことは出来ない。まるで全身が凍っているようだった。目が霞んできた上に皮膚感覚もなくなってきている。見ることも感じることも出来ないが、血を流しすぎたのかもしれない。
だんだんと意識が遠のいていく。風前の灯の意識の中で、ロイは確かに走馬灯の存在を感じていた。

――ごめん・・・エリナ。

薄れゆく意識の中で思う。死は思ったよりも簡単だった。

第２０話　レジスタンス　１

「やあ、エリナ」
「・・・・・・」
ジルコナ王家の城の最上階。そこから俯瞰する風景は国の端まで見ることは出来る。だが、見ることは出来ても手を伸ばすことは出来ない。この部屋にあるドアは一つだけで、外側から鍵がかけられていた。今は開いているが、逃げようにもその道を巨体が塞いでいた。
「つれないなあ。そんなに怖い顔しないでおくれよ、３週間後には夫婦になるんだからさあ」
「ふざけんじゃないわよ」
エリナは努めて無表情で言う。もはやこの男相手に感情を動かすことすら煩わしかった。生まれてこの方、こんなにも人間が嫌いなったことはない。
「んん～、そんなこと言ってても無駄だよ。誰も助けに来ないさ。君と一緒にいた旅人はさっきロバートが始末したから」
エリナは目を見開いた。心臓が震えるように鼓動が速くなった。
「嘘よっ！！」
そんなはずない。あんなに強いロイが殺されるはずがない。
「君を追って侵入したんだけどねぇ。ロバートに見つかっちゃったみたいだね。３階の廊下はめちゃくちゃになってたけど。まあ、すぐに直すからいいや」
――――そんな、あたしのせい？あたしを追ったから？あたしが捕まったから？
エリナは顔を両手にうずめる。その背中に手が置かれた。ぶくぶくと肥えた指の感触が全身の鳥肌が立つほど嫌で、振り払った。しかし、振り払えたのは手だけで、エリナの感情は何一つ振り払えなかった。残るのはただの絶望。そして自分に対する怒り。

「大丈夫。エリナの心の穴は僕ちゃんが埋めるから」
そして閉じる扉と鍵がかかる音がした。しかし、エリナはそれを目認する事が出来ない。よしんば顔を上げられたとしても、滲んで見えなかっただろう。

――へえ、地獄ってこんな貧しいところなんだな。
まさか天国にいけるとは思ってなかったが、もっと不快で苦しい場所を思い描いていたロイとしては拍子抜けだった。
視界が開けるには時間がかかった。そして身体が動かないことに気付くにはもっと時間がかかった。まるで異常に重たい鎧を着せられているようだった。なるほど、確かに地獄かもしれない。
「おおい、婆さん。目ぇ覚ましたぜ」
聞きなれない言葉が耳を貫いた。なんだよ、まだ眠いんだ、寝かしてくれ。ロイは思うが、顔を覗き込んだ声の主がそれを阻害する。
ロイは数回瞬いた。
「よく生きてたな」
――は？生きてた？何言ってるんだ？俺は死んで、だからここにいるのに。
声を出そうと思ったが腹に走る激痛がそれをさえぎった。代わりにかすかな息が洩れる。それが男に届くことはなかった。
頭の下に手を入れられ、上半身を起こされる。不快だったが、力を入れて抗うことすら出来なかったので、されるがままだった。口元に何かあてがわれ、そこから液体が喉を通り抜ける。かつてない快感に全身が狂喜した。だが、考えてみればそれはただの水で、それだけ自分が渇いていたことを自覚した。まるで、生きているように。
「頑丈に生んでくれた親御さんに感謝するんだね」
どこかで聴いたことのある声が聞こえる。もう一度寝かされると、辛うじて首が動いた。以前にまずいお茶を振舞ってくれた婆さんだった。
「生き・・・てる・・・？」

ロイの口元がかすかに動き、声を発する。次いで手を動かそうとして身体が痛んだ。深呼吸をしようとして肺が悲鳴をあげた。だが、痛みも苦しみもロイが生きてる証拠なわけで・・・

――生きてる。俺は生きてる。

そう思った時、再びロイは深い眠りについた。

――またここか。

ロイは1人佇んでいる。地面以外何もない世界。始めは純白、次は薄い灰色。今はその灰色を少しだけ濃くしていた。

身体が動くのを確認して、自分の手をかざしてみる。爪は伸びていなかったので、ほっと胸をなでおろした。

そして、やはり感じるのは焦燥感。だがロイは駆け出すことをしなかった。それが無駄だという事はわかっている。しばらくすれば闇が現れ、ロイの姿を醜く変える。それだけの、ただの夢。

――よお、久しぶりだな。

足音も無く、背後に突然現れた影。ロイは振り返り、その主を見る。前回同様、ロイと同じような背格好で、真っ黒い影の中、目だけが白く、ロイを見ていた。

――久しぶり？そうか？

ロイは腰を挙げ、影と相対する。以前感じたような恐怖は無かった。いや、怖くはある。正体がつかめない相手というのはそれだけで恐怖だ。しかし、恐怖を感じつつも、自分にはないもできない事を知っていた。自分の無力を知っていた。

――はあん、えらく落ち着いてるな。

声は聞こえるが、その声が目の前の闇の口から発せられているのかは分からない。ただ、ロイと闇しかない世界で、消去法でそうと信じているだけだ。

――なあ、ここはなんだ？

ロイは尋ねる。どこだ、とは聞かなかった。そんな問いに意味があ

るとは思えない。ここは「どこか」じゃなく「何か」なのだと、ロイは漠然と感じていた。

――ここは世界さ。

――なんだそりゃ。

――言葉の通り。ここはそれぞれの人間が持つ世界の片割れ。あるいは心。あるいは脳内。あるいは感情。あるいは精神。あるいは魂。

――なるほどね。ようするに俺の夢ってことか。

ロイは上を見上げる。灰色空は天井があるのかどうかもわからない。

――わが夢ながら気味の悪いところだな。目が回りそうだ。

影の目がにやりと笑った。

――確かに気味が悪いな。この場所といい、お前の姿といい。言われてロイは手をかざす。短いはずの爪が伸びている。口の中には牙の感覚があって不快だった。ロイは一つ、息を吐く。

――なんだよ、つまらないな。今度は取り乱さないのか？

ロイは肩をすくめた。そしてもう一度指を見る。

――いや、この姿ならもっと強くなれんのかなって思ってさ。

影は何も言わずロイを見ていた。影はしばらく黙っていたが、やがて声が聞こえた。

――なぜ、強さを求める。

ロイは即答した。

――守りたいからだよ。この世界とか全員とかじゃなくて良い。俺は俺の傍にいる人だけでも守りたい。そうじゃなきゃ、この世界に俺の居場所が無いから。だから俺は俺の居場所を守りたいんだろうな、きっと。

――ふん、悪くない。誰かのためとか甘っちょろい事を言ったらどうしようかと思ったがな。

――どうするつもりだったんだよ？

ロイは尋ねたが、答えの代わりに返ってきたのは頭を掴む右手だった。

ロイの意識が遠のいてゆく。少しばかりの気だるさを感じながら、夢から現実へと帰る。

目を覚ましたら夜だった。全身が刺すように痛んだが、それでもロイは身体を起こした。窓――と言ってもガラス張りではなく、ただ家に穴を開けたようなものだが、から差し込む月光が眩しかった。どれくらい眠っていたか知らないが、光を久しぶりに感じるくらいは寝ていたようだ。

ついで両腕を挙げてみる。左腕の肘から先は折れているのだろう、添え木がしてあった。あまり痛まなかったので、それほど重症ではなかったのかもしれない。それよりも胸が痛い。目線を下げることもかなわなかったが、包帯が巻かれている感触がある。ロバートから受けた傷で何本も折れてしまっているだろう。こうして息が出来ているので肺には刺さっていないようだ。自分の強運に半ば呆れてしまう。

足は大した外傷がないようだ。しかし、力を入れるのが難儀だった。どうやら相当眠っていたらしい。

ロイは胸をかばいながら横になり、右掌で顔を覆った。生きている事が嬉しかった。けれども、それが煩わしくもある。これでもう逃げることは出来ない。

そんなの当たり前だろ、と心の内で声がする。生きることは戦うこと。逃げることは死ぬこと。だから生きている限り戦わなくちゃならない。それはロイにとっては比喩ではない。あるいは魔物と、あるいはカルコンと、今に至ってはロバートと。壊すため、守るために戦い続ける。

――じゃあ、戦いが終わったら？

カリューで戦った妖怪、ガイガンが言ったようにロイの家族は魔界にいるのだろうか。ロイは何度も繰り返した問答をする。それを信じたいという純心と、生きてるわけないと大人になりかけのロイの

理性が反発する。そしていつも大人が勝つ。ロイの純心はいつも倒れる。

――大人は正論を言うから。そして、正論はいつも人を傷つける。

もう十分寝たはずなのに、いつの間にかロイは再び眠りに落ちていた。

第２０話　レジスタンス　２

「・・・ああ、間違いない。１０日後だ」
ロイは重い身体を起こし、自分の寝台の周囲にいる人々を見回して頷いた。人々はしだいに殺気立っていった。
「冗談じゃない。ただでさえ税がきつくて食べていけないってのにあのバカ王子の結婚式のために更に出せだと。俺たちをなんだと思ってやがる！」
その男に呼応するように歓声が上がった。
「今こそ決起の時だろう。ここで国民のために立ち上がらなきゃ何のためのレジスタンスだ」
歓声が上がる。ビリビリと身体の芯に響いて胸が痛んだ。
「待ちなよ」
その立った一言で歓声がぴたりと止む。全員の視線が一点に集中した。
「勢いのまま行ったって無駄だよ。ここは機を待つんだ。失敗すれば間違いなく処刑だろうね。だが、幸いにもあと１０日ある。あんたなら良くわかるんじゃないのかい？」
ついで、ロイに視線が集まる。老婆の濁った眼は期待を込めてロイを見た。周りの人間もそれにならう。
「私の見たところロバートと拳を交えられるのはこの坊やだけだ。他のものじゃ１秒と持たないだろうね。紙切れみたいに殺されるのがオチさ。だから、ここは坊やの回復を待つんだ」
「だが、もし徴税が早まったら・・・」
「誰一人殺されないように何とかするしかないね。どの道謀反が失敗したら全員死ぬしかないんだ。それに比べたら安いもんだろう」
「謀反・・・」
今朝――と言ってもほんの３０分ほど前、老若男女入り混じった

この人々がレジスタンスだと聞いた。秘密裏にだいぶ前から謀反の計画をたてていたようだ。だが、何より驚いたのが、その中心人物がこの老婆であるという事だ。

「そういう事だから、決起は結婚式前夜。城が準備で慌しくなってる時だ。それまで各自気を抜くんじゃないよ！」

老婆の一括にかつてない大歓声がとどろいた。ロイは痛む胸を押さえて顔をしかめる。しばらくすると、人々は狭い部屋を出て行って、ロイは老婆と2人きりで残される。

「・・・すまないね。そんな訳だからあんたにも反乱に参加してもらうよ」

老婆は立ち上がり、あんまりすまなく無さそうに言った。それに対し、ロイもどうでも良いように答える。

「かまわねえよ。どの道エリナを助けに行かなきゃだし。潜入する必要が無いならむしろありがたいくらいだ」

「だが、確実にロバートを倒さなくちゃいけないよ」

「わかってるよ」

今のままで勝てないことは分かっている。しかし・・・

「俺だって色々背負ってるんだよ。負けてばかりもいられないさ」

真剣な顔をして呟くロイを、老婆は一瞥して、部屋を出た。

それから9日後――――

月だけが煌々と照らす夜の闇。その明かりを享受している大勢の人がいた。その数を数えることはかなわない。これだけの国民の反発。それが、この国の王家がもたらしたものなのだ。

「大丈夫なのか？」

男が声を張り上げる。ロイは折れた剣の代わりに老婆にもらったナイフを腰に差した。

「ああ、問題ない」

そういいながらも胸の痛みをこらえていた。目が覚めてから１０日。

動けるようになったが、完治とはいえない。連続的に続く痛みは、まるで胸を縛りつけられているようだった。

「天の加護はもう尽きた。これからは俺達が国を治める番だ！」

群れの中で誰かが叫んだ。この9日間見ていて驚いたことだが、このレジスタンスにはリーダーがいない。一応本拠地は老婆の家という事になっているが、老婆はレジスタンスの一員ではないそうだ。中心などなくても謀反を起こすまでに膨れ上がったレジスタンス。そこに王族への恨みの大きさが窺えた。

人々は手に手に思い思いの武器を携え（そのどれもが農具などおよそ武器とはいえないものだった）、城に向かう。まったく明かりの無い城下と違い、城のガラスからは蝋燭の光が洩れていた。ロイは城の最上階の部屋を見て、そこに明かりが灯っているのを確認し、拳を握り締めた。

「雨か」

月が陰り始めた。これで人々の目に映る明かりは城だけとなる。それ以外は完全な闇。もはや後戻りする未来など無い。そして、闇色の空からしとしとと雨が降りそそぐ。

「好都合だ。雨が降れば降るほどやつらは逃げるのが難しくなる」

再び誰かが声を上げ、その意味も飲み込まず、全体が活気付く。ロイはそんな人々を見て少し悲しくなった。これから犯すのが罪なのだと考えるものはいない。人々はまるで義務を遂行するかのように足を進める。そしてその中に紛れている自分自身。その罪を利用している自分に腹が立つ。

――それでも、俺は行かなきゃならない。

ロイを動かすその意思が何であるかはわからない。結局、やりたいからやる。その一点に尽きる。世界のどこにも所属する事ができないロイの唯一の場所は己の内のみだ。だからやっぱりロイにとって動く理由は自分以外にはありえない。それは絶対のエゴで罪深いものだ。だが、罪の意識すらも、ロイの足を止めることはできない。

「お前にはまず単独で城に這入ってもらう」
いつのまにかロイの隣で歩幅を合わせていた男が声をかけてきた。
ロイは黙って頷いた。
「悪いな、お前を利用するみたいで」
ロイはちらと男を見て、その苦渋に満ちた表情を見て、「いや」と首を振る。男が離れて行ったのを見て、溜息をついた。
夜半にも近いこの時間。門の前に門番はいない。門は錠で硬く閉ざされていたが、これだけの人員を抑えることの出来るものではない。
「せーのっ！」
鉄扉は力でこじ開けられ、城の敷地内に国民が殺到した。だが、その音を聞きつけた黒服が既にスタンバイしていた。
時の声が上がる。鍬や鋤を手に突っ込む人々に、黒服は容赦なく銃弾を浴びせる。最初に入った何人かが赤い華を広げて動かなくなった。ロイは顔をしかめる。

「行け！！」

誰かが背中を押し、ロイは飛び出した。ナイフを取り出し、身に降りかかる銃弾をはじいていく。その衝撃は強かったが、ナイフは思いのほか頑丈で、歯がこぼれることもなく、黒服の間を突破する事が出来た。すれ違いざまに肩を切りつけ、一人が倒れる。ロイの背後で喚声が上がったが、ロイは振り返ることをしなかった。
ロイの足は何かに急かされるように回転速度を速めてゆく。完治していない肋骨が痛むがそれに構うことなく走り続けた。
大きな階段を上り、2階に上がる。3週間前の記憶を探って3階まで走る。この城は階段が一箇所に集まっていない。階を上がるたびにいちいち階段を探さなくてはならない。

第２０話　レジスタンス　３

ロイは壁やら床やら天上やらがボロボロになっている場所で足を止めた。胸の痛みが唸るように増した。ロイは固く口を結び、再び走る。人の姿はない。階下から聞こえる騒音が人々の居場所を教えてくれる。もしかしたらロバートも一階に下り、ここにはいないんじゃないかと思ったが、４階に上がった時、階段を正面に見据える形で立っていた。

「・・・・・・よお」

ロイは声をかける。ロバートは無表情のままだった。何の感動も湛えていない目をロイに向ける。ロイはそれに対し、にやりと笑った。

「・・・なぜだ。我に敵うはずなどないというのに、なぜ貴様はここに立つ」

ロバートがおもむろに口を開く。だが、その問いには疑問や困惑は感じ取れなかった。

「・・・俺にだって大事なものはあるんだよ」

気のせいだろうか、ロバートの口元が釣りあがった気がした。

「あんたに邪魔はさせない。俺はあんたを倒して先に進む！」

ロイは踏み込んだ。ナイフは抜かない。獲物があればリーチが長い分、懐にどうしても隙ができる。目の前にいるのはその隙を見逃すような男ではない。

「・・・愚か」

拳が突き出される刹那、ロバートの身体が右に動いたのが見えた。それを見て、ロイは身体の動きを止め、右手をかざしてロバートの鞭のような蹴りを止めた。しかし、そのまま攻撃を展開せず、衝撃にあわせて３歩下がる。

今度はさっきよりもゆっくりと近づく。拳を突き出し、避けたのがわかってから防御に転ずる。カウンターを受け止め、下がる。

「・・・成程」
攻撃し、防御し、下がる。その動作を5回繰り返したとき、ロバートは声を発した。相変わらず感情の無い表情だ。
「切り替えされないような防御主体の攻撃。考えたものだ」
突然の褒め言葉に、ロイは少々照れた。

「ならば、それを崩してやろう」

ロバートの目つきが変わる。薄めるようにしていた目が開かれる。それはまるで吸い込まれそうな眼力だった。
ロバートが1歩足を出した。ロイは身構える。もう1歩、もう一歩とゆっくりと近づいてくる。ロイはこらえきれずに攻撃に転じた。もちろん防御主体。身体に当たるぎりぎりのところで止まるように拳を突き出し、カウンターを防ぐ。
しかし、ロバートは避けることをしなかった。ロイの拳は見えない壁に阻まれたように止まった。ロバートはあらがじめ拳が届かないことを分かっていたように防がなかった。
攻撃に転じてこないロバートを見て、ロイは更に攻撃を続ける。緩急をつけた拳を4回。体制が崩れるので蹴りは出さない。その4回のうち、3番目だけ当てるように突き出した。
それでもロバートは避けない。3番目だけ、身体を後ろにそらすようにしてかわした。それ以外はまったくの無視。まるでそんなものは攻撃ではないというように。
「・・・・・っ！」
ロイは後ろに飛ぶ。その瞬間突き出された蹴りを腕を交差させて何とか防いだ。重さが腕に残る。今までと違い攻撃に体重を乗せる余裕と時間が十分にあったという事だろう。
「・・・あんた、化け物みたいなやつだな」
読心術。加えてスピード、パワー、ボディーバランス。およそ考えうる人間の完成系。ロイは純粋に、目の前の男を畏怖していた。

「下らん。どこの誰かも分からん者の助言に傾聴し、信じ込む。それに何の意味がある」
「・・・・・んなあほな」
確かにこの戦法は老婆の助言によるものだ。こんなの心を読んでいるドコロじゃない。心を悟られているようだ。脳を鷲掴みされているような気味の悪い感覚。
「攻撃に転じず、一体どうする。時間がたとうが貴様の負けは変わらん」
淡々とした口調でロバートは続ける。

「1度目は見逃した。2度目はしくじった。3度目は・・・ない！」
ロバートの殺気が全身を襲う。けれどもロイは怖気づくことはせず、拳を下ろして口を開いた。
「あんたほどの男が何でこんな国のこんな王族の護衛をやっているんだ？」
殺気が澱む。けれども薄れることはない。小さな針が全身を刺しているようだった。
「笑止。所詮貴様には与り知れぬこと。我には我の使命がある」
そう言い放つロバートの目に動揺はない。ロイはその姿を複雑な気分で見たが、一つ息を吐いた。
「・・・確かに、どれだけ時間がたっても俺はあんたには勝てない。あんたに心を読まれ・・・いや、悟られてる以上、俺の攻撃はあんたには当たらない。だから俺は攻撃しないことを選んだ。確かに愚かな策だな。俺もそう思う。だけど、今この状況ではそうじゃない」
階下から響く歓声。地面を揺らす轟音。予期せぬ事態にロバートは驚きをロイに分からない程度に呈した。
「俺は信じてる。この国の国民を？そうじゃない。愚かな君主は・・・力だけの統治は絶対に滅びるってことを」
恐らく城の前での抗争に決着がついたのだろう。そして、反乱軍が

次々と城内に侵入しているはずだ。このまま膠着状態が続けばここにも続々と人が集まってくる。不利になるのはロバートの方だ。

「・・・小癪な」

ロバートが足を踏み出す。決着をつける気なのだ。使命というものがロバートを突き動かす。そして、一瞬にして間合いを詰め、ロイの身体を貫かんばかりに繰り出された拳の先に、ロイの姿はなかった。

「・・・なっ」

ここで初めて、ロバートの顔に驚愕の表情が点った。勢いのある拳を戻すのには時間がかかる。更に、ロバートの身体は前のめりになっていた。その状態で、横から胸倉をつかまれれば抵抗などできようはずもない。ロバートの身体は壁にうちつけられた。

反射的に、胸倉を掴むロイの脇腹を殴る。目の前から「がはっ」という声がした。

「待ってたぜ、この瞬間を」

骨折の完全に治っていないあばらが再び折れたかもしれない。ロイは口元に血を滴らせながらもしかし、にやりと笑った。

単純な話。もっとも相手に攻撃を与える可能性が増すのは相手が攻撃した瞬間。それは今までロバートがやっていたことで、ただその攻守が裏返っただけだ。

「うりゃあああ」

力任せにロバートを窓に打ち付ける。密着さえしてしまえば、熱の術者であるロイの方が力は勝るようだ。二人の体は窓を突き破り、勢いに任せて城の周りの塀を越えた。

外は雨が降っていた。バケツをひっくり返した、などという比喩は性格ではない。夜闇の中に槍でも降っているかのような痛みすら感じる豪雨である。

「ぐっ」

空中でもう一撃ロバートの拳をくらってロイは掴んでいた手を離した。

ロバートはまっさかさまに落ちながら、この闇の後どれくらい先に地面があるかを計算していた。伊達にこの城で暮らしている訳ではない。４階がどれくらいの高さなのかは分かっている。しかし、攻撃がかわされた――いや、この戦い自体ロイの策略だったこと事態に動揺していた。

表情を変えたのはほんの一瞬だけ。しかし、彼の心中は穏やかではなかった。それ故に、彼は余裕をなくしていた。余裕の無いまま、計算どおりの時間で受身を取ることに成功した。だが、その余裕の無さが、次に攻撃があることを失念させた。

「うおおおお！」

闇の中から声が聞こえた。月明かりのない夜の闇。唯一の明かりは壁の向こうの城内の蝋燭のみ。加えていきなり明るい所から暗い所に出れば、目が慣れていないのは当たり前。声は近くで聞こえるのに姿を見ることはかなわなかった。いや、それ以前に受身を取った直後の攻撃に反応する事はできなかった。

ロイの拳がロバートの頬を殴る。全身全霊をかけた攻撃に、ロバートの身体は宙に浮いた。雨の轟音の中、ロイの耳には水しぶきの音が確かに聞こえた。どうやら堀の中に落ちたようだ。見たところあの堀は深いようだったし、加えてこの雨だ、いかにロバートといえども這い上がることは難しいだろう。

ロイは天を仰いだ。槍のような雨粒が全身を打った。一度咳き込んで血を吐く。そして左手を目の前に掲げた。

ロイは受身を取らなかった。全身を使って衝撃を和らげていたのではとても次の攻撃に間に合わない。そう考えて、左手を犠牲にした。筋肉を活性化したものの、地面についた手首は毒々しいまでに青く晴れ上がっていた。

「よし！」

深い闇の中、ロイは一人呟き、喧騒の方向へ急いだ。

たどり着いた城の前は人でごった返していた。誰もが我先にと城の中へ入ろうとしている。それが雨から逃れるためなのか反乱の成功を見るためなのかは分からない。今のロイにとっては邪魔以外の何ものでもない。

ロイは焦る。一応反乱軍の一部はエリナの事を知っているが、紛れて殺されないことがないとも限らない。誰かが最上階に踏み込む前にたどり着かなくてはならない。ロイはだらりとぶら下がった左腕を見下ろし、目の前にそびえる城を見上げた。

第２０話　レジスタンス　４

「やあ、エリナ」
城の最上階。数時間後に迫った結婚式を前にウェディングドレス姿のエリナの元をジルコナ王子、ボルノーニが訪れた。よほど待ちきれなかったのか、挙式は夜明けと同時と決まっていた。
「まだそんな落ち込んだ顔をしているのかい？大丈夫だよ。反乱もじきに治まる。そうだ、いいことを教えてあげよう」
天蓋つきベッドの中で、エリナは俯いたまま顔を上げようともしない。この3週間というもの、食事がほとんど喉を通っていなかった。髪などは整えられているので滑らかだが、それだけに目の虚ろさが際立っていた。
「・・・あの少年。生きてたってさ」
「ロイっ！！」
一瞬、エリナの目に生気が宿る。王子は複雑な顔をしたが、しかし意地の悪そうににやりと笑った。
「しかし反乱に紛れてまた忍び込んでね。４階でロバートと交戦中らしいよ」
エリナはまた顔を伏せる。その頭に肥えた手が載せられた。その不愉快な手を振りほどく気力は今のエリナには無かった。
「ふふ。ロバートさえいれば反乱なんてすぐ治まる。何も変わらない。まあ、罰として税をもっときつくさせてもらうけどね。安心していいよ。あと少ししたら、僕たちは夫婦だ」
じゃあね、と言い残して王子は部屋を出て行く。エリナは顔をベッドの枕にうずめ、泣いた。どれくらいの涙が出たのだろうか。毎朝寝具は取り替えられていたが、どれも涙で濡れていた。

コンコン

どこからか何かを叩く音がした。エリナは顔をあげ、音のした方向を見る。

コンコン

それが窓の方からしたのだと気づき、息を吐いた。これだけ雨が強ければ当たり前だろう。大雨が降って、結婚式が延びることを期待したが、それも潰えた。そして逃げ出す気力も残っていない。エリナは窓のカーテンを閉めようと腰を上げた。ウェディングドレスは思っていたよりも重くて、邪魔だった。

「きゃっ」

雷が轟いて、思わず目を背けた。随分近かったらしく、一瞬視界が真っ白になった。そして、何か冷たいものが顔を打ち付けるのを感じた。窓ガラスが割れたのかしら、とエリナは目を向けた。

「・・・・・えっ？」

窓は大きく開け放たれていた。エリナが感じた雨は外から吹き込んでいるもの。強い風が吹いて部屋の明かりが消えた。そして、エリナの前に立つ一人の少年――。

「待たせたな、エリナ」

「ロイっ！」

エリナはロイに抱きついた。ウェディングドレスを着た少女とボロボロの格好の少年、絵にならないことはなはだしいが、そんなことは関係が無かった。

「ロイ、ロイ、ロイ！」

目から涙が自然に零れ落ちた。3週間泣き続けたが、枯れることはなかった。そして、3週間分の喜びはとどまるところを知らなかった。エリナは力強く全身でロイを抱きしめる。

「・・・い」
ロイの口からもれた声にエリナは顔を上げる。
「いってぇぇぇ！いてえよ、エリナ！！」
ロイはエリナを強く押し、二人は離れた。脚の力が抜けたエリナは床に尻餅をついた。
「なによ・・・心配、したんだから」
顔を伏せる。顔を上げ、ロイを見れば涙が溢れてしまいそうだった。
「だからってバカ力で抱きつくなっ！」
感動も何もあったもんじゃないロイの言いように、エリナは顔を上げた。
「バカ力って言うなっ！何よ、心配させといて！！」
「心配？心配しすぎてそんな格好になっちゃったのか？似合わねえよ」
その言葉で、エリナの理性は音を立てて切れた。ぶち、という音はロイにも聞こえただろうか。エリナは立ち上がり、叫ぶ。
「こっちだって大変だったのよ！こんなところに幽閉されるしさあ」
「ふーん、幽閉されて安穏と暮らしてたんだろ？こっちは3回も死にかけたんだけどな」
「あーあー、死んじゃえ死んじゃえ。そしたらあたしはこの国で王妃として生きてやるんだから」
「ふーん、やっぱりそんなふうに考えてたのか」
「・・・・・っ！！」
ついにエリナの手が出た。平手がロイの左頬を打つ。ロイは折れかかっている左手を押さえながらエリナを見た。
「本当に・・・心配したんだから・・・」
ボロボロと、エリナは泣いていた。それを見て、ロイは微笑み、そして膝の力が抜けるのを感じた。身体の底から熱いものがせり上がってきた。前のめりになり、エリナに寄りかかる。
「ちょっと・・・ロイ・・・？」
「がはっ」

返事の代わりに血を吐いた。ちょうどエリナの右肩に顎が乗る形になっている。ロイは動く方の右手でエリナの左頬を撫でた。
「心配かけてゴメンな、エリナ」
ロイの背中に両手がかかり、ぎゅっと身体が密着する。エリナが耳元で囁いた。
「ううん。ありがとう、ロイ」

エリナが窓を閉め、壁の蝋燭に火をともすと、部屋が明るくなった。ロイをベッドに寝かせようとしたが、ロイは「大丈夫だ」と言って床に腰掛けただけだった。呼吸も出来ているし、出血も少ないから大丈夫かもしれないが、ほっておくと怪我が悪化する事もある。ここから出て治療をしたほうが良いのだが、反乱を潜り抜けていくことはできないだろう。まだここのほうが安全なはずだ。
「大丈夫だって、治りきってない傷を小突かれただけだから。それよりも手首だな」
ロイは膨れている手首をだらんとエリナに見せた。
「このナイフで固定するとして、何か縛るものを持ってないか？」
エリナは「ちょっと待って」と言い置いて、ドレスの裾を破った。細長くしてひも状にする。
「おっ、そっちのほうが似合うって」
「うっさい」
「いやいや悪い意味じゃなくてさ。そういうラフな感じのほうがエリナらしいかなって」
「ふん。言われなくてもわかってるわよ。でも心配よね、結婚するときにウェディングドレスが似合わないなんてやだわ」
「なんだよ、結婚する予定あんのか？」
「それはないけど・・・。そうね、どうしても見つからなかったら、ロイで我慢してあげても良いわ」
「なんだよ、それ」

ロイは苦笑する。
ナイフで固定し、ぐるぐるに巻いて動かないようにする。折れてはいないようだからこれくらいで大丈夫だろう。しかし、手首の関節は複雑なので注意が必要だ。
「あばらの方は大丈夫？」
「ああ、もうだいぶ慣れた。動かなきゃそこまで痛くないしな。動くとめちゃくちゃ痛いけど」
「あっきれた。よくそんな身体でここまで這い登って来れたわね」
そう、ロイは反乱軍よりも早くここに到達するために城を這い上がってきたのだ。
「人間必死になれば何でもやれるもんだよな。流石に暗くなかったらビビッて無理だっただろうけど」
「ビビり～」
「ビビりもするさ、人間だもの」
「あははは」
エリナが笑い、ロイもにやりと笑う。
窓の外に目を向けると、雨が収まりつつあった。夜が明けてきたらしく、徐々に空の端が白んできている。うっすらと窓に映るドアが突然開いた。
「エリナ、エリナ、助けて！！」
飛び込んできたのは肥えた男。ボルノーニは血相を抱えてエリナにすがりついた。
「父上が、父上が・・・」
嗚咽を漏らしながらうわごとのように呟く。
「ここに君の荷物がある。これを持って一緒に逃げよう」
エリナはそれを受け取り、王子の肩に手を乗せた。王子がすがるような目でエリナを見た。
「いいえ、あたしはあなたとは行かない」
王子の目が絶望色に染まった。エリナはすがりつかれた手を退けた。
受け取った荷物の中から、服を取り出す。洗濯してあったらしく、

きれいにたたまれている。
「・・・参ったわね、どこで着替えようかしら」
エリナの興味は既に王子には向いていない。王子は俯き、呟く。
「どうして、どうして。僕ちゃんは何も悪いことしてないのに・・・」
「ロイ、ちょっと向こうを向いててくれる？着替えたいから」
ロイは唖然とした。
「しょうがないでしょ！ほかに場所がないんだもの。ほら、ぐずぐずしてたら人が来るわ。早く早く」
「なぜ俺の考えを・・・。まさか、読心術っ！？」
その言葉を無視して早く向こうを向け、と睨んだ。ロイは肩をすくめ、右手で体を引きずるようにしてベッドの向こう側へ回った。
エリナは王子にどくようには言わない。どうやら王子のことは本当に眼中に無いらしい。
「あなたが王子と呼ばれて贅沢をしてきたのはあなたの父親が王様だから。人々が税金を納めていたのは国を良くするため。あなたたちを肥やすためじゃないわ。崇められれいたのならそれに応じる責任があるのよ。あなたたちはそれを知るべきだった。あなたたちはただの人なんだから」
衣擦れの音がやんだ。
「ロイ、もう良いわよ」
ロイがエリナの視界に再び現れるのに2分要した。エリナは怪訝そうな目を向けたが、ロイはなんでもない、と言った。
「いや、エリナは強いな、って思ってさ」
「弱くちゃ軍人は務まらないのよ」
エリナはロイに目を合わせない。壁に点った蝋燭の火を見ていた。その静かな目が何を考えているか、ロイには分からない。問いかけることもしなかった。

「王子はここか！！」

ボルノーニの肩がびくっと震えた。続々と集まってくる人々をロイとエリナは無言で見ていた。真っ青になっている王子はもはや言葉を言う事すらできなかった。

「おお、あんたのお陰で助かったぜ」

投げかけられた言葉にロイは無表情のまま返事をした。

「じゃあ、俺たちはもう行く。正直これ以上の足踏みはごめんだ」

ロイはゆっくりと立ち上がった。着替え終わったエリナがするりとロイの横に突き、その体を支えた。

「ああ、ありがとな」

男に頷いてロイとエリナは足を踏み出した。エリナが王子の横で足を止めたので、ロイも足を止めた。エリナは縛り上げている人々を無視して王子に声をかける。

「ありがとう、ボルノーニ。あなたは、優しかったわ」

そのとき王子がどんな顔をしたのかはロイには分からなかった。ロイとエリナは部屋を出る、その背後で叫ぶ声が聞こえた。

「そうだ。これからこの国をどうするか考えなくちゃならない」

炊きつけるような言葉。上がった炎は一気に燃え広がった。

「俺だ、俺が次の王になろう。親父が学者だったから政治に詳しい」

「いや、俺だ。俺は商人だから、金に関しては俺の右に出るものはいない」

「ちょっと待ちなさいよ。私は護衛を一人倒したのよ」

そして上がる、悲鳴、怒号、叫び声。

「・・・・・・」

その群れを、二人は静かに見ていた。

「・・・もう、行こうか」
「・・・ええ、そうね」
そのまま2人は一言も喋ることなく、城を後にした。

第２１話　人の心がわからない国　１

「良いのか、助けなくて。『優しかった』んだろ？」
城を出てしばらく歩いてようやく口を開いたロイにエリナは首を振った。
「なに、嫉妬？」
「だれが！」
声を張り上げたロイに対してエリナは無表情で言った。
「・・・ボルノーニはこの国の王子。運命はこの国とともにしなくちゃいけないわ」
「ふーん、そんなもんなのか」
エリナは少し足を速め、ロイの１歩分前を歩く。エリナの心境を知ってか知らずか、ロイは何も言わない。
「・・・ねぇ、このままこの国を出るの？」
「ああ。最初にお茶をくれた婆さんがいたろ？あそこに世話になってたから顔出してから帰ろうかと思ってる」
そう、とエリナは素っ気無く言い置いた。ロイは空を見上げる。雨はすっかり上がっていたが、分厚い雲が世界を覆いつくしていて、この国の行く末を物語っていた。
「・・・この国はどうなるのかな？」
「さあ、興味ねえよ。なるようになるんじゃないか？」
「そうかな・・・。・・・小さい頃に聞いた話でね、悪政を繰り返していた王を倒して、そのリーダーが王になったの。信念があった彼は国を立て直そうと躍起になってたんだけど、どんどん悪くなるばかり。税金を減らせば有事に財政が足りなくなる、って言う感じでね。それでその王様は数年後、自殺したの。そのときに残した言葉が『責難は正事にあらず』。」
「・・・・・・」
「まるでこの国そのものだなって。確かに税収はやりすぎだと思っ

た。けれど、暮らしはきつかったけど、ちゃんと国は治められていたじゃない。王がいなくなったら次はどうするんだろう。その指針があの人たちにはあるのかな、って」

あれが悪い、これが悪いと責めることは簡単だ。けれどもそれは必ずしも正しくない。本当に責める資格があるのは、責める相手よりも上手くやれる場合だけだ。

「・・・そう、かな？」

ここまで旅してきて、世界がひずんでいるのを感じている。それはディアボロスの暗躍のせいかもしれないが、少なくとも魔物の出現がなければディアボロスが生まれることはなかった。魔物は人間を襲う。これは確かだ。だから魔物を駆逐し、人々を救うという考えは一概に否定できない。ほかに魔物から人々を守る方法などロイには考え付かない。ロイがカルコンを止める理由はこの国の王のような非道さを止めるためだ。けれど、それを止めた後はどうすればいい。ロイは足を止めた。

「どうしたの？」

「・・・それでも俺は、いかなきゃならないんだ。俺が行きたいから行くんだ」

ロイは足を速めてエリナを追い越した。エリナは怪訝そうにロイをみて、少し小走りにロイの隣についた。そもそも肋骨の折れているロイの早足と言ってもたかがしれている。

そのまま2人は一言も発せず、老婆の家に辿りついた。ノックをせず、扉を開ける。老婆は2人を見て心底驚いた顔をした。

「生きてたのかい・・・。てことは、反乱は成功したんだね？」

「ああ、だが・・・」

ロイは事の顛末を話す。話している間、エリナは老婆が持ってきた医療道具でロイの怪我の処置をする。さすが軍人と言った感じで、手際がいい。

「・・・そうかい。仕方ないね」

すべてを話し終えたとき、老婆は落胆した声でそれだけを口にした。

「あんたたちは早くこの国から出たほうがいい。あいつらは何より力を恐れてるからね。あんたを倒して力を証明するか、あんたを味方につけて力を得ようとするだろうね」
「・・・だろうな」
ロイは自分が寝泊りしていた部屋に入って荷物を背負う。怪我がずきりと痛んだが、それでもこれはロイが背負うべきものだ。
「持ってきな」
老婆は乾燥させたパンをロイに渡した。ロイは礼を言ってそれを受け取る。
「すまないね、こんな国で」
老婆の含み笑いが何を意味しているのか、終ぞロイにはわからなかった。

「ああ、出国か。ご自由にどうぞ」
城壁をくぐるとあの無礼な入国審査官がいた。入国時と違い何の書類も用意していないという事は、既に事態を知っているんだろう。
「いいのか？役人のあんたも何かと大変なんじゃないか？」
恰幅の良いその男は両の目でロイとエリナを見た。
「・・・大変だったみたいだな」
「これから大変になるのはこの国さ」
ロイが肩をすくめると、無愛想だった男が笑った。
「そうかもしれないな。なに、こっちの心配は要らない。何かあったら逃げれば良いだけの話」
「それでもここはあんたの国だろう？」
「ここが？冗談じゃない。俺は誰もが不幸な国の住民になるほど鷹揚じゃない」
「・・・・・そっか」
「車は3週間前のままだ。荷物も指一本触れてない。ほかに誰も来てないからな」

ロイとエリナは礼を言い、男に背を向けた。男は2人に向かって問いかける。

「なあ、幸せな国ってのはどんなだと思う?」

二人は足を止めた。

「いや、別に深い意味じゃない。一度旅人に聞いてみたい。この国が不幸なのは誰でも分かる。じゃあ、幸せな国ってのは?」

「うーん、やっぱ王様はいないほうが良いかも」

エリナは下唇に人差し指を当てて少し考え、言った。

「ひょっとしてお嬢ちゃんの故郷ではそうだったのかい?」

「ええ、そうよ」

エリナは胸を張って答える。

「ふむ、なるほどなるほど。じゃあ、君は?」

ロイは少し俯く。幸せな国。まるでボンゴで暮らした15年間みたいな。しかし、幸福というのは恒久的に続かなければ意味が無い。どこか一つでも欠落があれば、一瞬にして不幸に変わる。

「・・・さあな、魔界にでもあるんじゃないか?」

そんなものはない、とロイは思う。だから自分に対する皮肉を込めてそう言った。

ロイは去ってゆく。エリナがそれに続く。エリナは車のエンジンをかけた。入国審査官は何も言わず、小さくなってゆくその姿を見送った。

「ああ~、疲れた。俺は寝るぜ。起こすなよ」

「起こさないわよ。ご苦労様」

よほど疲れていたのだろう、ロイは既に寝起きを立てて寝入っていた。エリナはその姿を見て微笑む。

幸せな国。あるいは幸せな世界。ロイはああ言ったが、エリナはこの世にあると思っている。そしてきっとそれは「どこか」じゃなく

て「何か」にあると思うのだ。たとえばエリナとロイがここにいる事。それは楽しくてどこか嬉しいものだ。

――なんて、ロイ本人にはいえないけどね。

エリナは頭に浮かんだ益体の無い考えを頭を振ってかき消した。前方から頬を撫でる風は少し冷たい。

「・・・もうすっかり秋ね」

きっとこれから先も、この旅には辛いことが待っている。けれど、つらいことの間に幸せがあれば、それはきっと不幸じゃないのだ。世界はこんなにも広いのだから。

エリナはちらりと横を見る。普段大人びて見える一つ年下の少年はしかし、大きな口をあけて子供のように気持ち良さそうに眠っていた。

第２１話　人の心がわからない国　２

少し戻ってジルコナ国内。そのうちのある一軒家に老婆は１人いた。考え事をするかのように、あるいは誰かを待つように椅子を揺らし、天井を見つめていた。

ドン、ドン、ドン

扉を叩く音が聞こえる。廃屋にも似たこの家全体が揺れた。これで国内では大きめの家だというのだから笑ってしまう。

ドン、ドン、ドン

「はいはい、今出るよ」

老婆は内開きの扉を開ける。

「ああ、あんたかい。一体何の用だい？」

そう言いながらも、老婆は客人を家の中に招き入れた。寡黙な客人は何の躊躇もなく、さっきまで老婆が座っていた椅子に腰掛ける。客人はずぶ濡れで、動くたびに床に水滴が落ちた。老婆は顔をしかめたが、咎めることはしなかった。

老婆は客人の前にお茶を置いたが、男はそれを手に取らなかった。

「いらないのかい。確かにまずいお茶だがね、みんなこれなんだよ。もっとも、城に仕えてたあんたはもっと上等なもの飲んでいたかもしれないが」

客人の男は無表情を崩さない。

「それにしてもあの子どもに負けたんだってねぇ。あんたが勝つと思ってたんだが」

男は――――ロバートは表情を変えない。代わりに口を開いた。

「趣味の悪い。そんな喋り方と姿はよせ」

ロバートがそう言うと、老婆は高らかに笑った。そして、老婆に不似合いな若々しい声を発した。

「これ結構気に入ってたんですよ」

老婆が自分の顔に爪を立てた。べりべり、と生々しい音を立てて、皮がはがれていく。その下から現れたのは黒いショットカットの女性だった。

「潜入ご苦労様です、サトリさん」

女性はロバートのことをサトリと呼び、笑顔を向けた。それに対してロバートはいつまでも無表情のまま、口を薄く開いた。

「ああ、お前もな、トライ」

トライ、と呼ばれた女性はロバート――サトリの向かいに座る。

「上手くいきましたかね？」

「ああ。今の状態なら誰が王になってもおかしくない。反乱軍の中には何人かディアボロスの者が混じっている」

トライは微笑み、サトリは笑わない。

「これでまた一つ、カルコン様の統治国が増えましたね。言うならば辺境の国をもう1つ、魔物の被害から守ったという事です」

「・・・どうかな」

「えっ！？」

予想だにしない返答にトライは聞き返した。

「近年特に感じることだが、魔物の力が増大している。レギュラスも言っていたことだ」

「果たして守りきれるか、という事ですか？」

サトリは着ていた黒いスーツを脱ぐ。トライが受け取ろうとしたが、断り、床に投げ捨てた。トライはその動作を見て、ため息をついた。

「我々がいれば造作もないだろうが、そうも言っておれん。我にも

お前にも次の任務がある」
トライは黙って首肯する。部屋の中に奇妙な沈黙が流れた。唐突に、トライが口を開いた。
「サトリさん、ロイ＝クレイスにやられたのはわざとですか」
「・・・・・・」
トライはふふ、と微笑んだ。
「なるほど、確かにカルコン様の弟子というわけですね」
「・・・計画に支障はない」
「ええ、それではそのように伝達しておきます」
サトリがいきなりこちらを見たのでトライは驚愕した。だが、すぐに今の動作でさえサトリにとっては緩慢なのだと思いなおした。
サトリは口を開く。
「あれは、戦士としても術者としても心身ともにまだまだ未熟。それでいて己の力を過信するという術者に見られる愚かさはない。されど、己が非力であることを受け入れているようにも見える。己を信じぬものは強く慣れようはずもない。ゆえに今のままでは、さしたる脅威は感じない」
トライは仏頂面のまま話すサトリを見遣る。普段ほとんどしゃべらないサトリがこんなに話すことに驚いていたが、それを顔に出すことはない。もっとも、顔に出さなくとも読まれているだろうが。
「あれは我を恐れていたようだが、我にもあれは恐ろしくある。己の力と十全に向き合ったときどこまで成長するのか計り知れない。このような恐れはカルコン様とペルソナにしか感じたことはない」
「ペルソナさんって七聖の＃1ですよね?私たちは会ったことないんですが、そんなに強いんですか?」
サトリは少し考え、口を開いた。
「我はカルコン様を相手にとってもいいが、奴だけとは戦いたくない。世界を敵に回してもいいが、奴だけは敵に回したくはない。正真正銘の悪魔だよ、奴は」
サトリは臨戦態勢の時と同じ目をしていた。トライはその目が収ま

るまで身動き1つ取れなかった。少しでも動けば食い殺されてしまいそうだった。

「身構えるな。その程度の理性は残っている」

サトリがトライの心を読んだのがわかり、背筋がぞっとするのを感じた。

ディアボロスの諜報部隊、七聖。それぞれが各々の妙技を持っているが、＃1～3は中でも別格だ。その内の＃2までもが＃1は悪魔だという。およそ底は計り知れない。加えて恐ろしいのは、それらを従える盟主。

トライは時々不安になる、ディアボロスが世界を掌握した後、あまりにも大きなその力はどこに向かうのかと。そしてそのとき自分たちの居場所はあるのかと。

「心配は要らない。お前の――――お前達の能力は我々の目的に不可欠のものだ。現に、カルコン様は誰よりもお前達を信頼している」

再び背筋に寒気が走った。この人は味方、そして盟主の心まで読んでいる。いや、読まないようにしていても聞こえてしまうのだ。

制御のきかない絶対の読心。だからこそのサトリだ。

「私は・・・次の任務に向かわせていただきます。では」

トライは足早に家を後にする。その背中をサトリは無言で眺めていた。

第２２話　深い深い霧の森で　１

空がない。ロイは天を見上げてそう感じた。まるで狭いパイプの上を滑っているようだった。
「どうした、エリナ」
今運転しているのはエリナだ。ロイはまだ怪我が治っていないため、ハンドルは任せられないとのエリナの判断だった。その運転席でエリナがそわそわするのを見て取って、ロイは声をかけた。
「あー、もう！ジメジメジメジメ嫌になるわ！！」
エリナは乾燥した砂漠出身なので、湿気がお気に召さないらしい。転じてロイは、港町出身なので慣れている。早朝には霧で覆い尽くされることもしばしばあったのだ。尤も、ここまでひどい霧ではなかったが。
「こうも湿気が強いと、今ロイを殺せばすぐ腐りそうね」
「怖いわっ！！」
霧で辺りが見えず、車の速さは必然的に緩慢になる。その霧の深さは、道端の木立が辛うじて見えるほどだった。この森がいつもこうならば先人は良くこんなところに道を作ったものだ。
「それはそうと、さっきから変な音してるけど大丈夫かな？」
車から低い振動音が響いていた。さっきというほどでもない。実は２，３日前から気付いていたが小さな音だったので言わなかっただけだ。
「さあ」
「さあって」
「いや、俺に聞かれても。俺車じゃねえし」
「違ったの！？」
「真顔で驚くなっ！俺は素で自分自身を疑うぞ」
そのとき、ガタン、と音がして、車が前のめりになった。ほんの少

しだけ後輪が浮き、ロイはヒヤッとしたが、無事に後輪は着地した。しかし有事なことに車はうんともすんとも言わなくなってしまった。

「おいおい、嘘だろ」

ロイは大きくため息をついた。隣を窺うと、エリナは背もたれに深く腰掛けている。突然体を起こしたと思うとハンドルに拳を叩きつけた。

「ああ、もう！うざったいわね。殺してやりたいわ」

「・・・やめてください」

「何を」とは言わなかったが、とにかく自分の身が危ない気がした。

「ああ、ダメ、暗くてよく見えないし、じめじめするし、まったく分からないわ」

車の点検をして早々、エリナは音を上げた。もちろんロイにも分からない。車は依然へそを曲げ、沈黙したままだ。このまま夜が近づけば、辺りがより見づらくなる。このまま暗くなると大変なので、今日は諦めてここで野宿する事にした。

「すべては明日ね。昼ごろになれば多少霧も薄れてやる気も出るでしょうし」

やる気の問題か、という突っ込みは無視された。エリナは近くの木の根元から手ごろな枝を持ち寄ってロイに渡す。

「かなり湿ってるけど火はつけられるかしら？」

「ん？ああ、多分大丈夫」

ロイは頷き、枝を掴むと神経を指先に集中させる。何度も限界に達しているので、普段は自然と術の使用を押さえていた。錆び付いていないかと心配になったが、しばらくしたら枝は煙を上げ始めた。

「本当に凄いわね。なんだか魔物か妖怪みたいだわ」

「・・・・・」

熱を一点に集約するのはなかなかの荒療治なので感覚を他にまわしている余裕はない。だからだろうか、ロイは返事をしなかった。

「・・・・・よし」
枝の先に火が点る。その種火をエリナが組んだ薪に移す。ここが難しいのだが、経験的にも物理的にも枝の温度を上げておくことで火が移りやすくなると知っていた。無事、火は燃え移り、立派な焚き火になる。
「便利よね。あたしにもできないかしら」
エリナは鍋と鉄の脚を持ち出す。水袋の水と米（ドートリア産の細長いものだ。あの狭い土地で作っていたと考えると正直感服する）を鍋に入れ、蓋をして煮立たせる。その間の火加減の調節はロイの役目だ。
「さあ、できるんじゃないか。お勧めはしないけどな」
「どうして？」
「まず開眼。これは人によっては違うらしいが、俺の場合は精根尽き果てるまで剣を振り続けた。それを何日も繰り返す。それでようやくスタートラインだ。
そして発動。これは思いの外簡単だが、とにかく神経が削られるし、やりすぎてぶっ倒れることもある。そこから術として発展させる訳だが、この期間が人によってバラバラだ。俺は結局途中までだから早かったが、だいたい4～5年修業するらしい。このときに焦りすぎると限界をきたして死ぬこともある」
ロイは苦笑する。ロイの半年という破格の修業期間はそのためだ。今になって考えてみればカルコンは焦っていた。ロイを術者としてものにし、ディアボロスに引きこもうとしていた。同時に、別に死んでも構わない、くらいには考えていただろう。
さらに、術との付き合いが短いことで、限界のラインがロイには分からない。何度も限界をきたしておおよそ分かってきたが、そのラインもギンやカルコンに比べて随分と低いことにも気付いている。
「更に限界はかなり危険だ。先生や先輩の話を聴く限り、限界をきたしての生存率は５０％くらいらしい。俺はもう3回経験してるから、１３％だな。次になったら６％だ」

もちろんそれは限界の程度にもよるのだが、脅かすために誇張して言っておいた。しかし今になって考えてみると、良く生きているものだ。

「・・・・・やっぱいいや」

エリナは快活に笑った。その快活さの意味がわからなかったが、とにかく今は火の管理に集中する事にしよう。そういえば、さっきから熱を調整して火の加減をしているのに、息が切れることも眩暈がする事もない。しばらく抑えているうちに限界のラインが上がっているのかもしれない。だとしたらそれは大きな進歩だ。

エリナは小さな天幕を張って、ロイは動かない車の上で休むことになった。天幕の中まで湿っぽいらしく、エリナは文句を言ったが、霧で満たされている外よりはいいだろうと言うと、しぶしぶながらも納得した。

火は消していない。霧で月が見えないので、あたりは真っ暗になる。それでは何かあったときに対応できないだろう。そのため、火が燻るごとにロイは薪を足さなければならない。霧のせいで火が付きにくい上、消えやすくなっていた。

ロイは一度、辺りを見回した。本当に静かだ。自分以外に誰もいないかのような錯覚に陥る。だが、そんな世界に意味はないのだろう。ごく最近まで自分は一人きりで生きているような気がしていたが、それは間違いだ。少なくとも自分はそれほど強くないことを知っている。

――――だからこそ、俺は強くならなきゃな。守りたいものができたんだ。

ロイは呟く。傍らには誰もいなかったけれど。「なに」とも「だれ」とも言わないけれど。

その時、森の中でかすかにもの音が聞こえた。

「・・・やっぱり、1人じゃないな」

ロイは苦笑してゆっくりと立ち上がり、耳を澄ませた。かなり遠いが、風の音でも聞き間違いでもないようだ。

ズズン

木が倒れる音とともに地響きがした。ロイは車から飛び降りて、エリナが寝ている天幕に近づいた。

「エリナ、起きろっ！」

しばらくすると、中から人が動く音がする。何となく後ろめたい思いがして、少し下がった。

また木が倒れる音がした。加えて、その音は少しずつこちらに近づいているようだ。

天幕が開き、同時にロイは息を呑んだ。先ほどまでロイがいた位置にエリナの無骨な軍用ブーツが繰り出された。１歩後ろにさがらなければ無事ではすまなかっただろう。ただでさえ怪我が完治していないのだし。

「ああ、なんだ。ロイだったのね・・・」

「なんだ、じゃねえよ！殺す気かっ！？」

「うん、まあ・・・」

「ホントに殺す気だったのか！？」

「だってあたしの安眠を妨げたから敵だなあって」

「お前は冬眠から起きたての熊かっ！？」

ズズン

「・・・なるほど、分かったわ」

エリナは音のした方を見て言った。

「説明の手間が省けてよかったよ」

エリナとロイは焚き火まで駆け寄る。近づいてくる何かに自分たちの居場所を教えることになるが、この暗闇の中で襲われるよりは安

全だ。
４度目の音の発信源は目で確認できた。すぐ近くの木がなぎ倒される。そして、そこから現れたのは一人の男。
「助けてくれ！」
長身痩躯のその男が木々を掻き分けて森から這い出てきた。身体に傷はないものの、服がボロボロに裂けていた。
「魔物だ！」
飛び出してきたのが魔物や魔獣ではなく男だったので、一瞬警戒を解いたロイだったが、男の必死の形相を見て、再び臨戦態勢に戻った。
自然、ナイフを握る手が強くなる。ジルコナの老婆に返すのを忘れてそのまま持ってきてしまったものだ。結構頑丈なので重宝している。やはり刃渡りが短いのと、術を使うときには軽すぎるのが難点だが。
しばらくすると、再び木々が揺らめく。
「・・・あいつだ」
膝に両手をつき、肩で激しく息をしている男が呟いた。

キーッキキキ

高笑い（恐らくそうなのだろう）とともに現れたのはかなり大きな一匹の猿だった。ガーレイシャほど、とまではいかないが、ザバンと同じくらいの体格だった。そして、通常の猿とは違って白い歯を見せ、笑っている。万人が万人楽しんでいると形容するだろう。
ロイはナイフを抜き、刃を魔物に突きつけた。恐怖など微塵もない。それよりも久々に魔物と退治して、血がたぎっている自分に驚く。
それを見て、魔物は再び笑い。脚に力を込めた。

キ？キキ・・・キー！

そのまま飛び掛ってくるかと思われた魔物がしかし、辺りを見回し、奇声を発した。

キキッ、キー

そして踵を返し、森の中へ飛び込むと、どこかへ消えていった。

「・・・なんだ？」

完全に姿が見えなくなったのを見て、ロイはナイフを下ろした。耳を澄ますが、音は凄い速度で遠ざかっていく。

「・・・どうやら、逃げたらしい。助かったよ、本当にありがとう」

すっかり息が整ったらしく、振り返ったロイとエリナを見て、男は微笑んだ。

第２２話　深い深い霧の森で　２

「俺の名前はベルゼビュート＝プランシー。正真正銘の一般人だ。長いからベルゼと呼んでくれ。年齢は１９だ。どうぞよろしく」
いまだ夜の闇は深い。霧と森がいっそう闇を深くしていた。その闇の中、３人は焚き火を囲んでいた。
ベルゼ、と名乗った男は背も手足も長い。体つきが細く、棒切れのような印象さえ与える。目は垂れていて、目にかかる前髪も手伝ってやさしそうな顔つきだ。背中に背負っていた袋から服を取り出し、ボロボロになった服の上にまとっている。
「わけあってこの森にいたんだけど、いきなり魔物に襲われてさあ。あれはビックリしたなあ」
男――ベルゼは快活に笑う。その表情を見て、ロイは眉を細めた。
「随分軽いな、命の危機だぞ」
「あはは、それもそうかもしれないね。うん、実際死ぬかと思ったね。『死ぬかと思った』か。・・・実に面白い言葉だね。『死ぬ気でやる』の次に面白い言葉だ」
そう言って笑う男を見て、呆れたようにロイとエリナは顔を見合わせた。
「ところで、わけってなあに？」
「う～ん、少し暗い話になるから後にしよう。先に明るく自己紹介をしないかい？」
言われた始めて、二人は自己紹介をしていないことに気付いた。
「ロイ＝クレイスだ」
「エリナリア＝スタンフィーナよ。エリナでいいわ。」
「ロイ＝クレイス・・・」
ベルゼはロイの名前を復唱し、目を細めた。
「どうした？」

「ああ、いや・・・なんでもないよ。ロイにエリナリア、か。いい名前だなって思ってさ。俺はどうもこの長い名前が好きになれなくてね。だってベルゼビュートだよ。長いし言いにくいしね」
ベルゼは快活に笑った。
「そう？ステキな名前じゃない」
「ああ、ありがとう、エリナ」
ベルゼはニッコリと微笑んだ。
「それで、わけっていうのは？」
訝しげにベルゼを見ていたロイが尋ねると、ベルゼはため息とともに目線を落とし、訥々と語り始めた。
「・・・俺はね、ある組織にいたんだ。簡単に言うなら犯罪組織って所かな。非合法な武器の売買とかが主な仕事だ」
「それのどこが一般人なんだ？」
ロイは目を細めてベルゼを見た。ベルゼは肩をすくめる。
「警戒しないでくれよ。君たちみたいに魔物に正面切って向かい合えるような人種じゃない、っていう意味さ。
だいたい俺だってそんな仕事したくなかったんだよ。だけど弟がね、重い病気を患ってさ。俺の家は貧乏だったから医者に見せる金がなくてね。それで俺は組織に入ったんだ。治療費は普通の仕事じゃとても賄えないような大金だったからね。
俺は情報収集担当だったんだけど、あるとき、殺人を強要されてさ」
「・・・・・・」
黙り込んだ2人を見て、ベルゼは微笑み、両手を広げた。
「その頃ちょうど弟も助からなくて死んじゃってさ。組織を抜け出してきたんだ。で、追っ手を撒こうとしてこの森に逃げ込んだんだ。霧のおかげで上手く振りきれたんだけど、今度は突然魔物に襲われてね。いやあ、本当に助かったよ。どうもありがとう」
笑顔を絶やさず深々と頭を下げる。その様を、ロイは目を細めたまま見ていた。
「・・・それで、あんたはこれからどうするんだ？」

「ああ、それは考えてなかったな。どうしようか・・・」
そう言って考え込んだベルゼを見て、がくりと二人は肩を落とした。
思いついたようで、ベルゼは指を立てた。
「ははっ。そうだな、とりあえずこの森を抜けるまで、君たちについていっていいかい？」

やはり朝は霧が深い。しかし、太陽の位置が高くなるにしたがって、少しずつだが薄らいできた。
「ダメね。さっぱり分からないわ。スクラップにしてやろうかしら」
「やめてくれ」
エリナは朝早くから車の修理に取り掛かっている。もちろんロイに修理が出来るはずもないので、傍らで見ているしかない。そろそろ日が頂点に差し掛かりつつあった。点検はしやすくなったが進展はない。この森の深さがどれくらいかもわからないので車を置いて歩いていくこともできない。文字通り五里霧中だった。
「そういえばベルゼは？」
修理の休憩の合間にエリナが尋ねた。
「なんか食べれるもの取って来るとか言ってどっか行っちまったよ。・・・ところでエリナ、あいつについてどう思う？」
「どうって？」
「めちゃくちゃ妖しくないか？」
エリナは人差し指を顎に当てて、考える仕草をする。
「うーん、確かにほんとのこと言ってる感じじゃなかったけどね。でもそんなに警戒するほどでもないでしょ」
「・・・そうかな」
「うん、多分組織とやらを抜け出したのはもっと自己チューな理由だと思うの」
「そこまでわかるのか！？」
ロイは純粋に驚く。そのリアクションを見て、エリナは低い声で言

った。
「心を、読んだから」
「お前はロバートかっ！」
「愚問・・・」
「やめてくれ、傷が痛む！」
エリナは快活に笑い、ロイは苦笑いした。
「冗談よ。それにしてもまだ怖いの？勝ったんでしょ？」
ロイは頬をかいた。ばつの悪そうな表情をする。
「食らわせたのは一発だけだしな。それまでに何度も殺されかけてる訳だし・・・。まったく、運ってのは素晴らしいな」
ロイは視線を下ろした。足元をじっと見つめている。本当に幸運だったのだ。１万回に１回起こることが３回目に来たに過ぎない。
「・・・ロイ」
ロイの脳天に衝撃が走った。
「何すんだよ」
突然振り下ろされたエリナのチョップに顔を上げる。エリナの顔があまりにも近くにあって思わず身を引いた。
「思いつめすぎよ。生きてるんだからいいじゃない」
ロイはそっぽを向いた。
「わかってるさ。ただ、ザバンと戦ったときも思ったけど、俺はまだまだ弱い。弱いから強くなりたい。ちゃんと守れるように」
身を引いて、エリナはふーん、と言った。少し間を置いて口を開いた。
「ところで、ロイの守りたいものって何？」
「ああ、それは・・・」
ロイは口に人差し指を当てた。
「・・・男の子の、秘密だ」
「なにそれ！」

エリナの視線から逃げるように、ロイは背中を向けて駆け出した。
「俺ベルゼのところ行って手伝ってくる！」
「なに、何？そんなに恥ずかしいものが守りたいの！？」
エリナの声がかける追い討ちから、ロイは命からがら逃げ出した。
そんなんじゃない、と全面的に否定したかったが、妙に気恥ずかしくて足はどんどん速まる。
「・・・言えねえよなあ、俺の傍にいてくれる人を守りたい、だなんて」
あるいは、そういうことを胸を張っていえるようになるのが、大人になるという事なのかもしれない。そう考え、ロイは足を止めた。
苦笑して、じゃあまだ大人になれなくていいかな、と思う。とにかく今はベルゼを探そう。確かに怪しい男だが、今のロイには彼だけが希望だ。

「俺はさ、どうにも人に信用されないらしくてね。ほら、いつもヘラヘラしてるだろう？どうやらそれが気にくわないらしくてね」
幸いベルゼはすぐに見つかった。手に持っている皮製の袋には、キノコやら木の実やらが溢れかえっていた。念のため聞いてみたが、ちゃんと全部食用らしい。こういうのを探すのはコツがいるのだそうだ。その植物の生態を知っていれば云々・・・という事だ。必要なのはやはり知識と経験、それはどんなことでも同じだと諭された。
「そうか？俺はあんたみたいな人知ってるから別に違和感とかないぞ」
ギンのことである。しかし、違和感がない、というのは嘘になる。あの裏を隠すことすらしない笑顔をずっと見ていたからか、ベルゼの笑顔の含みがありありと見えてしまうのだ。あるいはそれがベルゼを妖しく見せているのかもしれない。何かあるのはわかっているのに何があるのかは分からない。それは気味の悪いものだ。まるで深い霧の向こう側と会話しているような。

「・・・人間ってのはさあ、実に面倒な生き物だと思わないかい？1人で生きていけないのに、他人と生きるのはとっても面倒だよね」
ベルゼは袋を木の枝に引っ掛けて一本の木にもたれかかった。気だるそうに言うのに、表情だけは張り付いたような笑顔のままだ。
「・・・少し前までの俺なら全力で頷いてたかな。あるいは一人で生きていけると反論していたかもしれない」
ロイの返答に対して、ベルゼは怪訝そうに眉を吊り上げた。
「という事は今は違うのかい？」
ロイは首肯する。憂鬱そうな顔をして、少し押し黙った。目線だけはエリナがいる方へ向かっている。しばらくして息を吐いた。
「ところで、車の調子はどうだい？」
再び笑ったベルゼに、ロイは苦笑して肩をすくめた。
「あはは、ダメみたいだね。俺少しいじったことあるから後で見てみようか？」
「ああ、助かるよ。もう少しでエリナが爆発するか、もしくは車がスクラップになるだろうから」
ベルゼはあはは、と輝かんばかりの笑みをこぼした。その姿をロイは訝しげに見遣った。

「ああ、ここだ。ほら、燃料供給のパイプが詰まってるし、ここのビスも外れかかってる」
その後、ロイとベルゼが戻り、昼食をとった。打ちひしがれているエリナの代わりにベルゼが車を見始めてわずか十数分。故障箇所を見つけてしまった。面白くないのはエリナだ。
「エリナ、俺が補助をやるから、修理してくれるかい？」
ところが、ベルゼのその一言で機嫌を直し、色々質問しながら作業を始めた。その手口にロイは感心どころか感動すら覚えた。ああすればエリナはもっと上手く扱えるのかもしれない。
「あー暇だ」

感動を覚えるが、役に立たないロイとしては居心地が悪かったりする。ロイはそう呟いて、1人森の中へと入っていった。霧は朝ほど深くない。目印さえつけておけば迷うこともないだろう。

第２２話　深い深い霧の森で　３

「おっ、直ったのか」
「ちょっと、ロイ、どうしたのその格好！？」
ロイが森の中から這い出てきて早々、エリナが突っ込みを入れた。
それもそのはず、ロイは昨晩のベルゼに勝るとも劣らないほどボロボロで、魔獣と一戦交えたんじゃないかと思うほど泥だらけだった。
「修業。・・・最近怠けてたからな」
「修業って、まだケガ治ってないじゃない！」
ジルコナを出てからまだ一週間しか経っていない。あれだけきれいに肋骨が折れれば治るのに最低でも３週間はかかるだろう。
「大丈夫だって。俺って割と頑丈なんだぜ」
ロイは左手を振ってアピールしてみせた。一週間前は動かすこともできなかった手首は腫れがすっかり引いていた。たしかにまだ痛いが動かすことはできる。
ロイが微笑むと、エリナは大きく溜息をついた。
「特に関節のケガは危険なの。治ったように見えても以前のように動かなくなる事も多いんだから」
「だから普通に動いたんだって。俺の手なんだから良いだろ」
ロイは肩をすくめたが、エリナは肩をいからせる。それを横にいたベルゼが宥める。
「まあまあ、いいじゃないか。本人が大丈夫だって言えるうちは大丈夫だよ」
でも、とエリナはベルゼの顔を見た。ベルゼは相変わらず笑顔だ。
「しかし、ケガが治るってのは神秘的な話だよね。そう思わないかい？」
怪訝そうに首を傾げたエリナを見て、ベルゼはやはり笑う。

「だってどんな物でも一度壊れたら二度と戻らないだろう?あの車だって直ったわけじゃない。ただ補強し、部品を交換しただけだよね。それに物だけじゃない、例えば約束、友情、あらゆるものがそうだ。でもさ、生物は少しずつだけど治るんだよね。実に神秘的だ」

明るい話をしているのに、明るい表情をしているはずなのに、喋るベルゼの顔はどこか暗い。

「どうかした?俺の顔に何かついてるかい?」

「・・・いや、なんでもない。車直してくれてサンキュな」

ロイはベルゼに言った。

「ちょっと待って、車を直したのはあたし」

エリナは1歩進み出て胸を張った。

「ああ、はいはい、そうでした。・・・ベルゼ、車直す手伝いしてくれてサンキュな」

ベルゼの隣でエリナが頬をふくらませた。ベルゼは笑顔のまま方をすくめる。

「いいよいいよ。2人には助けてもらったしね。それに直したんじゃなくて補強しただけだよ」

「・・・・・そうか」

やけにこだわっている風だが、流しておくことにした。

「そう。まあ、それはともかくとして、この時間帯だとまた霧が深くなりそうだね。もう一泊した方がいいんじゃないかな」

森の外にあるのだろう夕日が霧に乱反射していて辺りは真っ赤だ。そしてもうすぐ暗くなり、気温が下がるにしたがって霧は深まる。早めに火を起こさないといけない。そう考えて、ロイは小さく頷いた。

「わかった。俺が火を起こしとくから、二人で夕食を調達してくれるか」

「あ、うん」

説明が面倒なので、ベルゼに術は見せたくない。それを察してくれたらしく、エリナはすぐに立ち上がり、ベルゼをつれて駆け出した。

「・・・さて」
2人がいなくなってから、ロイは大きく伸びをして辺りを見回した。
気温は下がっているが、思いの外霧は薄い。なんだか嫌な予感がしたが、気のせいだと思いなおして薪を拾いに再び森の中へと入っていった。

少し物足りない夕食を終え、エリナは天幕の中へと入っていった。
ロイも昨日と同じく、車で寝ることになる。昨日と違うのは隣にベルゼがいるので身体が伸ばせないことだ。
「それで、本当のところはどうなんだ?」
火は燃やし続けているが、座席のベルゼ側で燃えているので、逆光になってロイからベルゼの表情は読み取れない。逆にベルゼにはロイの顔がはっきり見えているのだろう、ロイの目をじっと見ていた。
「本当のところって?」
ベルゼは笑っている。影になっているが間違いないだろう。
「今日一日見ていたが、やっぱりあんたは何か隠しているよ」
ベルゼはしばらくロイの顔をじっと見ていたが、不意に視線を正面に戻した。
「隠している事なんてないよ。それにしても随分単刀直入に聞くんだね。そういう事はやんわりと聞かないと友達が減るよ」
「生憎友達は選ぶ主義だ。その程度で離れていく友達なら俺にはいらない」
言いながらベルゼの表情を窺おうとしたが、如何せん逆光でうかがい知ることはできそうにない。声色から笑っている事はわかった。
だが、それは変化ではない。そこでロイは追い討ちをかける。
「だとしたら納得できないことがある。あんたがどんな組織にいたのかは知らないけど、一介の諜報員が魔物の襲撃から逃げ切れるものなのか?かなりの距離を逃げ回っていたんだろう?」
隣でため息をつく声が聞こえた。

「・・・やれやれ、そんなに俺は気に障ったかい？」
その声には何の感情もこもっていない。ひどく冷えた声色だ。
「生憎知り合ったばかりの奴を信用するな、と言われているんだ」
「あはは、それはもったいないよ。俺の場合、知り合ったばかりのあの人についていかなかったら今頃どうなってたかな」
そう言ってベルゼは頭上を見上げる。その姿をロイは怪訝そうに見た。夜空には残念ながら星も月も垣間見ることはできない。ふと、思いついたように懐に手を差し入れ、ナイフを取り出した。それをかざし、ロイにも見えるようにした。
「自分で言うのもなんだけど、俺はそんなに弱くないよ。このナイフはなかなかの業物でね。うん、まあそれだけになかなか扱いが難しいんだけど。・・・働きの報酬にもらったものさ」
「・・・・・・！」
それは、ロイが持っている、あの老婆に借りたナイフとまったく同じものだった。ロイは驚きが表情に出ないように必死に隠した。
「・・・大事な、物なのか？」
言いながら、ロイは腰の自分のナイフに触れる。それは相変わらずそこにある。
「・・・どう、かな。以前は命よりも大切なものだったかな。ふふ・・・命よりも、ね。俺にとって自分の命より大事なものなんて腐るほどあるんだけどね。もしかしたらそこらへんの石ころのほうが大事かもしれない」
ベルゼは天を仰いだまま微笑んだ。見えなかったが、ロイにはその笑みがとても悲しげなものに感じられた。
「なんだそれは。死んでしまったら意味ないだろう。大事にしていたものも自分の所有物じゃなくなる。俺には人じゃなく物が自分の命よりも大事なんて意味がわからない」
人ならばわかる。例えばロイを命をかけて守ってくれた人がいる。彼らがどう思っていたかを知るすべはもうないが、彼らに恥じないように生きていかなくてはならないし、彼らを忘れるつもりはない。

そんなロイの言葉に対してベルゼは自嘲気味に言った。
「なるほどね。君は生きていることに誇りを持てるんだね。ああいうところにいたからかな、俺はどうしても自分のせいが誇れない」

「――――だからこのナイフも今は・・・命と同じくらいどうでも良いかな」

その言葉の真意を考えている暇はなかった。
突然の風切り音にロイは叫んだ。
「伏せろっ!!」
ロイはベルゼの頭を押さえて車の中へと押し込んだ。その音はロイたちの頭上を通り抜けた。

第２２話　深い深い霧の森で　４

キキキキキ

聞き覚えのある笑い声がして、ロイは顔を上げ、車から飛び降りた。
ベルゼもそれに倣う。
「ちっ、４体も・・・」
誰ともなく悪態をついた。昨日と同じ大猿の魔物が車の四方を取り囲んでいた。囲んでいる範囲にはエリナがいる天幕がある。ロイは急いでかけよったが、天幕が開き、エリナが出てきた。
「敵？」
エリナは既に銃を構え、臨戦態勢を整えていた。ロイはうなずき、エリナの手を引いてベルゼと合流する。腰に差していたナイフを抜くと、ベルゼが驚きの表情を呈した。
「ああ、偶然同じやつみたいだな」
驚いているベルゼを見ている暇はなかった。

キキッキキキ

笑いながら3人を取り囲んでいる魔物たちが口を大きく開いた。その動作はどこかで見たような気がした。ややあって思い出す。ガルガイアのガーレイシャと同じだ。その口はあまりにも大きく開かれていたので、顔の前面は口腔の赤い色しか見えない。その中から、何か白いものが覗いていた。
「伏せろっ！！」
再びロイは叫ぶ。同時に3人は地面に伏せ、更に同時に周囲に金属音が響き渡った。
「何、これ？」

エリナがあたりに転がっている鉄の棒を拾い上げた。ロイは車に刺さっているのを見て、力任せに引き抜いた。

「針？」

・・・だった。太く大きいので、針というよりも杭に近かった。先端は尖っていて、中心はロイの小指ほどの太さだ。それが車に深々と突き刺さっている。人間の肌ならいとも簡単に貫いてしまうだろう。

その針をまた発射すべく、４体の魔物は再び大口を開けた。

「エリナ！正面の一体を撃て！！」

咄嗟にエリナは銃を構え、正面向けて乱射した。そこにいた魔物は針を発射することなく、口の中よりも真っ赤な血しぶきを上げ、倒れた。

「ベルゼ！！」

叫びながら、ロイはエリナの頭を押さえてしゃがませた。エリナは抗うことなく膝を折る。こうしておけば、車が盾になって背後の１体からの攻撃を防げる。残るは左右の２体。エリナを守るようにロイとベルゼがナイフを振って、叩き落とした。

「・・・つう」

ベルゼの声が聞こえたが、そちらを見ている暇はなかった。ロイのほうは全て叩き落すことに成功している。角度的に向かってくる針の数が少ないのが幸いした。しかし、ベルゼの方はそうはいかなかった。せめて傷が重症でないことを願うしかない。

キキーッ

魔物が叫び声の三重唱をする。そして三度、口を開いた。

「今だ！！」

攻撃に転じるこの瞬間だけ、隙ができる。ロイは叫んで正面にいた１体に飛び出した。魔物の懐に入ると、心臓部にナイフを深く突き刺した。魔物の肉はゴムのように硬く、突き刺すのに時間がかかり、

ナイフを引き抜くことはできなかった。
慌ててその場を離れると魔物の死体に数本の針が刺さった。
「・・・っ！」
左腕に走った痛みに顔をしかめる。避けきったかと思ったが、針の1本が腕をかすったらしい。
その場にいる魔物は1体だけ。どうやら反対の魔物はベルゼが倒したようだ。ロイは一瞬、胸をなでおろす。弱くないというのは本当のようだ。むしろ強い部類に入ると思う。
その一体がまた口を開けたのを見ながら、倒した魔物に近づき、力任せにナイフを引き抜こうとする。ところが、肉の硬さと柄についた血の滑りでナイフは固定されているように抜けなかった。その焦りのせいで、行動が遅れてしまった。
「ロイッ！！」
叫んだのはベルゼだった。ロイと魔物の間に割って入った影を見た瞬間、ドスドスドス、という生々しい音が繰り返し聞こえた。
「ベルゼッ！！」
間に入り、魔物の攻撃の盾になったベルゼの背中から針が何本も覗いていた。

キキッキキキキ

魔物の笑い声がする。ロイは頭が真っ白になり、ベルゼに駆け寄ると、ベルゼの右手に持っていたナイフを取り、飛び上がって、魔物の脳天に突き刺した。

・・・・・キ？

魔物は倒れる。ロイは今度はナイフを引き抜くと、背後のベルゼを振り返った。
「・・・ぐ、ごほっ！」

刺さっている針は全部で４本。その全ては腹に刺さっていた。そのうち3本は貫通している。ベルゼは膝をついた。

「・・・・・だい、じょ、ぶ・・・なん、とか・・・」

そう言ってロイを見るベルゼはいつも通り笑っている。確かに心臓やその他重要な臓器にはくらっていないようだが、大丈夫でないことは火を見るより明らかだった。

だが、今ならまだ間に合う。傷口を火で焼けばひとまず出血を止められる。そう思ってロイはベルゼに駆け寄った。しかし、ロイがたどり着くよりも先に、ベルゼの懐に何者かが入り込んだ。

「死ね」

ドス、という音がまた聞こえた。ぞくりと全身に鳥肌が立つほど滑らかな攻撃だった。顔を上げると、ベルゼの心臓――――魔物と同じ位置に、全く同じナイフが刺さっていた。

「ベルゼェーーッ！！」

ロイは叫ぶ。叫び声は霧に木々に闇にこだまして辺りを覆いつくした。そばでエリナの悲鳴が聞こえる。

ベルゼの身体はうつ伏せに倒れ込んだ。

第２３話　＃７、パラサイト　１

「貴様ーっ！！」
ロイは叫び、手にしていたベルゼのナイフで切りかかった。しかし、ベルゼを突き刺したその男は身を翻してそれを避けた。２回バク天をして距離を取った。
「・・・ロイ＝クレイス、か。久しぶりだな」
「久しぶり・・・？」
男の格好は闇に溶け込む黒装束。これでは確かに近づくまで男の存在に気付くのは難しい。加えてこの身のこなしが只者ではないことをもの語っていた。
ロイは男を睨みつけた。どこかで会ったことがあるのだろうか。しかし、ロイには覚えがない。それなのにこの男はロイの事を知っているという。警戒しないはずがない
「何者だ？」
ロイはナイフの切っ先を男に突きつけた。

「ディアボロス諜報部隊七聖が一角、＃６カラスのツヴァイ。久しぶり、と言ってもお前に面識はないだろうが」

「ディアボロス！？」
後半の説明の意味はわからなかったが、ロイはその１単語だけに反応した。
「ククク・・・成る程。上手く隠して取り入っていたようだ」
ツヴァイ、と名乗った男はベルゼを――ベルゼの死体を見下ろして言った。
「取り入った、だと」
驚嘆の表情を見せたロイにツヴァイはにんまりと笑った。その笑み

があまりにも不気味で、およそベルゼとは似ても似つかないくらい禍々しい。ベルゼのような含みのある笑みではなく、含みしか感じられない笑みだ。ロイは緊張を更に硬くした。

「教えてやろう。この男は七聖の#7パラサイト。言うならばお前の敵だ」

目を見開いてツヴァイを見た。背後を振り返ると、エリナもあまりの驚きに声が出ないようだった。

「ククク・・・。裏切られたやつの表情ってのはどこまでも良いもんだ。大方いつも笑ってるこいつを見て善良とでも勘違いしたんだろう。

まあいい。まあいいさ。だがどの道こいつはここで終わり。ディアボロスに背くことはカルコン様に背くこと。ディアボロスを抜けることはカルコン様を否定する事。

こいつはな、ロイ＝クレイス。任務中に部下を殺して逃げたんだ。生存者を1人も残さずに、だ。まったく、せっかくカルコン様に目をかけていただいたというのに」

「部下を・・・殺して・・・？」

いまだに情報を整理しきれないロイを見て、ツヴァイは再びククク、と笑った。

「おいおい、まだ騙されてんのか？こいつは命令に従って故郷を滅ぼし、親兄弟を皆殺しにしたような男だぞ。生まれつきの人外。血なんか通っちゃいないのさ」

ロイは目を見張った。ベルゼの言葉に嘘と秘密があるのは感じていたが、弟のため、という言葉だけは信じていた。弟のことを語ったときだけベルゼの目が真剣だったからかもしれない。

「・・・ああ、そうさ」

突然聞こえた声に3人が3人とも辺りを見回した。しかし、声の主はどこにも立っていない。
そう、どこにも立っていない。声の主はうつ伏せに、倒れていた。
「確かに俺の体に血なんか通っちゃいない。俺は人間じゃないんだろうね。ははっ、俺ほど人外っていう言葉が似合うやつもいないだろうな」
ベルゼが、ゆっくりと身体を起こした。確かに太い針が腹を貫通し、心臓にナイフが突き刺さったままだ。だが、ベルゼは自分の両足で立ち上がった。
「俺はあの人のためなら何でもやった。あの人にすべてを捧げた。俺を必要としてくれたのはあの人だけだったからね。
・・・でも、それも終わり。そう、終わりだ。俺はもう、あの人にはついていけない」

「キサマァ！！」

ツヴァイはすぐに飛び出し、ベルゼ懐に入ると、その心臓に刺さっているナイフを掴んで、横向きに薙いだ。皮膚はきれいに裂け、その内部があらわになる。
「きゃあああ」
エリナが再び悲鳴をあげた。ツヴァイはにやりと笑ってその場を離れる。ロイはあまりの驚きに身動き1つ取れなかった。だが、その真っ白な頭の中でも違和感には気がついた。それはツヴァイとエリナも同様のようだった。
おかしい。おかしすぎる。間違いなく心臓を潰されているのに生きて、しかも動いている。それだけでもおかしいのに、さらに、割かれた皮膚からほとばしるはずの血液の量があまりにも少ない。そう、身体の内部が、肋骨が、肺が、穴の開いた心臓が動いているのが見えるほどに――。
ロイは下がった。1歩下がった、2歩下がった、3歩下がった。そ

れでも光景は変わらない。いつの間にかエリナの横に立っていた。エリナもロイと同様に青ざめた顔で「あ、・・・あ・・・」と口ごもりながらベルゼを指差していた。

「嘘だっ！」

ツヴァイが更にベルゼの身体を傷つける。傷つける、傷つける。まるでバラバラにするように。その不安を打ち消すかのように。

「うわああ！！」

突然ツヴァイは叫び、ナイフを取り落とした。勢いよく後ろに飛んで、ベルゼから離れた。それがなぜなのかロイにもエリナにも分からない。ただただ呆然と立ち尽くしていた。ようやく、ロイが口を開いた。

「お前・・・死なない・・・のか・・・？」

ベルゼが辛うじて繋がっている首をロイのほうへ向ける。身体の内部は標本のように鮮明に見えた。やはり血はほんの少ししか流れていない。

「違う・・・。死ねないだけだ・・・」

ベルゼの両目から、一筋の涙が頬を伝った。口元を垂れるほんの少しの血と交じり合って、顎から地面に落ちた。

突然だった。じゅくじゅくと、ベルゼの傷口が動き出した。まるでそれぞれが独立しているかのように蠢いている。

真実、それぞれは独立して蠢いていた。

「なんだ・・・あれ・・・」

ベルゼの傷口を何かが覆っている。それは無数の白い蛆だった。数え切れないほどの蛆がベルゼの傷口を覆い尽くしていた。

「いやーーーっ！」

エリナが三度悲鳴をあげた。そのエリナをベルゼは涙の跡が残る目で悲しげに見つめていた。

蛆は完全に傷を覆い、ほんの数秒後、どこかへ消えていった。そし

て消えたと同時に、ベルゼの傷も跡形もなく消え去っていた。
ベルゼは足元のナイフを見下ろした。その刃にも蛆が湧いている。
ベルゼはそれらを踏み潰した。足をどけると、やはり跡形もなく、蛆はまるで煙のように消え去っていた。残ったナイフを拾い上げ、ツヴァイに投げつける。ツヴァイはそれを受け取り、驚きを湛えたまま、怪訝な顔をした。
「レギュラスとともに俺から手を引け。そしてあの人に・・・カルコンに伝えろ。俺はディアボロスを抜ける」
暗い、虚のような目でベルゼはツヴァイを睨んだ。
「くそっ」
ツヴァイはそう吐き出し、森の中へと消えて行った。残されたのは４つの魔物の死体と２人の人間、そして――
「そんな顔をしなくても分かってるよ。俺の名前はベルゼビュート＝プランシー。正真正銘の――」
ベルゼは虚ろな目のまま、微笑んだ。その表情はあまりに悲しげで、全ての幸福を飲み込んでしまいそうだった。その笑顔に含むところがあるとすれば、地獄のような不幸だろう。

「――化け物だよ・・・・・」

ベルゼは告げる。並んだままのロイとエリナは何も返すことができなかった。

第２３話　＃７、パラサイト　２

体長わずか１センチほどの魔物、パラティシアム。宿主の体内に寄生し、増殖、成長する。子パラティシアムが親になるまでに２０年ほどかかり、全ての子が成長すると宿主の身体を突き破って野に帰る。

子パラティシアムは外気に弱く、触れると１分ともたずに消滅する。そのため、パラティシアムは宿主を守らねばならず、傷や病気を瞬時に完治させる。パラティシアムにとって宿主は絶好の家であり、宿主の運命は寄生されたときに決定する。

すなわち、死ぬことは許されず、パラティシアムを野に放すこと。

「――俺が寄生されたのは１歳の時だ。家の庭に変な虫がいて、それが赤くてきれいだったからつついて遊んでいたんだ。そしたら突然噛み付かれて、体内に入ってきた。それから、俺は化け物になった」

「・・・どうして、ディアボロスに？」

「１２歳の頃にあの人に拾われてね。それに魔物を滅ぼす、という目的が俺に合っていた。俺はあの人のためだけに多くの人を殺してきたんだ。母親も、そして・・・弟もね」

「・・・・・・」

「その頃からかな、あの人にも自分にも違和感を持ち始めた。だから、逃げてきたんだ。しかし、さっきあいつが言っていたようにディアボロスからの脱退は死を意味する。突然レギュラスの操っている魔物に襲われたんだ」

「・・・どうしてレギュラスが絡んでいると思うんだ？」

「魔物は特定の誰かを襲ったりしないものだよ」

「じゃあ、どうして逃げたんだ？その身体なら逃げる必要なんてないだろう」

ロイの問いにベルゼは乾いた笑みを返した。
「相変わらず、君は単刀直入だね。そして傷つくことを言う。・・・例えば君は死なないからといって拷問に耐えられるかい？この身体が痛みを感じないとでも？」
「あ、いや、そんなつもりじゃ・・・」
「死の苦しみは耐えがたいものだ。それでも俺の願いはただ一つ――」
3人は焚き火を囲んでいる。言葉を切ったベルゼの顔をロイとエリナが見た。

「――死ぬことだけだよ」

笑顔だった。まるでそれ以外のことがどうでもいいというような。
それだけが最大の幸福とでも言うような。
「ただ、裏切ったと言えばそうなのかもね。それは謝ろう。君の名前を聞いたとき、俺はすぐにあの人の敵だと気付いた。それでも言い出すことができなかった」
「どうして・・・？」
尋ねたのはエリナだった。さっき悲鳴をあげてしまったので、どこか気まずい表情だ。
「そりゃあ、君たちの近くにいたほうが安全だというのもあった。しかしそれ以上に、化け物でもね、拒絶されるのは怖いものなんだよ」
「・・・・・化け物、か」
「ああ。魔物でもない、人間でもない。それが俺だ。そういった中途半端はどの集団からも拒絶される」
「・・・なあ、ベルゼ。お前これからどうするんだ？」
ベルゼは天を仰いだ。空はうっすら白んできている。さっき車を点検したがちゃんと動いたので、今日は出発できそうだ。
「さて、どうしようかな。抜け出すことに必死で考えたことはなか

ったな。ディアボロスを敵に回してしまったし」
「・・・俺の一応の目的地はジラークだ」
「知ってるよ、あらゆる研究がなされているところだろう。車や銃もそこの発明品だ」
「そこならあるいはお前の身体を直す方法があるかもしれないんじゃないか？」
エリナとベルゼはロイを見る。ロイの瞳は焚き火の炎を映し出し、輝いていた。

「どうだ？俺たちと一緒に来ないか？」

「・・・・・」
ベルゼは黙り込んだ。ロイの横でエリナが手を打った。
「そうよ、そうしましょう。ベルゼがいてくれればあたしたちも助かるわ」
2人の顔を見比べて、ベルゼは破顔した。その笑顔は、今までのそれとまったく違った、正真正銘の、心からの微笑だった。
「本当にいいのかい？こんな化け物なのに？」
2人もニッコリと微笑む。言葉はなかった。言わなくても伝わった。
「・・・ありがとう」
こうして、旅はまた少しにぎやかになった。

霧はまだ深かったが、明るくなるのを待って、3人は出発した。運転席にはエリナ。助手席にはロイ、そして後部座席にはベルゼ。そこに山と積んであった武器類はベルゼの横に押しやられていた。いつ雪崩が起きてもおかしくないような積み方だが、本人が構わないと言っているのだから別にいいのだろう。
「やっぱり人数が多いといいよね。ワクワクするというか」
「これで景色が見えたらもっと良いんだけどね」

ベルゼの言に対して運転しながらエリナが呟く。ロイは改めて辺りを見回した。昨日浅かった分の反動か、霧はかなり深い。せいぜい前方の道が見えるくらいだ。

「じゃあ、こんなときは楽しい話でもしようぜ」

「おっ、いいね」

ロイの提案にベルゼが身を乗り出してきた。正直、硬い後部座席では身体が痛いだろう。気を紛らわせたいのかもしれない。

「ディアボロスの組織ってのは一体どうなってんだ？諜報部隊だのなんだのとややこしすぎるぞ」

「えーっ、つまんない」

そう言って唇を尖らせたのはエリナだ。だが、ロイのほうは聴く耳を持たない。ロイにとって霧は慣れてるし、懐かしい風景なのだ。

「まあ、いいよ。それくらい教えとかなきゃ裏切ったかいがないってもんだしね」

「・・・悪いな」

何となくロイは謝る。後ろからすぐに「別にいいよ」と本当になんでもないような声が聞こえた。

「もっとも、ディアボロスがどのくらいの規模なのか正直俺にもよくわからないんだけどね」

「なにそれ」

エリナが突っ込みを入れた。

「しょうがないだろ、ザイガの各地に広がって活動してるんだから」

「・・・じゃあ、主だったところだけ教えてくれ」

スタートからそれた話をロイが口を挟んで補正する。

「ああ、まず頂点にいるのが・・・カルコン、だね」

ベルゼはその名を呼び捨てにする事に対してまだ若干の躊躇があるようだった。

「その下にレギュラスと三騎士、そして七聖って感じかな。いや、レギュラスはディアボロスの一員というよりも同盟関係と考えた方が良いね。気に入らない任務に対しては拒否できる」

ロイはケムトで出会った少年の姿を思い出す。魔物を“操る”という規格外の術者。その術を持ちながら魔物を全滅させるというカルコンに賛同している理由が分からない。全滅なんてさせなくても危害はないはずなのに。

「さあ、知らないよ。本人に直接聞いてみれば？」

ベルゼは素っ気無い。どうやらあまり戦う理由というものを気にしていないようだ。

「続けるよ。次に三騎士。実質の幹部の役割もしていて、雑兵を統率しているのも彼らだ。もっとも、こっちはロイの方が詳しいんじゃない？」

誰も彼もロイの事情については詳しい。聞けば、要注意として、伝達がなされているとのことだった。要するに敵はこちらを知っているが、こちらは敵を知らないという事だ。かなり辛い状況ではある。

「ああ、その３人とは実際に会ったことがある」

カルコンに呼ばれて出てきた３人がそうだろう。カリューにいたのはほんの半年前のことなのに、随分遠い昔のような気がした。でも、それはそんなに悲しむことではない。それだけロイは旅をしてきて、成長しているのだろうから。

「リックとザバンの術は知ってるけどもう一人の女のは知らないな」

名前はなんだったか。カルコンが一度叫んだだけなのでうろ覚えだ。

「キリシエさんだね。彼女は水の術者だよ」

「ふーん、相性悪いな。で、誰が一番上なんだ？」

「基本的に順序はないんだけど、一番強いのはリックさんだろうね。カルコンさん・・・・・・もう言い慣れないからさん付けでいいや。・・・カルコンさんがそう言ってたからね」

ロイは忍び笑いをした。生き生きと話しているベルゼはまるで人生を楽しんでいるようだった。

「それで別枠にいるのが諜報部隊の七聖。正直俺は他の七聖のことを良く知らないんだけどね。・・・だからしょうがないだろ、別々の任務なんだから」

ロイたちは何も言わなかったが、ベルゼは勝手にそう反論した。
「ナンバーに意味はあるのか？」
「ああ、ナンバーは入った順番だよ。１つ抜けたら繰り上がっていく形だね。俺は一番新人だから７」
「そうなのか、てっきり強い順かと思ってたんだけどな」
「うーん、それは一概に否定できないな。危険な任務が多いから入れ代わりが激しくてね。ナンバーがついてるのも通り名で呼び合ってるのもその理由なんだけど。普通強いほど生き残る確率が高いから必然的に強い人のナンバーは小さくなる。中でも＃１，２，３は創立以来変わってないって話だ」
まあ、俺が残っていたら間違いなく＃１になれただろうけどね、とベルゼは付け加えた。
その軽口に突っ込むこともなくロイは押し黙る。ドートリアで会った＃３。あれより上に２人いて、いつか自分の前に立ちはだかるかもしれない。思わず拳を握り締めた。運転席でエリナもした唇を噛んでいる。
「俺が直接会ったことがあるのは＃６だけかな。でもツヴァイって言うやつとは違うやつだった。俺そいつがそう名乗っただけだから確証はないけど、女だったしね。＃６は伝達の役割があるらしい。それと、噂に聞いた話では＃２は人の心を覗く力があるとか」
「読心術か・・・」
「そうやって見切りをつけないほうがいい。想像を絶する人外の異能を七聖はそれぞれ持っている。例えば俺。俺が不死身だと聞いても普通は何かの比喩だと思うだろう？」
「・・・まあ、確かにそうだな。実際にこの目で見なきゃとても信じられないよ」
「だろう？つまり、そういうこと。・・・まあ、こんなもんかな、ディアボロスは」
ベルゼはそう言って身体を大きく後ろにそらした。
「ごめん。俺はもう寝るよ。体内の魔物が騒ぐとひどく眠たくなる

んだ」
そう言って目を閉じると、すぐに寝入ってしまった。ロイとエリナは顔を見合わせた。
「運転変わろうか？ここ2日、あんまり寝てないだろう？」
「ロイだってそうでしょ。だから、そうね、1時間交代で行きましょうか。少し寝て良いわよ」
「了解。じゃあお言葉に甘えるわ」
「うん。霧もだいぶ薄くなってきたし、ロイが起きる頃には抜けてるかもね」
「・・・・・・ああ」
ロイは目を閉じる。久しぶりの安らかな眠りがすぐ傍で待ち構えていた。
――こんな時は故郷の夢でも見れそうだな。
身体が重くなるような感覚の中、ロイは穏やかにそう思った。

第２３話　＃７、パラサイト　３

汗ばむ陽気はどこかへ去ってしまったらしい。心地よい風が肌をかすめていた。車で移動している分風が強いので肌寒く感じる。それはどうやら車でも同じらしい。

「うーん、どうも調子悪いなあ」

運転席のエリナのこの呟きも十数回目を数えた。エリナの調子ではなく車の調子である。確かに、さっきからがたがたと不吉な音がしている。ロイは心配そうに助手席の足元を見た。反面、後ろのベルゼは熟睡している。本人は魔物のせいだといっているが、森を抜けてからここ一週間の睡眠時間を鑑みると関係ないようだ。今度問い質してみようと強く思う。

「街は近いのか？」

流石にロイたちは何の目標もなしに進んでいる訳じゃない。進行方向に街があるはずだ。

「あと少しのはずなんだけど・・・」

自信ないなあと続いたエリナの言葉に青ざめるロイ。森での修理はあくまで応急処置で、ここまで騙し騙し来たそうだ。ここで車が動かなくなれば街まで歩きになる。

「うわあ、それはやだな」

ロイは大きく後ろにもたれて呟く。しかし、考えても見ればドートリアまではずっと歩きだった訳で、それに比べれば大したことない距離だ。つまり、今のロイは文明の便利さを甘受してしまっているということだ。

「ついにこの俺も文明っ子か・・・」

エリナが吹きだした。それも半端なものではなく、手元が狂って車が蛇行するほどの吹きだしっぷりだ。

「田舎者のくせに～」

うるさい、とロイは一喝したが、否定しきれないことに気付いた。

自分は十分に、十二分にド田舎出身だ。
そして、エリナがようやく持ち直した時、

プスン

「・・・・・・・・・・・・あ」
ロイは溜息をついた。やはり文明を甘受してはいけないらしい。
「・・・・・・・・・・どうしよう？」
思わず見とれてしまいそうな微笑とともにエリナが尋ねた。ロイが無言で睨み返すと、「何よ、あたしのせいじゃないもん」と頬を膨らめた。
「ベルゼ、ベルゼ、起きろ。行くぞ」
ロイは力いっぱいベルゼを揺さぶった。
「・・・なんだい、ロイ。戦闘か？忙しないなあ、君も。もう少し話し合いって言葉を覚えたほうが良いよ」
「エリナ、どうだ？」
寝ぼけているのか冗談なのか、起きぬけ早々喋ったベルゼを無視してロイは双眼鏡で前方を見ているエリナを見た。
「うん、見えた。ていうかあの山脈の麓だしね」
森を抜けてすぐ、前方には天まで届く山脈が広がっていた。あの山の向こうに海があり、バーカギル大陸があってジラークはそこにある。今ロイたちが目指しているのはその山脈の麓にあり、中継地点として発展しているフェルメロンだ。
「夜通しで歩けば夜明けには着きそうね」
口調こそ軽かったものの、エリナは顔をしかめた。そんなエリナの心の中を代弁するように後ろでベルゼが言った。
「ああ、めんどくさいなあ」
ロイもエリナも頷きたかったが、「それくらい平気」という見栄を張りたい年頃なので、何も言わなかった。

そこから出発するまでに少し時間がかかった。車は乗り捨てていくほかないし、個人の荷物も既にまとめてある。問題は、ベルゼの横に山と積んであったドートリア製の兵器である。全て持っていくというエリナと置いていくべきだというロイが真っ向から対立した。それぞれ座席の上に立って、今にも取っ組み合いに発展しそうな勢いである。

そんな2人の姿をベルゼは静観していた。口を挟むほどの仲じゃないと遠慮しているのかもしれないし、どっちでも良いと考えているのかもしれなかった。もしかしたらその両方かもしれない。

結局、いつもどおりエリナが勝ち、武器類は3つに分けて持っていくことになった。そこでベルゼはロイ側につかなかったことを激しく後悔した。

「平等じゃないよ、これは・・・」

一番重い狙撃銃はロイが持っているが、ベルゼはサブマシンガン2丁と拳銃4丁。更に手榴弾や銃弾ｅｔｃ・・・

確かにロイとベルゼの持っている荷物の量は同じくらいだ。大きなバッグを貸してもらって運びやすくなっている分ロイよりは些か楽かもしれない。けれどエリナは・・・

「何よ！男でしょう！？これくらいのハンデ当たり前じゃない」

随分な女王様気質である。ベルゼが口を挟まなかったのはどちらにせよ自分には負担がないと思っていたからだ。ドートリア軍出身だと聞いたから自分のことは自分で何とかすると思っていた。ベルゼは溜息をついて、背後を振り返る余裕もないほど重い荷物のために前かがみになって歩き始めた。まだ日は高い。

ちなみにベルゼは知らなかったことだが、集団行動には適材適所が基本である。軍で公行する時も全体の足並みが崩れないように力のないものの荷物は少しほかが負担するのが通例だ。あるいはそれは今まで仲間というものを持たなかったベルゼの失態と言えるのかもしれないが、いくらなんでもこの差は大きすぎるだろう。エリナの

荷物はベルゼはロイの半分以下。男女差を考えても力に2倍の差はないはずだ。
「頑張ろうぜ、ベルゼ。こんなもんでへばってちゃこの先大変だぜ」
既に肩の痛みやらで苦しみだしたベルゼに対し、ロイは涼しげだ。
そのロイは前方の山を指差す。天辺は雲にかかっている。流石に上るルートは稜線の最も低い箇所だが、それでも高いことに変わりはない。そう、フェルメロンについても次は山越えが待っているのだ。
ベルゼは早くもついてきたことを後悔し始めた。
「・・・エリナっていっつもああなの？」
体力の消費をできるだけ軽減しようと呟くように聞いた。
「まあ、女王様気質っていうか、かなりわがままではある。軍人なのにな。一度なんてお姫様になりそうだったぜ」
「なんか言った！？」
フットワークの軽いエリナは2人よりも些か前方にいる。それでも聞こえたらしい。大した地獄耳だ。
「まさかエリナの『ベルゼがいると助かるわ』がこんなことの伏線だったなんて」
「おいおい、まだ十分しか経ってないぞ」
ベルゼは既に息も絶え絶えだ。
「良いよな、君は術があるから。でもこちとら生身なんだよ」
人間じゃないけどね、とベルゼは続けた。不死の呪いはあるが、ベルゼの生身は普通の青年だ。一般人よりも鍛えてはいるが、それでもノーマルの枠は超えない。
「わかったよ。荷物を少し貸せ、持ってやるから。・・・その代わり、1つ聞いても良いか？」
ロイの提案にベルゼはすぐに飛びつく。荷物がほんの少し軽減され、比例するように口も軽くなったところで、ロイが質問を口に出す。
「――死なないってのはどんな気分なんだ？」
「・・・・・」
ベルゼはロイの顔から目をそらして、地面を見る。また単刀直入に

ひどい事を言う、と思ったが、前置きや自分の負担を増やしてまで聴くという事はデリカシーのなさは感じているのだろう。ベルゼは再び顔を上げた。

「・・・どうかな。そんな言葉にも昔は傷ついてたな。今はそうでもないのかもしれないね。ははは、俺の血が一滴残らず魔物になってる証拠かな?そうだな、一言で言うなら・・・死にたい気分、かな」

「・・・悪かったよ」

「いいさ、別に。俺からも1つ聞いていいかい?君は何がしたいんだい?旅をする事かい?それともやりたいことをやりたいようにやれることかい?」

「・・・・・・」

「君の情報は俺にも色々入ってきてる。断片的ではあるけどね。その秤で考えるならば君はとても自由だ。誰も君の旅を邪魔することはできないし、嫌になったら止めればいい。けれど俺は君が自由であるとはどうしても思えないよ。君は縛られているさ。復讐という名の・・・鎖に、ね」

ロイは足を止めた。ベルゼはロイの少し前で立ち止まったが振り返らなかった。どんな表情をしていようとも関係ない。確かめるつもりもない。そんなことよりも振り返る分の体力の方が惜しい。

「そうかもしんねえな。けどさ、ベルゼ、鎖から解放されれば自由なのかな?そりゃあ誰だって縛られているさ。土地だったり組織だったり復讐だったり呪いだったりな」

「・・・・・・」

ベルゼは振り返らない。

「けど、縛られてるってことはもがけるってことだ。もがくって事は目的があるってことだ。それはその鎖を断ち切ることになるかもしれないし、場合によっちゃあ自分の身体に鎖を巻きなおすことになるかもしれない。だけど、全ての鎖から解放されてその後にいったい何ができる?そんなんじゃ自由になってもむなしいだけだ」

ベルゼは振り返らない。背後で砂をかむ音が聞こえ始めた。
「もしかしたら人間自体が鎖なのかもしれないな。全部断ち切ったら何も残んないのかもしれない。だから・・・」
ベルゼは振り返らない。そのベルゼの横をロイが通り過ぎた。ベルゼの前で立ち止まり、振り返った。

「目的がある限り・・・ベルゼ、お前は人間なんだよ」

かなり前のほうでエリナが早く来いと声を張り上げた。ロイは慌てて駆け出した。
「おーい、ベルゼ、早く来いよ！」
ベルゼはゆっくりと足を踏み出した。

――自分は化け物だ。母親にも弟にもそう言われて育てられた。育てられたと言えるかは妖しいが、少なくともそう言われ続けてきた。
――それはベルゼが自分を化け物と称していたからかもしれないが、自分の元盟主や元同僚でさえベルゼの事は化け物と言った。それに対し、ベルゼはそれで構わないと思っていた。傷つけば瞬時に再生し、寿命まで死ぬことのない自分は既に人間ではない。それくらいの自覚はあった。だから自分の心には蓋をしていた。
――しかし、それでもロイは自分のことを人間というのだ。こんな呪われた体を自分と同じだというのだ。

ベルゼは少し微笑み。次第に駆け足になった。2人との距離は遠い。それでも少しずつ近くなっている。もう少しで手が届く。
ベルゼは後悔していた。ついてきたことをほんの少しでも後悔したことを後悔していた。
そしてようやく2人に追いついた。
ここにある。ここにしかない。人間、ベルゼビュート＝プランシー

の居場所に。

第２４話　喰人鬼　１

結局街についたのは日が上りきってからだった。まず宿をとることを主張したベルゼの剣幕に押され、一行は宿で荷物を下ろした。物騒なことこの上ない荷物だが、あまり気にされているようには見えなかった。商業の中継地点と言う事で、武器商人も少なくないのだろう。

部屋に案内されて早々、ベルゼは荷物を下ろし、横になった。よほど疲れていたらしい。エリナは「ヘタレねぇ」と言ったが、ロイは生憎エリナ側につくことはできない。もちろん怖かったので否定もしなかったが。

ロイもベルゼほどでないにしろかなり疲れていたので、休みたかったが、エリナは自分の部屋に戻ることなく（ロイやベルゼとは当然別の部屋だ）運んできた荷物を物色し始めた。

「今からホーエンス山脈越えるわけだからね、やっぱり装備は軽くしなくちゃ」

「装備って、装備してなかっただろ！」

ベルゼが哀れでロイが言うと、エリナはかわいそうなものを見る目をロイに向けた。

「本当に田舎者はレディファーストがなってないわ。こんなにか弱い乙女にこんな重たいものを運ばせる気だったというの？」

「か弱い乙女は敵の兵器に１人で立ち向かったりもしないし、銃を持っていくなんていう主張もしねえよ！」

ロイの的確な突っ込みだった。

「・・・悪かったと思ってるわよ」

やはり冗談だったらしい。エリナは口を尖らせた。ついで、右脚のブーツを脱いで軍用パンツの裾を捲り上げた。その脚は素人目に見ても重度の捻挫だと分かるくらい腫れ上がっていた。

「おいっ、どうしたんだ、それ！？」

「森の中で戦闘中にやっちゃってね。これでもずっと固定し続けといたから割と治ってきたんだけど・・・また痛くなってきたわ」
「言えよ、バカ野郎！」
ロイが怒鳴る。
「野郎じゃないわ！乙女よ！！」
エリナが反論した。
「乙女はこんな腫れた足で丸一日歩かねえよ！！」
ちなみにロイの手首はもう治っていた。早めの治療が功を奏したのだろう。治療をしてくれたのはエリナだから、自分にも同様の治療をしたのだろうが、それでも動かせば意味がない。
おかしいと思ったのだ。エリナは確かにわがままではあるが、そこまで理不尽なことをおしつけたりはしない。あれほど急かしたのもとにかく早く着きたかったゆえだろう。ロイは大きく息を吐いた。
「ああ、もう。言ってくれりゃあ負ぶってやったのに」
「結構よ。そこまで甘えるつもりはないわ。・・・言えなかったのはベルゼがいたのも大きかったわね。一線引いてる感じだったし、あんまり信用できなかったってのはあるわ」
確かにここまでの1週間、ベルゼはほとんど眠っていて、少なくとも親交を深めようという感じではなかった。信用できなかったのもムリはない。
「寝てる間だったら言えたんじゃないのか？」
思いついた疑問を口にする。ベルゼが寝ている間だったら別に問題ないはずだ。そうなるとロイも信用されていなかったということだろうか？かなりショックだ。
「気付かなかった？ベルゼは半分以上狸寝入りだったのよ。それが信用できない最大の理由だったんだけど・・・。でも疑うのはもうやめたわ。これはあれね、危機をともにした2人は恋に・・・じゃなかった、苦しみを共にすれば親密になれるってやつね」
「苦しみが同じじゃない！」
ベルゼとロイは重い荷物と戦っていて、エリナは足首の痛みと戦っ

ていた。その理屈でいくと親密になったのはロイとベルゼだけだ。
「いいのよ、ロイがベルゼを信用できればそれであたしも信用できるんだから」
「・・・そいつはどうも」
ようするにロイは信用されているらしい。ショックが解消された。
「だからここに来て話すことにしたの。・・・分かった、ベルゼ？」
ロイが振り返ると、ベルゼが身体を起こすところだった。相変わらずニコニコと笑っている。
「いやあ、ごめんごめん。なんか2人の会話って入りにくくてさあ。邪魔するのもあれだったから狸寝入りしてたんだけど。ところでどこでばれたの？こう見えても俺は隠密だったから気配消したりとか得意なんだけど」
「こちらに興味を注ごうとした時に微妙に寝息が変わってるわ。でもその微妙が致命的ね」
2人の間に挟まれたロイは居心地が悪かったので少し横にはけた。
「実際悪いとは思ったんだよ。でも俺は裏切られて育ったからね。いや、裏切られてすらいないのか。まあ、人間を信用するようにはできてないんだ。だから君たちが俺を信用してるとは思えなかった」
「まあ、そんなどうでもいいことで1週間もスパイご苦労様。で、結果はどうだった」
エリナは腕を組み、皮肉をたっぷりに込めた言葉を投げかけた。
ベルゼはベッドから降りて宿のカーペットに胡坐を書いて両拳を突き、頭を下げた。
「ごめん」
しばらく、ベルゼは顔を上げなかった。あまりにも動かないのでロイは寝てるのかとさえ疑ったが、どうやら違うらしい。
「・・・できれば俺を信用してほしい。ムリにとまでは言わないけどさ」
言ってベルゼは顔を上げた。
「そうね。あなたがあたしたちを信じてくれるとあたしたちも嬉し

いわ。ね、ロイ？」
突然振られたロイだが、当然だと頷いた。振られたことよりもさっきまでの棘のある声色から一気に変わったエリナの口調に驚いた。
「さて」
エリナが手を叩いた。少し暗かった空気が一気に吹き飛ぶ。エリナは再び装備品に向かった。
「あたしたちはこれから山を登るわけです。なんと天壁とまで言われるホーエンス山脈です。それで荷物を極力減らしたいのでいらないものは売ってしまおうと思うです。が、ご存知の通り、あたしは足が痛くて歩けません。さて、ここで問題ベルゼさん。今からこれを売ってくるのは誰と誰でしょう？」
笑顔で解答を促すエリナにベルゼは苦笑し、ロイと顔を見合わせた。ロイは諦めろ、と肩をすくめる。
「手厳しいなあ」
「信用してるのよ。こうしておつかいを頼めるくらいにね」
エリナは笑う。ロイも笑った。ベルゼも静かに微笑んだ。

「すごい殺し文句だよ、それ」

第２４話　喰人鬼　２

エリナの脚を医者に見せたところ、１週間安静にしておけばとりあえず腫れが引いて、１０日あれば歩けるようになるという。応急処置が良かったから治りが早いと医者は言ったが、エリナとしては不本意だったらしい。診療所を出た瞬間、

「こんなの３日で治してやるわ」

と言い置いた。

宣言どおり、腫れは３日で引いた。ロイとベルゼはエリナが予言者なのかといぶかしんだが、エリナは経験、と一言言っただけだった。本人は大丈夫と豪語したが、歩くには痛そうだったので、登山用の荷物が届くのに時間がかかると言って、出発をずるずると先延ばしにした。本当は即日購入できたのだが、嘘も方便というやつだ。

一週間後、エリナは完全に歩けるようになり、店に文句を言ってくると言ったので、ロイとベルゼは慌てて何とか制止し、諦めて取りに行くことにした。

「お金は大丈夫なの？」

荷物を全て宿に運ぶとエリナが聞いてきた。確かにケムトでグリンにもらった銀の量は多いとはいえ３ヶ月ほど収入のない旅をしている。流石に経済と無関係な仙人のような旅をしている訳ではないので、当然資金は減っていく。ドートリアの火器もこの辺ではメジャーな代物らしくあまり値がつかなかった。それに引き換え需要の多い登山用の荷物は値が張った。しかも３人分である。

「ジラークまではぎりぎり大丈夫だと思う。何の足止めもなければだけど」

「それなら何とかなるわね。山を越えた向こうの街はかなり大きいらしいし、足りなくなったら働けばいいわ。でも、だとしたら１週間も足止めくらったのはかなり痛い出費ね。やっぱり店に文句言って来てやろうかしら」

「あ、いや、勘弁してやれよ。向こうも結構急いだらしいからさ」
会話から逃げるようにロイは窓の向こうの山を見た。天辺を見ることはかなわない。秋が深まってきているので、季節的にもギリギリだといわれている。かなり冷えるので気をつけるようにとも。麓ではまだ少し暖かさを感じるというのに山ではもう冬の準備をしているという。もう少しすれば山が閉鎖されて半年待たされることになるそうだ。急ぐ旅ではないとはいえ、もう少し急いだ方がよかったかな、と思う。とはいえ、急いでいたらエリナやベルゼとも出会えなかったわけだから後悔はしていない。むしろ幸運だったのではないだろうか。
「どうしたの・・・？」
考え込んだロイを心配そうにエリナが覗き込んだ。
「ああ、いや。明日からきついなあ、と思ってさ」
「それはやだなあ。荷物減らしたといっても武器はまだ運ばなきゃだしさあ。2，3日かかるんだろう？もう寝ていいかい？」
ずっと会話に入れなかったベルゼがここでようやく喋った。ちなみにベルゼは狸寝入りもするが、よく寝ることも本当だ。
「でもまだ夕方よ？」
「甘いよ。明け方のうちに登っておくんだ。夜は危険だからね。明日は太陽が昇り始める前に起きたほうがいい」
ベルゼは知ったように言ったが、寝たいがための発言と取れなくもない。しかし、一応筋の通っている主張だったので、エリナは部屋を出て行った。
「・・・きついよ、山越えは。特にホーエンスはね」
ベルゼはベッドに横になり、天井を名残惜しそうに見つめながら言った。
「なんだよ、登ったことあんのか？」
「ああ、うん。・・・1年くらい山にこもって修業させられた。まだ大丈夫だと思うけど、冬場は本当にやばいね。雪がひどい。あと魔獣もいる。冬眠前の獣にも気をつけたほうがいい」

「修業？ディアボロスでか？」
俺はカリューだったな、と呟いた。ベルゼは「知ってる」という。
「ほんの3年前までね。その頃は七聖が足りなかったからその選抜さ。数十人で行くんだけど、無事に戻ってきたのは半分いたかな。冬の魔獣はこちらが凍えてようが関係なく襲ってくる。俺も3回・・・死に損ねたよ」
ベルゼは身体を起こして不敵に笑った。ロイは少し顔をしかめた。
「じゃあ慣れたもんだろ？きついことなんてないんじゃないか？」
「そうでもないさ。あの頃は生き残れば良いだけだったからさ。得意分野だしね。今度は重い荷物を背負ってだろ。・・・それに」
ベルゼは壁を見た。ちなみに視線の先の隣の部屋にいるのはエリナだ。
「怪我人もいる事だしね。・・・気付いてるだろ？」
「ああ」
気丈に振舞い、足の腫れも引いているが、痛くないという事もあるまい。もう少し休ませてやればいいのだが、本人を宥めるの限界だし、さっき言ったように資金も足りないし、時期的にもギリギリだしで、それもかなわない。
「あーあ、なんだかんだ荷物多くされるんだろうなあ」
ベルゼは再び体を倒して天井を見つめた。
「・・・仕方ないんじゃないか？」
頭だけ上げて、笑っているロイを見て、にやっと笑った。
「・・・だね」

流石に商業ルートとして使われている事もあり、道はそこそこしっかりしていた。これで一冬越えればまた雑草が茂り、かなり歩きにくくはなるのだろうが、そう考えればこの時期は最も道がきれいな時期なのかもしれない。
「大丈夫か、ベルゼ」

しかし、道が整備されている事と傾斜がきついことは無関係な訳で、つまりどんだけ道がきれいでもきついものはきついのだ。まだ日が昇りきっていないというのに、ベルゼは早速出遅れていた。案の定その背中には大きな荷物が積まれていた。もちろん前のほうを行くロイも同等の、いやそれ以上の荷物を背負っているが、それはそれ、筋力の違いが大きく関わってくる。

ちなみにロイは術を使っていない。フェルメロンに来る時にも使っていなかった。つまり、デフォルトでもそれだけの筋力があるわけで（もちろんきつくないはずもない。足りない分は気力でカバーだ）、ベルゼとしては言い訳のしようもない。

道で、結構多くの人とすれ違う。山の向こうから来た人や、狩猟や採集を仕事にしているものなど様々だが、彼らは皆軽装備だ。おそらくロイとベルゼもエリナの火器を除けばそれくらいにはなるのだろうが、あるものは仕方がない。

案の定、エリナの荷物は少なかった。2人に比べればないに等しい量だ。それでも2人は文句を言わなかった。

「ちょっと休憩しましょうか」

歩き始めてどれくらい経っただろうか、既に麓のフェルメロンは小さくなっていた。ベルゼとロイは荷物をどっかりと木陰に置いた。ともに座りこんで肩で息をしている。

「まったく、何の軍事訓練だよ」

ロイは不満を言ったが、返事はない。反論をしない分、申し訳なさを感じているのかな、と思いつつ顔を上げたが、単純に聞いてないだけだったようだ。エリナは麓で買った地図を広げ、ルートを再確認していた。

「やっぱり少し遅れてるわね。でもこのまま頑張れば夕方には小屋にたどり着けるかしら」

この山道では登山者のための宿泊小屋が用意されている。一応管理者はいるらしいが、ほぼ登山者が交代で管理をしているような場所だ。長い間かけてより安全を期すために考えられたのだから頭が下

がる。
「あっ、ごめん。ちょっとトイレ。荷物よろしく」
そういってベルゼは道の脇森の中へ入っていった。エリナが後ろから「そういう事はレディに聞こえないように言いなさい！」と怒鳴った。

「・・・さて、もう出てきてもいいんじゃないか？」
ベルゼはギリギリ迷わない程度に森に入って、周囲に向かって声を上げた。姿は見えないが確信はある。それは確かに、ベルゼが１９年間警戒し続けた人間の気配だ。
「おいおい。わざわざカモられに来てくれたぜ」
３人の男がベルゼを囲むように現れた。麓で聞いた話だが、最近ここでは追いはぎが出るらしい。
「俺たちを狙っていたろ？」
ニヤニヤと男達は顔を見合わせた。
「あんな大荷物で大変だろ？俺達が減らしてやるよ」
男の１人が言う。確かに減らしてほしいのはやまやまだが、そうもいかないから困っているわけである。大体減らしてもいいなら持って来ていない。ベルゼは荷物を置いていったらエリナがどんな顔をするのか想像してにやけた。
「なに・・・ヘラヘラしてんだっ！」
男が突然逆上する。どうやら相当忍耐力が足りないらしい。要カルシウムだとベルゼは思った。
「まあ、待て。まず１人、こいつをやる。次に探しに来た二人をやって、荷物を奪う。そう言う話だろう？ここで音を立てたら不審がられるぞ」
一人が言って、逆上した男を止めた。ただの荒れくれかと思いきや、ちゃんと考えているらしい。ただし、計画を立てられることと、それを実行できる事はまた別の話。

「俺としてはぜひとも俺たちをほっておいてほしいんだけどね。流石に荷物を持ってるときに襲われると分が悪い訳で。うーん、別にまあそうでもないか」
ヘラヘラしたまま言うベルゼにやはり男はこらえ切れなかったようだ。懐からナイフを取り出した。
「おい・・・っ！」
「いいだろ、口を封じりゃあなんだって。別に生かしておく必要はねぇ。むかつくんだよ、こういうやつ！！」
ナイフを振り上げる。随分と安物だな、とその刃を見ながらベルゼは息を吐いた。
――絶叫。森の木々に止まっていた鳥たちが四方八方に飛んでいった。

「・・・ねぇ、今の」
悲鳴はもちろんエリナの耳にも届いた。ロイが頷く。
「俺が見てくる。エリナはここで荷物を頼む」
そう言って、ロイは森へ入っていった。ベルゼが消えた場所へ向かって。
ロイの消えていく姿を見ながらエリナは溜息をついて呟いた。
「随分と危険なトイレだこと」
もしかしたら緊急事態なのかもしれないが、エリナはあまり焦っていなかった。悲鳴がした森の方を見る。

「ところで誰の声かしら？」

第２４話　喰人鬼　３

男は悲鳴をあげた。ナイフを投げ捨て、尻餅をつく。その男を見下ろすベルゼは笑っていた。

「やれやれ、ひどいことするなあ」

右手からは血が滴っている。否、それは血などではなかった。ボトボトと掌からあふれ出した蛆が地面に落ちた。男が投げ捨てたナイフにも刃が見えないくらい蛆が覆い尽くしていた。

「・・・ば、化け物！」

尻餅をついている男はもちろん、他の二人の男も身がすくんで動くことがかなわなかった。その３人を不敵な笑みを浮かべながら見回す。

「ご名答。化け物さ。化け物だから、悪いことした人間は懲らしめないとね。鬼と言ってもいいかもしれない。悪い子はいねえかーってね。知らない？俺の故郷の御伽噺なんだけど。ま、もうそんな故郷ももうないんだけどさ」

男達の顔が引きつる。さっきまで搾取する側だったのに、その立場はすぐに逆転してしまった。

「・・・喰っていいよ」

ベルゼがいったのはもちろん男に対してではない。自分の右手に群がっている蛆に向かっていったのだ。

キィィィ

その声に反応して高い音があたりに響き渡った。音源はベルゼの右手だ。それは蛆の鳴き声だった。

これ以上なく恐怖をあおる光景。だが、もはや男達の顔はこれ以上青くなる事はできなかった。ベルゼが１歩足を踏み出す。地面に落ちた蛆の一匹が足元の草を喰らった。ベルゼの足元には草木一本も残らない。その怪物が今近づいてきているのだ。まるで男達の存在

さえもかき消さんとするように。
「やめろっ！」
そのとき、男とベルゼの間に1人の少年が現れた。途端、ベルゼは無表情になった。
「やりすぎだ！」
ベルゼは足を止めた。蛆が催促するように鳴いたが、気に留めている様子はない。
「やりすぎだという事はないだろう。こいつらは俺たちを襲おうとしてたんだよ。俺を殺そうともしたんだ。やられる前にやれ。この世界の常識だ」
「だからって殺す必要はないだろう」
「よくわからないな。どうして無関係の人間を弁護したりするんだい？それとも彼らは君の知り合いなのかな？」
ロイは何も言わない。それを見て、ベルゼはやれやれと溜息をついた。
「危害を加えられたから殺す。君が魔物や魔獣にやっている事とになにが違うんだい？それとも人間だとダメなのかな？意味がわからないよ」
「・・・・・・」
ロイは沈黙する。確かにその言葉に反論する事はできなかった。論理で何とかならないなら、あとは感情しかない。
「俺は人が死ぬところを見たくないだけだ」
ベルゼも押し黙ってロイを睨む。その緊迫した空気に男達も身動き1つ取れなかった。
「・・・もういい。やる気なくした。傷も塞がったしね」
ベルゼはそれだけ言って、拳を握り締めた。ぐしゃり、と蛆がつぶれ、一瞬後には消えてなくなった。ベルゼは何も言わないまま森から出て行った。
「ありがとうございます！」
尻餅をついていた男がロイにすがりついた。ロイはそれを鬱陶しそ

うに振り払い、男達を一瞥した。
「勘違いするな。お前達を助けようと思ったわけじゃない」
もちろんこれはツンデレではなく、本心だ。
「さっさと山を降りて出頭しろ。今度俺たちに会ったときが最期だと思え」
男はこくこくと何度も頷いた。ロイはそれを見ることなく、ベルゼを追って森を出た。

「あれ？ロイは？」
岩に腰掛けていたエリナの前に出てきたのはベルゼ1人だった。ベルゼは不機嫌さを隠そうともせずに言った。
「さあ。慈善事業でもやってるんじゃないか」
「？」
エリナは怪訝そうな顔をしたが、それを気に留めることなく、ベルゼは自分の荷物を背負った。同時にロイが出てくる。こちらもやはり不機嫌そうだ。
「なんでもなかったよ。行こう」
ロイはベルゼの方を見ようともせずに荷物を背負った。ベルゼの方はさっさと歩き始めてしまったので、エリナも荷物を背負って後を追った。

沈黙が3人を取り囲んでいた。特にロイはどんどん前のほうへ行ってしまう。ベルゼもそんなに遅れることなくついてきている。そして気まずいのはエリナだ。森で何かあったことは確かだが、聞きづらい。仕方なく2人の中間あたりで脚を勧める。しかしその足取りは軽快とは言いがたかった。
何度か話しかけようと試みたが、2人とも刺々しい感じを醸し出していた。エリナに罪はないはずなのに、つい申し訳ないような気分になってしまう。それでもあと少しの辛抱だ、とエリナは顔を上げた。昼食も道すがら携行食を食べ、早足で歩いているので、目的の

小屋まであと少しだ。だんだん日射しが赤く染まってきているが、暗くなる前には着けるだろう。

「ホント、２人とも子供ね」

エリナはそう呟く。理由は知らないが八つ当たりされているエリナからすれば不満の１つでも口に出さなくてはやっていけない。子供、と呟いてそういえばこの順番も年齢順だな、と考えた。あと旅に参加した順番。もっともロイは参加したとは言わないけど。そう考えると楽しくなって、それ以外にも何か無いかと考えていた。

そんなことを考えているうちに小屋に着いた。小屋と言ってもかなり大きい。中も男女二部屋に分かれていて、それぞれ十人分くらいの寝具がある。もっとも、冬が近いので今はエリナたち以外に宿泊者はいなかった。大勢でにぎやかの方が好きだが、仕方無い。その分ゆっくりと休ませてもらうとようと思った。

寝室のほかに談話室もあった。もちろん水などは出ないが、そこで３人で食事をとることにした。とはいっても、昼間と同じような硬い携行食だ。本格的に食料を持っていくと荷物になるし、その匂いが獣や魔獣の標的になるのでこれが一般的であるらしい。一応味はあるが、それでも淡白であることは否めない。

食事中もずっと雰囲気はギスギスしたままで、昨日まで仲良さそうだったのになあ、と不思議に思った。

結局その空気の中でエリナ１人ではちゃけることもできず、明日の行程を確認しただけでその場は解散になってしまった。明日も朝早く出発するので、早めに寝てしまおうという考えだ。もっとも、そうすると睡眠時間に１０時間も割くことになる。いくら疲れているとはいえそんなに寝れるものじゃない。ベルゼならば分からないが、少なくともエリナは睡眠時間を多くても一日7時間と決めている。それ以上寝ると時間を無駄に使った気がするし、頭が痛くなる。起きている時間は本当に充実しているかというと疑問があるが、その喪失感が嫌なのだ。

エリナは固い床にそのまま敷かれた布団から身を起こした。やはり荷物が軽かったかもしれないが、疲れはそれほどない。少なくともフェルメロンにくる時に比べれば大したことはない。足首も確かに痛いが、増してはいない。明日は少し荷物を持ってあげようかしらと考えた。そういえば今日は2人とも不満を口にしたりしなかった。気を遣われているのだと思うと余計にじっと考えているのが嫌だった。何となく申し訳ない気分になる。それが遠慮につながる気がする。ギクシャクするというのだろうか、今日の2人みたいな感じにはなりたくない。あんな中で息をするくらいなら息を止めていた方がマシだ。

エリナはため息をついて部屋を出、外に出る。暗いかと思ったが、月がきれいでそこそこ明るかった。霧の森に比べれば眩しいくらいだ。せっかくだからしばらく眺めていようと傍の切り株に近づいた。小屋が森に飲み込まれなように誰かが定期的に切っているようだ。

「あ、ベルゼ」

すぐ傍の切り株にベルゼが腰掛けていた。気付かなかったのはエリナが月に見入っていたからなのかベルゼが気配を消していたからなのか。

ベルゼはエリナを見て「きれいな月だね」と呟いた。エリナも首肯し、断って横の切り株に腰掛ける。月を見上げることなくベルゼを見て言った。

「こんなところにいると虫に刺されるわよ」

ベルゼはにこりと笑った。

「大丈夫だよ。虫もこんな化け物を刺すほど馬鹿じゃないさ。そもそも俺の場合刺した虫の方が死ぬしね」

ベルゼが笑っている時は嬉しい時か不機嫌な時だ。どちらにも微妙な変化というものがないので実に分かりにくい。今はどっちだろうか。

「あなたは人間でしょ」

エリナは言う。これは本心だ。

「はは、ありがと。そういってくれるのは君たちだけだよ。つまり、この世の中のほとんどの人にとって俺は人間じゃないんだね」
エリナは溜息をついた。ベルゼは度々この話をしているが、正直、エリナはそんなに重要だとは思わない。
「そう、なのかな。仮にエリナが俺だったらそう考えられるのかな」
思ったことを包み隠さずにそう言うと、ベルゼは目線を落として組んだ手を見た。
「親パラティシアムはね、寄生した生き物の脳に寄生するんだ。大抵はそのときにショック死するらしいんだけど、俺は死ななかった。死ねなかったというべきかな？まあ、とりあえず生きている。でもさ、脳が乗っ取られているってことはどうなんだろうね、
――俺は、本当に俺なのかな。この考えも、この悩みもベルゼビュート＝プランシーのものじゃなくて魔物のものなんじゃないのかな」
「・・・・・・」
「せめて物心ついてから寄生されていればどっちか分かったんだろうね。いや、それでも分からなかったかな。どちらにせよ1歳であった俺は物事を考えることすら知らなかったんだ」
「・・・多分だけど、それでもあたしは『あたしはあたしよ』って言うでしょうね」
だろうね、と言ってベルゼは笑った。その笑みは嬉しくもなく不機嫌でもなく悲しそうだった。
「エリナは本当に強いよ。自分の小ささをありありと見せつけられる」
それはありがとう、と謙遜もせずにエリナは返した。
「それで、ケンカの原因はそれ？強いあたしでもあの居心地の悪さには辟易しているんだけど」
エリナはかねてからの不満を口にする。ベルゼは首を横に振った。

「休憩する少し前からかな、追いはぎが俺たちを狙ってたんだ。俺はとりあえず話をつけようとしたんだけどね、ナイフを持ち出してきたから後は問答無用さ。正当防衛だね」

ベルゼは再び空を見上げた。さっきまでの自身のない雰囲気は消え去っていた。自分への猜疑心を一切持たない鋭い眼光で月を見る。

「それをロイは止めたんだ。あいつらに猶予を与える。笑っちゃうよね、罪を犯したのに罰を与えないんだ。愚かだよ」

まるで神のようじゃないか?とベルゼは言う。エリナは黙り込んで考えた。どちらが正しいと言う事ではない。その場にいればエリナは間違いなくロイについただろう。エリナが考えなければならないのは、どうしてベルゼがそんな決断をしたのか、だ。

「ベルゼは人間が嫌いなの?」

自分が強者であれば、その力は攻撃ではなく誰かを守ることに使うべきだ。心も攻撃ではなく酌量に用いるべきだ。ところがベルゼは人間なのに人間に対する酌量などという事は頭の中に一切ないのだ。ベルゼの表情から笑みが消えた。笑っていないベルゼは真剣になっているか悲しんでいる時だ。

「嫌いだね。実に嫌いだ。ディアボロスの目的は魔物を消滅させることだけど、俺は同時に人間も滅ぶべきだと思っている。それくらい嫌いだ」

「・・・・・どうして?あなたも人間なのに?」

どうかな、とベルゼはそっぽを向いた。

「例えばさ、小さい頃から親に声もかけてもらえず、むしろ憎しみばかりかけられた子供が成長した時、人を慈しむようになれると思うかい?人の愛し方を分かっていると思うかい?」

「・・・・・・」

「俺の思考が俺のものでも魔物のものでも俺はこの考え方だけは変えないよ。少し昔話をしようか・・・」

訥々と、ベルゼは語りだした。

――それは、救われなかったとある化け物の物語。

第２５話　化物ができるまで　１

タンタニア大陸中央からほんの少し西。どこにでもある辺鄙な村。主産業は農耕牧畜。これと言った特徴もなく、行き交う人は商人のみ。そんな平凡な村に災厄は襲い掛かった。

プランシー家は村の東寄りにある村の中では中流の家庭だった。贅沢をするほどではないが食事に困るほど貧乏でもない。いわゆる普通に位置する家庭だが、唯一ほかと違うのはベルゼが生まれてすぐに父親が森で獣に襲われて死んだくらいだろう。それでも祖父母が大きな土地を持っていたので生活に困ることはなかった。祖父母が農作業をする代わりに母は家事を担当する。だから母も忙しく、当時１歳だったベルゼは１人でいる事が多かった。それを苦に感じたこともない。そうはいっても、当時のことはほとんど覚えていないのだけど。

村人は全て知り合いのようなもので、犯罪なんてものは滅多に起きない。だからベルゼの母親もベルゼが庭で遊んでいても目に付くとこにいれば良いと考えて注意しなかった。

――――最初に見たときはきれいだと思った。真っ赤な色が新鮮で、小さな形がやけに興味を引いたのを覚えている。次には面白いと感じた。うねうねと動いていた。おもちゃのなかったベルゼにとって、それに近づくことに抵抗は無かった。むしろ自分のものにしたいと思ったのだ。

その赤いものをつつくと嫌そうに身体をくねらせた。その反応がまた面白かった。いつも忙しい母親や祖父母は自分には構ってくれない。だから自分に対して反応してくれるそれに好意すら覚えた。

しかし、それは突然牙をむいた。小さなベルゼの人差し指に歯を立てた。口というよりも頭が開いたというほうが近かったのかもしれ

ない。それはベルゼの皮膚を突き破り、身体を細くしてうぞうぞと侵入してきた。本能的な恐ろしさを感じて指を地面にたたきつけた。かまれた時はほとんど痛みを感じなかったのに、ポキリ、という音がしたときは激痛が走った。わけが分からなかったが、初めて感じたその激痛に泣き叫んだ。

母親が慌てて駆け寄ってくる。ベルゼは人差し指を母親に見せて泣き叫んだが、その指は骨が折れていないどころか腫れや噛み傷、あらゆる傷がなかった。気付けば痛みもどこかへ消え去ってしまっている。それでもベルゼは泣き続けた。祖父母が帰ってきてベルゼを叱るまでずっと泣き続けた。

それが何の涙だったかは覚えていない。もしかしたら脳を占領したパラティシウムが絶好の宿主を得たことに対して感涙していたのかもしれない。

それから、ベルゼの異変が発覚するまで、3年の時が過ぎた。

美人だった母親は新しい父親と結婚して、ベルゼには2つ歳下の弟ができた。新しい父親は弟にもベルゼにも同様に優しくて（もっとも狭い村だったので元から知り合いだったのだが）、ベルゼは好んで彼の傍にいた。

彼は祖父母とともに農作業に従事していた。ベルゼは彼の畑仕事を見るのが好きだった。あぜに腰掛けて、彼が鍬をおろし、汗をかくのを見ていた。

そのとき、ベルゼの前を蝶が舞った。それが何か宝物のように感じられて、つい、腰を上げて追いかけ始めた。いつも危ないから入っちゃいけないといわれている畑の中だが、そんなこと気にならなかった。

そして、ベルゼは全速力でかけて、その蝶を掴んだ。その瞬間、蝶をつかんだはずの腕がなくなった。

ボトリ、と生々しい音を立てて腕が肩から落ちる。ベルゼは驚愕した。痛みにではない。あまりにも痛すぎたせいか、脳が痛覚を拒否

していた。だから痛みにではなく、そこにあって当たり前のはずのものが突然なくなったことに驚いていた。

「うわあああああ！」

叫んだのは鍬をおろした父親だった。心の底から言えることだが、父親に非はない。悪いのは鍬をおろしている父親の背後から突然現れたベルゼの方で、彼が責任を感じることでない。しかし、今は責任の有無を言及している場合ではない。この村では医療は発達していない。故に腕の切られた少年を待っているのは出血多量と感染症による死だけだった。責任の如何を問わず、父親は人殺しになるのだ。

彼が叫んだのは自分の保身故ではないという事をベルゼは分かっていた。それほどに父親を信用していたし、今から考えても出来た人だった。しかし、どの道、彼が罪に問われることはなかった。

ベルゼは遅れて現れた痛みに叫んだ。叫んだ次に、千切れた肩に感じた違和感に喚いた。ニュルニュルと、何かが蠢いている気配がした。ベルゼは恐る恐る目線をそちらに持っていく。

「いやだあああああ！！」

あってはならないものがそこにはあった。傷口が真っ白な蛆で完全に覆われている。勇気を出して顔を上げると、落ちた腕からもウゾウゾと蛆が現れて、腕を食い始めた。

再び腕に違和感を感じた。いや、違和感というよりもむしろ恍惚感というほうが近いだろう。文字通り、失ったもの取り戻した感覚。落ちた腕が食い尽くされ、蛆が霧散するのと、ベルゼの肩から腕が生えたのは同時だった。

「あ、あ、あ、・・・」

そう声を漏らしたのはベルゼだけではなかった。目の前で腰を抜かした父親さえも驚き、恐怖した表情でベルゼを見ていた。そして、ベルゼが最も信用していた人間はベルゼに対してこう叫んだのだ。

――――化け物！と

考えてみれば、もちろん4歳までにケガをした事はある。走り回って膝をすりむいたり、虫に刺されたり、足を雑草の端で切ったり、怪我をしないわけではなかった。それでも痛みを感じたときにはすでにケガが治っていた。母親はベルゼがケガをしないことをいぶかしんでいたみたいだったが、ベルゼは自分が人とは違う特別なもののような気がして誇らしかった。

そう、確かにベルゼは人とは違った。根本的に違っていた。人などではなく、化け物だったのだ。

その日から、ベルゼにとって世界は狭くて暗い部屋だけになった。本来冬用の食料を溜めておくための地下室。ネズミなんかが入らないように頑丈な作りになっていて、化け物を閉じ込めるのにはちょうど良かった。家族はベルゼ1人を残して父親の実家に引越した。唯一地下室の扉が開くのは一日2回、地下室の蓋が開けられて袋に入った食事が投げ込まれる時だけだった。

ベルゼは独りになった。いや、体内に巣食う無数の魔物を考えれば独りじゃないのかもしれないが、そんなことはどうでも良いことだ。誰とも言葉を交わすことはできなくなった。ある日喋るのにとても苦労したので独り言で言葉を忘れないようにした。

食事は朝と夜の2回。持ってくるときは二人組で、わずかにもれ聞こえる会話で今の自分の状態を知ることができた。

例えば、世間体というものがあって、村人は皆ベルゼは病弱で表に出てこれないと思っているとか。だから死なせる訳にもいかないとか。

誰もが陰鬱そうな声色だった。何よりも母や父が自分を「化け物」と形容するのが一番堪えた。だからベルゼは死のうと思った。自殺なら確かに世間体は悪いが、これ以上ベルゼのことを表に隠さなく

て済む。
この状況下でも、ベルゼは父と母が仕方なくこうしていると思っていた。幼い頃から感じている愛情に偽りはないと思っていた。だから2人の足かせになってはいけないと思った。
死ぬために色々試した。
例えば壁に思い切り頭を打ち付けてみた。激しい痛みに悶絶した。それでも頭蓋が壊れるまで撃ちつけ続けた。ダメだった、致命傷となる事もなく、怪我をする直後に蛆が治してしまった。
例えば地下室の木の破片で動脈を傷つけた。祖父母に脈の取り方を聞いた時に、ここを切ると血がたくさん出ると聞いていた。しかし、血はほとんど出ず、細い傷はすぐに癒えてしまった。
例えば食事を半月食べなかった。5日ほど経って残した食事が腐って異臭を放つのが嫌で、身体を傷つけて蛆に食わせることを覚えた。蛆は傷を治すこと以外、ベルゼの意思に従うらしい。半月で死ねなかったので、一月に延ばした。空腹感ばかりが増すだけで身体に異常は見られなかった。もともとほんの少しの食事だったので、変わりがなかったのかもしれない。
例えば食事とともに運ばれる水を溜め込んで頭を突っ込んだ。3分ほどして、口から蛆が溢れて水を完全に飲みつくした。川や湖なら死ねるのかな、と思ったが試す方法はなかった。
ほかにもあらゆる方法を試した。その都度死を望む心がどんどん大きくなった。死ぬ方法を探すことだけがベルゼの生きる目的だった。しかし、その方法もわからぬまま、いつのまにか7年の時が経った。

弟は2つ年下なので、その時には9歳だ。というよりも弟が9歳と言ったのでベルゼは11歳だ。あるときから、弟がしばしば食事を運ぶようになった。それどころか、親の目を盗んで食事の時以外にも来るようになった。もちろん兄を哀れんでなどではなく、むしろいじめる対象としてだ。
弟はベルゼを一瞥して、自分がどれだけ愛されていて、反対に化け

物である兄はどれだけ家で嫌われているかをとつとつと語った。ベルゼもいい加減それを勘付きはじめていたので、ショックはなかった。むしろそれでも死を求め続けている自分に驚いた。弟はそんな兄の動揺を意に介すことはない。

時には友達と連れ立って石を投げてくることもあった。痛かったが、既に慣れたものだったので、何の反応もしなかった。頭蓋の割れる痛みに比べればなんてことはなかった。興が削げたのだろう、しばらくするとなくなった。

弟は兄をいじめに来ているつもりらしかったが、ベルゼからすれば弟の存在は何よりも得がたいものだった。最初に声をかけてみた時、かなり驚いた様子だったが、驚いたら負けとでも思ったのか、逃げることはなかった。

そんな弟から外の情報を聞き出す話術はすぐに身についた。最初は上手くいかなかったが、弟の神経を逆なでしないような柔らかな口調や笑顔もしだいに定着していった。

ベルゼは弟を通してでしか世界を見ることはできなかった。だからここから逃げ出すつもりもなかった。呪いで弟を脅して外に出ることはきっとできる。だからと言って何の意味があるだろう。この頃にはもう自分が化け物であることも外の世界に居場所がないことも自覚していた。

8年が経ち、ベルゼは12歳になった。そして、その邂逅は突然だった。

地下室の扉が開けられた。食事の時間ではないので（ベルゼは長年の監禁で、体内時計を発達させていた）弟かと思った。しかし、そこに現れたのは弟でも、もちろん両親でもなかった。

浅黒い肌をした体つきのいい男。一言で言うならばそうだ。無表情で、冷たい目でベルゼを見下ろした。ベルゼは釘付けにされた目線を下げることはできなかった。男はベルゼに手を伸ばした。

「ついてこい。お前に居場所を与えてやる」
その男はカルコンと名乗った。お前の力がほしい、とそういった。
ベルゼには断る理由もない。迷わずその手をとった。
その狭い世界から解放された時、ベルゼの人生は終わり始めた。

第25話　化物ができるまで　2

「――それからもう7年か。俺はたくさん殺してきたよ。命令を受けてあの村も滅ぼした。もっとも、最後まで両親は俺に気付かなかったみたいだけどね。ようするにあの人たちにとって俺はその程度のなんでもない存在だった訳だ」

ベルゼの顔には再び笑みが戻っている。その笑みは自嘲だろうか。

「・・・人間全部がそうだなんて決め付けないでよ」

エリナの両眼には涙が滲んでいた。泣くべきではないと思ったが、出てきてしまうものはしょうがない。それが涙だと認めるのが嫌で、拭うことはしなかった。だから、涙は重力にしたがってポロポロと、ボロボロと落ちていく。

ベルゼはそんなエリナを一瞥して、表情を消し、そして立ち上がった。月を見上げているのでその表情は分からない。

「虫に刺されるよ。早く戻った方がいい」

それだけ言うと、小屋へ戻っていった。1人残されたエリナはようやく涙を拭った。下げていた視線に脚が見えた。エリナは顔を上げてきっと睨む。

「・・・悪かったよ」

そこに立っていたロイはいつものように言い訳したりしない。本当に悪いと思っているからだろう。さっきまでベルゼが座っていた切り株に腰掛け、月を見上げた。

「昼に言われたんだ、俺が魔物を殺すのとあいつが人間を殺すのはおんなじだってさ」

エリナは何も言わない。ロイは月を見上げたまま続けた。

「確かにエゴではあるよ。俺は全ての魔物に対して憎悪してる。俺の故郷を奪ったのは、危害を加えたのはたった2匹だったってのにな。カルコンだってそうだ、全ての魔物に総動員して故郷を奪われ

た訳じゃない。そしてベルゼを迫害したのもほんの少しの人間。確かに違いはない。でもさ、人が死ぬとこももちろん見たくないけど、それ以上に俺はあいつが人を殺すところを見たくない」

それが我が侭だってのはわかっている。ベルゼはそうしなければ生きていけなかったのも分かる。でも、ロイは1つの希望にすがっていたかった。

「あいつは言ってたろ、カルコンにはもうついていけないって。ディアボロスには居場所はなかったって。多分、あいつは変わろうとしてるんだよ。人間としての居場所を探してるんだよ。だってあいつは人間だろ？」

エリナの目から涙は渇くことはない。ロイはそんなエリナの頭をポンポン、と叩く。いつもは「年下の癖にっ！」と怒るが、今は何も言わなかった。

「さて、明日も早いし、寝ようぜ」

ロイは立ち上がって、エリナの腕を取る。立ち上がると辺りが暗くなった。月も眠る時間らしい。

ロイが寝室に戻ると、ベルゼは既に布団をかぶって寝息をたてていた。しかし、よく聞けばここ1週間同じ部屋で聞いていた寝息と微妙に違う。なるほど、エリナが言ったことは正しかったらしい。それでもロイは声をかけることなく横になった。

久しぶりにあの日の夢を見た。すべてを失ったあの日の夢。宙を泳ぐ魔物。殺されていく知り合いたち。驚くべき告白。父親の最後の姿。

きっと俺は魔物を憎んでいる。けど根絶やしにしようとは思わない。思わないけど、たとえそれが知らない人でも魔物に襲われてほしくない。カルコンは滅ぼすしかないと言った。けど本当にそれだけしか方法はないんだろうか。

――俺はガキだ。でも大人はそんな方法しか受け入れられないの

なら、俺はガキでいい。

目を覚ますと、既にベルゼは起きていた。眠れたのか聞こうと思ったが、結局狸寝入りには気付かない振りを通すことにした。そもそも目の下のくまが返答をしている。わざわざ聞く必要はない。

「よう、女泣かせ」

開口一番、ロイはそういった。エリナが泣いていたのはロイがケンカしたせいでもあるので人のことは言えない。本来なら口にするべきでもないことだが何となく素直に話すことが出来なかった。

「ふん、小屋の影に隠れて盗み聞きしてたやつが何を偉そうに」

どうやら気付いていたらしい。だったら言えばいいのに。こっちがどんだけ後ろめたい気持ちで聞いてたのか知りもしないで。ロイは自分のことを棚に上げてそう思った。

イラっと来たので、ドロップキックを繰り出す。ベルゼは吹き飛んで壁に激突した。

「何するんだよ、いきなり！」

ベルゼは正面から突っ込んできて、拳を振りかざした。殴ってくるなら腕を掴んで投げ飛ばしてやる、と構えたが、ベルゼの姿は目の前で消えた。同時に身体がふわりと宙に浮く。足払いをきれいに決められたのだ。宙に浮いたまま、頭を掴まれて、床に叩きつけられた。小屋が壊れるんじゃないかというほど大きな音がした。かなり痛かったが、下が布団だったので助かった。間髪入れずにロイは両手で身体を起こし、両足でベルゼの頭を挟んだ。腹筋と背筋をフルに使ってベルゼの身体を布団に沈める。倒れたベルゼの上に馬乗りになった。

「ちょっと！うるさ・・・・・・」

ドアが激しく開けられ。ちょうどエリナが入ってきた。朝早くからロイがベルゼに馬乗りになっている図を凝視する。

「い・・・・・・・・・っ！！」

バタンッ！と勢いよくドアが閉められた。その向こうからエリナの

叫び声が聞こえてくる。
「ごめん！ごめんごめんごめんっ！！あたし何も見てないから！！
ロイとベルゼがそういう関係だなんて知らなくてっ！！準備できたら言ってねっ！」
どたどたと足音が遠ざかっていく。

「「・・・・・・・・・・・・っておいっ！！」」

ロイとベルゼが同時に叫んだ。ベルゼが腰を跳ね上げ、ロイは後ろに吹き飛んだ。
「おい、やべえ、やべえよ、どうしよう。今途方もない誤解をされた気がするぞ」
ロイの額から汗がダラダラと流れ落ちる。それに反して、ベルゼは涼しい顔をしている。
「うん、まあいいんじゃないの？」
「・・・・・うわあ、大人」
じゃあさっきの突っ込みはなんだったのか、ノリだろうか。
「頼む、一緒に弁解してくれ！！」
「そうだなあ、でもドロップキック痛かったしなあ。どうしよっかなあ」
「すいませんでしたっ！！」
ロイは間髪いれず土下座した。
「うん、じゃあいいよ」
大人だ、とロイは感動した。さっきまでとはうってかわって、ベルゼが神に見えた。後光も射して見える。
「なあ、ロイ」
自分の分の荷物をまとめて、背負いながらベルゼがロイに話しかけた。
「昨日確かにエリナを泣かしたのは俺なんだよね。でもさ、脅してとかじゃなくて、純粋に俺のために泣いてくれた人は今までいなか

ったんだ」
それをロイに言った理由はなんだろうか。ベルゼはそれを告げずに部屋を出て行った。ロイも重い身体を何とか起こして荷物をまとめる。ようやく立ち上がり、ベルゼの分も布団をたたんで軽く部屋を掃除し、後にした。エリナにどう弁解したものか悩み悩んで結局答えは出なかった。
しかし、談話室に出ると、エリナとベルゼは何事もなかったかのように会話していた。ロイは目を疑うが、エリナはロイを見て、微笑んだ。
「良いんじゃないかしら、そういう趣味があったって」
「・・・・・・・・・はあっ！？」
ベルゼを睨む。外を見ながら口笛なんぞ吹いていた。
「たばかったなあ！！」
自然と両手はベルゼの首に伸びていた。人間を憎む気持ち。ベルゼはいつもこんな感じなのかと思った。だとしたらベルゼのことを一概に否定できない。
しだいにベルゼの力が抜けていく。我に返ると、エリナがロイを必死に引き剥がそうとしていた。
「冗談よ、ロイ。冗談だから！」
はっとして、ベルゼの首から手を離す。そこにはロイの指のあとがくっきりと残されていた。
「こらえろ。違う、敵じゃない」
ベルゼはゴホゴホ言いながらぶつぶつと呟いた。首筋からは蛆が現れなかったものの、指のあとが消えていく。内出血は皮膚下で回復が行われるのだろう。
「危ないよ、ロイ。俺の経験から言うと、オートで攻撃が起こるまで後2秒だね。こいつらは怖いよ。敵を食い尽くすまで終わらないから」
そう考えるとぞっとした。しかし、それでも殺意は押さえられなかったのだ。

「いやあ、俺たちの悪ふざけも過ぎたかな。本気で首絞められるとは思わなかったけど・・・。とにかく、エリナ。俺の言ったとおり、男はケンカすれば、大抵仲直りできるもんだよ」
ロイは次にエリナを睨む。昨晩のエリナよろしく、ロイの目には涙が浮かんでいた。それが何を意味するのか、自分ですらわからない。
「ごめんってば。昨日の盗み聞きの罰にしようかなって話をしてたのよ」
「ふん」とロイは鼻を鳴らした。それを言われては返す言葉もないが、簡単にハイそうですかとはいかない。さっさと小屋を出て歩き始めた。エリナとベルゼは顔を見合わせ、笑った。拗ねているロイなどなかなか見れるものではない。2人も荷物を持って小屋から出て行く。
「あ、ロイ～、そっちじゃないよー。こっちだよー」
道を間違えたらしい。
「・・・・・」
ロイは黙ったまま足の向きを変えた。どうやら今日ロイの運勢はかなり悪いようだ。

第２６話　ティグレー　１

フェルメロンをでて４日目。３人はまだ山越えをしていた。
前日の午後から山を下り始めた。行く手には海が広がっている。
「凄いきれいだね。ロイもああいうところで育ったんだよね？」
「ああ、ただ南よりも青いな。どうしてだろう」
言ったものの、本当にそうだったのか確信が持てない。１年以上の海との隔絶はロイの記憶を曖昧なものにしていた。ただ、眼前に広がる海の青さに感動したのは本当だ。
ゴールが見えてきたので、自然と３人の足は早くなった。それに加えて下りなので、ベルゼの足が遅れることもなくなった。どうやらベルゼの身体は筋肉の断絶も治してしまうらしい。つまり、筋肉痛がないということだ。ロイやエリナは昨日あたりから足が痛くなってきたので羨ましい限りだ。
「ははっ、そんな羨ましがっても変わってあげないよ」
ベルゼは笑ってそういった。自嘲じゃなく、ただの冗談でそう言ったのだ。
「俺はその代わり、人に比べて超回復が極端に少ないからね、筋肉が付きにくいのさ。今でもかなり細いけど、ここまでつけるのに苦労したよ」
筋肉がつく、という事は、一度筋肉を限界まで痛めつけなければならない。しかし、１０数秒でそれが治ってしまうわけだから、その１０数秒間で身体がどれだけ反応するかと考えると、絶望的な数字になる。
「本当にこいつらは融通が利かなくて困るよ。我が侭な彼女みたいだね」
ベルゼが冗談めかしてそう言って、ロイとエリナが吹き出した。いつもべったりと引っ付いて離れない。なるほど、確かに彼女みたい

だ。
そんな余裕も見せながら歩き続けた。太陽が頂点に昇る頃には傾斜が緩やかになって言って、ついに港町、ティグレーに到着した。

ジラークとタンタニア大陸を結ぶ港はこのティグレーだけである。ジラークは開発、発明の中枢なので、必然的にティグレーも発展し、規模が大きい。ケムトと同程度かそれ以上の大きさである。町中石畳で、水路がめぐらされており、街の整備にはかなり力を入れているようだ。聞けば、観光地としても有名らしい。ただ、ホーエンス山脈を挟んでいる分、南よりも西からの客の方が多いようだが。
「すごい！すごいすごい、すごーい！！」
エリナははしゃいでいた。ドートリアで育ってきた彼女にとって、ここまで活気のある町どころか、水路を見るのも初めてだろう。下山の疲れもどこ吹く風、いろんな場所を見ようと駆け回っていた。
「ねえ、せっかくだからちょっと観光していかない？」
バカ言うな、とロイとベルゼが口をそろえて言う。彼ら2人の目的地はジラークだ。もっとも、エリナの目的は別にそうではないので、そこに考え方の相違があるのかもしれないが。
嫌がるエリナを引きずるようにロイとベルゼは港を目指した。聞けば、港からバーカギルへの定期便が出ているらしい。

「申し訳ありません。今定期便は欠航となっておりまして」
「・・・・・やった」
沈黙の中にエリナの声が聞こえてきたので、睨んで黙らせた。
「最近航路に魔物が出るようになりまして、もう3ヶ月くらいですか、定期便は一便も出ておりません」
「魔物・・・」
「しかしご安心下さい。2週間後には討伐隊が発つ手はずになっております。討伐を終え、船の整備が済めば1ヵ月後には復帰できる

でしょう」
「1ヵ月!?」
冗談じゃない。今からまた1ヵ月も待てというのか。こっちとしては今すぐにでも行きたいのに。ロイはそう思って受付の女性を問い詰めた。
「しかし、無理なものは無理なのです。こちらとしてもこれがギリギリでして、流石にこれ以上早めることには・・・」
さっきまで黙って聞いていたベルゼがすっと手を挙げた。
「もし、俺達が討伐隊に参加したら2週間でバーカギルまでいけますか?」
説明をしていた女性は怪訝そうな視線を3人に向けた。
「大丈夫。あたしたちは軍人なの。故あって今ジラークを目指していて、できるだけ急ぎたいんだけど」
エリナが口を挟んだ。やはり罪悪感に負けたのだろう。
「・・・わかりました。討伐隊の方々と相談しあって決めましょう。討伐が成功した暁には船はそのままバーカギルに行きますから確かにその方法ならば2週間で行くことが可能です。では討伐隊に参加していただくことが決定しましたら遣いを出しますので、よろしければ泊まっている宿の名前と連絡先を書いて下さい」
そう言われて3人は互いの顔を見合わせた。もちろんティグレーに着いてそのままここに直行(正確にはかなり迷ったので直行ではないが)したので、まだ宿は取っていない。
「そうですか、こちらで探すことも可能ですが」
ちなみにここは役所である。定期券の発行は前まで港でやっていたらしいが、中断されてから役所の窓口で説明がなされている。だからここまでたどり着くのに時間がかかったわけだが、役所でそこまでやってくれるとは流石に発展している街は違うとロイは感心した。
「できるだけ安いところを2部屋取りたいのですが」
思わぬ足止めを喰らってしまったので金が足りない。討伐隊に参加すれば船賃を払わなくても済むが、その分を差し置いても足りなか

った。
「ティグレーは観光地ですから他の街に比べて宿は割高です。しかし、仕事は探せばたくさんありますよ」
要するに働けということらしい。
「それなら・・・ここですね。郊外ですが、1泊1食付です」
女性がベルゼに紙を手渡した。ベルゼがそれをロイに横流しして、ロイは了承する。
「それでは、滞在をお楽しみ下さい」
最後に女性の営業スマイルを見て、3人は役所を後にした。
「・・・なんか、自分が田舎者だって感じちゃったわ」
「へえ、俺は別に感じなかったけどな」
ロイは見栄を張って言う。本当は言葉がグザグザと胸に刺さっていたのだが。
「ロイは麻痺してるのよ」
エリナはどことなく落ち込んでいるふうだ。確かにドートリアもかなり発展しているが、ここに比べたら大したことないだろう。ケムトには商人連合があるが、ここまで行政がしっかりしている訳ではない。
「とりあえず短期の仕事を探さなきゃね。どうする?せっかくなら3人一緒の職場?」
ロイは少し考えて頷いたが、ベルゼは拒否した。
「俺は当てがあるから」
「そんなこと言ってサボるつもりじゃないの~?」
まさか、と肩をすくめた。
「そんなことしてエリナの雷落とされちゃ堪らないしね。大丈夫、確かな当てだから」

宿はフェルメロンで泊まったような簡素なところでなく、窓ガラスも使われている豪華なところだった。役所で紹介してもらったと言うと、すぐに部屋を案内してくれた。ふかふかのベッドがある大き

な部屋に通され、一行は困惑した。
「いいのかな、こんな贅沢して」
エリナと別れてすぐ、いきなりベッドに横になり、ベルゼが言った。
ロイとエリナはすぐに仕事を探しに行く。今はエリナの着替え待ちだ。流石に登山者の格好で仕事を探せはしないだろう。
「言動と行動があってないぞ」
ベルゼはゴロゴロと贅沢を享受していた。
「いいんじゃないか。たまには楽しんだって」
ロイは言った。
「そういうロイだって言うほど楽しそうに見えないよ。どことなく落ち込んでいるようにも見える」
ロイの表情がさっと陰った。ぼりぼりと頭をかく。
「やっぱ表情に出ちまうか。どうにも海と魔物と聞くとな」
「ああ、なるほど・・・。大丈夫だよ。強くなったんだろ？」
ベルゼがロイの方を見ずに言った。ロイもベルゼを見ずにガラス越しに外を見た。
「まーな」
もう、あの時とは違う。魔物から逃げて故郷が滅ぶのを黙ってみているしかなかったあの頃の自分じゃない。今の俺は戦える。そう自分に言い聞かせ、気持ちを奮い立たせた。
「よし！じゃあ行ってくる！！」
ロイは大またで部屋から出て行った。後ろからベルゼがエールを送った。
「おい、エリナ、まだか！？」
勢い勇んでドアを開けてしまった。鍵つきのドアだが、うっかりかけるのを忘れたらしい。
「きゃあああああ！！」
エリナが周囲の物を手当たりしだいに投げつけた。物が外に出る前にロイはドアを閉めたので助かった。しかし、次にこのドアが開けられたときがロイの最期かもしれない。

「――所長、先ほどの3人の件なのですが。軍人だとかで討伐隊への参加を希望してきたのですが」
ティグレーの役場。さっきまで窓口にいた女性は中に戻り、高齢の男に声をかけた。役場の中にはその2人ともう1人、デスクワークをしている男の3人しかいない。所長と呼ばれた男は難しい顔をして言った。
「うむ、どうしたものか・・・。確かに向こうも人手不足だと聞いているしな」
「なんというか・・・かなり田舎者の感じでしたが」
「この街に比べたら世界のほとんどは田舎だろう。確かに最近物騒だから旅をしているというだけで少しは腕がたつのだろうが・・・。しかし魔物となると」
「やはり断りましょうか？」
「いや、一応向こうに手紙を出しておこう。人数は多いほうが良いからな」
「わかりました。えっと、討伐を申し出てくれたあの組織、なんていいましたっけ」
「ああ、たしか・・・ディアボロスと言ったかな」

第26話　ティグレー　2

「おい、ロイ。早くしろ。店開いちまうぞ」
「はいっす！」
狭い店内を駆けずり回っているロイの両手には食材が抱えられていた。これをキッチンに持っていき、次にそこで生ごみを集めて店の裏のバケツの中に入れなければならない。
「おう、先に炭の補充してくれ」
「はい」
「おい、ロイ！ほこりが立つだろうが。あんまりどたどた走るんじゃねえよ」
「すいません」
といいつつも急がない訳にはいかない。まだ3日目だが、少し気を抜いたらどうなるかは2日で学んだ。
「ルシカもエリナも今日も頼むよ」
汗だくになって炭を運んでいるロイの耳ににはーい、という元気のいい声が聞こえた。ロイは誰にも聞こえないように舌打ちをする。レストラン・ヴォルフォール。ティグレーについた初日に雇われ、今日で3日目だ。
「いやあ、ルシカもエリナも今日もかわいいなあ。ガンガンお客さんを呼び込んでくれよ」
雇われた、というよりも勧誘されたに近い。「かわいいなあ、どう、うちで働いてみない？」などと声をかけられ、知らないおじさんについていったらこの店だった。店長はエリナだけ雇いたかったみたいだが、エリナが頼み込んでロイも雇ってもらっている。もちろんウェイターなどではなく、雑用である。
「・・・エロじじい」
重たい生ごみを出しにいき、ようやく戻ってきた時にぼそりと呟い

た。

「なんか言ったか！？」

「なんでもないっす」

ここに来て被雇用者の地位の低さを思い知らされた。ミスをしたり店長に逆らったりすると給料が引かれる。明らかにロイの方が仕事量が多いのに、エリナと給料は同じ。いや、ロイは何度か給料を減らされているので、確実にエリナのほうが上だ。

多いときには数十人入るかなり大きめのレストランなのに、スタッフの数は少ない。店長がいて、キッチンで働いているのが2人。そしてウェイトレスがルシカとエリナの2人。雑用ロイ1人。もともとティグレーは旅行客は多いが働き手が少ないようだ。さらに、店長があれなので、とにかく辞めていく人が多いらしい。今でも死ぬほど忙しいのに、ロイたちが来る前もちゃんと営業できていたのだと言うから驚きだ。

「あんな店長だけど仕事だけはできるからな」

キッチンの1人がそんなことを言っていた。なるほど、確かにてきぱきと仕事をこなし、客に対する愛想もいい。更に付け加えておけば、エリナとルシカに対しては更に愛想がいいが、キッチン2人とロイに対してはかなり悪い。

「ロイ、布巾補充しといて」

「はいよ」

客が使い終わった後の布巾はきれいに洗って乾かす。これは次の日に使うもので、既に乾いている布巾を一つ一つ水で濡らして絞り、お盆に載せた。山と積んで、ルシカに渡した。

ルシカはもうここで2年近く働いているらしい。茶色い髪の人形みたいな顔立ちで、店長のお気に入りの1人だ。つり目が少し怖い印象を与えるが、本人はいたって物腰柔らかだ。

「ありがとう。店長が呼んでたよ」

わかった、と頷いて溜息をついた。店長のところへ行くと、メモを渡された。

「今日は時に客が多いから食材の補充に行って来い。寄り道するなよ」
無論ロイは寄り道などしたことない。道に迷ったことはあるが。しかしロイは信用ないので、店長は寄り道したと思い込んでいるようだ。もちろん滅俸。
わかってますよ、と投げかけて金を受け取り、店に向かう。肉屋は近いのだが、八百屋は結構遠い。ロイは店の裏から出て、少し駆け足で向かった。

流石に一度迷った道を二度迷ったりしないので、かなり早く戻ることができた。裏口のドアを開けると、ちょうど店長と初老の男性が話しているところだった。
「そうなんだよ、それでうちに来るはずの商品も遅れちゃっててさ。それはいいんだけど、傷がねぇ」
「ああ、なるほど。お宅の商品はデリケートですからねぇ。うちも一応頼んではいるが、盗まれてなければ問題ないですよ」
初老の男性は隣の雑貨店を経営している。何の話をしているのかと聞き耳を立てていると店長に見つかった。
「おう、ロイ。バルヘルさんについていって手伝って来い」
「なにをっすか？」
買ってきたものを台に置きながら尋ねた。
「街の外で馬車が横転したってよ。人助けだ」
「それって仕事関係ないんじゃ・・・」
「ばっかやろう！」
つい怒鳴った店長だったが、店の方をちらと見た。そして声を潜めたが、脅すかのような口調だった。
「困った時はお互い様だろうが！いいからつべこべ言わずに行って来い！」
「それは助かるな。うちは夫婦でやってるから若い手が足りなくて

ね。さあ、行こうか」
ロイは抵抗する間もなく、雇用者の権力で連行された。その分の給料が出るのかだけが心配だった。

「ただいま・・・」
馬車はかなりの大きさで、車輪が壊れて横転していた。まず、荷物を外に出し（もちろん誰かに盗まれないように警備も必要だ）、次いで車輪を直して馬車を起こし、さらにまた荷を詰めなおさなければならなかった。御者は怪我して運ばれていたので行動を起こしたのは色々な店からロイと同じようにボランティアを買って出た人だった。全員無償でよく来るな、と気になったが、「困った時はお互い様」だそうだ。この辺の考え方はケムトの商人たちと通じるところがあるのかもしれない。
そして最も若く、最も働かされたロイが疲れて帰ってきたときには既に日が暮れていた。日暮れとともに客足が遠のくので、もう店は閉まっている。
「おう、ご苦労だったな」
「これ、うちで注文してたもんです」
さっき釣りを渡すのを忘れていたので、それをそのまま流用した。ちなみに荷を取り仕切っている仲買人も当然来ていて、多くの人が街の外で売り買いしていた。釣りだけではとても足りなかったが、まけてくれた。報酬だそうだ。
「それ俺がやっときますよ」
店長はごみをまとめている。本来はロイの仕事だ。
「いい。今賄いつくってるから大人しく座っとけ」
ここで反抗する意味もないので、大人しくしたがって店のほうに出た。キッチンの2人が賄いを作っていて、そこにいたのはルシカとエリナだ。
「お疲れ様」

2人が声をそろえて言った。ロイは2人の正面に腰掛けた。
「今日は大変だったよ。お客さんいっぱい来てさ」
「・・・そいつは悪かったな」
言葉尻に非難を感じたので一応謝っておく。やっぱりこれも被雇用者の弱みだ。
「ほんとにエリナが来てくれて助かってるよ。今まであたし一人だったからどうしても回転が悪かったし」
「こんなに要領悪いのに？」
ロイが言って、エリナがテーブルの下にあるロイのむこうずねを蹴り飛ばした。
「だおおおお！」
悶絶するロイを見てルシカは笑う。この光景を見て笑うのかとぞっとするロイ。もちろんルシカはムキになるエリナが面白くて笑ったのだけど。
「でも2週間だけなのよね。それからまた大変になるわ」
頬に手を当てて憂鬱げな顔をした。その表情にはどことなく品があった。ロイはようやく脛の痛みが和らいだので、椅子に座りなおした。
「待たせた」
店長がやってきてすぐに賄が出てくる。これを食べた後に全員で店の掃除をして、そうしたら仕事が終わりだ。

「今日も疲れた～」
ホテルに戻る道で、エリナは大きく伸びをした。疲れた、と言いながらも随分楽しそうだ。
「まあね、色々新鮮だし、みんな親切だし」
「下心があるって言うんだよ、ああいうのは」
「え、なに？羨ましいの？」
「誰がっ！」

ロイは足を速め、エリナはその反応を見て笑いながら後を追った。
「観光よりは退屈しないかな、って思うわ」
確かにな、とロイは今日一日の仕事を思い出す。とてもじゃないが退屈している暇はない。
強い風が吹いて、2人の髪をなびかせた。潮をはらんだ風がロイの鼻腔をつく。懐かしさを感じるが、ここが自分の故郷と違うことも実感してしまう。
親切じゃないとは言わない。それでも一線引いてしまう自分に気づいている。素直に心を開けないことも分かっている。
――それでもいいんだ。
ロイは隣にいるエリナの顔を見た。
「なに？」
「なんでもない。ベルゼのやつは頑張ってるかな」
ホテルはすぐそこの角を曲がった先だ。
「お帰り」
ホテルのロビーでちょうどベルゼに出くわした。調理用の真っ白な格好だ。
「相変わらず似合わないな」
ロイがそう軽口を叩くと、ベルゼはそうか、と破顔した。
「今日はもう上がりなのか？」
「ああ。やっぱり活気がある街は違うね。かなり忙しい」
俺たちもだよ、とロイ。
ベルゼの言っていた当てとはホテルでコックとして雇われることだったらしい。こんな特技を隠していたとはびっくりだ。
「2人にも食べさせてあげたいけど、そっちで賄い料理が出るなら難しいかな」
「いいさ。今度ゆっくりいただくから」
着替えに行くベルゼと別れて部屋に戻った。窓を開けて夜風を入れる。夏は完全に過ぎ去り、すっかり秋の風だ。眼前に広がる民家はところどころ明かりがついている。なるほど、確かに裕福な街だ。

しかし、遠くの方は明かり1つ点っていない。色々な場所を旅をしていると、その街のいい面も悪い面も見えてしまう。この街はいい面が大きくて、その分悪い面も大きい。しばらく黙った後、ロイは窓を閉めた。

第27話　シルビア／リリー　1

ヴォルフォールで働き始めて1週間が経った。仕事にも慣れてきて、怒鳴られることも少なくなった。同僚ともそこそこ親しくなり、3日前にエリナが言っていた言葉が身にしみて分かってくる。ようするにロイの社交性はエリナの半分という事で、少し自分にがっかりした。ここにいるのもあと1週間。そうしたら半年以上もの旅が一応一段落する。ただ、それからどうしようなどと考えている暇はなかった。

「おい、ロイ。買出しだ！急げよ」

「はい！」

店長からメモと金を受け取って店まで走る。頻繁に買いに行くので、店の人にも顔を覚えられ、声をかけられた。ほんの少しだけ話をして、両手いっぱいに荷物を抱えて帰路に着いた。

「ねえ、あなた。少し付き合ってくださらない？」

帰り道でそんな言葉が聞こえた。女性が暇な男を誘っているのだろうか。まあなんにせよ自分には関係ない話だ。なんせ今とてつもなく忙しいのだから。

「あなた、ねえ、ちょっと！」

どうやらその女性は無視されているらしい。面白そうでつい目を向けたくなったが、失礼だし、時間がなかったので含み笑いだけして足を速めた。

「ねえってば！」

ぐいっ、と腕が引っ張られた。同時に左腕に何か軟らかいものが当たったが、そんなことよりも、左手に抱えていた紙袋の中身が地面に落ちてしまったことのほうが一大事だ。果物が道路を転がっていく。

ロイは犯人の顔を見る前に落ちたものを素早く拾う。この街は道路

の脇に水路がめぐらされているので、ほうっておくと転がり落ちてしまう。落ちてしまえばもう使えないわけで、そうなると店長の雷が落ちるわけだ。考えるよりも先に身体が動いてしまったのは被雇用者としての悲しい性だった。

「はい、どうぞ」

目の前に赤い林檎が差し出された。ロイは礼を言って受け取り、紙袋の中に放り込んで今度は絶対に落ちないように口を何度も折った。

そこでようやく顔を上げた。

赤みがかった髪が風でなびく。にこりと笑った表情に一瞬見とれてしまったことは否定できない。そして豊満な胸に目が行ってしまったのも男としてあながち間違いではないだろう。

「ああ、・・・すまない」

年齢は２０前後といったところだろうか。快活な、というよりも美しい笑みだ。一瞬言葉を忘れ、慌てて礼を言った。しかし、礼を言う筋合いはないことに気付いた。立ち上がると、女性も立ち上がった。

「いいえ、わたくしにも非がありました。無視されるとは思っておりませんでしたけど」

あたりをキョロキョロ見渡したが、いるのは通行人ばかりでさっきロイが思い描いたような暇な男はいなかった。誰も彼も忙しそうに歩いている。多少この女性に通行人の目が行っているのは彼らの男としての本能というやつなのだろうが。

女性はかなり上品な喋り方だ。裕福な家柄なのだろうか。どことなくシルクを思い出させた。シルクには目の前の女性のような清楚さは皆無だったが、彼女のどことなく上品な振る舞いが似ていたのかもしれない。

「その件に関して謝罪はないのですか？」

女性は不満そうに口を尖らせた。随分ずうずうしい物言いだが、それが本心でないことは声色で分かる。その程度にはロイも世間擦れしているつもりだ。

「・・・ねえよ。悪いけど急いでるんだ」
そう言ってロイは踵を返した。どう考えてもロイに非はない。そんなことよりも余計に時間を食って店長に怒られる方が一大事だ。ロイは早足で歩き出した。すると、女性が後ろからついて来た。
「いいんですの？こんな美女からの誘いを蹴って」
自分のことを美女と形容する。やはりずうずうしい物言いだが、そう言うだけの器量は認めざるを得ない。
「ああ、まったく残念だよ。でもそんなことより俺は忙しいんだ。ついてこないでくれるか」
足を進めたままロイは言う。感情のまったくこもっていない物言いに女性は何か言い返そうとしたが、ロイが手を挙げて制した。
「ここからは関係者以外立ち入り禁止だ」
そう言って路地に入り、裏口から店に入る。店長に商品と釣りを渡した。店長は何も言わずそれを受け取り、中身と釣りを確認して、中身をキッチンの持っていった。ロイはさっそく次の仕事に取り掛かった。
それからほんの数分。食器を洗っていた時、店長に怒鳴られた。驚きのあまり食器が手から滑り落ちて割れた。こんなに怒る店長を見ることはそうそうなかったので、何かしでかしたかと色々思い返してみたが、怒鳴られる前は食器も割ってないし、今日は客ともめ事も起こしていない。もしかしたら落とした商品が傷ついていたのかもしれないが、それでもこんなに怒ることはないだろう。
「ばかやろう！あんな美人待たしてんじゃねぇ！！」
はあ、とロイは聞き返した。人を待たせている事にもましてやそれが美人であることにも心当たりはない。店長はロイの首根っこを掴んで、店の一角を指差した。さっきの女性が座っていた。こちらに気付き、輝かんばかりの笑顔で手を振っている。ロイは何かの見間違いではないかと数回瞬きをした。

「ちくしょう。あんな美人と仲良くなりやがって。俺だってあと10年若けりゃあ・・・」
「いえ、人違いですよ。こっちに向かって手を振ってるって事は店長目当てなんじゃないですか？」
「ばかやろう。俺だってそう思って声をかけた！そしたらお前の特徴をずらずら並べて約束があるって言うじゃねえか」
思って声をかけてんじゃねえよ、とロイは心の中だけで突っ込んだ。
「どこで知り合いやがった。今度紹介しやがれ！・・・いいから、行って来い。美人は待たせるもんじゃねえ」
「いや、でも仕事が・・・」
ぎろり、と店長が睨んだ。
「てめえは仕事と美人とどっちが大事なんだ！？」
「仕事っす！」
断言したロイの頬に張り手が襲いかかった。
「バカヤロー！」
突っ込む暇すら与えない。
「仕事はいつでもできるけど美人とは今しか会えないんだぞ！」
あまりにも感情的になっている店長。昔そういう事で後悔したことがあるのだろうか。
「行け、行け。てめえの仕事なんざ俺がやっといてやる。その代わり、今度紹介しろよ」
わかりましたよ、とロイは頭を振って外に出た。出る寸前に「わかりましたけど紹介はしません」と言ったら店長の激怒の声が降ったが、逃げてしまえばこっちのもんだ。
表側に回って店に入る。裏での店長の怒鳴り声が筒抜けだったのだろう、客はざわざわして店の奥の方を見ていた。そしてエリナはロイを睨んでいた。ロイは大げさに肩をすくめて見せた。
「あ、来ましたわね。待ちましたわ」
先ほどの女性が手招きした。コーヒーをすすっている。聞けば店長がおごってくれたらしい。本当に、昔後悔したことがあるのかもし

れない。今度探りを入れてみよう。
「どういうつもりだ。こんなところまで押しかけてきて。言っとくけど俺はあんたの生き別れた弟とかじゃないからな」
言いながらロイは女性の向かいの席に腰掛ける。
「わたくしにも生き別れた弟などおりませんわ」
「だったらなんだよ。はぁ、職場は追い出されるし、意味もなくひっぱたかれるし、あんたは俺を破滅させに来たのか」
「そんなのまだまだ序の口ですわ」
「本当にそのつもりなのか!?」
つい突っ込んでしまった。不覚、と目元を押さえた。
「冗談ですわ。わたくしはあなたに幸せを届けに来たのです。そう、わたくしは幸福の天使なのです」
「・・・・・もういい。で、何の用だ?用がないなら帰ってほしいんだが。あんたが帰らないと俺が仕事に戻れない」
それこそ店長が許してくれないだろう。本当に困った店長だ。対して女性はむくれ顔でロイを見た。
「まあ、ひどい事を言うのですね。こんな美人を捕まえて帰れだなんて」
「俺の美人の基準は心のきれいなやつなんだ。できれば俺と関わりがないほうが良いな。関わりがあるとどうしても粗ってもんが見えちまうから。粗が見えちまうと美人というのは難しい。というわけで、あんたが美人なら即刻帰ることをお勧めする」
ロイは店の外を指差した。
すると女性はむくれたまま身を乗り出してきた。テーブルに載った胸に目が行くのは仕方がないのかもしれない。さっきからことあるごとに胸に目が言っている自分に気づく。自分はそんな思春期なキャラだったのかと頬をはたいた。さっき店長に殴られたので痛かった。女性はロイの突然の動作に首を傾げたが、ややあって口を開いた。
「わたくしのハンサムな男の基準はレディに優しくするものですわ。

それにわたくしはあんたではありません。シルビア、という名前があります」
にこりと微笑む女性――シルビア。ロイは天井を見上げて溜息をついた。
「なんか用があるんだろう?さっさと済ませてくれ。これでも俺は忙しいんだ」
ロイが諦めてそう言うと、シルビアはにこりと微笑んだ。確かに天使の微笑といえなくもないのかもしれない。
「本当に出し惜しみをする殿方ですわ。まあ、それも重畳。さあ、行きましょうか」
そう言ってロイの手首を掴み、立ち上がった。
「行くって、どこへ?」
細い指だった。その指に操られているのが癪で、自分で立ち上がる。いや、美人に触れられていやというほどロイは男でなくないのだが。
「ほんの少し現実離れしたところですわ。大丈夫、あなたも十分楽しめることを保障いたします」
首をかしげるロイににこりと微笑み、ロイの手首を掴んだまま店を出る。ロイが後ろを振り返ると、不機嫌そうな顔でこちらを見ていたエリナがそっぽを向いた。

第27話　シルビア／リリー　2

「いい天気ですわね。こういう日はゆっくりと散歩したいものですわ」
「・・・いや、いいからさっさと済ませてくれ」
シルビアはむっと膨れて歩きながら振り返った。
「先ほどから随分と陰気ですわね。そんなことでは人生を楽しめませんよ。というよりもわたくしが楽しめません」
「人生は相応に楽しむのが良いんだよ。どうするんだ、もし俺が楽しみすぎて周りの人が本当は自分は楽しんでないんじゃ、とか考えたら」
「そういうセリフは少しでも楽しんでる素振りを・・・ひゃぅ！」
ロイの方を向きながら歩いていたので、店先に吊ってあった看板に頭をぶつけた。涙目で頭をさすっている。
「あはは、やはり前を見て歩かないと・・・」
ロイの方を見てそう言いながらも足を進めていた。そして、道の端で足を滑らせる。がし、とロイがシルビアの腕を掴んだ。そのままぐいっと引っ張り挙げる。
「あぶな・・・」
シルビアは道路に沿って敷かれている水路に落ちる寸前だった。身体が３０度くらい傾いていたので、ロイが助けなければ間違いなく今頃ずぶ濡れになっていただろう。
「あ、ありがとうございます」
自分の両足でちゃんと立っているのを見届けて、ロイは掴んでいた手首を離した。細く白い手首にロイの手のあとが残っている。少し強く握りすぎたかと思ったが、落ちるよりは良いだろう。シルビアは胸に右手を当てて、息を吐いた。流石に今度は歩きながらではな

い。
「危ないところでした。・・・少し舞い上がっているみたいですわ」
「だといいけどな。どっちかというと天然に見えたが」
「そんなことありませんわ。これでもわたくし、普段はしっかり者で通っておりますの」
多分嘘だ。何となくそんな気がする。
「それはそうと、あなたの名前を聞いておりませんわ」
「あー、そうだっけ?店長が怒鳴ってたろ?」
「あなたの名前をあなたの口から聞いておりませんわ」
「めんどくさいんだな」
それは目的と過程がごちゃごちゃになってないかとロイは首をかしげた。過程が目的、みたいな。まあ、いい。
「ロイ。ロイ=クレイスだ」
「そうですか。わたくしはシルビアです」
「・・・知ってる」
「なぜですかっ!?」
本気で驚いている。自己紹介をしたことも忘れたらしい。ずっと話をしていると疲れそうだったので、ロイは足を進めた。もちろん横を歩くシルビアに注意を向けるのを忘れない。ほっとくとまた転ぶかもしれない。
「ロイ、あなたはこの辺りの人ではないのでしょう?」
顔に図星、と書いてあったのだろう、シルビアは得意げな顔をした。
「服装がどことなく違いますからね。しかし髪や肌の色はわたくしと同じですわね。北部の出身なのですか?」
「ああ、いや。南の海から来た」
ロイが表情も変えずにそういうと、シルビアは吹き出した。ロイは首かしげる。
「ふふふ、ご冗談を。しかし、冗談の効く殿方はわたくしの好みですわ」
「・・・・・・」

故郷を全否定された。そんなにありえないことじゃないと思うのだが。

「まいっか」

と流してしまうロイもロイだ。

「でも目の色は少し違いますわね。ところで、いくつですか？わたくしよりは年下とお見受けしますが」

「・・・あれ？」

ロイは指折り数え始めた。シルビアは信じられないという顔をする。シルビアの顔にむくれ以外の負の感情が浮かぶのはこれが始めてじゃないだろうか。

「・・・もうすぐ17。うわっ、もう17だ！信じらんねぇ」

「・・・わたくしの方こそ信じられませんわ」

しかしロイにも事情というやつがある。ボンゴを出てから日を数えるような生活をしていないので仕方ないことかもしれない。

「・・・わかってるよ。女性に年齢を聞くような無粋なことはしないさ」

はらはらと落ち着かなくなり始めたシルビアにロイが言う。

「あら、別に構いませんのよ。隠すことでもないですし」

その割には安心しきった顔だ。

やれやれ、じゃあ年齢のことを話題に上げなきゃ良いのに。ロイはシルビアを見ながらそう思った。

「ここですわ」

街の中心近くにその大きな建物はあった。ロイにはなんなのかわからなかったが、かなり金のかけられている建造物だという事は一瞥してわかる。

「ティグレーの誇る大博物館ですわ」

「博物館、ねぇ」

それにしてもかなりの大きさだ。外をぐるりと回るだけでも1時間

近くかかるだろう。
「さあ、男の甲斐性を見せて下さい」
華のように微笑むシルビアだった。ロイは諦めて渋々二人分の入場料を払う。公立なので、そこまで高くない。手持ちの金で何とかなった。
「まさか入場料のために俺に声かけたんじゃないだろうな」
正面から入ると、赤いカーペットが敷き詰められていた。シルビアはすたすたと歩いていく。振り返って驚いた顔でロイを見た。
「いえいえ、まさか。わたくしがそんな女に見えますか？」
「時間が経つほどにどんな女か分からなくなってくるよ」
「確かに、女はたくさんの顔を持っているものですしね。いえ、今はそんなことを論じる必要はありません。１人では入りづらいところですし、こういうものは１人で見ていても楽しくないでしょう？」
ロイは大きく溜息をつく。
「つまり俺は、あんたに巻き込まれたわけか」
「そういう言い方はよくありません。今は純粋に楽しむべきですわ。人生には往々にして楽しむべき時があるのです」
そう言って奥へと歩いていく。ロイはもう一度溜息をついてゆっくりとその後をついていく。
正直言って、博物館などに興味はなかった。

第27話　シルビア／リリー　3

「これが見たかったのです」
ありとあらゆる美術品に驚嘆の意を表したシルビアだが、ある1つの美術品にはそれ以上に見入っていた。硝子細工の器だ。
「素晴らしいですわ。実に素晴らしいですわ。硝子の発達と歴史を感じさせながらも美術品としての美しさを兼ね備えているなんて。見て下さい、ロイ、この緻密な細工を！」
いい加減ロイは疲れてきた。シルビアはかなり美術品に詳しいらしく、逐一ロイに説明する。そのたびにロイの少ないボキャブラリーから相打ちの言葉を捻出しなくてはならないのだ。
しかし、確かに意匠の凝らされているものであることは否めない。掌に収まるくらいの硝子の器なのに針で一本一本かかれた模様に威圧感すら感じる。なるほど、確かに博物館の最奥に展示されているだけのことはある。
「確かに金細工や銀細工は高価なのでしょう。しかし、芸術品の価値はその儚さにあるといっても過言ではありませんわ。例えば金細工は壊れてもそこそこに価値を持つのでしょう。しかし、この器は割れたらもはや捨てる以外にはありませんわ。それだけ儚いからこそ、人はそのありように感動するのです！」
シルビアが訥々と語り、振り返った先にロイはいなかった。少し離れたところで別の展示を見ていた。というよりも、見入っていた。
「どうしたんですの？」
話しかけて、ようやくロイは口を開いた。顔はあげられることなく、その展示品に釘付けになっている。
「カオスの予言板だ」
そこには人の大きさのブロンズ像と傍らに古い石版があった。石版の字は読めないが、その横に現代語に訳したものが展示されていた。

「ええ、救世主カオスの予言の書。かの者が打ち払った闇の再来を予言するものですわ。もしかしたら現在魔物が現れているのは予言の通りなのでは、と学者の間では議論になっております」
「あんたは本当に詳しいな。しかし・・・すげえ！」
ロイも別にシルビアへのあてつけに不機嫌になっているわけではない。基本的に美術品には興味がないのだ。しかしこの書だけは違った。子供の頃から伝説について聞かされていたし、ジエルトンに属するものとして興味津々になろうというものである。
「ああ、このブロンズ像は最近つくられたものなんだな。どおりで新しいわけだ。しかし、なんだこの額のマークは、いたずら書きか？」
「失礼ですわ。そのよう事をするわけがありません。この像は伝承にあるとおりのカオスの姿を象った物です。彼の額にはこの一対の竜の印があったといいます」
へえ、と今度はシルビアを見て感心した。
「あんたは本当に物知りだな」
「いえ、この程度、一般教養ですわ」
少し嬉しそうだ。知識を披露できて嬉しいのだろうか。
「それよりもわたくしはあなたがそんな無垢な表情で喜ぶことに驚きですわ」
「おいおい、こんな純粋な少年に向かって何いってんだよ。俺は無垢な表情意外したことねえぞ」
「嘘は好きませんわ！さっきまでむすっとした顔をしていましたのに。わたくしがどれだけ気を遣ったか」
「・・・気を遣ってたのか、あれ」
どう考えても楽しんでいたように見える。しかし冗談は好きだが嘘は嫌いなんて難しい。少なくともロイの中でその境界は明確ではないのだが・・・。
「ああ、ほしいなあ、これ」
ロイは硝子ケースの中の石版を見ながらいった。

「犯罪ですわ。わたくしは肯定いたしません」
「シルビアだってさっきの硝子細工すげえほしそうな顔してたのに？」
「な、なにを言っているのか皆目見当もつきませんわ」
シルビアはものすごく驚いた顔をする。半分冗談で言ったのにシルビアは本気で欲しかったのだろうか。
突然、鐘が鳴った。かなり大きな鐘のようで、脳にずしりと響いた。
「もうすぐ閉館ですわ。この鐘は博物館の天辺についていて閉館時間を知らせるものですの」
再びシルビアに感心し、ロイは出口の方へ向かった。もちろん道を完璧に忘れたのでシルビアの後をついてだが。

「今日はどうも付き合ってくださってありがとうございました」
博物館の外に出ると、あたりは薄暗くなっていた。シルビアはペコリと頭を下げて礼を言う。明るかったら胸を覗いてしまったかもしれない。人道的には暗くてよかったと思う。男としてはちょっと残念であるが。
「いや、結局俺も楽しかったからいいや。俺からも礼を言おう。ありがとう」
「喜んでくれて何よりですわ。・・・もう少しお話をしていたかったのですが、生憎わたくしにも用事というものがありますの」
「門限か？」
教養豊かなことと言い、上品なしゃべり方と言いおそらく裕福な家なのだろう。だとすれば門限が厳しいのも頷ける。
「それではこれで」
シルビアはロイの質問には答えず、再び一礼して黄昏の中へ消えていく。送っていこうかとも考えたがそれは野暮ってものだろう。ロイは溜息をついて・・・現実に戻った。
「やべ、仕事」

もちろん早退などと伝えてないので、店長はすぐに戻ってくるつもりでいたのだろう。そもそもロイもそのつもりだったのだ。
ロイはシルビアと逆の方向へ全速力で駆け出した。

「おう、早かったな」
しかし店長はロイが戻るとそう言った。店はもう閉まっていたので、いつもどおり裏口から入った。店長は何をしているでもなく、椅子に座っていた。
「てっきり朝帰りでもするかと思ってたんだが」
「まさか。門限が厳しいらしいです」
「わはは、そりゃあおめえ、見限られたんだよ」
そうなのだろうか。しかし、そう考えられなくもないと思う。どの道この話を続けると泥沼なので、ロイは尋ねた。
「それで、みんなはもう帰ったんですか？」
「ああ、エリナの機嫌が悪くてなあ。それで今日は片づけをお前に全部押し付けることになった」
「まじスか・・・」
それは尋常じゃないくらいの時間がかかる。
「ちゃんとやればサボった今日の給金半分くらいは出してやる」
「わかってますよ。やりますよ」
ロイは諦めてひとまずキッチンからきれいにしようと奥へ入った。
「俺は上にいるが終わったら勝手に帰って良いからな」
はーい、とキッチンで返事をする。階段を上る音がした。店長はこの店の2階に住んでいる。というよりもこの店はもともとの店長の家の1階を改築したものだ。
結局ロイがすべてを終えて帰路に着くことができたのは町が静まり返った後だった。ロイは疲れて重い足取りでホテルに戻る。この数時間後、大事件が起こることなど知る由もない。

「やあ、色男。楽しかったかい」
ロイが部屋に戻ると、やはりベッドに横になるベルゼの姿があった。
ロイも自分のベッドに横になる。
「人生初のデートはどうだった？」
言われてロイは目を見開いた。そうか、あれは初デートだったのか。
色っぽい雰囲気はゼロだったが。
「勘弁してくれ。仕事中に知らない女に声をかけられ、美術館に付き合わされて戻ったら6人分の仕事を1人でやらされることになってたってだけだ」
言うほど悪くはなかったが、これを言うとからかわれること必至だったので口を閉ざした。
「からかいたくもなるよ。君のせいでさっきからエリナの機嫌が悪くてさあ。延々と愚痴を聞かされたよ」
「愚痴？何でだ？」
ロイは身体を起こして尋ねたが、ベルゼは「やれやれ。君も罪な男だね」と言って眠ってしまった。

第27話　シルビア／リリー　4

次の日、ロイと顔をあわすこともなくエリナは先に仕事に言ってしまった。ロイは自分が何か悪いことをしたのかと首を傾げたが、解は思いつかない。ただ、ロイが朝寝坊をしたのも確かで、宿で出る朝食も食べずに仕事に出かけた。

「よお、ロイ。聞いたか？博物館の美術品が盗まれたらしい。なんか硝子の器だとか言ってたな」

「・・・へえ」

ロイは一瞬驚いたが、特に気にも留めずに聞き流した。

「最近この街には怪盗が出てな、なんでも女だって話だが」

「・・・へえ」

その2つの共通項として1人の女性の顔が浮かび上がったが、しかしすぐに打ち消した。流石にそれは失礼というものだろう。

「ところで」

店長が息を大きく吸い込んだ。ロイは嫌な予感がして一歩下がったが、遅かった。店長の大きな手ががっしりとロイの頭を掴んだ。

「何であの娘今日は来ねえんだよぉ！」

「いたい、いたいっす。まじでそういう感じじゃないんですよ。誰でもいいから一緒に博物館行く人が必要だったみたいで。だから俺は被害者だ！」

「そんな美味い害なら俺が被りてえ！」

「いい年してなに恥ずかしいこと言ってんだっ！」

とてもじゃないが聞き流せないほどの執着っぷりだった。きっとあれだ、仕事にかまけて妻に逃げられた等の過去でもあるに違いない。1週間もすればだいぶ仕事も慣れてきたので、色々別のことも考えながら手を動かせた。

そして、店仕舞いしたすぐ後、行くところがあるから、と言ってロ

イは店を出た。

博物館は今日は閉鎖されていたらしい。盗みが入ったのだから当然だろう。入り口には2人の男が立っている。ロイはそのうち1人に声をかけた。ベルゼと同じくらいの若い男だった。

「怪盗リリーだろ?そうなんだよ。昨日、というか今日の夜中だな、現れてさ、警備の穴をかいくぐって美術品を盗んでいったんだ」

男は喋りたくて仕方がなかったのだろう、ロイが尋ねると矢継ぎ早に話し始めた。

「リリーは必ず犯行予告を送りつけてくる。しかし強盗を働くこともなければ、盗んだもので私服を肥やすこともない。貧しい人々に還元しちまうんだよ。その上女性で美しいらしい。だから一部ではヒーロー・・・じゃなくてヒロインか、みたいに扱われているんだ。というか敵視しているのが一部の金持ちだけかな。でかい声では言えないが、ここでこうして仕事をしてる俺もファンだ」

隣の男に聞こえないようにロイの耳元で囁いた。隣の男は黙ったまま前を見ている。おしゃべりな同僚の性格はもう諦めているのかもしれない。

「それともう1つ。これは極秘なんだが、今夜ある資産家の屋敷に犯行予告が届いたらしい」

この男は極秘という意味をよくわかってないのかもしれない。しかし、ロイにとってはこの上なく感謝すべきことだった。礼を言って、踵を返す。

「馬鹿を言ってるんじゃない、ぼうや。こっちは仕事なんだ。お前の遊びに付き合ってる暇はない」

あたりはすっかり暗くなっている。しかし、犯行予告の時間まではまだある。ロイは予告のあった資産家の屋敷を訪ね、警備をかって

出たが、こうしてあしらわれている。
「まさか警備だと名乗ってこの屋敷でこそ泥を働こうってんじゃないだろうな。冗談じゃない。お前みたいな汚い身なりのやつをこの屋敷に入れられるか」
ひどい物言いだ。確かに小奇麗な格好をしてる訳じゃないけど、そこまで言わなくても。エリナみたいに感情に身を任せたくもなる。けど耐えた。それくらいには大人になっていた。
「ちっくしょう。せっかくの俺の計画が」
屋敷の庭の小石を蹴っ飛ばしながら悪態をつく。そのまま小石を投げて窓ガラスを割ってやろうかと思い、手に取った。暗いし逃げれば大丈夫と考えるくらいにロイは子供のままだ。しかし、振り返ったとき、屋敷の傍の大きな木に目に留まった。ロイは小石を振り上げたまましばらく考え、小石を捨てた。
夜もしだいに更け、肌寒くなってきた。しかもずっとじっとしているので余計寒い。術を使おうかと思ったが、やめておいた。話によるとジラークがあるバーカギルはここよりかなり寒いらしい。少しは慣れておかなくてはいけない。しかし南部出身のロイは暑さに強いが寒さにはかなり弱いのだ。
そんなことを考えながら大きな木の枝に寄りかかった。天辺はこの屋敷の屋根より高い。いざとなれば窓ガラスを割って屋敷内に侵入できるし、もしかしたら怪盗リリーもこの木を使うかもしれない。屋敷内は煌々と明かりが灯っていて、まだ騒ぎがある様子はない。
「あ、そんなことよりもエリナどうしよう」
昨日かなり怒ったといっていたし、今日一日口を利いてくれなかった。原因は昨日途中で仕事を抜け出したしたせいだろう。でもそれに関してはロイは悪くない。まったくの濡れ衣だ。

「やつだ！怪盗リリーだ！誰か、早く明かりを！！」
一瞬寝そうだったが、その声を聞き、慌てて身体を起こした。木の

上だったのでバランスを崩し、危うく落下するところだったが、何とかこらえた。
ガシャン、という音はしなかった。その代わりにロイのいたところより少し上の方で窓が開けられ、黒い服を着た人間が現れた。ロープを屋上へ向かって投げ、それをつたってするすると登っていった。
「なるほど、そういう手があったか」
ロイは感心したが、すぐに木を登った。修業中に散々やらされたので、木登りは得意中の得意だ。術を使えば手を使わなくても上れるが、今それをやる意味はない。
考えてみれば、ここにいて正解だったかもしれない。中で警備をしていれば、混乱してとても追うことはできなかっただろう。ロイは頂上付近の細くなった枝から天井へと跳んだ。
「・・・あら？」
黒ずくめの人間。さっきは分からなかったが、町の明かりと月明かりで今ではっきりと女性だと分かる。目のところがだけ開けられたマスクで顔を隠しているが、全身ぴっちりとした服を着ていて、そのスタイルが露になっている。あんな男がいるわけない。いたら気持ち悪いだろう。
「随分と可愛らしい探偵さんね」
怪盗リリーはそう言って微笑み、手に持っていた黄金の女神像を胸の谷間に入れた。もちろんそんなことに感心する余裕はロイにはない。
「何か用かしら？」
「あんたが盗んだものを返してもらう」
「なぜ？」
ロイは返答につまった。確かにその理由はロイにはない。言うならば純粋な興味だ。怪盗リリーは自分が知っている女性なのかどうか。しかし、声もスタイルも昨日会った彼女とよく似ている。いや、後者はあまりよく見ていないとロイは自分に言い訳した。ただ、雰囲気が違う。まったくの別人だった。

「最近金欠でさ。その上昨日見ず知らずの人に美術館に連れてかれてその分の費用を負担させられたもんだから金が必要なんだ」
ロイがおどけたように肩をすくめると、リリーはあらあらと言った。
「でもそれくらいは男の甲斐性ではなくって？」
「さあ、そういう事はこの街のジェントルメンにでも言うんだな。生憎田舎出身の俺にはそんな常識はない」
「それじゃあ、鬼ごっこをしましょう」
「鬼ごっこ？」
「ええ、わたくしを捕まえられたら貴方の勝ち。逃げたらわたくしの勝ち。勝った方がこの女神像を手に入れる」
「へえ、上等！」
ロイは一投足で駆け出した。そのあまりにも速いスピードにリリーは息を呑んだようだが、上手くかわし、そのままロイの背中を押した。
「うわっ！」
ロイは勢いそのまま前に転がる。問題はそこが屋上であること。それも豪邸の屋上というのだから半端ない高さだ。何とか縁を掴んで落下だけは阻止した。その頭上をリリーは跳んだ。
「ふふ、せっかちね。でもそんなことじゃ捕まえられなくてよ」
ロイは立ち上がり、リリーの方を見た。木に跳びつき、するすると下降し、更に木から木へ飛び移って、別の家の屋根に飛び乗った。
ロイを挑発するように手招きする。
「ちっくしょー」
ロイも同じように飛び移る。枝がめきめきと音を立てて何本が落ちた。その度に足を踏み外し、落ちそうになるが、何とか踏みとどまった。そしてようやくリリーと同じ屋根に立つことができた。腕は枝で切って傷だらけだ。対してリリーには傷どころか埃1つついていない。
「あらあら、大変そうね」
そういって隣の家の屋根に飛び移る。ロイも負けじとそれに倣うが、

その家に飛び乗る間にリリーは2つ隣の家にいる。挑発するようにギリギリまでロイを待つ。遊びを純粋に楽しんでいるようだった。

「猫かよ、あいつは」

休むことなくダッシュと跳躍を繰り返さなくてはならないのでもうかなり疲れている。ところがリリーの方は疲れた表情をするどころか肩で息をする事もない。それがロイのプライドを更に傷つけた。

確かに“熱”の術者は体力に難があるものだが、それでも人並み以上にはあるつもりだった。

「うわっ」

ついに足を踏み外し、宙ぶらりんになった。右手で縁を掴みんでいる。地上までは結構距離がある。しかも石畳なので落ちたら無事ではすまないだろう。

「あらあら、もうおしまい？」

顔を上げるとリリーがこちらをのぞきこんでいた。どうやらロイを挑発するために戻ってきたらしい。やはり疲れた様子はなく、悔しさが募る。

「・・・かかったな」

右手に一気に熱を込め、力を込める。さっき跳び掛かった時とは比べ物にならない速さで身体を持ち上げ、飛び掛る。

「・・・・・・っ！！」

しかし、ロイの手は再び空を切った。リリーは咄嗟に素早く後ろに跳んだ。よほど驚き、警戒したのか、反対側の縁まで下がった。

しかし、彼女は気付かなかった。その足元にバナナの皮が落ちている事に。

「えっ」

もちろん踏ん張りが利かなければ慣性に従って彼女の身体は後ろに行く訳で。壁もない屋上から落ちれば地面に向かってまっさかさまに落ちる訳で。

「きゃあああああ！」
いかに素早く、運動神経が良いと言っても生身の人間であるリリーは地面に落ちればただではすまない。彼女は空中で戦慄した。
ロイは駆け出した。さっき飛び掛ったスピードよりももっと速く。熱を惜しむことなく最大限に使って走り、壁を蹴って落下速度を増し、落下し続けるリリーの身体を抱えた。進行方向には街のどこにでも流れる水路。深さは分からないが、昼に底が見えないという事はかなり深いという事だろう。今はそうであることを祈るしかない。万が一の時に備えて、空中で身体を反転させ、自分の背を水面に向け、リリーを抱える両腕に力を込めた。
閑静な住宅街に水しぶきが上がる大きな音が響く。きれいに頭や足から入ればそれほどでもないが、背中から落ちたので音も水しぶきもロイの背中の痛みも大きい。しかし、幸いなことに周囲の住民を起こすことはなかったようだ。
「おい、大丈夫か！？」
しばらくして、水面から2人の人影が浮かび上がった。正確には1人と抱きかかえられているもう1人だ。リリーに意識はないようだ。無理もない。
漁村出身なので泳ぐのは大の得意だ。1年半近く泳いでなかったので多少不安だったが、問題ないようだ。何とかリリーを抱えたまま水路から上がった。
「おーい」
頬を優しく叩いてみるが応答はない。息はしているのかと口元に手を近づけてみるが分からなかった。そこで、口元に耳を近づけると、リリーの目が急に開かれた。
「！！」
バシャン
ロイは突き飛ばされ、再び水路に落ちる。
「なにすんだよ！」
水路から上がり、怒鳴る。リリーは立ち上がりロイから少し離れた

場所にいた。
「あら、鬼ごっこだもの。貴方がわたくしに触れ、わたくしが再度貴方に触れた。順当ではなくて？」
「ぐ・・・」
確かにそういえばそんなことをしてた。途中から追うことばっかり考えていて忘れていたが。
「あら、もう夜明けね。それじゃ、さようなら」
そう言ってリリーは踵を返して走り出した。かなりの速さだったが、右脚をかばっているように見える。おそらくバナナの皮で滑った時に挫いたのだろう。ロイは追おうかと思ったが、やめておいた。もう2つの疑問は解けた。
「・・・やっぱりスラムか」
リリーの消えた先は海の方向。そちらにあるのはこの街の最下層者が住むスラムだ。そしてもう1つ。
「・・・あのドジっぷりは疑いようがないよな」
やはりロイの推測は当たっていたらしい。どうしてシルビアが怪盗をやっているかなど疑問はまた浮かんできたが、今それを考えている余裕はない。
「ハックション！・・・ああ、さむ」
早くホテルに戻らなければ風邪を引いてしまうだろう。

第27話　シルビア／リリー　5

「朝帰りとは隅に置けないね。お姫様はかんかんだよ」
ホテルに戻る頃には辺りはすっかり明るくなっていた。こっそりと部屋に戻ると、既に起きていたベルゼにからかわれた。そのまま寝てればよかったのに、と思ったが、ベルゼの場合は朝の仕込みもあるので仕事が早い。起きているのも当然の時間だった。
「そんなんじゃねぇ。というか若干17歳のピュアな少年に朝帰りの嫌疑をかけるな。ほら、最近話題になってる怪盗がいるだろ？昨日はやつとばったり会って追いかけてたんだ」
若干の嘘が含まれているが、それは仕方がないことだ。少しでも尻尾を見せればベルゼは容赦なく引っ張ってくる。
「あれ？怪盗リリーってきれいな女って言ってたよね。なるほど、また女の尻を追っかけてたってわけだ」
「人聞きが悪すぎるぞ！お前の脳は言語変換機能でもついてるのか！？」
ドアがバン、と開かれた。廊下には門番のようにエリナが立っていた。手に持っているのは拳銃だ。ロイは瞬時に両手を挙げた。
「ねぇ、どういう事？」
笑顔だった。笑顔で銃口をロイに向け、わざとらしく大げさに安全装置をはずし、ゆっくりと歩み寄ってくる。
「あはは、修羅場だ」
確かに目の前には修羅がいる。しかし、その表現は若干の間違いを含んでいる事をとうとう言及する事はかなわなかった。
――――口を開いたら間違いなく撃たれる・・・。
かつて感じたこともないほどの殺気が、あの笑顔の下に隠れている。いや、隠しきれてない。
「昨日も仕事を早く抜け出したと思ったら・・・。へえ、そういう

こと・・・」
頼む、銃をおろしてくれ、と心の中で手を合わせる。心の外ではもちろん挙げたままだ。身動き1つとっていない。
「もう少し節操のある人だと思ってたわ。へえ」
ベルゼは「仕事だから」と言ってそそくさと部屋を出て行った。不死でも身の危険は感じるらしい。
「・・・言い訳をさせて下さい」
その瞬間、ロイの頬を銃弾が掠めた。いつもは避けられる銃弾だが距離が近すぎる上に恐怖で身がすくんでいるので身動き1つ取れなかった。銃弾は壁に当たって穴を作った。後で弁償しなければならないだろう。
「どうぞ」
他人から見たらその笑みは女神に見えるのだろうか。だとしたら女神というのは跳んだ道化だ。
「一昨日俺をさらった女がいるだろ?あいつがなんと怪盗リリーだったんだ」
はあ、とエリナは銃口を向けたまま大きく溜息をついた。
「嘘ならもっとマシにつけば?」
「本当だって、信じてくれ!それ以外に真実はない。真実はいつも1つだ。ていうかなんで俺こんなに脅されてんの?」
「あたし一応監視者だし・・・」
説得力に欠ける発言だった。が、そこを追及していくと今度こそ脳を打ち抜かれかねないのでやめておく。代わりにくしゃみが出た。
「どうしたの?っていうか水浸しじゃない!?」
「ああ、やつに水路に突き落とされた」
助けたことに関しては秘密だ。ロイにはロイの命を守る義務がある。
「わかったわ。一応信じましょう」
エリナは銃をおろし、安全装置をかけ、ついでに笑顔を浮かべるのもやめた。普通の表情のほうが癒されるなんて経験は初めてだった。
「それより風邪引いたまま店に来ないでね。裏方とはいえ客商売な

んだし。お客さんにうつしたらことだから。店長にはあたしから言っとくわ。良いわね、大人しくしとくのよ」

エリナはロイをびしっと指差し、部屋を出て行った。ロイは頷き、ベッドに倒れこむ。徹夜だった上に身体をムリに動かしたのでかなり疲れている。目を閉じればすぐに眠れそうだ。

「ごめんエリナ」

そう呟きながら瞼を閉じる。前に風邪を引いたのはいつだったか。生まれつき心肺機能が強いので、数えるくらいしか経験がない。風邪とは違うが魚の毒があたったことは良く覚えている。苦しんでいるロイに母親がつきっきりで看病してくれたものだった。

「大丈夫だよ、父ちゃん、母ちゃん、祖母ちゃん。俺はちゃんとこの世界にいるから」

それを呟いたのは夢の中だったか、現実だったか。少なくともロイの意識は既に深く沈んでいた。

昼も近づいてきた頃、ロイはホテルを抜け出した。もともと大した風邪ではなかったので、もう治っていた。今からでも仕事に行くという選択肢もあるにはあったが、それよりも今は優先すべきことがあった。

「さて、久しぶりに海でも見に行くか」

などと嘯いてロイは店と正反対の方向へ足を踏み出した。街の人々は忙しなく歩いている。商店街では店先に様々な商品が並んでいた。確かに豊かではあるのだろう。しかし、経済的な豊かさが幸せといえるのだろうか。ロイがボンゴにいたとき、経済的に豊かでなかった。というか経済そのものがなかったのだが、しかし、ロイは幸せだった。彼らはどうなのだろうか。幸せというのは十人十色にある言葉だが、日々を楽しんで生きることができているのだろうか。

そして、更に今から向かう地区に住んでいる人々。貨幣経済には必ず犠牲者が出るとグリンの下にいるときに教わった。グリンはその

犠牲者を助ける役目を自分に課していた。けれどここには行政はあるものの、そういった人は存在しない。犠牲者はひとまとまりにされ、一箇所に集められている。

「・・・でも俺はこっちの方が落ち着くな」

狭い土地を有効に使うための密集住宅。他の家々のように石造りではなく、全て木造だ。地面もならされておらず、ところどころ石畳が割れている。水路は濁っていて、やはり底が見えない。家と水路に挟まれた道路は狭く、ロイが横に手を広げればその横を人が通ることはできないだろう。住んでいる人々は市街地で働いているのだろうか、人の姿は見えず、閑散としていた。しかし、そんな中、3人ほどの男がまとまって話をしているのが見えた。

「おい、聞きたいことがあるんだけど良いか？」

ロイが声をかけると、驚いた様子で男達がこっちを見た。声をかけた相手が少年だと分かると、鬱陶しそうな顔をした。

「ぼうず、どこから来た。俺たちは忙しいんだ。あっちへ行ってな」

ぶんぶんと手を振る。

「そうか？とてもそんなふうには見えないけどな」

ロイが不機嫌そうにそう言うと、男も不機嫌になった。

「なんだお前は。ガキのくせに俺たちにケンカ売る気か！？」

「いやいや、そんな気はないんだけど・・・。聞きたいことがあるんだ」

ロイと話していた男を宥めるようにしながら別の男がロイに向けていった。

「人にものを尋ねる態度じゃないな」

「悪かったよ。知り合いに騙されてイラついてるんだ。で、聞きたいんだけど、怪盗リリーはどこにいる？」

「・・・・・」

男達は顔を見合わせた。ロイを怪訝そうにじろじろ見た。

「さあ、知らねえなあ。俺たちは顔は広いんだがな。俺達が知らねえって事はこの辺じゃねえんだろ」

ロイから視線をきって、手をしっしと振った。ロイは小さくため息をついた。

「ああ、良いやじゃあ自分で探すから」

そう言って踵を返すと、目の前が塞がれた。背後にも2人の男がいて、囲まれる形になる。

「困るんだよ、俺たちの家の周りをこそこそかぎまわれるのは」

拳をぽきぽきと鳴らす。身体も大きいからよほどケンカに自信があるんだろう。

「知るかよ。俺はそいつに文句の1つでも言ってやらねえと気がすまないんだよ」

ロイは不機嫌さを隠そうともせず、男を睨み返した。

「てめえ、ちっと痛い目見るか?」

そう言って男は拳を振り上げた。そのまま拳を振り下ろす。ロイは後ろの2人がまだ攻撃動作に移ってないことを確認した後、拳を避け、その腕を掴むと後ろに回り、男の腕をねじり上げた。

「いでででで!」

男が声を上げるが、ロイは力を緩めなかった。そのまま足払いをかけて、地面にねじ伏せる。

「動くな!」

ロイに襲いかかろうとした男達に向かって叫び、腰に刺したナイフを倒している男の首筋に当てた。さっと男の顔に戦慄が走る。2人の男は足を止め、驚いた目で下がった。

「おい、よせ!」

「知っているんだろ?話せ!」

ロイは2人の男に言ったが、答えたのは倒している男だった。

「話すかよ。ここにはあの子を売るようなやつは1人もいねえ!」

ロイはねじっている腕を更に締め上げる、ことはしなかった。尋問じみた行為に出たのははは朝のエリナから受けた恐怖が原因だろうが、その一言で、この男が決して話さないことを悟った。ねじっている手を離し、男を解放して立ち上がると、服についたほこりを払って

ナイフをしまった。
ロイは男たちに何も言わずに歩き出す。男たちの口ぶりから、少なくともこの近辺にいる事はわかった。少し探せばすぐに見つかるだろう。
「待てこらぁ！」
再び囲まれた。男はねじられた腕を押さえながらロイを睨んでいる。
ロイが睨み返すと少し怯んだ。
「やめて、やめて下さい！」
女性がロイと男の間に割って入った。赤みがかった髪が揺れた。驚き束の間、ビンタがロイの頬を襲った。
「わたくしの仲間にひどいことをしないでくださいな」
「・・・シルビアちゃん」
男が女性の名前を呼ぶ、シルビアは振り返って男を指差した。
「貴方がたもですわ。こんな薄汚れた少年を大人3人がかりで囲むなんて野蛮この上ありません。わたくし、野蛮な殿方は嫌いですわ」
そして、シルビアは誰もいない方向へ歩く。その右脚には包帯が巻かれており、左足に体重のかかった歩き方だった。
くるりと振り返って腰に手を当て、４人を見た。
「ですから、ここは喧嘩両成敗と行きましょう。構いませんわね？」

第27話　シルビア／リリー　6

「・・・肩、貸そうか？」
ロイを睨み続けていた男をシルビアが何とか宥めてロイとシルビアは3人の男と別れた。せっかくだから家に招待してくれるというのでお言葉に甘えることにする。部屋を出た事をエリナに知られたら、しかも女性に会いに行ったと知られたら今度こそ殺されるのでエリナの仕事上がりまでには帰らなくてはならない。だが、少しくらいなら大丈夫だろう。
「いえ、結構。わたくし、野蛮な男に肩を借りるほど落ちぶれてはいませんわ」
そう言って頬を膨らませ、ぷいっと向こうを向くシルビア。しかし、その右脚ではかなり歩きにくそうだ。いつ転ぶんじゃないかとはらはらしながら、ロイは隣に並んで歩いている。
「・・・悪かったよ。意中の女性になかなか会えなくてイラついてたんだ。でも俺もいきなり頬をひっぱたく女は俺もちょっと好みじゃないな。あと手癖の悪い女」
シルビアが少しだけ足を速め、ロイの前に立ちはだかった。
「不愉快ですわ！こんなところまで何しに来たんですの！？」
「いや、だから意中の女性に会いに・・・」
「それはもう聞きました。わたくし、冗談で紛らわせようとする殿方は嫌いですわ！」
シルビアは不快感をあらわにしながらきっとロイの目を睨んだ。
興味があるのは本当だ、とロイは言おうとしたが、口をつぐんだ。
しつこい殿方は嫌われそうだ。
「そうだな。強いて言うなら質問をしに来た、かな」
「質問？」
「ああ。例えば、大人しそうな女性が怪盗になるに至った理由とか」

ロイがそう言うと、シルビアは溜息をついた。
「かないませんわね。さあ、どうぞ。何もないところですが」
そう言って通されたのはこのスラムではどこにでもある木造の家だった。聞いたところによると、ここはもともと工場労働者や違う街から来た人々のための長屋であったらしい。一時、人が皆市街地へ行ってしまい、放置されていたが、格差が広がるにつれてぽつぽつと舞い戻ってくるようになったとか。
「しつこい殿方は嫌いですが、熱心な殿方は悪くないとは思いますわ」
ロイがそのどちらに当てはまっているかまでは言わなかった。しかし、何となくイラついているようにも見える。
「座ってもよろしいかしら。やはり足が痛いのです」
ロイは首肯する。椅子らしい椅子は1つしかなかったのでロイは立っている。流石に年上で1人暮らしの女性の家でどっかりと腰を据える図々しさはロイにはない。
「その足、どうしたんだ？」
ロイは右脚の包帯を指差して言う。ここに来るまで転ぶことはなかった。
「からかうのはよしてください。もう気付いているのでしょう？」
言われてロイは肩をすくめた。
「しかし驚いたよ。まさかアンタがあそこまでやるとは」
「女性に対してアンタという二人称を置くような殿方と話す言葉などありませんわ」
「まさかシルビアさんがあんなに動けるとは。・・・バナナでこけたけど」
シルビアがロイを睨んだが、ロイはおどけて肩をすくめて見せた。
シルビアは軽く溜息をつく。
「わたくしもあんなところにバナナがあるとは考えもしませんでしたわ。バナナでわたくしの一生が本当に終わるかと思いましたから。ああ、そういえばお礼を言ってませんでしたね。わたくしの命を助

けていただいて本当に感謝しております。いささか破廉恥でしたが」
「濡れ衣だ！」
「わたくしの体に触れられたのですから等価交換。このことに恩は感じませんわ」
「あんたの身体は触るだけであんたの命と同じ値打ちなのか！？」
「あら、人の身体を指して値打ちなんて形容しないでくださる？」
「揚げ足を取るな！・・・まあ、いいや。別に恩を着せようと思って助けた訳じゃないからな」
「それは重畳。謙虚な殿方はわたくしの好みですわ」
「・・・なんかさっきから男が好きかどうかしか話してないぞ」
シルビアはバン、と机を叩いた。
「心外ですわ！侮辱ですわ！名誉毀損ですわ！わたくしをそんな安っぽい女に位置づけしないでくださる！？」
ロイは必死に宥める。女性を怒らせると怖いというのは今朝いやというほど分からされた。
「それで、何で怪盗なんてやってるんだ？」
突然話を変えたので、いささか不審に思ったようだった。しかしシルビアは少し考えた後、口を開いた。小さな窓から外を見る。スラムの家々が広がっていた。
「貴方はこの場所をどう思いますか？汚い負け犬の巣窟だと卑下しますか？」
その目はどこか悲しそうだった。ロイも何となく視線を外にやったまま答える。
「いや、俺はむしろ落ち着くな。前にも言ったろ、俺は南の海のほうから来たんだ。貨幣経済さえも成り立ってないド田舎でね」
シルビアは視線をロイに向ける。憂いとほんの少しの喜びを湛えたその目を見ているのが気恥ずかしくなって、ロイはまた外を見た。
「ありがとうございます。・・・けれど、ティグレーに住む大部分の人はそうではないのです。それこそ、ここがなくなっても良い、むしろなくなったほうがいいと思っているくらいに」

「そういうもんなのか？」
「そういうもんなのです。けれどわたくしはこの場所が好きなのです。この場所にいる人々が好きなのです」
ロイは視線を再びシルビアに戻した。
「少しわたくしの身の上話をいたしましょうか。わたくし、１３歳までは市街地の一等地に住んでいたのです。それこそ昨夜盗みに入ったあの家と同じくらいのものでしたわ。しかし、はやり病で両親を亡くし、独りきりになってしまいました」
品がいいのはそれが理由か、とロイは納得する。昨夜の家くらいなら豪邸だ。お嬢様で、しっかりした教育を受けてきたのだろう。
「しかし、両親が残してくださった莫大な遺産がありましたから、わたくしは何とかやっていけると思っていたのです。それでもやはり１３歳の少女が１人で生きていけるほど世の中甘くも安全でもありません。わたくしは父の兄の家に養子にもらわれることになりました。しかし・・・」
シルビアは一度口をつぐんだ。
「やはりわたくしが悪いのかもしれません。思えば昔は人を信用しすぎるきらいがありましたわ。お金が人を買えることくらい知っておくべきだったのです。伯父はわたくしを騙し、わたくしの遺産を奪い去っていきましたわ。そして無用になったわたくしは１人になりました」
「・・・・・つらいな」
「ええ、地獄でしたわ。無人島に１人残された方がまだマシだと思いましたもの。人がいるのに助けてくれないのです。私は右も左も分からないまま路頭をさまようことになりました。でも、迷い込んだここの方々は違いました。わたくしの話を真摯に聞いて下さいました。同情し、同調してくれました。涙し、憤ってくれました。わたくしはあの時、確かに救われたのです」
そう言ってシルビアはにこりと微笑んでみせた。確かに辛い過去ではあった。しかし目の前の女性はそれを乗り越えて今ここにいるの

だ。
「それで、ここの人を助けるための義賊か」
「そういう事になるのでしょうね。先ほど貴方が会った方々はやはりエゴで職を奪われた者たちです」
「だからってシルビアが人から物を奪う理由になるのか？」
「・・・・・・」
シルビアは黙り込んだ。ロイの言葉が心の琴線に触れてしまったのかもしれない。シルビアとしてはどうしようもないことなのだろう。
「確かに卑劣ではあるかもしれませんね。意趣返しではあるのかもしれません。しかし1つ言い訳をさせてください。一昨日の美術品はもともとある老人の物でしたわ。彼もまた騙されて奪われたのです。わたくしはそれをあるべき持ち主のところに返しただけですわ」
「なるほどな。昨日は？」
「あれは伯父の家なのです」
「なるほどね、意趣返しか」
「軽蔑、なさいますか？」
悲しみを込めた目で言う。ロイはわざと軽く答えた。
「いや、むしろ安心したかな。何の理由もなく人に恵みだけを与える女神のような人だったら畏れ多くて話もできないな、と思ってたところだ」
もっとも、女神は今朝でこりごりだけどな、とこれは心の中でだけ考える。
シルビアは噴き出した。何がそんなに面白いのかとシルビアを見ると、シルビアの頬には涙が伝っていた。ロイはつい身を固めた。状況的に見て間違いなく自分が泣かしたのだが、心当たりがない。
「ごめんなさい。・・・本当にありがとうございます」
そう言ってシルビアはロイの手をとって、両手で包み、額に当てた。それはまるでロイに祈りをささげるようなポーズだった。
「ずっと不安でした。わたくしのやり方は間違っているんじゃない

かって。けれど誰にも打ち明けられなくて、わだかまりばかりが渦巻いておりました」
「俺のおせっかいも少しは役に立ったかな」
そうロイが言うと、シルビアはロイの手をぎゅっと握ってから放し、目元の涙を拭った。
「ええ。わたくしの心が救われるくらいに」
「それはよかった。俺は今まで人に助けられてばかりだったから」
語弊があるかもしれないが、命を救うことは心を救うことよりも簡単だ。ロイは人の命を救ったことはある。けれど考えてみても心を救ったことはなかった。
「しかしこの足だと今日は仕事を中止にせざるを得ませんわ。貴方に勇姿を見せられず、残念です」
「いいだろ。今度バナナでもお見舞いに来てやるよ」
「やめてくださいな。しばらく黄色い色も見たくはないですわ」
そういって2人は笑いあった。そしてしばらくしてロイが気付く。
「あ、やべ」
ロイは外を見て、少し赤みがかった空を見て、声を漏らした。
「早く帰らないと殺される。じゃあな、シルビア。お大事に」
「ええ、冥福を祈っておりますわ」
「なんでだよ!?幸福を祈れよ!!」
ロイが突っ込むと、シルビアは破顔して手を振った。
「ありがとうございました。さようなら」
ロイは駆け出す。とにかく速く。心は随分スッキリしていた。

第２８話　怪盗／強盗　１

翌日、ロイは何とか生きていた。今日一日どれだけ自分が大人しくしていたかを延々とでっち上げると、エリナの機嫌もいささか治ったようだった。しかしベルゼにはばれていて（さすが元諜報部隊だ。抜け目がない）床に頭がめり込むぐらい頭を下げて黙ってもらうように頼み込んだ。プライドというものは命に比べると大したことないんだな、とロイは嘯いた。ベルゼは、「あの険悪な空気は俺もいやだからね。いいよ、黙っててあげる」と言ったが、その鬼の首をとったかのような表情は忘れられない。

「ロイ、皿洗いしてくれ」

昨日休んだことについてはほとんど言及されず、店長の様子はさばさばしたものだった。ロイは二つ返事で了承し、流しに積まれた皿を取った。

「おい、聞いたか。昨夜また怪盗リリーが出たらしいぞ」

「えっ！？」

振り返ったロイの手から皿が滑り落ちた。それが地面に落ち、砕ける前に何とか掴みなおした。息を吐いて冷や汗を拭いた。

「危ねえな、気をつけろよ。・・・ただ、いつもと違うのは強盗だったらしい」

「強盗・・・？」

ロイは眉根を顰めた。

「ああ。中程度の屋敷を狙ったらしいんだが、手口がいつもとまったく違う。屋敷にいた人間は皆殺し、屋敷の中は荒らし放題。金目のものは一切残ってなかったらしい」

お互い貧乏でよかったな、と店長は最後に言い残し、出て行った。

ロイは洗い途中の皿を流しに置き、今の言葉を反芻していた。あのシルビアが人殺しなんて考えられない。それ以前にあの足で盗みが

できたとは思えない。
「やれやれ、今日も行かなきゃか」
「どこへ？」
いつの間にか横にエリナがいた。ロイはびくっと身体を震わせた。
「今お客さん行っちゃって昼休憩に入ったから手伝おうかと思って。それでどこ行くの？」
問い詰めている口調じゃなかったので安心する。
「ん？ああ。仲良くなった人が怪我したって聞いてさ。お見舞いに」
エリナは顎に人差し指を当てて天井を見る。あ、と声を漏らした。
「・・・仲良くなった人ってこの前の女の人？」
じとっ、と形容したくなる目でロイを見た。全て見透かされているらしい。
「・・・・・・」
「・・・なんで黙ってるの？」
「あ、いやなんでも。まあその人だ。別に他意はない」
「そんなこと一言も聞いてないけど・・・？」
しまった、とロイは口を押さえた。エリナは少し唇を尖らせる。
「わかった。じゃああたしも行くわ」
「何でそういう結論に達する！？」
「当然じゃない。あたしはロイの監督者よ。ロイの行動を監視する義務があるわ」
「あったな、そんな設定。完全に忘れてたけど」
「あれ？あたしは四六時中監視してたけど？ロイの寝顔なんて毎日日記につけてるわ」
「こわっ！俺のプライバシーは！？」
「・・・冗談よ。とにかく！」
びしっと指差されて、ロイは身をすくませる。
「仕事の後にあたしも行くから。そのつもりで」
そういってスタスタと言ってしまった。どうやら皿洗いを手伝ってくれるつもりはないようだ。どちらにせよこれはロイの仕事なので

断るつもりだった。断る口実にエリナがここ1週間で割ってきた皿の数を思い出していたところだ。

「ま、いいか。・・・あ、でも黄色いもの見せることになるな」

金髪の少女の笑い声が遠くから聞こえた。昼休みなので他の店員と談笑でもしているのだろう。その声をBGMに、ロイは黙々と仕事を続けた。

「・・・ここなの？市街地とはえらく雰囲気の違うところね」

それはエリナとしてはかなり歯に衣を着せた言いようだったのだろう。本来彼女はこう言いたかったに違いない。「こんなに寂れたところに住んでいるの？」と。無理もない。ここはそれほどに寂れたところなのだ。

「財産の豊かさと心の豊かさは別問題。わかるだろ？」

もう日はどっぷりと浸かってしまった。ここには街灯もないので、小さな月と家々から洩れるかすかなランプだけが光源である。その明かりを跳ね返して、エリナの髪が縦に揺れた。

「そういうことさ。少なくとも俺はこっちの方が落ち着く」

エリナはふーん、と言ったきり何も言わなかった。その沈黙が何を意味するかはロイにはわからない。

少し歩いて、一軒の家の前で足を止める。同じような家が並んでいるので、迷うかと思ったが、しっかりと覚えていた。隙間から明かりが洩れている。まだ起きているのだろう。ロイは力を込めれば壊れてしまいそうなドアをノックする。

「生憎今はドアを開けられませんの。どうぞ、お入りになって」

聞きなれた声がした。しかし、その声はロイが知っている声とはうってかわって感情がこもっていなかった。

ロイはエリナに目配せして、ドアに手をかけた。ドアを開ける。

「・・・・・・っ！」

足に何かが絡まる感触がした。その足が意思に反して前方に滑った。

ロイは尻餅をつき、足はそのまま引っ張られる。
「ロイッ！」
エリナの声がした途端、足にかかる力がなくなった。ロイは腰をさすりながら立ち上がった。
「まったく、見舞い客に随分な応対じゃないか？とても怪我人とは思えない」
エリナが家に入り、ドアを閉めると、その影に妙齢の女性が立っていた。その手には透明な糸が握り締められており、同じものがロイの足にも巻きついていた。
「夜分に女性の家にやってくる殿方に心当たりはありませんでしたわ。子供はもう寝る時間です」
「まだそんな時間じゃねえよ。それに今日は監督者付だ」
ロイはナイフを抜いて足に巻きついている糸を切った。簡易的なトラップだが、よく考えられている。シルビアはロイから無言で自分を見ているエリナへと視線を移した。
「あら？貴女はヴォルフォールにいた方ですわね。わたくしはシルビアと申します」
「・・・エリナリア＝スタンフィーナよ」
エリナは無言で、しかし不機嫌そうに言い放った。あからさまに警戒しているのが窺える。
「足は良いのか？」
糸を切り終えたロイが立ち上がり、服を払う。シルビアはいいえ、と首を横に振った。歩きにくそうに移動して椅子に腰掛けた。
「しかし苛立たしい事件がありまして。じっとしていられなかったんですの」
エリナがいる手前、何がとは言わなかった。言わなくてもわかるとふんだのだろう。
「ねぇ、ちょっとこの人大丈夫なの？ていうか何でロイそんなに冷静なの？完全に殺気出てたわよ」
エリナがロイの耳元で囁く。しかし、シルビアには聞こえていたら

しく、エリナに微笑みかけた。
「あら？わたくしのような乙女が殺気だなんて。冗談にしても言いすぎですわ」
エリナは微笑み返すことはなかった。
「ところでエリナリアさん。あなたロイの監督者と言っていましたがどういったご関係で？姉弟には見えませんけど」
口を開きかけたエリナをロイが制した。
「ややこしいからやめておこう。まあ、平たく言えば旅仲間だ」
シルビアは納得したように頷いた。
「本日はわざわざ来ていただいてありがとうございました。しかし、問題はありません。・・・わたくしはこれからやることがありますので」
シルビアがにこりと微笑んで言い、ロイとエリナは家を後にする。
「・・・随分変わった人ね」
帰り道。来たときよりもいっそう光源が少なかった。エリナは息を吐いた。
「まあ、変わった人ではあるな。今日はかなり機嫌が悪いようだったが」
苛立ちを隠そうとしていたようだったが、言葉の端々に険があるのが見て取れた。それはロイに対してよりもエリナに対してのほうが多かったように思える。エリナにもそれは伝わっていたようだ。エリナの言う「変わった人」というのもやはり歯に衣を着せた言いようだったのだろう。
苛立つのも当然だったのかもしれない。今日あって確信したが昨夜の強盗はシルビアではない。だとしたら強盗を働き、その罪をリリーになすりつけた奴がいるという事だ。
「まあ、あのケガならしばらく大丈夫か」
ロイの呟きを聞き、エリナは首をかしげた。ロイは「なんでもない」と言って足を速めた。無音の闇の中、２人分の足音だけが響いていた。

第２８話　怪盗／強盗　２

「昨晩も６人、殺されたらしい」
店長からそう聞いたとき、ロイはいやな予感がした。言葉では説明できないもやもやした何かがロイの頭にひっかかっていた。
だからロイは仕事が終わるやいなや、すぐにシルビアの家に向かった。３度目ともなれば慣れたものだ。しかし、昨日までとはまったく違う場所のような気がした。空気が重くて暗い。それは感覚でしかないのだけど、確かにそう感じた。
予感が的中したようにシルビアはそこにはいなかった。失礼とは思いながらも家に入り、隠れているんじゃないかとあたりを探した。しかし、やはりどこにもいなかった。
「シルビアちゃんなら昨晩ふらっと出て行ったっきり帰ってきてない」
ロイが尋ねるとそう返したのは一昨日ロイに絡んできた男だった。男も心配そうな表情でそわそわしていた。何か知っているのか、と聞かれたが、ロイは正直に首を横に振った。
「シルビア・・・」
いなくなった理由は限られている。シルビアは怪盗リリーという存在に誇りを持っていた。だが、何者かによってその誇りが汚されたのだ。事実、昨日のシルビアはかなり憤慨していた。何か行動を起こさないはずがないのだ。昨日言っていた「やること」というのはつまりそういう事なのだろう。そしてここに帰ってきていないという事は失敗したということだ。
ロイは踵を返して昨晩被害にあった家に走った。幸い店長に詳しく聞いていたのであまり迷わずに到着する事が出来た。さらに幸いなことに、その家の前に立っていたのは美術館にいたのと同じ２人組

だった。どうやらかなり人員不足のようだ。
「よお、リリーファンの少年」
その男はロイのことを覚えていた。確かに周りと比べて異なる出で立ちなので覚えられるのも無理はない。しかし、男の前でリリーのファンだといった覚えはロイにはなかった。勝手に勘違いされたらしい。冗談めかしてスラムでは言ったのだが。まさかあの辺に住んでいるのだろうか。
「怖いよな。まさかこんなことになるなんてな。だが、極秘の話、一昨日はともかく昨晩は複数の人間だったようだ。屋上で話をしているのを見かけた人間が何人もいる。しかし依然としてリリーからの予告状が出てるからどちらか判断がついてない状態だ。俺はもちろん別人に一票」
同じく、とロイは言った。そう言うと男は喜んで今日の犯行予告の場所を教えてくれた。横にいた男は3日前と同様に何も言わなかった。やっぱり諦めているのだろう。

そしてその場所に向かう。門前には多くの人がいた。強盗と聞けば警備を強化するのは当然だ。そしてガラス窓の中にも何人もの人が動いているのが分かった。どうせ警備を申し出てもまた門前払いを食うに決まっている。それに行動も制限されてしまうので、ロイは3日前と同様に木陰に隠れた。前とは違って高い木がなく、季節がら葉が落ちてしまっていたので、身体を低くして生垣に身を隠した。何者かが侵入すればすぐに分かるように目を光らせておく。
どれくらいの時間がたっただろうか。ベルゼは体内時計が正確らしいからここに連れて来ればよかったな、と内心思ったが、思っただけだった。これはロイの問題なのだ。
夜もすっかりふけた頃、人影が見えた。それは滑るように門に向かった。まるで黒い影が移動しているようで、それが人間かも分からなかった。そこにいた警備はナイフで首を割かれて絶命した。そこ

で影の動きが止まった。黒ずくめの人間だった。リリーのような露出はなく、目以外完全に真っ黒な格好だった。その人間が手招きをすると４人の同じ服を着た影が出てきた。

「怪盗の正体見たり盗賊団、ってか」

ロイはそう呟いた。その瞬間、ナイフを仕舞った黒ずくめがこっちを見た気がした。ロイはあわてて息と気配を殺した。５人の男たちは屋敷の中へ侵入する。しばらくすると、明かりが消え、屋敷の中から悲鳴が聞こえ始めた。ロイはいても立ってもいられず立ち上がった。ナイフを掴む。

屋敷に入ると見張りだろうか、黒ずくめの男が立っていた。男は驚き、声を上げようとしたが、それよりも早くロイはナイフを掴んだままの手で男の腹を殴る。男は「がはぁっ」と苦しそうな声を漏らして気絶した。

ロイは声が出ないように息を吐くと、男の着ていた黒装束をはいだ。それを着て、気絶している男を手近に会った紐で縛る。その間にも階上からは悲鳴が上がっている。ロイは男をきつく縛ると、誰もいない部屋に隠し、階段を駆け上った。途中で何人かの黒ずくめと会ったが、親指を立ててきたのでやり返すとにやっと笑って盗みに戻った。どうやら正体が入れ替わっている事には気づいていないらしい。

ロイが一番奥の一室に入ると、ひと際大きな悲鳴が聞こえた。目を向けると、そこには抱き合う一家の姿があった。ロイは黒いマスクを取った。

「大丈夫です。俺はやつらの一味ではありません。俺がロープを垂らしますからそれをつたって外に逃げて下さい。そして警察に言って伝えて欲しいのです。『強盗は怪盗リリーの仕業ではない』と。これは間違いなく別の盗賊団の仕業です。玄関のところに一味の男を１人一階に縛ってあります。もしその男がまだいたら詳しい話はその男に聞いて下さい。時間がありません、急いで！」

一家はきょとんとした表情でロイを見たが、それを聞くと父親らし

き男が力強い表情で頷いた。すぐに長いロープを用意して、窓から垂らした。ロイはそれを掴み、一人ずつ降りるように促した。

「君の名前は？」

最後に父親が降りる前、ロイに尋ねた。ロイは正直に名前を明かした。

「ありがとう。本当にありがとう」

そう言って男は消えていく。後は無事に保護されることを祈るばかりだ。

「ここはどうだ？」

ちょうど黒ずくめが一人入ってきた。背格好から言って、恐らく最初に現れ、門番を殺した男だ。リーダー格だろうか。

「寝室のようですが既にもぬけの殻でした。恐らく貴重品を持って既に保護されていたのでしょう」

男は舌打ちした。

「まあいい。なかなか稼げた。まったく、この街は俺たちに恵んでくれる。前の街とはまったく違うな。笑いが止まらん。・・・行くぞ」

どうやら拠点を１つにしている盗賊団ではないらしい。ロイは男の背中に従って寝室を出た。奪った金品の袋を１つ渡され、肩に担ぐ。

「行くぞ」とリーダー格の男が言って、５人は夜の街を駆けた。街の外に出て、更に東を目指す。

――シルビア、無事でいろ。

ロイは男たちの背中を追って走る。見張りをしていたことからも倒し、服を奪い取った男が一番下っ端だという目論みは見事当たったらしい。他の男たちからそのように扱われた。慣れない敬語で話しておいてよかったと息を吐いた。

第２８話　怪盗／強盗　３

盗賊団のアジトは山脈麓の山の中にあった。討伐を警戒しているのだろう、街からは遠い。金品を運ぶ男たちに続く。
「俺がまとめておく。お前は地下のＶＩＰの見張りを代わって来い」
「ＶＩＰ・・・？」
「何言ってんだ、知ってんだろ？俺たちの隠れ蓑だ」
ロイは驚きが表情に出ないように努めた。だが、好都合だ。男の話からまだシルビアが生きている事が分かったし、なんと今から近づけるという。ロイは力強く頷いた。だが、場所がどこか分からない。立ち尽くしてしまった。男がロイを見る。不審がられたか、とロイは身構えた。まだ正体がばれる訳にはいかない。黙らせようか迷ったが、男が懐に腕を差し入れて取り出したのは鍵だった。
「ああ、そうか。お前は確か行ったことがなかったよな。あっちの地下室だ。これは入り口の鍵。牢の鍵はお頭が持ってるからな。まったく残念な話だ。あんな美人がいるのに手出すこともできねえなんて。お頭は変なところが紳士だからな。
だが、もう少しの辛抱だ。お頭の話だと俺たちの正体もそろそろバレる。ま、そうなったらなったで上手い汁がすえるってわけだ」
「・・・・・」
男はマスクの上からでもわかるくらいニタっと笑った。ロイは何も言わなかった。
「なんだよ、食い付きが悪いな。一番楽しみにしてたのはお前だろうが」
そう言われたので、ロイは煮えくり返るはらわたを押さえながら「そうですね」と同意した。男は満足げに頷くと金品を持って行ってしまった。ロイは踵を返して地下室へと向かった。

鍵を使って開けたその部屋はひどくかび臭かった。傍にあったたいまつに火をともし、扉を閉めて目の前の階段を降りていく。その地下はかなり立派に石で造られていた。盗賊団が造ったのだろうか。それとも別の誰かだろうか。しかし、今はそんなことを気にしてもしょうがない。

「あら、もう朝食かしら。お腹がすいたのだけれど」

聞き覚えのある声がする。しかし険のある口調だ。ロイが地下に足を踏み入れ、たいまつをかざすと見知った顔がそこにはあった。

あの露出の高い服を着て、怪盗リリーはそこにいた。牢の中の鎖で足をつながれ、手錠をかけられていた。目立った外傷はないようだが、その露出の高い服がところどころ破かれている。かなりきわどい格好だった。

「・・・あの怪盗リリーも今は獄中の乙女、か」

ロイは呟いたが、シルビアは表情を変えなかった。しかし表情を変えずに叫んだ。

「犯すなり殺すなり、好きにすればいいでしょう！」

そう叫んだシルビアの目をロイはじっと見る。わずかに怯んだ。やはり不安なのだろう。誰もいなければ光など存在しない地下牢。それだけではない。自分がこれからどうなるのか、それすらもわからないのだ。心身ともに、まさに一寸先は闇。不安でないはずがない。

ロイはマスクを取って、素顔をあらわにした。

「ロイ！」

口元に人指し指を当てる。ここで正体がばれるのはまずい。ここまで来たが、見た所この格子はかなり頑丈なようだ。全身全霊を注げば溶かせないこともないだろうが、それではここから逃げることができなくなる。疲労困憊してやられるのがおちだ。

しかし、安心するかと思われたシルビアが急に悲しそうな顔になった。

「まさか、あなたの正体が盗賊だったなんて・・・。わたくし、あなたのことは信じておりましたのに。

・・・・・いいですわ、あなたがそう望むなら、犯すなり殺すなり好きにしなさいっ！！」

「ええっ！何でここでそういう結論に達するんだ！？」

いや、でもそういう考え方もありなのか。シルビアにとってロイは出地不明の少年なわけだし、運動能力があることも証明済みだ。もしかしたらそっちのほうが考え方としてはしっくり来るのかもしれないが・・・。

「格好つかね～」

嘆かざるを得ない。ロイは両手で頭を抱えた。その自分の声が思いの外反響したので、慌てて口を塞いだ。扉の方を見たが、誰も来ていないようだ。シルビアに視線を戻すと潤んだ目でロイを睨んでいた。

「あなたとは良い友になれると思いましたのに。わたくしの目は節穴でしたわ。成る程、あの日、わたくしを助けたのもそういう魂胆があってのことですか。・・・失望しましたわ」

なんか勝手に失望された。面白くないことはなはだしい。

「違う違う。助けに来たんだ！」

シルビアはきょとんとした顔をしている。

「つまり、裏切りを・・・？」

「ちーがーう！その原点を改めろ！」

確かに冷静に自分の考えを見つめなおすのは難しい。後で考えればなんでもないような答えでもそのときには無理難題の迷宮回廊に見えるものだ。

「さっきティグレーに来た盗賊の1人と入れ替わったんだ。ったく、ちょっとは『ヒーロー登場！』的なカッコイイ感じにさせろよ」

ロイは別にヒーローに憧れている訳ではないが、悪役よりはいいだろう。

「え？え？わたくしの体目当てで？」

ロイは息を吐いてうなだれた。なんて強情なのだろう。

「離れろ！そっから！」

「・・・あなたは性的未熟者だったんですか？」
「違え！そんなこと言うとここから出してやんねえぞ」
「構いませんわ。自分で何とかしますもの」
「嘘つけ、絶対諦めてただろ！・・・だが自分で何とかするって言うなら俺が盗賊団を壊滅させて、かつお前をここに放置してやるよ。行く先は白骨死体だな」
ロイはシルビアを指差し、意地悪く笑った。シルビアは悔しそうな顔をする。
「この外道・・・」
「・・・・・・」
なぜそこまで言われなくてはならない。
「・・・そうですわね。意地をはっても仕方ありません。ロイ、無事わたくしを助け出せた暁にはご褒美を差し上げましょう」
おもむろに自分の胸を掴んだ。突然のことにロイは赤面する。
「結構だ！・・・ったく、今までどんな男と付き合ってきたんだよ」
「それは申せませんわ。・・・多すぎて覚えてませんから」
「失望した！」
ロイは頭を振って地面にうずくまった。そのまま冷たい床に寝転がって上を見上げた。その姿をみてシルビアがくすくすと笑った。
「ジョークですわ。しかしお子様には少々刺激が強すぎたのかもしれませんね」
「・・・・・・」
「・・・それよりも、本当にありがとう。これで二度も命を助けられることになるわね。やはり何か恩返しをしなくては」
「そういうことは無事助け出してから言ってくれ。恩返しもしなくて良い。俺は自分のやりたいようにしただけだから」
「やりたいのですか・・・」
「そこだけピックアップするな！いい加減しつこいぞっ！」
ムキになって声を上げたロイを見て、シルビアはふふっと笑った。
「なんとも、助けられ甲斐のない殿方ね・・・」

ロイは手を使わずに足を振り上げてその勢いで立ち上がった。
「甲斐とか義理とかいいんだよ。黙って助けられるのを待ってろ。それとあれだな。やっぱり俺は丁寧語じゃない方が好きだな。そっちのほうがかわいい」
さんざんからかわれたのでひとつからかってやる。しかし、かわいいと思ったのは本当だ。自然な感じがする。
牢の中のシルビアは固まったまま、さっきのロイよりも赤面していた。
「からかわないでくださいな！あなたは余計なこと言わずに早くわたくしを助ければ良いのです！」
丁寧語に戻ってしまった。まあいいか。そっちも嫌いじゃない。
「はいはい。わかったよ。せいぜいしっかり震えとけ」
ロイは階上へ向かって歩き出す。
「震えていたとしても恐怖でなくて寒いからですわ！というか本当に寒いのです」
確かに、冬がすぐそこまで来ているし、その上ここは地下室だ。更にあんな肌着じゃ寒くて当然だろう。
扉を開け、低い位置にある太陽を浴びた。ゆっくりと部屋の鍵を閉める。
「よし！」
さっきの男の話からすると、地下牢の鍵を持っているのはリーダー格の男だろう。まずはそこに向かわなくてはならない。

第２８話　怪盗／強盗　４

「・・・どうした」
リーダー格の男の部屋はさっき入っていくのを見ていたのですぐ分かった。ロイはノックをして中に入る。男は硝子もはまっていない窓から外を眺めていた。顔をこちらにむけることもなく尋ねた。
「地下牢の女なのですが、空腹だそうで。食事を与えますので牢の鍵を貸していただけないかと」
「食事は与えない。そう言っておいただろう。恐らく明日には正体がばれる。それまで我慢しろと言っておけ。なに、人間一日二日食わなくとも死にはしない」
「・・・あと、用を足したいそうで」
「届く範囲に穴がある。用はそこで足せといってある」
人権無視もはなはだしい。しかし男の言葉に揺るぎはなかった。ロイはしだいにいらついていく自分に気づいた。
「寒いそうですが」
「格子戸の間からお前の衣類を与えてやればいい。・・・さっきから何が言いたい。いや、言わなくともわかっている。だがあの女はゲストだ。手荒なマネは許さない」
恐らくさっき金品を運んでいた男が言っていて、シルビアが覚悟していたようなことだろう。吐き気がした。
「ばれてしまえばあの女には用はない。だが、あれほどの上玉なら捌き方によっては邸宅を襲撃するよりよほど高く売れる。俺達が商品の価値を下げるわけにはいかない」
ようやく男がこちらを向いた。そして、それとロイが限界に達するのは同時だった。ロイは男に飛び掛った。
「何をする！」
男は飛び上がってロイをかわした。ロイはマスクをはずし、苛立ち

をぶつけるように床に投げつけた。軽すぎて柔らかな音しか鳴らず、余計苛々した。

「キサマ、誰だ！」

男が1歩身を引いた。ロイはさっきまで男が座っていた椅子を蹴り飛ばした。壁にぶつかり、椅子の足が壁に刺さった。

「俺の友達を拉致して、言うに事欠いて商品だと！？ふざけんなっ！」

苛立つロイと対照的に、男は冷静だった。

「ふん、ネズミが紛れ込んだか。まったく、使えない部下だ。しかし背格好が似ているとはいえ気付かなかったのはこちらのミスだな。今度から仕事中以外マスクをはずさせるか」

男もマスクを取る。その素顔が露になった。

「しかしお前のそれは失敗だな。そして愚かだ。そのまま隠れ続けていれば寝首をかけたかも知れないし、上手くいけば鍵を奪ってこっそりとゲストを助け出せたかもしれないぞ」

「知るか！友達を売り物扱いされて黙ってられるのが賢いなら俺は愚かでいい」

ロイは叫ぶ。確かに最初は男の言う通りにするつもりだった。しかし、こうなってしまったことはしょうがない。ロイにとっての最優先は「ロイが何をしたいか」なのだ。

「友達、か。ククク・・・つまりあれを人質に取れば手も足も出せないという事か」

「させるか！」

ロイは男に飛び掛った。その猛スピードに男も驚いたようだ。慌ててかわしたが、男の懐から何かが零れ落ちた。

「くそっ」

鍵だった。このアジトでもともと鍵が必要なのは地下室の鍵と地下牢の鍵のみ。地下室の方はロイが持っているから間違いなく地下牢のほうだ。

「確かにもらったぜ」

「・・・小僧。逃がすと思うなよ」
男は懐から取り出した笛を吹いた。あまりにも大きな音にロイは耳を塞いだ。
「ここでは戦いにくい」
男は窓から外に出る。少し遅れて、ロイはドアから外に出た。そこに待ち受けていたのは４人の盗賊たちだった。大剣や斧、鉄球と各々の武器を携えている。どうやらあの笛の音を聞いて駆けつけてきたのだろうか。ものすごく迅速な対応だった。
「地下牢の鍵を取り戻せ。取り返したやつには・・・そうだな、鍵をくれてやる。そして無期限で監視の仕事を与える。好きにしていい。だが、そいつは必ず殺せ」
男たちが血気はやるのとロイが唇を噛むのは同時だった。ロイはナイフを取り出した。
「！！」
その目を離した一瞬の隙に、鉄球がロイに襲い掛かった。ロイが跳んで避けると、背後にあった小屋がえぐられた。その破壊力から鉄球にかなりの重量があることが分かる。しかし、男はそんな素振りも見せず、軽々と振り回していた。どうやら相当できるようだ。ロイは気を引き締めた。
だが、踏み込もうとした瞬間、前方から大剣が振り下ろされた。避けることもできず、ロイはナイフを当てた。出地不明の老婆にもらったナイフは頑丈なので折れたり欠けたりはしなかった。しかし、衝撃に耐え切ることはできないし、刃同士をぶつければ当然滑る。大剣は刃渡りの短いロイのナイフをすべり、掴んでいた右手を少し切った。ロイは裂かれる前にナイフの角度を変え、いなしたが、吹き飛ばされた。そしてその背後には既に斧を構えている男が立っていた。
「・・・・・っ！！」
油断していた。そこらの盗賊なら簡単に押さえ込むことができると思っていた。そしてリーダー格の男が出したあの条件から、個々が

てんでバラバラに攻撃してくると思っていた。連携攻撃など頭の片隅にもなかった。あるいは、それが作戦だったのかもしれない。

ロイの身体は斧の男に吸い込まれるように吹き飛ばされていた。ロイは何とか体勢を立て直そうとする。だが、そんな時間が在る筈もない。男が斧を振りかぶった。あと2メートル。1メートル。ロイは死を覚悟した。

ガウン

だが、斧がロイの身体を切り刻むことはなかった。その轟音とともに男の姿は消えていた。驚くロイは受身が取れず、一本の木に背中を強打した。痛みに思わずうずくまった。

「だっさ～～い！」

顔を上げた。手が差し出されている。眩しかった。まるで太陽が自分に手を差し伸べているようだった。ロイがその手をとると、ぐいっと身体が引き上げられた。

「エリナ・・・。ベルゼ・・・。なんでここに？」

ロイの目の前に2人が立っていた。エリナは唇をとがらせ、ベルゼはいつもどおりに笑っていた。

「ほんっと信じらんない。勝手に死のうとするなんて」

そう言って、エリナは頬を膨らめた。

「別に死のうとした訳じゃねえよ」

「だったらなおさらダサいわね。なす術もなくやられるところだったんだ。笑っちゃうわね」

「・・・助かった。ありがとう」

何に怒っているかは分からなかったが、助けられたのでとにかく礼を言う。

「それよりよく弾が俺にあたらなかったよな」

それなりに遠距離からの射撃だったはずだ。自分の身体が蜂の巣になっていないことが不思議だ。・・・エリナは射撃が苦手だったし。
「ふっふー。あたしは日夜進歩しているのです。女の尻ばっかり追い掛け回している誰かさんとは違ってね」
鼻先に突きつけられた人差し指を掴んだ。不愉快だった。
「あちらさんも作戦会議してるみたいだね」
エリナの背後にいたベルゼが盗賊団の方を指差した。４人は突然の新手の登場に集まって何か話している。
「そういえば・・・」
エリナが声を上げる。
「何でこんなとこにいるの？」
「何で来たんだ？」
エリナとロイの声が揃った。
「・・・シルビアっていたろ？あの足怪我した。あいつが捕まってるんだよ」
エリナとベルゼは顔を見合わせてにこりと笑った。ロイはなぜかむかっとした。
「つけてきたんだよ。元諜報部隊の尾行術を嘗めないでほしいね」
「いつからだっ！？」
「んー？ロイがスラムの女の家にこそこそと出かけて行くときから？」
「そんな犯罪じみた出掛け方はしていない！！濡れ衣かぶりすぎてもう暑苦しいぞ俺はっ！」
自分でもよくわからないつっこみを返した。やはりロイにプライバシーはないようだ。恐るべし、七聖。
「草陰でいつまで隠れてるんだ、って蹴りに行こうとするエリナを宥めるのが大変だったよ」
ベルゼが言い、エリナは不機嫌そうに遠くを見た。成る程、さっきから機嫌が悪いのはそれが原因か。確かに、あれは冷静になろうとしたロイの責任だ。でも、確かにすぐにことを起こせば何人かの人

は助かったかもしれない。ロイは無事だったか分からないが、富豪の家族以外にも逃がすことはできたはずだ。その代わりシルビアの居場所は分からなかっただろう。

結局ロイはシルビアの命1つのために何人もの人の命を見殺しにした。けれど、後悔はしていない。

「・・・俺は、名前も知らない人を助けて、そのために友達を犠牲にできるほど大人じゃない。それが大人なら、俺はガキで良い。このセリフ、前にも言ったか・・・？もちろんそれがベルゼやエリナでも同じだ。エリナ、お前は怒るかもしれないけど、俺はたくさんの人の命よりお前の命を守るよ」

ロイの独白。ベルゼがヒュウと口笛を吐いた。「だってさ、エリナ」とエリナに声をかける。エリナは相変わらずそっぽをむいたままだった。

「・・・わかった。納得してあげるわよ。ロイ、鍵を貸して」

「鍵・・・？」

「シルビアさんが捕まってるところの。ちょっとは話が聞こえたんだけど、今持ってるんでしょ？」

ああ、と頷いて鍵を渡した。エリナはそれを受け取る。

「あの地下室でいいのよね？救出はあたしがやるからここをお願いね」

わかった、とロイは頷いた。駆け出そうとするエリナに、ベルゼが声をかけた。

「敵だからって意地悪しちゃダメだよ」

「うるさいわねっ、何もしないわよっ！」

そう怒って、走り去っていった。

第２８話　怪盗／強盗　５

「敵？エリナとシルビアは敵同士なのか？」
ベルゼはきょとんとした顔をした。しばらくしてやれやれと肩をすくめた。
「そうだね。とある甲斐性なしが起こした悲しい戦争だよ」
「？？？」
「そんなことより！」
首をかしげていたロイははっとして周囲を見回した。
「あちらさんも準備ができたみたいだ」
既に、ロイたちは囲まれていた。４人で囲んでいるところを見ると、エリナのほうを追うのは諦めたらしい。ロイとベルゼを倒せば後はどうにでもなるという腹積もりだろう。
「行くぞっ！」
リーダー格の男が叫ぶのと同時に、３人の男の姿が消えた。いや、消えたのではない。まるで地面を滑るようにして、こちらに向かって来ていた。その動きが速過ぎたので、消えたように見えたようだ。ロイとベルゼは瞬時に背中をくっつけて、同じナイフを取り出した。
「右に跳べっ！」
背後からベルゼが声を上げた。ロイは考えるよりの速く、ベルゼを信じて反射的に右に跳んだ。地面に斧が突き刺さる。ロイの着地点には大剣を携えた男がいた。ロイは着地と同時に地面に伏せて大剣の横薙ぎをかわした。続いて蹴りを入れようとしたが、男は後ろに飛んでそれをかわした。
どうやら一気に勝負を決める気はないようだ。４人で２人を囲んでいる以上、消耗戦になれば先に倒れるのはロイたちのほうだ。ロイが下がった時、再びベルゼと背中が合った。
「ロイ、あの大将っぽい男を連れてできるだけここから離してほし

い。3人はこっちで相手する」
ロイはうなずいた。
「大丈夫、殺さないから」
今の状態だと、ベルゼが傷ついた場合、魔物の防衛本能で一番近くにいる異物であるロイがやられてしまう。ベルゼはもともと1対多に対して有効なのだ。自分がここにいては邪魔になるのだろう。
「わかった、信じてるぜ」
ロイは駆け出す。確かに男たちの動きは速い。しかし、それは止まった状態からトップスピードへ移るのが早いのであって、常に高速で動けるわけではない。それに対してロイは初動こそ劣るものの、術があるので短時間なら高速で動き続ける事が出来る。だからスタートダッシュさえ勝ればロイに追いつける者はいない。ロイはリーダー格の男に切りかかった。
「・・・ふん」
ナイフが交錯する。途端に2人の表情が驚きのそれに変わった。昨晩は暗くてよく分からなかったが、ロイとベルゼ、そしてリーダー格の男はまったく同一のナイフを所持していた。だが、驚きで怯む事は一切なく、ロイは蹴りを繰り出す。男はそれをかがんで避けた。次いで男はナイフをロイの心臓めがけて突き刺す。ロイは右に避けてそれをかわした。ナイフを持っていないほうの左手で男の顔を殴る。男は避けようとしたが、ロイの拳はフェイントだった。体を左に傾けたところで、ロイのとび膝蹴りが顎にヒットした。
「ぐおっ・・・」
男は顔をしかめて距離をとり、痛そうに顎をさすった。だが、目線がしっかりしているところを見ると、大したダメージはないようだ。ロイは指でちょいちょいと男を手招きした。
見下されたように感じたのだろう、男は激昂し、ロイを追ってくる。ロイは走った。ここにいては間違いなくベルゼに巻き込まれるだろう。できるだけベルゼから離れなければならない。
「・・・・・・」

高速で打ち合いをし、この場を去っていった二人とは対照的に、ベルゼと3人の男は微動だにしなかった。状況は3人の方が圧倒的に有利。しかし、男たちは警戒していた。
独りになってもベルゼの顔からは焦りがかけらも見られない。勝ち得る自信がこの男にはあるのだと悟った。それは動物的勘ではなく、今まで血肉をするような生き方をしてきた男たちの経験だった。
「・・・さあ、始めよう」
最初に動いたのはベルゼだった。それを合図に、3人の男が一斉に動いた。ベルゼの口元がニタリと歪んだ。

「・・・そのナイフ、貴様もディアボロスなんだろう?」
男はロイから距離をとり、鋭い眼光をこちらに向けている。ロイとてさっきの死への恐怖が完全に払拭された訳ではない。実力のわからない男を前にして心臓はバクバクと震えていた。けれど、それを表情に出す事はない。
「やっぱりそうなのか。ベルゼの話からまさかと思ってたんだが・・・」
じゃあなぜあの老婆がこのナイフを持っていたのか。一瞬疑問が頭をよぎったが、すぐに消え去った。今それを考えたところで意味はないし、どうせ推測しかできない。
「なぜ俺たちの邪魔をする。ディアボロスに反旗を翻すつもりか?」
「ちょっと、待てよ。お前もって、あんたはディアボロスなのか?」
ロイの言葉を聞いて、男は怪訝そうに目を細めた。眉に皺が寄っているかもしれないが、マスクをかぶっている今ではわかるはずもない。
「俺たちはディアボロスの下位部隊。主に斥候と財源確保の任を負っている」
「なるほどな・・・。じゃあ余計負けるわけにはいかねえよっ!」
ロイはナイフを突き出した。男は体を回転させ、かわし、すぐにロ

イの右腕を切りつけた。ロイは瞬時にそれを受け止める。返す刃で男を横なぎに薙ぐ。

「なっ！」

男の姿が消えた。いや、消えたのではない。ナイフを避けるために開脚して地面に伏せたのだ。ロイは勢いと驚きで一瞬動きが止まる。それを男は見逃さなかった。足を閉じて立ち上がると、ロイの胸を薙いだ。ロイは咄嗟に後ろに下がる。

黒い装束の胸の部分が裂けて、ロイの白い肌が露になった。一瞬後、ぶしゅっ、と生々しい音を立てて、そこから血が吹き出る。

「っつう・・・」

「・・・浅かったか。よくぞかわしたものだ」

ロイは瞬時に血を乾かした。浅いとはいえ心臓に近い部位だ。血を流しすぎては持たない。幸い傷はそれほど深くないので、傷口を焼かなくても固めた血が傷を塞いでくれるだろう。

顔を上げると、男は昨晩見せた地面を滑るような動きでこちらに来る。左右にぶれるその動きのせいで、男が何人もいるように見えた。ロイはその姿にナイフを突き出した。しかし男は体を回転させ、ナイフをかわすとロイの右腕を切りつけた。咄嗟にナイフで受け止めるものの、胸の傷と焦りで力が入らず、肩にナイフが食い込んだ。ロイは蹴りを繰り出したが、男はその足を蹴って、背後に飛んだ。空中で一回転し、着地する。

「・・・剣舞」

間違いない。あの流れるような動きも、躍るような身のこなしも剣舞の技だ。相手の力に決して逆らわず、一撃必殺を狙わず、削り殺す。一対一でも一対多でも有効な技。基本から考えれば明らかに無駄の多い動きだが、それだけに捕えることはできない。ギンが得意で、ロイも何度かしこまれたが、不器用なロイには到底ムリで、悔しがったのを覚えている。

男は間髪いれず次の攻撃に移る。もはや自分の右にいるのか左にいるのかも分からない。それでもロイは目の前にいる男にナイフを突

き出した。それはがむしゃらだったのかもしれない。男はさっきとは逆方向、左側に回転する。そして繰り出される斬撃。辺りには血がほとばしった。

「なっ！」

驚いたのは男の方だった。しかし顔をしかめたのも血をほとばせたのもロイだった。

ロイは左手でナイフを掴んでいた。鋭いその斬撃は掌の半分ほどまで達している。筋肉でギリギリ骨まで達するのだけは回避できた。

「おおおおおお！」

鋭い痛みに震える体を奮い立たせる。体を低くして男の腹に肘うちを繰り出した。男の体を衝撃が突き抜け、男の体から力が抜けた。そのまま前かがみに倒れた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

男が動かないのを確認してから、激痛が走りしゃがみ込んだ。

「やばいな、これ」

一瞬、左手の親指以外の４本の指を諦めた。咄嗟に左手を差し出した事によって男が驚かなければ間違いなく持ってかれただろう。結局勝利したのはロイの精神力だという事だ。いや、勝利といえるかもわからない。いつも通りの辛勝になってしまった。

血は止まらない。熱で止血したところで止まりそうになかった。ロイは服の袖をちぎってわきの下をきつく結んだ。ここの血管を止めれば掌に血は行かなくなる。案の定、血は少しずつ収まってきた。とは言ってもロイの左手はもともと真っ赤だったんじゃないかと思えるほど赤く染まっていた。覚悟を決めて傷をくっつけるように拳を握った。

「ぐわあああああ！！」

熱をいきわたらせる。地獄のような痛みに悲鳴が洩れた。森が邪魔してベルゼたちの姿は見えない。この声が聞こえてなければ良いと切に願った。

第２８話　怪盗／強盗　６

血は止まったが、代わりに左腕は指先に向かって血の気を失っていた。しかし、今血を止めている脇下の布をほどけば血が吹き出るだろう。まだ早い。痺れてきたら少し緩めるくらいで良い。

血を流しすぎてくらくらしたが、ゆっくりとベルゼがいるだろう盗賊団のアジトへと歩いていった。

そこには凄惨な光景が広がっていた。

一番目立つのは首を掻き毟りながら気絶している男。そしてその傍で口から泡を吹いて倒れている男。更にもう１人、頭を抱え、歯をカチカチと鳴らしながらロイの左腕以上に血の気を失って震えている男。

そして、その男たちを見下ろして立っているベルゼ。

「おい、ベルゼ！」

振り返ったベルゼをみて背筋に寒気が走った。頭が陥没していて、蛆によって修復されている最中だった。腕もちぎれて落ちている。肘から蛆があふれていた。

「遅かったね、ロイ。こっちは終わったよ。・・・大丈夫、約束は守ったよ」

確かに、３人とも生きてはいるようだ。しかし、一体どれだけの恐怖を味わったのだろう。３人とも身の毛もよだつような恐怖を顔に浮かべている。唯一意識のある男はロイの登場に絶望し、大声を上げて走り去っていった。

ベルゼの体が完全に修復されるのを待って、ロイはベルゼに近づいた。流石にあんなホラーな絵の中近づけるほどロイの心臓は強くなかった。ベルゼは苦笑する。

「何したんだ、お前」

ロイは首から血を流している男を覗き込んだ。傷つけたのは自分の爪だろう。十爪と指の間には血と皮がついていた。

「さあね。気味の悪いものでも飲み込んだんじゃないか」
にやっと笑うベルゼをみて、ぞっとせざるを得なかった。まったく加減などしなかったのだろう。ベルゼにとって人間とはそうすべき相手だ。命は奪わないという約束は守ったものの、心を完全に殺した。果たして立ち直れるのか。
「おいおい、文句を言うのはやめてくれよ。ノーマルな俺が普通に戦って3人に勝てるわけないだろう？」
「まあ、そうなんだけどな」
絶対ベルゼとは戦いたくないとロイは心に誓った。
「まあ、いいか。これでこいつらは再起できないだろう。あっちはわからねえけど」
ロイはさっきまで自分がいた方向を指差した。かなり強く肘を入れたので半日は意識が戻らないだろう。
「その傷は・・・？」
言われて再び痛みが増した。こんな時だけはベルゼの身体が羨ましくなる。寄生されたいとは微塵も思わないが。
左腕が重くなったので、結び目を少し緩めて血を流した。やはり傷は塞がっていなかったらしく、血が滴った。
「いいだろ、勝ったんだから」
ロイは唇を尖らせた。
「別に悪いなんて言ってないだろ。・・・まあ、羨ましいよ」
ベルゼは目を細めた。ロイは何も言う事が出来なかった。
「まあ、そんな事は置いといて、エリナのところへ行こう。シルビアさんとやらが殺される前に」
「誰に！？何で！？」
歩き出したベルゼにロイは問いかける。
「・・・ほんとに分からないの？」
首をかしげるロイに背を向けてやれやれと首を振ると再び足を進めた。

地下室に向かうと、既にそこにシルビアとエリナはいなかった。どこいったんだと辺りを見回すと、小屋の1つから2人が出てきた。
「あれ、ロイ。っていつからそんな露出狂になったの!?」
ひどい言いようだった。たしかに今のロイの服は胸元が切り裂かれていて、外気が冷たかった。しかし、ロイは好きでこんな格好になった訳じゃない。まだ痛いが血は止まってきたらしく、ロイは左腕の血流を解放した。
「無事でしたのね。返り討ちにあっていると思っていましたわ」
エリナの後から出てきたシルビアは先ほどまでのきわどい恰好ではない。男物だがしっかりと服を着込んでいた。恐らく盗賊たちのものだろう。さっきまでの格好だと目のやり場に困るのでありがたかったが、残念だと思う感情がないわけではない。
「返り討ちにあいそうだったよ。突っ走りすぎてもろくな事がないな。今回は反省してる」
「そうですわ。女性に心配をかける殿方はわたくしの好みではありません。しかし、ここは素直に礼を言いましょう。本当にありがとうございました」
シルビアは深々と頭を下げた。ロイは笑顔で頷く。
「さあ、用が済めば長居は無用だ。早く街に戻ろう。今日は3人とも無断欠勤だ」
ベルゼの言葉にエリナが溜息をついた。
「全部ロイのせいだからね」
なぜかエリナはイラついているように見える。ロイは首を傾げて考えるが答えは出ない。
「まあ、いいからいこうぜ。つっても俺貧血気味だからゆっくり頼むよ」
「さあ、ベルゼ、急いでいきましょ」
「・・・鬼っ!?」
「いいじゃない、倒れたって。ちゃんと野犬とかが処理してくれる

わよ。ねぇ、ベルゼ」
ロイのほうからはエリナの表情は窺えないが、ベルゼを見ているエリナがどんな顔をしているかくらいは分かる。
「あ、ああ・・・なんなら俺が手伝うよ」
ベルゼもやはりエリナには弱いのだった。背後でシルビアがくすくすと笑った。ロイは振り返った。
「手ごわそうですけど、それだけに面白くもありますわ」
やはりロイは首をかしげる。
「何でもありません。こちらの話ですわ。さあ、行きましょう。わたくし、のろまな殿方は好みではありませんの」
わかったよ、とロイは息を吐く。そして貧血で倒れない程度に体力を温存しながら3人の後をついていく。
冷たい風が頬を撫でた。着ている服が薄手の上に胸の部分が裂けていて、更に血が足りていないので肌寒い。それでもロイは充足感に満ちていた。ちゃんとこの世界に自分の居場所を感じていた――。

ティグレーに戻って、まず最初にシルビアを家まで送り届けた。シルビアは再び深々と頭を下げた。
「ロイには一度ならず二度も命を助けていただきました。エリナさんとベルゼさんも本当にありがとうございました」
「別に大した事じゃない。友達を助けただけだ」
シルビアの頬に若干の赤みがさした。にこりとはじけるような笑みを湛える。
「貴方に出会えてよかったですわ」
言って、シルビアはロイに近づいた。その胸がギリギリ当たらない位置まで来た。身動きすれば当たってしまいそうで、ロイは動けない。シルビアは背伸びをして、ロイの頬にキスをした。
ロイの身体だけでなく、脳も完全に硬直した。キスで眠り姫を起こす王子の童話があるが、女性のキスが男を凍りつかせるものだとい

う事を初めて知った。
「ほんのお礼です。これからのあなたの人生。幸福をお祈りしていますわ」
再びにこりと笑って、シルビアは家の中へ入っていった。ロイはいまだに身動き1つ取れない。肩にポン、と手が置かれた。ようやく身体が動き始める。氷を溶かしたのはベルゼだった。ベルゼは何も言わずにロイの背後のエリナを指差した。エリナも硬直していた。
遠距離攻撃もありとは、恐るべし、シルビア。
「な、な、な・・・」
動き出したエリナがようやく発したのはそれだけだった。ロイが近づくと、顔を思い切り殴られた。もう少し下だったら間違いなく鼻血が出ていただろう。ロイは仰向けに倒れた。
「な、なにすんだ!!」
「うるさい!」
有無を言わさぬ「うるさい!」だった。ロイを起こしてくれたベルゼの優しい笑顔が痛かった。
「良いからほっといて行こ、ベルゼ!」
エリナはずんずんと歩き出した。
「お、おい、ちょっと待てよ」
ロイはその背中を追ってかけていく。ベルゼはその2人の姿を目を細めて愉快そうに見ていた。

第２９話　船上の再会　１

長かった2週間も終わりが訪れた。最終日にロイとエリナは深々と店長に頭を下げたが、店長はしごくあっさりしたもので、「またここに来たら働きに来い」と言っていた。他の店員とも話をしたが、涙ぐむルシカをエリナが慰めていたのがとても印象的だった。

当日の朝になって、船員と名乗る人が使いに来た。ロイたちはせかされて荷物をまとめ、男についていく。他の討伐隊は既に準備をしているらしい。

「ロイもベルゼも死なないでよ」

エリナが2人に向かってはっきりとそう言った。

「死なねぇよ」「死ねないよ」

返事はそれぞれに違ったが、ベルゼも傷ついている様子はない。どう考えているかを悟る方法はロイにはないし、その必要もないと考えている。

船に積まれた剣の中で一番の長得物をもらった。久しぶりに剣を振るので鈍っていないか心配になったが、少し振ると勘が戻ってきたようだった。ただ、間合いが掴みづらいと感じたので多少不安になったが、そのうち慣れるだろう。

船は大きい。ボンゴで使っているせいぜい１０人が乗れる程度のものではなく、住んで生活できるんじゃないかと思えるほどの大きさだった。ロイはそれをぼーっと見上げる。心臓が引き締められたような感覚がした。まだ傷の癒え切っていない左手で額を覆った。

「どうしたの・・・？」

尋ねるエリナに無言で首を振る。今は感傷に浸っている場合ではない。そんな事はわかっている。それでもロイにとって海は特別なものなのだ。ずっと漁師になりたかったロイにとって海はいつでも羨望の的だった。海に出る事は大人になって父親に認めてもらうこと

と同義だったからだ。けれど、もう漁師になることはないし、認めてくれる父親ももういない。もういないのにロイは通過儀礼を行おうとしている。

「・・・ここは北の海よ」

ロイの心を知っているのだろうか、エリナはそう呟いた。

「そうだな・・・」

ロイは頷く。気持ちを切り替えたとは言いがたかったが、自分を奮い立たせて船に続く渡し木に足をかけた。ぎしと音を立てて板は反った。それも懐かしい感覚で、少しだけ足が竦んでしまった。

ロイ、エリナ、ベルゼの順番に船に乗った。そこには既に大勢の人がいて、水夫が忙しく荷物を運んだり、屈強な男たちがたむろしたりしていた。そんな中、一人の女性に目が止まった。船員でも無さそうだし、討伐隊のメンバーにしては細身の体型だった。それを言うならロイ達も人の事は言えないだろうが・・・。

女性と目が合うと向こうがにこりと笑って会釈してきた。

「あれは・・・」

ロイの背後でベルゼが声を漏らした。それと同時に女性がこちらに向かって歩いてくる。腰まで伸びた黒髪がそれに合わせて優雅に揺れた。

「お久しぶりです、ベルゼ。そして・・・」

ベルゼの緊張感が背中越しに伝わってきた。女性はロイに向かってニッコリと微笑みかけた。

「ロイ＝クレイス。私の事を覚えていますか？カリューで一度会ったのですが」

記憶のピースが埋まった。あの日。カルコンに呼ばれて現れた3人のうちの1人。

「キリシエさん・・・どうしてここに・・・？」

ベルゼが緊張したまま尋ねた。キリシエはその長身を見上げて、にこりと微笑みかける。

「もちろん任務のためですよ。魔物の討伐はディアボロスの一番主

な活動ですから、依頼されれば動かない訳には行きません」
ロイはゆっくりとキリシエから距離を取り、剣のつかに手をかけた。
ベルゼは裏切り者だ。ディアボロスの掟によれば抹殺されるべき存在のはず。さらに、ロイもエリナもディアボロスには敵対している。つまり、任務というのは3人の抹殺も含まれているのだろう。
睨むロイを見て、キリシエは両掌をロイの方へ向けた。
「そんなに怖い顔しなくても、あなたたちに危害を加えるつもりはありません。レギュラスもいない今、ベルゼの抹殺など出来るはずもないでしょう？私たちは純粋に人類の平和のため、魔物の討伐のためにここにいるのです。ここは剣を納めて一時休戦と行きませんか？」
不死身のはずのベルゼだが、レギュラスが体内の魔物を操ればあるいは殺すことも可能かもしれない。いや、可能だと判断したからこそ、ベルゼは霧の森でレギュラスに襲われていたのだろう。
だが、レギュラスがいないからと言って危害を加えないとは決していえないだろう。ロイは警戒を解かない。更にここは海の上なのだ。ロイの記憶を嫌でも揺さぶり起こす。あの悲しみを。あの怒りを――。
「ああ、ちゃんと自己紹介をしていませんでしたね」
ロイとは対照的に、キリシエは明るい声を出して胸の前で両手を打った。
「私は三騎士のキリシエ＝モレスキュールと言います。そちらのお嬢さんは初めてですね」
「エリナリア＝スタンフィーナよ。ドートリア出身のね」
エリナの言葉にも険が込められていた。キリシエは申し訳無さそうに目を細めた。
「ドートリアですか。あれに関しては私も反対だったのです。しかし結局ザバンに押し切られてしまいました。力及ばず、申し訳ありませんでした」
キリシエはエリナに向かって深々と頭を下げた。

「？？」
エリナは首をかしげる。
「ドートリアの管轄はザバンさんだったんだ。毒を撒くという主張をしたのはザバンさんと七聖の１人でね。キリシエさんは最後まで反対していたんだけど」
ベルゼが解説をした。言葉の上ではキリシエ側だが、声からは警戒の色が解かれていなかった。
「ザバンとはあれ以来まだ険悪です。それでも私はあんな卑劣な・・・いえ、私がここで何を言っても徒にあなたを傷つけるだけですね」
「・・・・・・」
エリナは何も言わなかったが、やはり戸惑っているようだった。
「立ち話もなんですし、中に入りませんか？まだ出航前ですが、食堂はもう開いていますし」
そう言ってキリシエは船室の中へ入っていった。その背中に警戒心は感じられない。後ろから襲いかかれば簡単に斬れそうだった。３人は顔を見合わせる。
「・・・どうするの？」
ベルゼの問いに答える声はなかった。ロイもエリナも戸惑っているようだった。あれほど敵対していたディアボロスの幹部があんな態度を取っているのだ。
ベルゼが息を吐いて、２人の肩を叩いた。
「今の敵は魔物だろ？ここは仕方ないんじゃないか？」
「・・・わかった。だけどこちらを攻撃するような事があれば容赦しない」
ロイはむすっとして言った。ベルゼは溜息をつく。ベルゼも色々複雑なのだろうが、いつも通りの笑顔の仮面は彼の内面を悟らせない。
エリナはというと、やはりどうしたものか考えあぐねているようだった。
「じゃあ、行こうか」
ベルゼが足を進めた。エリナがそれに続き、遅れて不機嫌なままの

ロイがついていった。
船室に入ったところで、キリシエが待っていた。こちらの会議を待っていただけかもしれないし、様子を見ていたのかもしれない。
「この船はティグレー政府から無償で貸与しているものです。もっとも、返せる保証はないのですけどね。もちろん最善は尽くしますが、相手が魔物である以上絶対の保証はできません」
船は内装もよく整えられていた。しかし、それに感心している余裕はロイにはなかった。前を歩くキリシエの一挙一動を観察していた。まだ不審な動きは見せていない。
「レギュラスがいれば一瞬で片がつくんじゃないのか？」
「無理でしょうね。レギュラスの術も絶対ではないのですよ。強大な魔物ほど自我が強いですからね。それにカノトリアスが近くにいたのでは私たちが死んでしまいます」
「どういうことだ・・・？」
よくわからないキリシエの言にロイが尋ねると、キリシエは苦笑した。
「これ以上は彼のプライバシーにかかわりますからね。秘密としておきましょう。・・・・・さあ、ここが食堂です」
船内の階段を下り、一番奥の部屋の押し戸を開けた。
ざわつきが一瞬にして収まった。そこにいた全員が椅子から立ち上がり、キリシエを見た。いや、見たのはキリシエだけではなかった。背後から現れた裏切り者のベルゼ、そして盟主の敵であるロイ。男たちのざわめきが元に戻った。
「みんな聞きなさい！」
キリシエが声を張り上げると、再びざわめきが収まった。どうやらキリシエにはかなりのカリスマ性があるようだ。
「彼らは私たちの大事な仲間です。万が一、危害を加えるような事があれば、容赦なくディアボロスから除名します」
ごくり、と唾を飲む音が聞こえた。全員が頷いたのを見て取って、キリシエは男たちを座るように促した。喧騒が元に戻る。しかし、

こちらを見る視線は収まらないようだった。キリシエは振り返って3人に言った。
「さあ、私たちも座りましょう」
キリシエが近づいた席は自然と空いた。キリシエは迷いなくそこに腰掛け、3人にも座るように促した。すぐに料理が運ばれてくる。食べようとしないロイたちを危惧することなく、キリシエは料理に口をつける。
「そもそも、カルコン様はあなたに危害を加えるつもりはありません。リックから話を聞いていると思いますが、あの方はあなたの能力を大変欲しがっておいでです。ただ、ザバンや七聖の大半は違います。彼らは決して穏健ではありませんからね。どんな芽でも早めに潰しておきたいと考えているのでしょう」
なるほど、ディアボロスも一枚岩というわけではないのか。
「どちらが主流というわけではありません。もともとディアボロスは魔物を駆逐するためにつくられた組織ですからその目的の方向性さえ合えばその道は違って当然なのです。中でもザバンは過激派です。その考えに心酔している者も多いですが、カルコン様がそれに対してどう考えているかは分かりません」
話ながら食べ続けるキリシエを見ていたら自分も腹が減ってきたので、ロイも食事を口に運ぶ。なるほど、絶品だった。
「あなたたちもこの討伐に参加したという事は、つまりそういう事なのでしょう？」
キリシエの問いにロイは答える事が出来なかった。手を止めてキリシエを見る。キリシエもじっとロイを見ていた。
「さあな。その葛藤はし飽きたよ。結局俺の目的地の邪魔をするから戦うだけだ。それが魔物でもあんたたちでも関係ない」
「・・・目的地を変えようとは思わないのですか？もしくは妥協や譲歩をしようとは？」
「お前たちが！」
ロイはテーブルを勢いよく叩いた。料理の皿がいくつかひっくり返

って床に落ちた。ベルゼとエリナはロイが怒ることを察知していたらしく、既に皿を持ち上げていた。周囲の目が全てこちらに向いている。構うものか、とロイは思った。むしろ全員に聞かせよう。どいつもこいつも関係がある話だ。

「お前たちがそれを言うのか!?俺の故郷を奪ったのは誰だ?俺の人生をめちゃくちゃにしたのは誰だ?この生き方以外を選ばせなかったのは一体誰だ?」

「・・・・・・」

キリシエは黙り込んでしまった。ロイは舌打ちをして食堂を出た。視線はやはり注がれたままだ。関係ない。いや、関係はある。その視線がロイを更に苛立たせる。階段を駆け上がって甲板に出た。ちょうどロープがほどかれ、出航するところだった。ロイは縁に体重を預けて海を覗き込んだ。船が大きすぎて海面が遠かった。手を伸ばしてもまったく届かなかった。けれど、決して届かないと分かっていても手を伸ばしてしまう。そうせずにはいられなかった。

結局諦めて甲板に座り込む。手をついたら傷のある左手が痛んだ。痛くて涙が出そうだった。

「止まれないんだよ、どうしても・・・・・・」

その言葉は海に届くことなくロイの心の底に沈んでいった。

第２９話　船上の再会　２

「・・・静かだな。月がない」
その日の夜、ベルゼは甲板に立っていた。周囲は真っ暗な闇。手元に置いてある蝋燭だけがぼんやりと辺りを照らしていた。人の声は聞こえない。耳を澄ませばわずかに波が船に当たる音が聞こえた。静か過ぎて、目を閉じるとそのまま眠ってしまいそうだった。もちろん船室に戻れば自分のベッドがある。しかし、そこにはロイがいる。
昼間、食堂を飛び出してからロイは一言も口を開かなかった。その重々しい空気はエリナとベルゼに口を開くことを禁じた。それは今でも同じで、ロイは眠ることなくベッドに座り、胸のネックレスを握り締めていた。それが何を意味するのか、ベルゼは知らないし、聞く事はできなかった。ただ、一緒にいると気が重かったのでここに逃げてきたわけだ。
「気持ちは分からないでもないんだけどね」
しかし、分かるのは気持ちだけで、感情までがわかるわけではない。ベルゼには魔物に対して、ディアボロスに対して怨みがあるわけではない。だからかける言葉がない。下手な言葉ではロイの心を引き裂くことになりかねない。
「・・・いい夜ですね」
不意に、背後から声がした。ベルゼは勢いよく振り返る。蝋燭の灯に照らされたその黒い髪はよく見知った人のものだった。
「キリシエさん。こんな所で会うなんて奇遇ですね」
「いいえ、奇遇ではありません。私はあなたを探していたのですよ」
「そうですか。でもここは寒いですよ」
「そうですね。やはり北部は何度来ても慣れるものではありません」
キリシエはベルゼの横に立った。それだけでベルゼは少し緊張する。

元上司だが今は無関係な存在だ。それなのにこうして意識してしまっている。長年で培われたそうした癖は簡単に払拭出来るものではないのだろう。果たして自分が死ぬまでに消え去るのだろうか。それはそんなに長くはない。

「・・・軽率な発言だったとは思います。しかし、あそこまで逆上されるとは。・・・意外でした」

キリシエは白い息を吐いた。真白い吐息はほんの少しだけ風景の一部になってすぐに消えてしまった。

「例えばあいつがもっとものわかりのいい大人だったら、今頃ディアボロスに入っているでしょうね。そしてその力で魔物を殺し続けている。そして俺は霧の森の中で終わっていたでしょうね」

「確かにそうですね。私としたことが失念していました。いかにカルコン様が認めるほどの才能を持っていても中身は17歳の少年なのですよね」

ベルゼは船室の方をじっと見た。その目線の先には闇しかない。

「ところでベルゼ、もう一度ディアボロスに戻ってくるつもりはありませんか？カルコン様もそれを望んでいます。一部の者はいい顔をしないでしょうが、それはどうにもでなるでしょう。それほどあなたの力は絶対なのですから」

こちらを覗くようにしているキリシエの黒く大きな目をベルゼは見返すことができなかった。代わりに口を開いた。白い息が出た。

「それはできません。あそこに俺の居場所はない。あそこだけじゃない、この世界にはない。唯一ある俺の居場所は俺を人間だと言ってくれたあの2人のそばだけなんですよ」

「――ではあの2人を殺せば？」

ベルゼの右手がキリシエに伸びた。首を掴もうと思ったが、肘から先が一瞬にしてなくなった。切り口から蛆があふれる。それから距離をとるためにキリシエは後ろへ跳んだ。闇のせいでどこにいるのかは分からない。

「失礼。冗談が過ぎました」

闇から再びキリシエが現れた。蝋燭の明かりに照らし出されたその無表情からは彼女の考えは読めない。

「申し訳ありませんでした。あの2人に手を出すつもりはありません。だからそれを抑えてくれませんか？船に大穴が開いてしまいます」

ベルゼはしばらくキリシエを睨んでいたが、腕を修復しつつある蛆に命じた。甲板にぼたぼたと落ちていた蛆は煙と名って消えてしまった。

「あなたも変わりましたね、ベルゼ。以前なら決して私に歯向かうことはなく、まして攻撃しようとなんて考えもしなかったのに」

ベルゼは修復しきった右手を握った。顔を上げてキリシエを睨む。

「あなたは、狂ってる」

蝋燭を置いたまま、ベルゼは闇に消えた。足音がだんだん遠ざかっていく。残されたキリシエは闇しかない空を仰ぎ、白い息を大きく吐いた。

「狂ってる、か。確かにそうかもしれないわね」

別に罪悪感が消えた訳でも道徳観が狂ったわけでもない。キリシエが狂う理由はいついかなる時もただ一つの理由。ただ1人が理由――。

ベルゼにもこれでディアボロスと戦う理由ができただろう。あの二人を守るという理由。この理由がある限りベルゼはあの二人を裏切ることもあの二人から離れることもない。ちゃんと自分の居場所にいる事ができる。キリシエはもう1つ大きな息を吐いた。

「・・・これでいいのですよね、カルコン様」

ベルゼが船室に戻ると、ロイは既に眠っていた。さっきまで怖い顔をしていたが、寝顔を見るとただの少年だ。弟と同じく17歳の子供の寝顔だ。

最後に見た、この手で殺した時の弟の表情は今でも覚えている。あの村を襲った時、両親はベルゼだと気づかなかった。自分たちが世に放った化け物だと気付かずに死んだ。ベルゼが殺した。罪悪感はなかった。だが、弟は違った。蛆に体を食われながら言ったのだ「兄ちゃん」と。

弟だけは違ったのだ。ベルゼにとって敵だらけの世界で、唯一人間としてのベルゼを知っていたのだ。ベルゼは絶望した。

村を滅ぼした理由は実に単純なことだった。パラティシアムは成虫になると1つの宿主から野に還る。パラティシアムの運動能力はそれほど高くないので、次の世代の宿主は一箇所に集中することが多い。つまり、ベルゼ以外にも寄生された人間が村にいるかもしれなかったわけだ。その人間をあぶり出し、隔離する必要があった。

本来ならば村人一人一人を傷つけ、反応を見るだけでもよかったのかもしれない。だから、殺したのはベルゼの意思だった。そしてその時に気付いてしまった。この村を滅ぼした時、人間、ベルゼビュート＝プランシーを知る者はこの世から消え失せてしまったのだと。

――そして、残ったのは不死身の化物、パラサイトだった。

ベルゼは村の破壊に立ち会った部下も食った。そこにあるすべてを食わせた。家のすべてを、あの地下室を、人間の頃の自分を全て壊した。人間、ベルゼビュート＝プランシーを抹消した。自分は全てを消すためにここに来たのだ。そう考えることで、弟を殺す口実にした。すべてを終えたとき、身体を傷付け、蛆を吐き出す痛みに精神が磨耗し、そこに倒れた。雨が降っていた。真っ青な空から降る雨がベルゼの目尻をつたって地面に落ちた。

もしかしたら、弟とロイを重ねているのかもしれない。だが、重ねようとしても弟がどんな性格で、どんなことが好きで、どんな人間だったのかベルゼは知らない。重ねようがないのだからやっぱり重ねてないのかもしれない。本当のところはベルゼ自身にも分からない。

ロイは弱い存在じゃない。むしろベルゼとは比べるべくもないほど強い。けれど、キリシエが言い放った時、ためらいもせずに手が出た。どうしようもなく守りたいと思った。

ベルゼは横になった。よほど疲れていたのだろう、睡魔に襲われるまで時間はかからなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9454y/

Disturbed Hearts

2012年1月11日08時55分発行